脳内計算

ALISA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
脳内計算

【Ｎコード】
Ｎ３４１５Ｘ

【作者名】
ＡＬＩＳＡ

【あらすじ】
本城那津（１９）
黒縁メガネにボサボサの黒髪。趣味は読書、体力ナシ。―という地味人生を悠々と歩く女子大生。
悪口？そんなの言わないよ？
…頭の中でボヤくだけだから。

そんな孤高の彼女が、俺様なイケメンと出会ってしまったら。
脳内毒舌女×俺様美青年のラブコメディー。

モバゲー（E☆）で掲載している小説の転載です。
どうぞ読んでみてください。

地味女、現る（前書き）

はじめまして。ＡＬＩＳＡと申します。
笑えるラブコメ目指して頑張った（？）作品です。どうぞ読んでみてください。

地味女、現る

――車が行き交う大道り。
多くの通行人が慌ただしくすれ違う。
サラリーマンのおっさん、ＯＬのお姉さん、短いスカートの女子高生、チャラい暫定フリーター男。
たくさんの、人がそれぞれの目的地に向かう。
―こんなに大勢の人がみんな他人であって、それぞれの人生を生きているんだなぁ、とか。
少し哲学的に思ったり。
ちょっと立ち止まり、また足を踏み出して歩き出す。

昨晩の雨のせいで路面は少し湿っていて、水たまりが所々できていたが、見上げると雲ひとつ無い青空が広がっていた。きれいな五月晴れだ。ピクニックにはもってこいだろう。

「……いい天気だなぁ。講義サボって散歩でもしたいなー。」

そうボヤいて空を仰ぎ、
ポケットに手を突っ込みながら通行人の一部にまぎれる女が、ひとり。

私は、本城　那津（ホンジョウ　ナツ）。
１９歳。　一応、女。
地元を出て、ただ今一人暮らし中の至って普通の大学二回生だ。

……いや、

普通だと思うがね、私は。
あるヒト曰く、私はどうにも、『一般的な女子大生』とは異なっているとか。

私のことを客観的かつ単純に例えるなら――
『陰キャラ地味女』らしい。
ほとんど化粧もしない上に常にジーパン、黒ブチ眼鏡。テキトーにそろえた肩くらいまでの髪。
その人からは女を放棄してる、とも言われたっけな……

…別にいいだろうが、どーでも。個人の自由だよ、諸君。
そんなことは特に気にしてないし、こんな容姿故に話かけられもしない。
悠々自適な一匹狼として過ごしているわけだ

…寂しい奴とか思っただろうが、私はこれで満足しているんだぞ。
ええ、なんの不満もありませんとも。

――
――

歩いていたら、私の通うS大学がもう目の前にあった。ドンと、重厚感のある門が立っている。

退屈な講義を聴くのは実に面倒だし、精神的にも苦痛だが……
仕方ない、と肩を落として校門をまたぐ。
…今日は本屋に寄って帰ろう、うん。
何か自分にご褒美を与えないと、やっていけないや。

今日の講義室の場所を思い返しながらそこそこ広い棟内を歩き回る。
――と、あった。プレートの番号を確認して中に入る。

中では14、5人くらいの男女がそれぞれのグループで仲よさげに話している。
私はサッと教室内を見渡し、うるさいグループから離れた場所に座ることに…。
…おい、席は詰めろよ、邪魔くさい。鞄を座席に置いてるんじゃねぇ。

そうして行き着いた先は窓際の、後ろから2番目という好位置。
…こんなことでラッキーを感じる私はきっと小さい人間だろうな。
日当たりがよく、景色もよく見える。

窓の外をのぞくと中庭で大道芸まがいの――ジャグリングか、あれ――をやっている男子が数人。
…あ、失敗した。恥ずかしそう。辺りを見回している。
……ゴメン、バッチリ見ちゃったよ。はは。

――そんなところでチャイムが鳴り、ハゲた英語の講師が入ってきて、出欠をとる。
しゃがれた、いかにも年配らしい呼び声に私は気の抜けた返事を返して、授業がスタートするのをぼんやり眺めていた。

…あーあ、つまんね。
前の奴なんかゲームやってるよ。

そうぼやいていると、英語教師の抑揚のない声が響いて教室を満たす。

最初の１０分くらいはマジメに聞いていたが……いかんせん、ここは気温・日当たり・先生の死角という3条件をすべて満たした神席。当然（？）のごとく、私はゆっくりと舟を漕ぎだした。
…学生の本分？そんなの知らない。だって眠いもんは眠いんだから。

―
―

―チャイムが鳴る。どうやら授業が終わったらしい。
私はムクッと起き上がって真っ白なノート等を片づける。
そういえば、もう昼だ…。今日は学食を食べようか。
思い立った私は食堂へ行った。

学食を販売する食堂は、私の学部棟からほど近いところにあって非常に便利だ。
着いてみると、まだ早い時間だからか、あまり人が見えない。
これまた、ラッキー、だ。私はさっとメニューに目を通し、適当に手ごろなものを頼んで席についた。

…学食って何気に美味い、とかぼんやりと思いつつ、のろのろと箸を進め、完食。
…ごちそうさまでした。日替わりランチＡセット。おばちゃんもいい腕してるなあ。
―ついでにコーヒーを頼み、ブラックのまま一口飲んだ。

そして、持参してきた、本屋でもらったカバーつきの小説を取り出し、開いて読む。さらに携帯音楽プレイヤーのイヤホンを耳につけ、再生。

―あとは自分の世界に入るだけだ。
ゆっくりと耳に流れ出した音楽を聴きながらページを繰っていく。
1日のうち私が最も至福を感じる時間。今日もそれを存分に満喫することにする。

―
―
―

1時間くらい、そうしていただろうか。
人も随分と増えてきて辺りがザワザワしてきたので、私は音楽プレイヤーを止め、本を閉じて席を立った。
…人の多いところは好まない。集まってきたらすぐ退散。―それが、私のルールです。
ふん、と鼻を鳴らし、こそこそとその場を後にした。

――食堂から出たものの、まだ授業が残っているので、大学内をゆっくり散歩することにする。

外に一歩出ると、爽やかな風が春の温かな雰囲気を演出していた。
……ん、ちょっと詩人くさい表現だったか？
―しかし、そのくらい気持ちのいい春風の中、足を鳴らして歩くのは最高に爽快だった。

いい。この新鮮な空気。都会の汚染された空気とは無縁みたいだ。
私はそのままブラブラ歩いた。

しばらくすると始業時間間際になったので、う～んと伸びをして、午後の授業に向けてガッツを入れて、

私は再び学部棟へと歩き出した。

―――

―――

これが私の日常である。

たらたらとつまらない授業を聞き流し、時々バイトもして、たまには家族にも連絡して……。

…いや、最後のヤツは無いか。私、実家すらなかなか帰らないしなぁ。

まあ、とにかく。

…こんなつまらない日常が私は心底好きだった。誰の目にも触れられず、山も谷もない平坦な人生。

少しのラッキーで幸せになれちゃう、お手軽な毎日。―死ぬまでそうだろうと思っていたのに……

判らないのが人生なのか、それとも神サマとやらのいたずらか。

―とにかく私の日々は見事なまでに崩壊することとなる。

地味女、現る（後書き）

那津さん、基本個人プレーです（笑）
出会うのはもうちょい先。

3匹のギャル

―それは、突然訪れた。
今日もブジに講義が終わり、昼食をハンバーガーセットにするか、牛丼味噌汁付きにするかで迷っていた頃。

「ねぇ～っ本城さんっこの後ヒマぁ～？」

やたら語尾を伸ばす女ども（計3人）が私の正面に現れた。…言っておくが、少し後ずさってしまったのは、私のせいではない。
彼女らの、ハンターが獲物を刈り取るかのような勢いが、怖かった。
ただ、それだけである。
てか、私の周囲の野郎どもも若干引いてたし。

目を向けてみると、やはり何処をどう見ても、ド派手な女子たち。
髪はくるくると巻かれていて、マツゲは、瞬きする度にバサバサと音が鳴りそうなくらい。
さらに、化粧と言うよりはもはや仮面と言えるくらい塗り固められた顔面。

―そう、いわゆるギャルの方々だ。…付け加えると、私が最も関わりたくない人種でもある。
――ん？これから暇か、だと？

「…え、何で？」

一応返したものの、嫌な予感がバシバシする。そして、それは。

「あのさぁ～今夜、４対４の合コンするんだけどぉ～ミーコとうちとアミでぇ３人しかいないわけ。
もう１人女の子がいるの。そんで、暇そうな本城さんにチャンスをあげようと思って！
今日のメンツ、マジイケメン揃いなんだって！！」

次にそう続いた彼女のセリフで、ああ、クリティカルヒットしたな、と思った。

「……。」

…まあ、実は私は、『あのさ』の時点で状況は完全に把握していた。
…合コンの人数合わせね、要は。
現れた時点で害のような彼女らだが…よくもまあ、なんとも面倒くさいことを突き付けて下さったな。

ミーコもアミも君も私は知らないし、『暇そうな』って失礼すぎるだろ。
私、今日はバイトあるんですけど。
つか、話が長すぎ。無駄が多すぎるな。
少しは、ナイ頭振り絞って、きちんと文を頭ん中で構成してから口を開け。

――とは当然、言えないわけだが。いや、当然じゃないですか。

でもとっとと断らないとなあと思い、口を開く。

「悪いけどきょ…「わぁ～っありがとう！行ってくれるんだぁ！！」

「…いや、だか「ほんと助かったぁ。あ、場所はねぇ……。」

…人の話、聞けよ。
やっぱり強制参加かよ。拒否権すら認められてねーのか。
しかし、ヤツらの目が「断ったりするわけないよな…？」と言っている。
チキンな私がビビるには十分すぎる程の睨み。ちょ、怖いって。

――結局、私はしぶしぶ頷いた。なるべく波風はたてたくないからな。
…しかも向こうは超強そうだし。勝ち目無さそうだし。何か起こったら面倒だし。…ねえ？

―なんて、自分自身に言い訳がましく言い聞かせていると、３匹のギャルは手早く場所をかいたメモを私に渡してきた。そして、「じゃあよろしくー！！」と言って、嵐のごとくその場を立ち去りなさる。

…残された私はというとなんだか微妙な空気の中、周囲から白い目で見られていた。
ジロジロ、チクチク。好奇の目で私を見てくる野次馬共。

見んな。私だって意味分かんないんだから！
厄日か。今日は厄日なのか。
私は愕然としたまま頭を抱えたくなった。

…とりあえず今日の予定は埋まったらしい（強引に）。
いやしかしマジでどうしよう…。こんな事態久々だな。
まだ『自分たちの引き立て役に地味なやつ誘おう。』なんて作戦、実行するような古い人間がいたのか。

しかも、よりによって、合コンなんて。何それ、都市伝説じゃなかったの？
ははは…笑えない。

――頼みの綱のバイトも…シフト、確か１０時からだっけ…。
ヤツらの言っていた集合時間は、６時…ああ、バリバリ間に合う感じ、だな…。
ちくしょう。シフト変更だしやがった竹内（３１歳、独身男）を恨むしかねぇ…。
……あとで一発殴ろう。うん、そうしとこう。

内なる決意を心の奥にしまい、私はとりあえず、居心地の悪かった室内を飛び出し、外に出た。

―もう昼飯はどうでもいいや。とにかく何か策を考えないと。そう思い立ち、幸い今日の授業は午前のみだったので、私は早々に帰ることにした。

―私の家は大学を出て１０分くらい歩いたところにあるアパートである。多少ボロいが、通学に非常に便利だ。
…そういうわけで、私はすぐに家に着き、悶々と考え始めた。

―――
――

随分と考え込んだが、いい回避策は皆無だった。
今まであいったたぐいは上手く切り抜けてきたのだが、流石に今

夜となっては……。しかも実際に予定は無いので断る理由もない。
あれこれシミュレーションするも、最終的に彼女らの押しに負ける結果となる。

――本気で困ったな。どうしよう。
…なーんて堂々巡りをしてる間に、もう、5時。向こうが指示してきた場所に行くには、もう出なければ間に合わない。

…行きたくない、が、行かないと後が怖い。やはり行ってイケメンたち（仮）のお目汚しになるしかない、か…？
…どうせあのギャルたち、いつも以上に派手なメイクとぶりっ子を決めてくるだろうしなあ。
浮きまくるよなー、私。

私は人の目にさらされるのは、好きじゃない。つーか嫌い。でも上から目線で鼻で笑われるのはもっと腹が立つ。
……なんか、あいつらの顔を思い出したら、怒りが…

「……。」

はあ…。なんかあんなギャルどものことで悩んでんの、アホらしくなってきた。
もう行くしかないのは分かってる。でも……

―どうせならぶっ潰すか？この合コン。

どうせ私は地味な恋愛対象外女。なら、それを逆に利用しようじゃないか。
それで…話を聞かないバカどもに、ふ・く・し・ゅ・う？

…クッ…なかなか楽しそうじゃん？やってやろうじゃないの。
私を呼んだのを後悔しろよ？
―君らの合コン、台無しにしてやるよ。

私は思考をそこで停止して、シャワーを浴びにバスルームへと移動した。
そして、お湯を頭からかぶりながら今夜に向けて計画を練る。

――今夜の合コンはカラオケだと言っていたから…
…こうきたら、……
……

ある程度思考がまとまった所で、シャワーの蛇口をひねった。キュッと音を立てて止まる水勢。
汗を流して、気分も幾分かさっぱりした感じだ。

――よし。多分、イケる。
気合いを入れ直し、バスタオルを巻きながら適当に服を着替え、たいした時間もかけずに準備する。
―間違ってもおよそ今から合コンだという女の心持ちではないだろう。例えるなら、戦場に赴く戦士だ。

私は鏡を見てニヤリと笑った。

――
――

……さあて、ショーの始まりといこうじゃないか。

今夜限りの、特別な『私』で、な。

私は不気味な笑みを浮かべ、目的地のカラオケ屋を目指して、ゆっくりと街道を歩き始めた。

3匹のギャル（後書き）

実はこのギャルたちの名前はあやふやで作者も把握できてないです（笑）

さてどうなるんですかねえ、合コン。次話に続きます。

合コンと言う名の戦場（1）

待ち合わせ場所のカラオケ屋は、そこそこデカいカラオケのチェーン店らしい。
分かりやすい場所に立地しており、難なく見つけることができた。
チカチカと目障りなネオン、バカでかい看板には『宴会大歓迎！』の文字が見える。
―今から合コンですけどね。おたくで。

「あー本城さぁん！！来た来たーっこっちー！」

すると、3匹のギャルがやたらテンションの高い声で私を呼ぶのを聞いた。
予想通り、3人とも気合いの入りまくった服装に、メイク。露出もかなり高めだ。
しかも、さっきからしきりに鏡で顔をチェックしている。目つきもギラギラしていてすげー怖い。

―これが、女子の本気、ね。私には一生無縁だなあ。…てか、無理だけどね☆

私は、ぼんやりとソレを観察して、暇そうにあくびをもらした。
…なんでも今日来る男子軍は、相当の男前らしい。ギャルの内の1人の、妹の彼氏の友達の友達経由で知り合ったとか。…どうでもいいけど、遠いな。

「…だからぁー！本城さんも、もう少しオシャレしてくればよかったのにぃー！」

ほっとけ。

「そんなんじゃ、浮いちゃうよぉ？」

それが狙いだろうが。

「せっかくイケメンと知り合えるのに、それじゃあ損だよぉ。もうそんな機会ないかもじゃーん！」

失礼だな。しかもストレートに。

…ちなみに私は今、ジーンズを履き、ロングTシャツの上にジャケットを羽織った格好。まるっきり普段着だ。確かに気合いとかは微塵も感じられないだろう。

――君らと違って男を落としにきたワケじゃないんでね。

私はギャルたちの下品な笑い声を聞き流し、来るべきときに向け、最後のイメトレに専念する。

…ふう。なんか緊張してきた。

――

――

そんなこんなで店内に入る。カラオケに入るのも久しぶりだ。
キョロキョロと辺りを見回し、凝った内装に目を奪われながらも、
3人について行った。

「本城さん、こっちこっち。」

ハイハイ。

「向こうはもう部屋に入ってるって！待たせちゃ悪いから早く行こお！！」

そーでーすねー。

「そうだ！！本城さんのこと、ナツって呼ぶね！友達なのに名字じゃ変だし。」

友達って…今日初めて話したくせにか？君の友達の定義って、一体何なのさ。
…あー、もうどうでもいいから、勝手にしてくれ。
てか、帰りたい。行く前だけど、激しく帰りたい。

と、私は愛想笑いで全部スルーした。今日で顔面筋肉痛になるんじゃないかなー。

―――
――

「あ、ここだ！部屋。」

奥へ奥へ入っていくこと幾分。たどり着いた大部屋で一行は止まり、ドアを、開けた。

その途端、

「おっ、合コンの子たち？」
「待ってたよー！」
「ん、入って入って。」
「何か飲みます？俺、注文しますよ。」

中にいた男性陣がわっとしゃべりだした。　へぇ。結構ノリがよさそうだ。

「お邪魔しまーす！」
「キャー！話には聞いてたけど、皆超かっこいいー！」
「よろしくお願いしまーす！」

ギャルたちのテンションも最高潮。語尾も上がっていて、後ろにハートマークがついてる感じだ。
いつもより数割増しに高い声もキモ…ゴホン、まあ、頑張ってる感じでいいんじゃないかな。

私も、首を回し先に来ていた男性たちを観察してみる。

ふむ。確かに、４人ともどこからどうみてもイケてるメンズ。それぞれタイプは違うものの、皆整った顔立ちをしている。
全員、大学生らしいが、ちょっとチャラけた印象を持った。…これは、相当遊んでるだろうな。
てか、人種が違いすぎて怖いわ。彼らのオーラだけで存在ごとかき

消されるんじゃないかな、私。
…いや、別に消えてもいいけどね。許してくれさえすれば、私はすぐにログアウトしますけど？
…まあ、イマサラ無理だろうけどねー……

まだ騒ぎ続けるギャルどもを尻目に、私はそんな風に現実逃避をしていた。

――
――

「じゃあ、みんなが席についたところで…」
「自己紹介、ね。」

台詞とともにわーっと盛り上がる室内。…まあ、私も適当に合わせて盛り上がっておいた。一応。
空気読める仕様ですからね、今日は。

――さて、いよいよ本番だ。
彼女らとともに私も身を乗り出した……ら、正面から視線を感じた。
不審に思い、ちらっとそちらを見ると、３番目に座っているイケメン君と目が合う。

……あれ？なんか、私、超凝視されてる…？

私は眉をひそめ、顔を若干しかめる、が。思い当たる理由が瞬時に浮かび、ああ、と手を打つ。

…やっぱ浮いてるよなー。この中じゃあ。
ギャルと地味子じゃフィールド違いだろうし。もの珍しい、みたいな感じだろうか？
私は珍獣じゃねぇぞ。

私はふいとそいつから目をそらし、自己紹介を聞く。……訂正、聞いているフリをする。
なんか双方、色々と言ってるが、聞くつもりはない。だって完全アウェーだから全然耳に入って来ないんだもん。興味無いし、この場限りだしねぇ。

「…アミでーす。S大の2年生で、ただ今彼氏募集中です！」

そのうちに。余計なウィンクまで入れた完璧（らしい）紹介の後、やっと私の番が来た。

――きたぜ。俺の、ターーン！！

私はすうっと深呼吸した。

「本城　那津、19歳。S大生。
今日は彼氏探しじゃなく……純粋にう・た・い・に！来た！！マイクを持ったら絶っ対に離しません！！
今夜は日ごろの鬱憤晴らしに、歌いまくります！
…と、いうわけで、よろしく。」

…親指を突き立て、言った。言い切った。
最後にペコリと頭を下げて席に着く。さぁ、反応はいかに……！？
私は期待と不安交じりに辺りを見回した。

が、室内はシン……と静まったまま凍りついている。

――あちゃ、ハズしたか……？

反応が全く返ってこないので、そわそわと落ち着かない気分になる私

しかし

やっぱ方向性間違ったかな、と思った、その時。

「……ぶっ、ははははははっ！！」

イケメン様方が一斉に大爆笑なさった。

「…ちょっ、なにそれ！ギャップありすぎだろ！？」

「おとなし目な子かと思ったら…いいねー。歌、好き？」

「何歌うんですか？聞きたいです。」

「最初に入れなよ。ハイ、デンモク。」

などなど。リアクションは、上々だった。

私は心の中でガッツポーズをする。

うっしゃあっ！よかった、つかみはＯＫ、みたいだ。

…ククッ、ギャルども、唖然としてやがる。……その口、閉じたほうがいいですよー？なんて。

「じゃあ…お言葉に甘えて…行きます！サ●ン！！ものまねｖｅｒで！」

「いきなりサザ●！？」

「しかも、ものまねって…。」

「みぃとぅめあ～うとぉすな～おにぃ～♪」
「うっわ、しかも超似てるし！」
「すっげぇ！！」
「マジ何者？君。」

ざわざわとまたいいリアクションを取ってくれるイケメン様方。私はまたいい気分になって声を張った。

フフ…見たか。これが私の秘伝キャラ…
『ＫＹムードメイカー』だ！！

…ゴホン。あ、ネームセンスは気にすんな。どうせ私は名付け下手だ。
とにかくこのキャラで大暴れしてやる！！ものまねはこう見えても得意だったりするし！

予想通りの盛り上がり様に私は満足し、もう１曲入れようとする、が…

「っ次！私が歌います！！」

しばらく呆然としていた女性陣の内１人にデンモクを奪われた。ほかの２人も我に返ったように慌てて曲を選びだす。

ふーん？
歌、歌ってれば私みたいに注意が引けると思ったか？ナマ言ってんじゃねぇ。
おもしろキャラをなめんなよ？もう流れは完全に私のものさ。

「ヤッバい、超受けた！」
「本城さん、おもしろいねー。次、何歌う？」
「うーん、何にしよう。玉●浩二か…郷ひ●みか…」
「チョイス、古っ！？」
「悪いか！どうせ古い人間だよ！なつメロのどこが悪いんじゃー！！３０字以内で説明しろぉっ！」
「うわっ熱いな。逆ギレすんなって。」
「ふふ…楽しい人ですね、ナツさん。」

そう、男性陣らの注目を一身に受けるのは私なのだ。私はニヤニヤと心の中で笑った。
…いやー、悪いね。目立っちゃって。でもこういうキャラだからさ。仕方ないよね？ははは。

―そして、さらに悪いことに、ヤツらの歌なんざ誰も聞いていやしない。
つーか、こんなとこで恋愛バラードなんか歌う方がバカだろ。チョイスミスもいいとこだ。
ヤツらの顔も引きつっているように見える。
…さぞかしみじめだろぉな？この空気。ははははは。

合コンと言う名の戦場（2）

―その後、ギャルたちは、何曲か歌うも、微妙な雰囲気のままだった。…可愛い子ぶってアイドル曲なんか歌ってたって無駄、無駄。

「……っねえ！歌もいいけど、何か頼もうよ！」

見かねた女子のうちの一人がそう提案した。

「おっ、そうだねぇ。なに、飲む？」

「俺、ビール！」

「おい、お前、車だろうが。烏龍茶にしとけって。」

「俺、飲みたいときは飲まなきゃ死んじゃうの！」

「馬鹿か、お前。」

イケメンもノッてきた。どっと笑いが起こる。

私はそれをうすら笑いを貼りつけたまま眺めた。

…ふーん。話題転換したか。

とりあえずトークで女子特有のアピールをするつもりだろう。

男子を持ち上げて、調子にのらし、自分の良さを何気なく伝えるパターン。

「あははっシンジくんおもしろーい！」

―ほら、ね。ちなみにおもしろいのはお前の顔だ、ギャル子。

さっき歌った曲がガン無視されて、結構堪えてるのが丸分かりだぞ。

「マジで？ミーコちゃんも可愛くておもしろいよ。俺、結構タイプかも。」

うん。これも、合コン常套句。やはり、この男ども、慣れてるな。

「ええ～っそんなことないですよぉっ。もうっ！」

ハイ、ぶりっ子ウザーイ。『もうっ』とか、いつの時代？ウケるんですけど～？

ハッと、脳内で思い切り笑い飛ばしてやる。

…しかし、少し面倒な展開だな。雰囲気が合コンに戻りかけだ。

他の2人も、そろそろ狙いをしぼっているのか、ガンガン攻めているみたいだし。

……ふむ。どうするかな。

「那津は何飲む？」

―と、そこに私に呼びかける男が1人。

は？いきなり呼び捨て？なに、誰。そう思って見ると、例の3番目の男子だった。

…なんか何かと引っかかるなぁ、こいつ。

まあでも、聞かれたなら返しますよ。今の私にベストな返答は……

「あ、オレンジジュースで。」

…これだろ。

――すると、

「は?? 」

男性陣は声を揃えて私に疑問符を投げかけた。
ナーイス、リアクション。

「え、何で?飲まないの?酒、超強そうじゃん?」

彼らの一人が、私を覗きこんで聞いて来る。
…何の決めつけだ。しかも結構気安く話しかけるようになってきたな。
そして、また別の人も、声をかけてくる。

「もしかして、車で来たとか?俺が送るから大丈夫ですよ?」

わー、紳士だこの人。でもここは譲れないんですよね。

「…いや、だって未成年だし。」

…ねぇ?
きょとん、とした表情をつくって言ってやる。

すると、

「ええ!??」

一瞬、空気が固まったかと思えば、今度はさらに大量の疑問符を送られた。

しかし、それを聞いて、女子たちが、これ見よがしと棘を刺してくる。

「えーナツ、ノリ悪ーい。こういうのは飲む所でしょぉ？」

ニヤニヤ笑う彼女らは『ふっ、失敗したな！』と言外に語っている。

―バカめ。これも、作戦の内なのさ。

「ダメなの！」

タイミングを計り、私は突発的に立ち上がる。

「お酒は、満ハタチになってから、というじいちゃんの教えなんだ！私が破るわけにはいかない！！」

――再び、室内は笑い声に包まれた。うん、中々のウケだ。

「っ何だよ！何者なんだよ、お前のじいちゃん！」

「力説しすぎだろ。漫画のキャラみたい。」

「え、じゃあいつ２０歳になるのー？」

「お。聞くからには誕生日プレゼントを用意してくれるわけで？」

「あ、やっぱいいわ。」

また、爆笑の渦が巻き起こった。…今日のメンツはノリがよくて助かる。おかげでなんとか巻き返せた。

やっぱこういう明るい空気じゃねぇと、な。

ちらっと後ろを向くと、女どもは一応笑顔をつくっているものの、目はこっちを睨んでやがる。

…その顔やばいよ？ボロを出しちゃまずいんじゃないの？

まー、いいけどさ。君らの心配なんて、してないし。

私は私で、好き勝手やるから。

―――

―――

―

「っしゃーーっ次はアニソンだぁあーー！！」

「待ってましたー！」

「ナッちゃん、カッコイイー！」

お酒も入って皆の頭がゆるくなってきた頃。完全、私ペースの合コンが繰り広げられる。

…合コンってよりも、もはや宴会のノリだ。

男性陣も何曲か歌った後は私にマイクを譲ってくれたので、私は自由に歌う・笑かす・盛り上げる。

まさに　ＦＲＥＥ☆ＤＯＭ！！

ノリノリで歌い終わり、次、何にしようか、と曲を選ぼうと――

「……。」

―すると、突然、女性陣がガタッと無言で席から立ち上がった。

……来たか。そろそろだと思ったよ。

男性陣は女性陣を見上げ、私も、デンモクを置き、３人を見た。

「ちょっとー、私たちお手洗いに行ってきまーす。」

「皆、歌っててねー。」

ギャル３人は私の腕を掴んで（半端なく痛い）部屋から連れ出した。

カラオケ開始から、約２時間半……まぁ、潮時だろう。

―――

―――

ガタンッ　バンッ！！

トイレに入るや否や、いきなりドアに叩きつけられた。派手に頭と背中を打つ。

…痛いな。予想はしていたけども。

「あんた、何様のつもり？」

ものすっごく低い声でそう言って私を睨みつけるギャルその１。

おーコワ。これが本性ですかー。

「何様って…ただ普通に歌ってただけだけど。」

しれっとそう言ってみる。…火に油をそそぐな、このセリフ。

「そうじゃねぇよ！何目立ってんだって聞いてんだよ！」

ホラ、ね。まさに鬼のような形相のギャルその２。

…化粧落ちてんの、言った方がいいかな。黒い涙みたいになってんだけど。

「ホーント、騙されたわ。あんた、実は男好きだったんだね。あんな風にチヤホヤされて、うれしかった？えぇ？」

ギャルその3に髪を引っ張られる。

ちょ、毛根が傷つくからヤメテー。

―なんて、脳内で展開されていることは欠片も知らない彼女ら。

しかしそろそろ終わらせよう、と、私は怯えたような顔を作り、上目使いに見ながら言った。

「ゴ…ゴメン！気に障ったなら謝るよ……。私、今日バイトあるし、もう帰る！これならいいでしょ？」

本当にすまなさそうな顔を作り、手を前でくっつける。

ちょっと声を震わせるのも、ポイントだ。満点だろ？どうよ。

「…フン！じゃあとっとと帰れ！」

「席ついたらすぐに店出てってよね！」

「割り勘、２０００円でいいわ。今払って。」

予想通り、私の演技にコロッと騙されたギャルたち。難なく成功、だ。

お金も今払うらしいし、ますますラッキー、てなもんだ。

――さて、私の道化もここらで終了と行こうかね。

―――
―――

「遅いよー、ナツちゃん。次、君の曲だよ。」

戻ってきて一番に一人の男性にそう言われた。

…思えばこの人たちにもすまないことをしたな。合コンに来たはずが、宴会につき合わせて。

―まあ今日のことはさっぱりと忘れて、次回頑張ってくだせい。

「ゴメン！それ、演奏停止にしといていいよ！今日、今からバイトあるの、忘れててさ！」

「えー、もう帰んの？」

「うん…、ごめん。後は皆で楽しんで！」

本当にすまなそうな顔（パート2）を作ると、男性陣も、承諾してくれた。

「あ～じゃあ、しょうがないね…。」

「気をつけて帰りなよ。」

…イケメンズのみなさま。温かい言葉をありがとう。

「え～マジ残念～。」

「じゃあねぇ、ナツ。」

…ギャルズのみなさま。全く心のこもってない、むしろ殺意のこもったセリフをありがとう。

私は静かにドアを閉め、カラオケ屋を後にした。

――

外にでると、もうすっかり辺りは暗くなっていて、肌寒かった。
私は新鮮な空気を目いっぱい吸い込んでは、吐く。

ひと段落。

そして、数歩歩いたところで後ろを振り向き、ほくそ笑んだ。

「…さて、今頃は気まずい雰囲気だろうな。もうすぐ解散、かもね。」

背をむけて、私は夜の街の中に消えた。

合コンと言う名の戦場（2）（後書き）

ヒロインとしてどうなんだろう、コレ……
ちなみにページ数が段々長くなっていくのは仕様です。

君の名は（1）

ｐｉｐｉ…ｐｉｐｉ…
無機質なアラーム音が、狭いワンルームに響く。

「……ん…。」

どうやら我が家の目覚まし時計は、今日も正常に役割を果たしてくれているらしい。
私はスヌーズ2回目でようやく布団をはねのけるのに成功した。

「……ふぁ……」

特大あくびをひとつかまして、寝ぼけ眼をこする。
―私、本城　那津は、超低血圧人間であり、さらに二度寝の常習犯でもあるので、起きるのに毎回ひと苦労なのだ。
―しかし、今日はいつもよりは気持ちよく目覚めた感じだ。…いつもよりは、ね。

何故かというと、昨日の出来事だ。
全く不本意ながらもしぶしぶ参加し、かきまわすだけかきまわした合コン。
…あの人たちがあの後どうなったか、想像するだけで、笑えて来る。
見事にフラれて絶望したか？それとも、なんとか押し切ってテイクアウトに成功したかな？
…クク、やっぱ性格悪いね、私も。自分で言うのもなんだが。

―まぁ、実際どうなろうが、私には関係無い。
昨日の私はもういない。あるのは今の『私』のみ。

今後はあのギャルたちに関わらないようにしよう。そしたらあの人たちもだんだんと忘れるだろう。
怒りも、さっさと冷めてくれることを願おう。
あのイケメンたちにも、もう会うことは無いだろうから、気にしなくていい。
―両者とも、また新しい出会いを勝手に求めちゃって下さい。ただ、私にはもう関係無いから。

――よし、昨日のことはもう消去しよう。無かったことにしておこう。そうして、また私のつまらない日々の始まりだ。
エンジョイ・マイ・オリジナル・ライフ！！

やっぱり人生には多少の面倒くさいイベントもあるよなー。今回、勉強になった。
今度はああいう人種の上手いあしらい方を研究せねばな。応用させりゃ、結構使えそうだ。

―なんて考えながら、
合コンことなど、すっかり過去のこととした私は
いつもの通学路を歩き、いつものように通行人に交り、大学に入り、講義を受け――……

――だが、しかし『いつも』のように済んだのは、ここまでだった。

―
―
―

昼下がり、私は例によって昼食を食べ終わった後、小説を開き、携帯音楽プレイヤーを鳴らして、自分の世界に浸っていた。
今日は天気がよかったので、大学内にあるオープンカフェの白いイスに座って、カフェオレを飲みながら。
なんとも快適、かつ優雅な空間。

「何、読んでんの？」

それが突如ブチ壊されたのは、背後から聞こえた、一人の声。イヤホンをつけていてもよく聞こえた、低く、甘い声。
―ものすごく、聞き覚えがあった。しかも、ごく最近。正確に言うと、昨日。
つ　ま　り　…　？
私は恐る恐る後ろを振り向き…絶句した。

――そこには、私の座っている席の後ろには、なんと、
もう会うことは無いと思っていたイケメン――あの、３番目の――が、いたのだ。

って、えーー！？ななな、なんですとーーーっ！！？

「…っ何で、ここに！？」

慌てて本を閉じ、鞄に突っ込む。私らしくなく動揺して、他人のフリすりゃよかったのに、つい声に出してしまった。
男は気だるげに椅子の背にもたれかかり、フッと、軽く笑う。

「…だって、俺、ここの大学の理学部だし、専攻。聞いてなかった？」

…その言葉に、またも、絶句。おいおい、妹の彼氏の～ってくだりはどうした!?ギャル子!こんなに近くにいるじゃねぇか!!

…いや、自己紹介聞いてなかった私も悪いけど!

「那津。」

若干パニックに陥っていた私に、ヤツの声が降りかかる。ゾクリと背中に悪寒が走った。

…危険信号だ。

頼むから名前、呼ばないでくれるかな。この男、声にまで色気があるようだ。

―しかし、私の気持ちなど露知らず。男は眉根に皺を寄せながら続きを話した。

「…それで、何で昨日帰ったんだ?バイトじゃ、なかったんだろ?」

確信を秘めた、やたら責めるような口調もプラスして。

……バレとるーー!!?いや、バイトはあったけど!いや、若干嘘だけど!

しかも何でコイツ、こんな不機嫌（?）ぽい顔してんの?

意味分からんっ!てか、美形ってなんでこんなに迫力あるのさ!?

怖いよっ!

…いつもの冷めた私はどこへやら。思考回路はショート寸前♪ってこんな感じだろうな…。

まだ5月だってのに、変な汗が止まらねぇよ、ハハ…。

――それでも、なんとか冷静さを取り戻そうと努力する。
落ち着け、本城那津。ここでうろたえたら、もう、なんかグダグダだ。
そんなグダグダな女になんか、なりたくない。そうだろ？

自分の日常を取り戻すんだろうが。これくらい、するっと切り抜けろ。
…よく考えたら、慌てる必要は全くないぞ。悪いことは（多分）してないはず！
自分で自分にエールを送りながら、私は今日初めて、男と目を合わせた。

綺麗な茶髪と、切れ長な瞳が視界に入る。男は、改めて見ると本当に整った顔をしていた。
私はそれに、少し気後れしてしまいそうなのを押し込めて、

「…いや、ホントにバイトだったんで。」

シンプル、かつ余計な内容を含まない返答をした。
…ま、本当のことだし。若干ね。

――すると、ヤツも私の方を見てニヤリと笑った。

「…へぇ？計算じゃなくて？」

……え。

表情が、固まった。今度は別の意味で、背筋が凍る。ブワっと、嫌な汗も吹き出る。

……何だ、この男。何　を、言ってるんだ。

「…何が、計算だって、いうんですか？」

かなりのショックを受けながらも、慎重に聞いてみる。

…ここは、本当に陽のあたるテラスなんだろうか？さっきまで暑かったのに、今ではシベリア並みに寒く感じるんだが。

私のリアクションに満足そうに、またもニヤリと笑いながら至極楽しそうに、男はまだまだ話す。

「全部。最初っから、最後まで。今のそれが、素でもなさそうだな？まだ少し違和感あんだけど。」

そっけなく言い放たれたその言葉に、コイツはすべてを理解している、と、なんとなく感じた。

衝撃音。……ガーンと、頭を殴られたみたいだ。ヤツの放った言葉が頭に響く。

……あぁ、こいつは、やられた…

昨日の茶番が全部見破られたってのか。この男に。この私が。

……嘘だろ？

―よほど私が変な顔をしていたのか、目の前の男は吹き出した。

「くくっ、何、その驚いた顔。俺に言わせりゃ、まだ白々しさが残ってたよ、昨日のキャラ。

まだまだ未熟だな。」

うるせぇ。

ピキッと額に青筋が浮かぶ。

―あのな、私はあのキャラ作りには自信があったんだよ。それをあんな短時間で、

しかも君みたいな男に見破られるなんて思ってもみなかったから、

ショック受けてんだよ。

放っとけよ。

私は目だけで男にそのように伝えると、ふとあることが引っかかった。

――コイツに分かったんなら、他の3人にもバレたんだろうか？

『キャラ作られる』ってなかなか良い気分じゃないよな。それで文句つけに来たのか？それとも単にあざ笑いに来た？

……どうであれ、何か逃げたくなってきたな。ダメかな。

――この男、このまま側にいると危険だ。

ホント、予測不可能すぎて、次に何が来るか全く分からない。マジで、有害以外の何物でも無し。

「黙ってないで、なんか言ってよ、那津。」

あーもう。

今考え中だから話しかけるなって。あと、呼び捨てヤメロ。昨日知り合ったばっかで、何、その親しさ。

…まあ、でもずっと黙っているわけにもいかない。私は口を開いた。

「…気付いたんだ？どうして？」

肯定。そして何でもないフリをして理由を問う。

…内心、ボロボロなわけだが。

―まったく、今まで親にさえ気付かれずにコレで中・高を乗り切ったってのに、よりによって、この性格の悪そうなヤツにバレるとは。なんとも屈辱だ。

ヤツは笑みを崩さないまま、私を覗き込んだ。

「まあ、俺もお前と同じ…ってか、似たようなもんだし？と、いってもレベルが違うけどな。」

私は、ヤツの言葉を心の中でリピートして考えた。

――『同じ』、だと。ああ…コイツもそういえば昨日と性格が違うな。

…なるほど、多重人格者、か。

多数の性格を使い分け、人と表面上の付き合いをするヤツ。確かに、私と似たようなもんだな。

ふーん。それで親近感（？）が湧いて私に近付いたのかな。

…そのまま、放っておいてくれたらよかったのになあ。やっぱ珍獣扱いか。ちくしょう。

私は、はあ、と息をついた。

――もう、それだったら。

「…ふう、だからあんなに私を見てたってわけ。穴があくかと思った。」

……いいや、面倒くさい。素でしゃべってしまえ。
この男の前では、とぼけたって無駄だ。

私がなんか気にくわないことをしたのなら、素直に謝ろう。そんで静かに、去ろう。それが1番てっとり早い。

すると、私の変化に気付いたのか、ヤツは口角をあげた。
そして、嬉しそうな笑みを浮かべる。ニヤニヤ笑いでない、ホンモノに近いもの。
『やっと正体を現しやがったな…』みたいな？
……私、悪役（ヒール）じゃ、無いんだけど。そして、君もどっちかっつーと悪だろ。

「…うん。お前はなんか、俺と同じニオイがしたから。」

そう言いながら、ヤツはいつの間にか私の目の前の席に腰掛けていた。

…ちょ、それ困るな。コイツは、性格はともかくとして、外見は文句なしにカッコイイ。
なんか、テラスにいる他の女子たちがめっちゃこっち見てるんですけど。
…明らかに敵意こみで。

…オーケイ、みんな、落ち着こうじゃないか。
コイツと私は知り合いですらないぜ？というか、むしろこっちからテイクアウトをお願いするよ！

誤解してもらっちゃ困るな、ハハハハーーー……
……

「…オイ、お前、考え込むタイプ？口に出して言えよ。」

ハッと気付けば、不審そうな顔が私を見ていた。

―おっと、いけない。トリップしてた。ちなみに、考え込むのは私の癖ですから。直すつもりも、ありませんから。

「…えーっと、ゴメン。それで、君は何の用で来たわけ？文句でも言いに来た？」

――さて、気を取り直して、本題だ。

とっとと済ませて、コイツとはさっさとおサラバしたい。
罵倒でも何でも、どんと来い。免疫なら、ギャルたちとの対戦でついたから。

――しかし、予想に反し、彼は怪訝そうな顔を作った。

「は？お前に何の文句があるんだよ？むしろ、言うんならあの女どもにだろ。」

…アレ、そうじゃないんだ？さらに、彼は美しいお顔の眉間にシワをよせ、いらだったように吐き捨てた。

「全く、那津が帰ってから散々だったよ。場が完全に白けちゃってさ、俺も、他の3人もお開きにしようって言ったのに、あいつら、すがりついて止めようとしたんだぜ？しかも、スゲー顔で。

あれは引いたな…つーか萎えた。」

―ほほぅ。それは俯瞰（フカン）して見たかったな。さぞ恐ろしい顔だったことだろう……

てゆうか、君、結構饒舌に話すじゃん。素は案外おしゃべりだったり？

「…あーそれは、ご愁傷さま。」

「人事だな。お前のせいだってのに。」

「ま、そうだけど。つーか、私、あの合コンつぶそうと思って参加したし。」

「あ、やっぱそれが目的か。ハハッ、性格悪いなー那津は。」

「君こそ。お互いさまでしょ。」

それから、私と彼は昨日のギャルたちをネタに、時折毒を吐きながら、話した。

…案外話してみると普通だなー。ポンポン会話が成立しているし……
ハッ！…って、ダメじゃん！

バッと周囲に注意を払ってみると、もの凄くこちらを睨んでいる女子の方々が……！
ううう、視線がさらに痛くなってきた…！しかもさっきより数、増えてるうぅー！！
目で人が殺せるって、ホントかもしれない。なんかまたうすら寒くなってきたし…！

訪れる戦慄。
―身の危険をぞうぞくと感じる。

…うん、もう、さっさと行こう。早いとこ脱出しよう。スイマセン、もう消えますからね、私は。

「っあー、とにかく。もう用無いんなら私、帰るから。あの3人にもよろしく言っといて。じゃあね。」

言いながら、私は鞄を持ち、そそくさと席をった。

「まあ、待てよ。」

――否、立とうとしたが、阻まれた。目の前の、男らしく、角ばっ

た手に。
…要は、ヤツが私の腕を掴んだのだ。
唐突なことに、そして意外と強い拘束力に私はびっくりした。

「ぅえっ!?離せぇ!」

っ、あー!なんか変な声出ちゃったじゃん、アホー!!
何だよ、まだなんかあるの!?

恥ずかしさから若干顔が赤くなっている私。
キッと、手を掴んでいる男を睨むと、彼は頬杖をつきながら余裕そうな笑みを見せた。

「ふっ、何、その顔。急いでないならまだ話そうぜ。」

…は?私はポカン…とした顔を作る。なに、のんびり言ってんの、コイツ。
だーかーら。そんなことしたら、心臓ショック起こすっつーの。
こんな中で君とトークを楽しめる程、図太くは無いんだよ、私は。
私は舌打ちしたくなるのをぐっとこらえ、冷めた目線を送った。

「あー、急いでるから、無理。じゃあ、サヨナラ。」

そう言って足を踏み出そうとするが、腕を掴む手に力を込めているのか、全然動けない。

「…離してくれない?」
「断る。」

うわ、ムカつく。

「あのさ、本気で言ってるんだって。私。」
「俺も、本気だけど。ホラ、座れって。」

言葉のわりには、真剣な顔でこっちを見る彼。私は困った顔を作り、うんざりと肩を落とした。

オイオイ……完全に拒否してんだから、行かせてくれよ。
それに、そんなに話したいんなら、その辺にいる女子を誘ってやれ。
…これ以上私を巻き込むない。

――

―その後も不毛な言い争いを続け、ついにヤツが折れた。

「……分かった。解放してやるよ。」

それを聞き、私はふう、とため息をついた。
―やっと分かってくれたか。若干上から目線なのがムカツクが、気にしないでおこう。

「あ、そう。じゃ…「じゃあ、俺の名前呼んでよ。」

…?

「は?」

「だから、俺の名前。」

……何て？

いや、聞こえたよ。聞こえたけどさ……名前？君の？何で？

突然、突き付けられた条件に、『？』を浮かべる私。

「……何で？」

あ、ヤベ、そのまま口にだしちった。

「……呼んでほしいから。」

しかし、彼は少し拗ねたような口調でぼそっと呟いた。

―呼んでほしいから、ねぇ。……うーん。イケメンの思考は理解できないな。

…そして、どうしてそんなに私をじっと見るのか。

ちらちらと流し目でこっち覗いてくるの、止めようか。後ろで女の子が、またひとりご臨終になったよ？

私は、仕方なく腕を組み、肩を軽く回す。

まぁ、名前を呼ぶくらいお安い御用だし……とっとと呼んで…

……

・・・・・アレ。

コイツの名前、何　だ　っ　け？

……。……ダメだ、ぜんっぜん、思い出せない。

思えばさっきまでも、『コイツ』とか『ヤツ』とかしか、呼んでないじゃん……

……。

だんだんと青くなっていく顔色。滴りおちる冷や汗。

……っ、ゴメンなさーーーいっ！聞いてませんでしたーーー！！
そういえば、小学生のとき、通知表に『もっと先生の言うことを聞きましょう。』って書かれてたっけ…
あれから１０年近く経つのに、未だに直ってません！！先生ーーー！！

先程のあわてぶりを上回るくらい、内心うろたえる。
……や、やばいよな、コレ。お、怒られるよな、絶対。
私の名前はバッチリ覚えてもらってるのに、私の方はさっぱり…なんて。

あーーっもう！こんなことなら自己紹介、キチンと聞いときゃよかったよ……

動揺を知られないように必死で顔を作っているものの、そろそろ返事をしなくては、時間的に怪しい。
さっきからずっとアイツ（名前不詳）に顔を見られてるし……。逃げ場もない。

――っええい、ここは恥をしのぐしかないわっ！覚悟決めろ！本城那津！

私は息を吸い込んだ。

「……ぁの、私、君の名前、知らない……。」

うーわーっ恥ずかしっ！大人として恥ずかしいわいっ、これ！せめて覚えてないって言えばよかった！？
いや、一緒か！？レベル的に！
心の中でもだえ苦しみながら、私は顔を真っ赤にして、俯く。
目の前のイケメンも目を丸くしている。

―イタすぎる静寂が、辺りを包んだ。

……ゴメン。ホントにゴメン。私は申し訳なくて、顔を上げることができなかったが、
相手の反応が気になり、しばらくして目線をあげた……

その時。

ヤツは、呆れた様子で、くしゃりと顔を崩して…笑っていた。

――――っ！

あまりの完璧スマイルに胸がドキッと鳴る。
…うっっわ！やばい！何コレ！？王子スマイルか！？核ミサイル並みじゃないか！この破壊力ー！
後ろでまた女子が数人倒れたよ、絶対！バタッて音がしたし！
そしてソレを私に向けるんじゃなーい！！笑顔が腐るよ！？
自分で言っといて悲しくなるけど、私にその技を使う価値は無いんだよ！？
…やっぱ、私と貴方様とじゃ、生きてる世界が違うんだって！！

私が合コンに参加したこと、ひいては生まれてきたことにまで後悔していたとき、男は諭すように話しだした。

「…じゃあ、覚えて。俺は、国崎　聖悟（クニサキ　セイゴ）。那津と同じ2年で、２０歳。」

そう言ってにこっと笑う彼に、私は安堵した。…どうやら怒ってはいないらしい。

…あぁ……。さいですか。よかったぁ……心の広い人だ、国崎様は。私が君だったら、軽くぶっとばしてた所なのに。

…とりあえず、私は彼の名前を呼んでこの場から立ち去ることにした。

「…分かった、国崎君。私もう帰るね。」

「うん。じゃあまた明日、１２時にここで。」

にこっと笑顔を作って言い、また彼も笑顔で返す。

……ん?待て。

なーんか変なの聞こえたなあ?幻聴かな?

マタアシタ?ジュウニジニココデ?

…もしや、また明日も会おうとか言っちゃてる?この人。

無　理　だ　ろ　！!

「…あの、丁重に断らせて…

「拒否権なし。

俺、自分の名前を忘れられたどころか、覚えられもしなかったこと、軽くキズついてんだけど?」

……う。それを言われると…

「じゃ、じゃあなんか奢りま…
「今、腹いっぱいだから、オゴッてくれるんなら、明日にしてくれる？」

ううう。最後まで言わせてすらもらえず、全部返される……
やっぱコイツ……じゃない、国崎君は、私より何枚も上手らしい。
――しかも、わざとボリューム大きくして言ってません？ギャラリーが増えてきてるじゃないスか。
逃げ道、ゼロ。回避、無理。

……。
……っあーーもうっ！降参だよ！こんちくしょう！

「分かったよ…また明日、ね…。」

私はがっくりと肩をおとして、力なく返事する。

…なんだ、この敗北感……。国崎君の勝ち誇ったような笑みが、さらにムカツク。

「そ、じゃあね。」

国崎君はようやく私の手を離すと、笑顔を貼り付けながら、ヒラヒラと手を振った。
手を解放されると、私はすぐに踵をかえし、かなりの早歩きで歩き出した。
…1度も振り返らずに。

ただひたすら、ずんずんと歩いていった。なので、国崎君が私をじっと見ていたのにも、もちろん気付かなかった。

――ああぁ……目立つのキライなのに！
あの国崎のボケのせいで私まで注目が集まったじゃないか！！
なにあの視線！コワイ！空気のように生きるのが人生の目標だったってのに！

しかも！明日も会うとか、本気で、ヤダ。
まんまと私をはめやがって…！あいつ、絶対私をからかって楽しんでるし！
あ～もう、死ね！滅べ、ボケナス！

心の中で、悪態をついてついて、つきまくる。
―しかし、『また明日』という約束が私の首を絞め、全く気分は晴れない。

ああ～～～！何でこうなったんだ！何かバチあたるようなこと、したか？私っ。
こんなに全力で、明日なんか来なければいい、と思ったのは初めてだっ！

――

どこをどうやって帰ってきたのか覚えてないが、気付いたら、私の家の前だった。
乱暴に鍵をあけて中に入り、積み上げてある布団に倒れ込む。

「うぐあぁぁーーぁあ……」

…女子にあるまじき妙な唸り声は、今日だけは目をつぶってくれ。
マジで、混乱してるから。私。

「くう……」

私は、目を閉じながらぐっと拳を握りしめ、ただ、想った。
…願わくは、目覚めたら、
今日の――ついでに昨日の――出来事がすべて夢でありますように。

……。

…本気で頼みます、困ったときの神様あぁぁ！
私にはロマンスより、平穏をくれ！

君の名は（2）（後書き）

那津の口の悪さは最早デフォルトです。ちょいちょい男口調にもなりますが。
ようやくヒーローが登場しましたが、こいつも黒いな……ｗｗ

変な男たち（1）

――朝起きたらすべてが夢だったことに気付いた。
いきなりギャルに絡まれたりしてないし、合コンにも参加してない。
あの国崎のボケと会ってない。
カフェで会話なんてもってのほか。

――あー…よかった。夢かあ。びっくりさせんなよぉ、全く。
そーだよね、私がこんな面倒くさいことに巻き込まれてるワケないよね。

――さ、今日も1限からだ。いつもやる気なさそうな教授に会いに行こう。
アハハハハ……

――――…よし、
現実逃避はこれくらいにしておくか。そろそろリアルに戻らないと。

――夢であってほしかったが、めったに着信の無い、私の携帯電話に来ていた1通のメールがすべてを物語っていた。

『今日、忘れるなよ。
国崎』

そう、昨日の別れ際にメールアドレスを交換し（させられ）たのだった。

で、今朝早速来た連絡が、これね。
…ご丁寧に名前まで入れてありますね……ハイ。

……。
…あーーー、困った。合コンのときより５０倍はうろたえている自分に気付く。

…なにしろ生まれたときからこの外見に、この性格。あんな、生まれながらのスター☆みたいなヤツにどう対処していいか、全然分からない。
…はーぁ、なんでまたあんなヤツと会うハメになるかな。
……正直会いたくねぇ。

あんな読めない男は初めてだ。関わるとまた、なにか厄介なことになる気がする。

…いや、そもそも。私をイジってそんなに楽しいか？
私は、ごらんの通りの本城那津よ？可愛いわけでもなければ、スタイルがいいわけでもない。
地味で、暗いし、貧相だし……あぁ、自分で言っていて空しくなってきた…。
とにかく、外見にセールスポイントはゼロ。かといって、中身に自信があるかって言われても微妙だけどさぁ。…私って、男側からするとむしろ避けたいタイプじゃないか？
昨日だって、あのままサヨナラ。の方があっちにとっても都合が良かっただろうに。

……ホント、あいつ謎。

私はがしがしと頭を掻き、寝ぼけている脳を目覚めさせる。そして、

ふらりと立ち上がり、そのまま洗面所に向かった。
そろそろ換え時な歯ブラシを口にくわえていると、ぼんやりとしていた頭がだんだんはっきりしてくるのが分かった。

そして、思考を続ける。

――いや実際、まったく謎、というわけではない。一応、あいつが私なんぞにカラむ理由は分かっている。
…原因はあの例の、ＫＹキャラだろう。私の予想以上にアレが受け、後を引いた。それだけだ。
あんなんやったから、国崎なんぞに興味持たれたんだ。
あーあ、変に意地はらずにひっそり息を殺して、地味で終わっときゃよかったよ、全く……。
『後悔先立たず』、だな。まさに。

――
――

洗面所を出て、頭をすっきりさせるためにコーヒーを入れる。さらに、６枚切りの食パンを１枚、トースターに放り込む。普段、朝食は食べない派だが、今日は国崎に言い負かされないためにも、カロリーをとっておくことにした。トーストにかじり付きながら、コーヒーを飲むと、幾分か落ち着いた気分になる。

――さて、もう、過ぎたことを悔んだってしゃーない。やめとこう。
…別に国崎は何をするってわけでもない。ただ私のことを珍しがってるだけ。
私はただ、今日を無難にやり過ごし、もう借りを作らなきゃいいん

だ。そしたらあいつだって、その内私のことなんか飽きるし。

…うし、頑張ろう、私。

私はガチャンとシンクの中に皿を入れると、ガッツを入れ、気合い十分に家を出た。

―――

――

――

……

……何か、緊張してきた…。

時刻は１１時５０分。待ち合わせの、１０分前。私は約束通り、例のカフェの白いイスに座って、国崎を待っていた。

―それにしても、あんなに９０分の授業って短かったか？誰かが時計進めたんじゃないか？チャイムが鳴ったときビクッとしたのは初めてだぞ。

ふう、と息を吐きだし、辺りを見回す。学生らしき男女が談笑しているのが見える、が、

未だ国崎聖悟は現れない。

…少し早く来すぎたかな、と、私はデート前の乙女（キモイ）のようにソワソワとしながら視線を戻す。

――と、理学部の棟から、標的である国崎が、ゆっくりと歩いてくるのが見えた。

少し長い茶髪を揺らしながら、長い足で１歩１歩近付いてくる。

…何、その余裕そうな顔。ムカツクな。笑顔なんか浮かべやがって。

「お待たせ。」

私の目の前にまで来た男は、そうやって定番なセリフを吐く。から、

「待ってないよ、今来たとこ。」

私も、これまた定番なセリフを返した。

そのうちに国崎が私の前の席に座る。私はそれとほぼ同時に話し出した。

「えーっと、じゃあ、何奢って欲しい？昼はもう食べた？」

――先手必勝。当たり前だ。私は早く帰りたい。そして縁を切りたい。

「そう、急がなくてもいいって。お茶でも飲もう。」

私の心情を察したのか、国崎は呆れたように言いつつ、こっちをチラリと見た。

…あー、ゆっくり話すつもりは無いから。昨日みたいにズルズルいくとか、冗談じゃないし。

「いや、借りは早く返したい性質なもんで。用事もあるし。」

『用事』をいやに強調して言い、ニコリと口だけで笑いながら国崎を睨む。

訳すと『とっとと飯を奢ってテメーと離れたい。私は忙しいんだ。』
国崎にも裏の意味は読めたらしい。苦笑をこぼした。

「…ククッ。やっぱお前、面白い。そんなに、俺が嫌い？」

嫌いです。言えないけど。

「高いもんでもいいよ、どうぞ。」

私は国崎の言葉を全無視して、先を促した。

……。

すると、国崎は口を閉じて少し黙る。何を言おうか迷っているのか、メニューを思い返しているのか。

「…じゃあ、スペシャル苺パフェ。」

……後者だった。てか、本当に高いヤツ頼んだな。しかも甘党か。
今流行りの甘党男子か。
意外すぎるわ。

「ＯＫ。じゃ、待ってて。」

しかし、彼の趣味に言及するつもりはない。
特にリアクションせず、私は鞄をもって席を立ち、カフェに並ぶ人の最後尾に並んだ。

―よしよし、後はパフェを買って終わりだな。結構、簡単に済んで

よかった。
国崎に会わないためならパフェでも何でも買いますとも。ええ。

――
――

さて。
無事に『スペシャル苺パフェ』を手に入れた私は、国崎のもとへ戻ろうとしたのだが、

――――何、アレ。

私からはヤツの姿が見えなかった。――ものすごい女子の群に埋もれているのだ。
多分、２０人前後はいるだろう。どいつもみんな顔を紅潮させているのが分かった。
それを見て、呆然と立ち尽くす私＋パフェ。

……うわ、やっぱりすごい人気なんだ国崎のヤツ。危ない危ない。
これ以上関わったら、あの内の誰かに刺されるところだったよ。……夜道とかで。

早めに見切りつけといて、助かったぁ、と心の中で安堵のため息をつく。
しかし……どうしよう。パフェを渡して終わり、のハズが最後にこんな障害が。
いや、モチロン渡すよ？いったん約束したことは、最後までやりとおすのが義理というものだし。

でも、かと言って、こんな群のなかに突っ込む勇気もないしなあ…
……。

う〜ん、とうなっていると。

「ナッちゃん!!」

国崎……じゃない男の声が、恐ろしいことに集団の中から聞こえた。
…まぁ、あいつは私のことを図々しくも呼び捨てで呼ぶからな。
こんな、某清涼飲料水みたいには呼ばない。

…て、いうか、今、私を呼んだのか?他に夏子さん、とかいるんじゃないか?
夏子さん(仮)?呼ばれてますけど。

「本城那津さーーん!!」
「っ!!?」

だが、次いで耳に届いたのは、明らかに自分の名前。ビクッとして、思わずパフェを取り落としそうになった。

あ〝ーー!フルネームで呼ぶなよ!何か予想はしてたけど、やっぱり私のことですか!!
あわあわと分かりやすくうろたえる私。絶賛パニック中なう。

うわ…女子のみなさん、冷たいまなざしを一斉にこちらに向けないで。
ん?つーかこの声、聞き覚えが…。

「あ、ちょっとキミタチ、通してあげて!」

混乱の最中、色々ごちゃごちゃと考えてると、女子の中にいるらしいその男の声が響き、パッと道が開けた。
――直後、私は衝撃的な光景を目にする。

増　え　と　る　。

…正確に言えば、合コンに参加していたイケメン全員が、国崎を囲んでイスに座っていたのだ。

……。…っっそうきたかーーー！！
予想をオオハバに超えた展開に、私は軽く眩暈を起こした。

…お前かっ、国崎ぃ！！頬杖をついて、ニヤニヤしている男を振り返り、ギロッと睨む。
様々なパターンを想定してはいたけど、これは予想外すぎだっ！
……というか、みんなS大生だったのね……。知らんかった。やたら親しそうですし。

「ナツちゃん、1日ぶりー！」
「ちょっと、俺にもメアド教えてよー。聖悟だけなんてずるいしー。」
「パフェ、美味しそうですね。俺も買おうかな。」

―ちょ、一気に話し始めんなって。何コレ。何この状況。イケメン達に囲まれた1人の女……？
ベタな逆ハーレム少女マンガか、コレ？
…だったらもっとマシな主人公選べよな。私が主役なんて、シャレにもなんねぇよ。

「…ちょっと、一遍にしゃべられても。」

とりあえず、困った顔で正論を言うことに。ホントはちょっとどころか、かなりまいってるわけだけどね。

……もう、君ら、みんな消えてくれないかな。私のことは放っとけって。

「…あぁ、ゴメン。でもまた会えてうれしいよ、ナツちゃん。合コンのとき連絡先も教えてくれなかったし、聖悟が出くわさなかったら、もう会えなかったかも。」

私が心の中で国崎をメッタ刺しにしていた時、黒髪をワックスでたたせ、左耳にピアスを1つ付けた、爽やか系イケメンがそう言った。

…名前はもちろん知らない。

――いや、私は会いたくありませんでしたけど。一生。故意に国崎が会いに来させただけですけど。

「あー、ハイ。そうですね。」

私は黒髪の言を適当に流し、国崎の前にパフェを置いた。…若干、力をこめて。

ヤツはフッと笑って、「どーも。」と受け取った。ああ…殺してぇ。

――と、

「おい、聖悟。女のコに奢らしてんの？フツー逆だろー？」

4人の中で1番チャラそうな、茶髪メッシュの体育会系イケメンが

口を挟んだ。
…名前はもちろん以下略。

そう、もっと言ってやってー。
コイツ最低だからー

そして、もう1人の黒髪眼鏡の、インテリ系イケメンも私に顔を向ける。
…名前は以下略。

「そうですよ。スイマセン、俺がお金払いましょうか？」
「…いや、私が奢るって言ったから、いいよ。ありがと。」

わー、なんて紳士。そういやあの日、この人が1番私的に印象良かった気がする。

いい人だな、眼鏡の人は。…それに比べて最悪だな、国崎は。
どうせ皆を集めて、私があたふたするのを見たかったんだろ。
悪だ。君は『聖悟』から『悪悟』に改名すべきだ。こいつの親も何考えてこんな漢字あてたんだか。
聖人でも何でもねぇよ、実際のこの人。

変な男たち（2）

――その後も、私は引きつった笑顔を貼り付けながら、彼らと雑談を交わす。

―その間、分かったことが、1つ。
どうやら他の3人には、キャラ云々の話しは知られてないらしい。
彼らが合コンのときのまま、変わらないテンションで話しかけて来るのがその証拠。
……まぁ、そうじゃなきゃ、私にまた会いたいなんて酔狂なことは言わないだろうが。
―そんなわけなので、私も無理してテンションを上げて話すハメになった。

しかし、…まいった。このまま話してんの、疲れてきた。
だだ下がったテンションをムリヤリ普段以上に上げるのって、かなり高レベルの苦行だ。
もともと私を守るために作ったキャラが、ここまで後を引くとは、思わなかったなぁ。
後腐れなく終わろうと思ったが、無理みたい。

……。
あー、もう、いっか。国崎にもバレたことだし、どうでもよくなった。
ここはもう、カミングアウトして怒って帰ってもらおう。
多分、大学の空気は悪くなるだろうが、コイツらと慣れ合うよか、

よっぽどマシ。
…そうだろ？本城那津。

そう思い立つと、私はすうっと息を吸いこみ、意を決して口を開いた。

「…あのさ、合コンのときの私は、私じゃないから。」

いきなり真剣な目でそう言った私に、びっくりしたような顔をする3人。

「…んー？じゃ、君じゃなきゃ誰だったのー？」

私の雰囲気が変わったことに気付いたのか、少し真面目な顔をして、茶髪が尋ねた。
私は、ふっと一瞬笑うと、お得意のやぶ睨みで全員をジロリと見ながら、一気に――

「…私が作ったキャラだよ。明るいムードメーカー、合コン仕様。素の私は地味で暗い、毒舌女だから。なんの面白いことも無いから。分かったら、とっとと消えろ。迷惑なんだよ、君ら。」

――毒を、吐いた。

瞬間、しん……とした静寂が訪れる。脳内の私は高笑いをしながら男たちを見下していた。
…よし、言った。流石にここまで言われたら、お調子者のコイツらといえども、怒るに違いない。

『うわ、超ムカツク。』

『そんな人だったんですね。幻滅しました。』

――そんなセリフを期待していたのだが。

「ぶっっはははははははっっ！！！」

―あ、れ？

突如響いた大きな笑い声に、私だけでなく、周囲のギャラリーも目を丸くする。

……何故に、爆笑？え、私、今そんなに面白いこと言った？

「えーアレ、作ってたの！？全然、気付かなかったし！」

「しかも、フツーそれ暴露するー？」

「地味で毒舌って…素の方がよっぽど面白いですよ。」

3人は思い思いの感想を言って、さらに笑い声を上げる。

…う、ウケてるよ……コイツらのツボがよく分からないんだけど。

…あれ、もしかして何か失敗、した？私。

「おい、聖悟！お前の言う通り、かなり面白いな、ナッちゃん！」

こと、茶髪の彼のウケようは尋常でなく。隣の国崎の背中をバシバシと叩いて言った。

―て、ええ！？失敗確定！なんだか分からないけど、マズい方向に行ってる！

好感触、とか、望んでないから！！こっちは！

―そして国崎。さっきから黙ってるが、この人たちに何を吹き込ん

だんだ?テメェ。
話しかけられた男は、パフェを食べながらニヤリと笑った。

「だろ?でも、盗るなよ。」

は?取る?撮る?トルって何??爽やかな顔で笑ってんじゃねぇ。
最早怒りの矛先が迷子になった私はギンッとヤツを睨みつけていると、ついに、黒髪から決定打が打たれた。

「…ね、友達になろうよ、ナツちゃん。俺ら、君のこと気に入ったよ。」

瞬間、体中に電流がバリバリと走った。

これは…

うわぁっっ!?最悪の結末じゃんかっ!?何故か私、彼らのお気に入りカテゴリに分類された!?
何で!何が起こって!?
…ダメだ、私にとって、コイツらは完全に理解不能です!もう、手に負えないよ!!

――ゾクリ……――――――

そして、背後に突き刺さる、たくさんの、視線、死線、四川。
…あぁ、そういや、推定20名の女子に囲まれてたんだっけ…?じゃあ、黒髪の言った、トモダチ宣言もバッチリお耳に届いたわけで……。

……。

は、はは……。は……

もう……

……プツン。

私の中で何かが切れた音が、確かに聞こえた。

ドンッ！

「キャッッ！？」

私は突如、適当にその辺にいた女子を引っ掴んで、男たちの前に押しやった。いきなり前に出された、全く知らない女はびっくりしている。

…そらそーだわな。でもゴメン。身代わりヨロシクね。

「友人は作らない主義なんで。作りたいんなら、この子とトモダチになってあげてください。じゃ、サヨナラ。」

――私はそう言い捨てて、足のターボエンジンをフルに回して、全速力でその場を逃げ去った。

４人のあっけにとられた顔とか、国崎が何か叫んでいたこととか、直後、女子たちがワッと押し掛けだしたこととか、

…もう、どうでもいいわ。

とにかく、走った、走った。こんな強制逃亡は、無様以外の何物でも無い。
――でも、限界だった。

っあーーーーっもうっ！
トモダチ、だと！？何ハゲたことぬかしてんだよ！？なるわけねーだろうが！！
私はな、わが身が1番可愛いんだよ！

君らみたいな主役級俳優と、スタッフの下っ端にもなれないような私が知り合いなんて、
客観的にもおかしすぎんだろ！
しかも、君ら全員、かなりの人気だよ？女子の嫉妬をナメんなっ！
無視したつもりだったが、私にはボソボソ呪いの言葉が聞こえたんだっての。

『何、あのブス。何で国崎くんたちと仲良さ気なワケ？』
『身の程をわきまえろよ、ちゃんと鏡見えてる？』
『どんな手を使ったのかしら。あの貧相な体で。』

――こ、怖えぇぇ！！マジで怖ぇ！！大学生にもなってあんな低レベルな妬み！！
…でもヤツらは、本気だ。本気で、私を殺る……！

――女って、これだからイヤなんだよね……。ハァ……。

――もう、いいさ。これからは、あのカフェに近寄らないでおこう。
学食はやめて……、面倒だが、弁当を作って近くの公園で食べるか、どっかの喫茶店に入ろう。

…あーもう。おとといより昨日、昨日より今日と、事態が悪化していってない？
―今が人生で最大に面倒臭いわ。

どうしてこうも、上手くいってくれないんだろう。…私は静かに暮らしたいだけなのに。
それも、これも、何もかも、全部アイツ、国崎のせいだ。―アイツさえいなけりゃよかったんだ。

私は振り返ることなく、街道をひたすら突っ走った。

―
―
―

―どのくらい走っただろう。私はピタッと足を止めた。
……キツイ。
やっぱり運動不足の体に全力疾走は無理があったか。ものすごく息が切れている。
―気がつけば、大学からかなり離れた、とある公園に来ていた。

私は休憩がてら、近くの自動販売機で缶コーヒーを買って、ベンチに座る。
ゆったりと腰をかけて、天を仰ぐと、すでに日が傾きかけているのが見えた。
私以外、誰もいない空間を確認。そしてポツリと呟いた。

「……国崎…死んでくれ…。」

「なんで」

……！！

独りだと思っていた空間から、突然の返答。私は飛び起きて、声の主を振り返った。

目の前には、彼。

――国崎聖悟の、馬鹿みたいに整った顔があった。

……っな、なんで、ここに？

瞬間移動でもしてきたのか、この野郎！？

変な男たち（2）（後書き）

微妙な所ですが、ここで切ります。
那津の心の声と地の文の改行どうしようか迷う……

奇妙な夜（1）

……しばらく見つめ合う私たち。
…うん、何度見ても、ヤツはそこに実在していた。つーか、こんな顔が2人も3人もいるもんか。
―私の目の前には、国崎聖悟がいた。
何を言えばいいか分からなくて、数分、ボーっと立ち尽くす。
なんだか微妙な雰囲気を壊したのは、国崎からだった。

「お前、」
「ひっ！？」

うはっ、また変な声出た。オーラが怖いって、国崎さん。

「…逃げてばっかだよな。あの後、俺ら大変だったんだけど？」

低い声で脅しつつ、私を睨む彼。
――そんなん知らんがな。私は私で、いっぱいいっぱいだったんだから。

「…もう、私のことは放っといてって。」
「イヤだ。」
「…何で。」
「俺らに気に入られるなんて、そうそうないことだぜ？光栄に思えよ。」

何様だよ。俺様かよ。
女子はみんな、君らに気に入られるために動いてるとでも？バカか。

「……そりゃ、どうも。余計なお世話で。」
「可愛くねぇ。」
「自負しております。」

無駄な会話もそこそこに打ち切り、私は立ち上がった。そして、飲みもしなかった缶コーヒーを片手に去ろうとする。

「オイ、待て。」

…途中で止められたけど。ちぇ。

私は仕方なく振り向いて国崎を見る。
私は無表情。ヤツも、無表情。両者とも、何も言わない。

「……どうして、ここに来た？やたら早かったけど。」

しばらく睨みあっていたが、結局、私が根負けした。肩を落として、国崎との会話を続行する。
……早く帰りたいな。

「こっちに走ってったって、聞いた。俺は車で追いかけてきた。」

…おー。大学生でもう車持ちですか。いいご身分で。
…って、そうじゃない。私が聞きたいのは、だな。

「どうして、私を追ってきたかって、聞いてんの。」

「…ムカついたから。」

……は？

「…1発殴りに来たってこと？」

「……別に、女を殴る趣味はない。基本、俺、紳士だし。」

どの口がそれを言うか。紳士て。ブッ……

「…笑ってんじゃねぇ。」

「……っは、君、絶対紳士ってガラじゃないって。」

「そういうキャラでいるっての。普段。」

少し不機嫌そうに言う国崎に、私もふと思い起こす。

―あ、そういやコイツ私と同類、だっけ？

…でも、それは……

「似合わん。」

「は？」

「そんな性格、絶対合ってない。むしろキモい。」

――そんなんじゃ、騙される女子いないって、多分。

こんなに違和感あるのに。

「……へぇ。じゃあ何なら、俺に合うって？」

「ふむ、そうだな……俺様ドSキャラ？あ、これは元々か。」

「…クッ、俺がドS、ねぇ。」

「そうでしょ。こんなか弱い乙女いじめて。」

「乙女って、誰だよ。どこにいるわけ？」

「…あぁ、君、目つきだけじゃなくて目も悪いんだね。」
「ひとこと多いんだよ、那津は。」
―そうやって、しばらく話しあった。
……何だか、笑える。国崎と、公園で毒吐きながら、会話してるなんて。
…少し前の私なら、ありえなかったシチュエーションだ。
――でも、もう終わり。終わりにしておこう。私と彼は同じようで、その実、全く違うのだから。
私はくるっと彼の方を向いた。目が合う。
―約束は、果たした。もう、用はないはずだ。…私にも、国崎にも。だから、今度こそお別れだ。
「…じゃあ、私、帰るから。もう明日からは関わるなよ。」
そう言い残して、ヤツからくるりと背を向け、公園を出ようと……出ようと……？
……へ？
何で、足、動かないんだ？
「……行くなって。」
……気が付くと、国崎が私を後ろから抱き締めていた。
身長差もあって、私は完全に国崎の腕の中にすっぽりと収まってい

る。

……っ！！

一瞬遅れて、顔面の体温が急上昇する。

…自慢じゃないが、私は男性経験はゼロに近…いや、完璧ゼロだ。

……だから、こんな風に抱き締められるのも初めてな、ワケで。肩ハバが広いな、とか、腕長いな、とか……。

……。

……うわ、何だ、キモいぞ、私。絶対顔真っ赤だ。後ろは振り向けません。

…そして、一体何だ、コレ。ドラマか。そういうのは現実でやっちゃダメだろ。

やるならホンモノの女優を選べ、国崎。

――この間、およそ3分。たっぷり時間をかけたパニックでしたよ、ええ。

そして、少し長めの沈黙の後、

「……国崎、離せ。」

意外と冷静な声が出たことに、自分でもびっくりする。

「イヤだ。」

でも、彼の方は聞く気が無いらしい。…なにが『イヤだ』だよ。駄々っ子か。

「何で。」

「……ムカつくから。」

そのひとことで、ようやく私はこの意味不明な行為の理由を理解した。

――ああ、コレ、殴らない代わりの精神攻撃なのか。なら、他のが良かったな。てか、殴ってもらっても別に良かったんだけど。

内心でため息をつき、

「とにかく、はな、せ！！」

今度は強引に腕を振り上げる、と、パッと、簡単に拘束は解かれた。途端に安堵の息が出る。

――なんだ、強く反抗すりゃよかったのか。もっと早くそうすりゃよかった。

てか、よく考えたら、……いやよく考えなくても。

痴漢、だよな？今の。…顔で騙されるところだった…危ない、危ない。

放たれた、と同時にヤツと少し距離を置いた私は、ジロリと国崎を睨みつけた。

「…オイ、次やったら叫ぶからな、変態。」

「…変態じゃねぇし。

だったらこの世のほとんどの男が変態だっての。」

…マジか。いきなり抱きつく変態どもが、大半？うわ、怖。もう街中歩けないじゃん。世の中の女性。

「で、何よ?変態。」

あえてこのネタを引っ張ってみる。――と。

「国崎だっ。人の話、聞けよ。」

彼が少しイラついた口調になったので、しばらく黙った。そして再度口を開く。

「…引きとめた理由は、何?」

「……送ってく。」

「結構です。」

再び歩き出そうとしたら、今度は手を掴まれた。

「だから、何よ?」

いい加減、ウザイぞ。国崎。

「…ホントット、可愛くねぇのな。」

「知ってるって、そんなこと。」

だが、国崎は意外と強い力で私の腕を握り、意見を譲ろうとしない。

「…もう暗いんだから、夜道は危険だろ?黙って送られろ。」

―なんて、いかにも、デキル男が言うセリフも言う。

私はハッと、鼻で笑い飛ばした。…脳内で。

頼れる男アピールか?……これまた、ベタな展開だな、俺様王子さん?

でも、その必要はないぞ?

「私を襲うヤツなんか、いないし。むしろ君と一緒のが、危険。」
「言うじゃねぇか。でも、世の中には、マニアックなおっさんだっているんだよ。」

遠まわしに失礼だな、マニアックて。…いや、ホントのことだと思うけど。

「いいから、来い。」

まだ、うだうだと抵抗していた私の腕を、グイッと引きながら、国崎は歩く。

…っと、痛いわ!ボケ!力加減考えろ!離せ!おかまいなく!!

色々と叫んだ気がするが、国崎は首にもかけず、公園の傍に停めてあった黒い車の前で止まった。
…どうやら、この黒い日本車が、ヤツの愛車らしい。
私は車種に詳しく無いからよくは知らんが……、高そう。

「オラ。」

と、国崎は私を助手席に押し込み、自分は運転席に乗った。

…ちょ、誘拐犯の乗せ方だろ、今の。国崎って、変態の上に、犯罪者なわけ?強引すぎる。

「失礼なこと考えてねぇで、家の場所、教えろ。」

ナビに向かって人差し指を突き付けている国崎が、不機嫌そうに言う。

…うわ、出たよ。エスパーが。私にも心の読み方、教えてほしい。何かコツでもあるのかな。

「…早く教えねぇと、俺の家に「S大を出て2つ目の交差点を左。さらにX町の所の交差点を右に曲がって、突き当りのアパートが我が家です！！」

……なんっつー恐ろしいことを言いやがる、この野郎。ちょっと黙ってたからって、何でその結論に行き着くかな？

…流石、変態俺様。何考えてんだか、ワケ分からん。

私が行き先を教える（聞きだされる）と、国崎は、「了解。」とだけ呟いて、車を発進させた。

――

――

夜の車道を、闇に紛れて黒い自動車が走り出す。時折、街灯のオレンジ色の光が車内を照らすが、

私も運転席の男も、黙って前を向いたままだった。

―聞けば、私の家まで約１０分ほどかかるらしい。…思ったより遠くまで走って来たもんだ。

車でそれくらい、ということは、徒歩だとその倍以上の時間を要していただろう。

……一応、感謝すべきか？好意かどうかはともあれ、ちゃんと送ってくれるらしいし。

「那津、」

口を開こうとしたとき、国崎から話しかけられた。前を見て、ハンドル片手に運転する国崎。

…何をしても絵になる男だ、ムカつくことに。

「…何？」

とりあえず聞いてみる。――いや、聞かなきゃよかった。

「お前のメアドと番号、あいつらに教えといたから。」

―それを聞き、ピシッと、私は見事にフリーズした。漫画風に言うなら、石化、だ。

――ナンデスッテ？？

「っはあーー！？何してくれてんの、君！！」

突然、ガバッと起き上がった私に国崎は多少の驚きを見せたが、気にせず詰め寄る。

「どーして、そんなコトするかな！？」

「どーしてって…聞かれたから。」

ヤツは何でもないように答える。

「ちょっ、プライバシー！プライバシーの権利を主張します！」

テッメェ……せめて確認とれや、こっちに！！事後承諾て！

「残念ながら、プライバシーは却下されました、那津さん。」

法律で認められてる権利すら、無いわけ！？私！

…私は意気消沈した。そうだよ、こんなヤツなんだよ。…血迷って感謝なんてしなくて良かった。

「…だいたい、何でダメなんだよ。減るもんでもねぇだろ。」

「減るわー！主に、私の精神面とか！」

ヤッベェ……携帯、開くの怖い。

携帯電話なんて、普段使わないもんだから、ずっと電源切ってたよ…何てこったい。

「精神て…何だよ。」

国崎は苦笑しながら私の方を見る。…ハイハイ、カッコイイネー。

「…君のメールアドレスだったら、いくらで売れるかなー？」

「売るなよ。」

「私のは無断で売ったくせに？」

「俺は、いいの。」

いいのって……何がいいの？またも俺様なの？ホント、一遍死ねばいいのに。

ぶつくさと文句を言うも、結局送ってしまったものは仕方がない。
私がついには黙って窓の外を覗きこんだ。

――車がS大を通り過ぎる。私の家まではもう目と鼻の先だ。
しばらくしてふて腐れている私に、国崎はまた話しかけてきた。

「…分からねーんだけど、お前、何がそこまで嫌なワケ？」
「何がって…何が？」
「質問を質問で返すな。何で俺らとダチになんのが嫌なのかって、聞いてんの。」

何だ、そんなこと。……んなの、答えは、1つ。

「私は、君らと関わりたくないからだよ。」
「……。」

国崎は、黙って私の方を見た。…運転中は前を見ようぜ？

「…あ、別に、君たちにだけじゃないよ。私は誰とも交流しない。1人でいたいだけ。」

―言っただろ？私に、友人はいらない。私には、一匹狼がお似合い。
大学に入ってようやく自由になれたんだ。私は、このまま普通に過ごしていきたいだけだから。

――どうか、このまま放っといて下さい。

国崎の綺麗な眉根にしわが寄る。ハンドルを握ったまま、彼は口を開いた。

「……人嫌い、か？」

「あー、別にトラウマとか、そんな大層な過去はないけど、多分そうかな。…だから、君たちのお友達にはなれません。ごめんなさい。」

国崎と目線を合わせ、ペコリと頭を下げた。そのままの姿勢を保ちつつ、男の反応を待つ。

……ここまで人が真摯になって謝ってんだ。そろそろ私のことなんか諦めて、他の、もっとキャラの強い子でも見つけてはくれまいか。そっちと遊んだ方が、よっぽど面白いと思うぞ？私なんかより。

そう願いながら待っていると、国崎が静かに口を開いた。

「……それで？」

「…は？」

『それで』、とは何ぞや。これ以上話すことなど、何も無いが。

「それで…俺たちが納得するとでも思ってんの？」

……え？

目を瞬かせる私に彼の眼差しが重なる。どこか暗い色を施したソレは、私を真っ直ぐ見ていた。

「那津、もう1回言うけど、」

赤信号で車が止まる。同時に国崎は私の方へ身を乗り出した。

「『俺は』、お前を気に入った。そう簡単に逃げられると思うなよ？」

……！？

私は、再びフリーズした。顔もひきつってたかもしれない。

隣で国崎はフッと笑うと、前を向いて運転を再開した。

……こ、この…オレサマがぁあああーーー！！！？

嘘だろ？なんでそうなる？普通、『あ、そう。』で済む問題だろうが！

男前はそんな執着なさそうって、私の勝手な妄想だったのか？いくら私が君に興味ないからって、イケてるメンズのプライドなんて発動させなくていいから！！

マジでうぜぇえええ！！

「…しつこい男は嫌われるよ？」

とりあえず恨みを込めてそう言ってみる。

「しつこくて結構。…さ、着いたぞ。ここじゃないか、家？」

しかし彼は意に介すことなく。さらりと流されてしまった。

……って、着いた？…あ、ほんとだ。いつの間にやら。

眼前には、まさしく、私の住んでいるアパート。3階建のグレーの物件。
…よかった、帰ってこれた。…無傷じゃあ、無いけど。
国崎はアパートの前に音も無く車を停めた。

―バタン。

私は助手席のドアを閉めて、国崎の車を降りる。そして、持ち主の男も、反対側のドアから降りた。
……って、何故に？

「…何で君まで降りる？」
「別に。なんとなく。」

…あ、そーですか。

「あ～、じゃ、どうも送っていただいて、アリガトウゴザイマシタ。」

…一応お礼を言っておくとしよう。ま、人として、な。

「何で棒読みなんだよ。誠意が感じられねェ。」

……るっせ。言ってもらえるだけマシと思えよ。今、腹わた煮えくり返ってんだから。
私は振り返って、男に向かって人指し指を突き付けた。

「……国崎。」
「？」
「君も早いとこ帰って、寝て、夢から覚めた方がいいよ。君はどう

やら、一昨日から幻覚を見てるらしいから。」
「…ったく。俺は正気だっての。何で信じねーかな。」

信じられるワケないじゃん。
こいつの今日の行動は、はっきり言って奇行としか思えない。
それとも、マヤクか？今流行りの。

「那津。」
「――！？」

ジーッと睨んでいると、突然ヤツの腕の中に引きずり込まれた。
そのままぎゅっと抱き締められる。

……本日2度目！？

「っわ！？オイ、離せ！叫ぶぞ！」
「もう叫んでるし。近所迷惑だからやめた方がいいんじゃない？」
「～～！」

てめっ！卑怯だぞ！

「ま、運賃だと思って。那津って中々抱き心地いいんだよな～。」
「…デッカイぬいぐるみ、郵送してやるから！とにかく離れろぉ！」

…じたばたもがいてやると、国崎は舌打ちして私を離した。
……舌打ちしたいのはこっちだっつの。こんの変人が！また顔が熱くなるじゃんか！

「っじゃ！もう帰る！」
「おぅ。また明日。」

「永遠にサヨナラ！！」

―最後のヤツの言葉は無視して、ヤケクソ気味にそう叫ぶと、私はそのままアパートの中へと消えた。

――残された男はしばらく立ち尽くした後、嫌な笑みを浮かべ、自分の車に飛び乗った。

――

――

「っはー…、何だっての…。」

部屋に入る。しっかりと鍵をかける。お腹がすいたので、カップラーメンにお湯を入れる。

……何やっても、先の出来事が頭をかすめる。気を抜いたら、すぐに国崎の顔が浮かんでくる。

……コレは、ヤバい。ヤツの毒気にあてられたようだ。何、この脳内に占めるあのアホの割合の大きさ。

…こんな、乙女脳、私じゃない。

……。

「っだーー！もう、ヤメヤメ！」

思考をブチ切って、頭をぐしゃぐしゃとかく。

―やっぱり、アイツの顔が良すぎるのがいけないんだ。あんな感じ

で迫られたら、誰でも……こう……ドキッとするにきまってる！私の女の部分（どうやらあったらしい）が過剰に反応してしまってるに過ぎない！

ああいう……、多分、国崎にとっちゃ何でもないことに動揺する自分が腹立たしい。

―私だけこんな悶々と悩んでるなんて、不公平だ！

もう、忘れてしまえ！！

そうして、私は雑念を払うため、シャワーを浴びることにした。

――

シャワーを浴びると、まあ、少しはスッキリした。チューハイを飲みながら、髪を乾かしていると、

「……あ。」

鞄から飛び出た私の携帯電話が見えた。

そ　う　い　え　ば　……あの3人からメール、きてるかも…

まだ今日やるべきことがあったのに戦慄し、私は慌てて携帯を取り上げた。

しかし。

……うう。見たくない。

電源ボタンに触れる親指が震える。携帯片手に、顔を青くしながら苦悩する私は、どう見ても不審者だ。

……。

っええい！自意識過剰だぞ。本城那津！

アドレスが渡ったからって、あっちはメールなんか打ってないかもしれないじゃん！ハイ、メールボックスは空でした☆かも！！！
そんなこんなで、私は覚悟を決め、携帯の電源を入れた。

――結論から言おう。
メールなんざ3日に1通ペースの可哀想な我がブルーの携帯は、前代未聞の事態に陥っていた。

『着信　18件
新着メール　39件』

まさに、驚きの数字だ。こんなに連絡がきて、我が携帯もさぞ驚いただろう。
……どうすんの、コレ。電源切っといて良かったわ。
着信は全部、知らない番号3つから。やはり、あの3人で間違いなかろう。
ちょっとしたストーカー並みじゃあないか……お顔がすばらしく整った方々だが。

着信履歴は放置し、メールを読もうと、次にメールボックスを開く……が。
ここで問題浮上。
私、あの人たちの名前…知らないじゃん。
どうしたものかと、あごに手を当てて、考え込む。

…うーむ。国崎のように直接聞くのは避けたい。……もう懲りたし。
どーしよっかな。

―結局、考えた結果、誰が誰だか分かんないが、1番古いメールから開けてみることにした。

文字の羅列を目で追う。

――ほとんどが、昼のときの謝罪…と明日の誘い、だ。

大体書いてある内容に大差は無かったが、幸運にも、なんとなく文面で顔と名前が一致した。

…いやー、文章って性格出るんだな。助かった。

爽やか系黒髪ピアスの男が、
斎藤　宏樹（サイトウ　ヒロキ）

チャラい茶髪スポーツマンが、
水谷　信二（ミズタニ　シンジ）

ジェントル黒髪眼鏡の人が、
乾　圭太朗（イヌイ　ケイタロウ）

――と言うらしい。一応、ちゃんと記憶しておかねば。

しかし、この人たちも半日でよくもここまでメールを送れるもんだ。

私は物臭だから、メールは基本、しないのだ。

――すべてのメールを読み終え、メールアドレスと携帯番号を登録し終えた私は、

今度は新規メール作成画面で頭を悩ませる。

…返事、どうしよう。流石にこれだけのメールを全無視する度胸は、無い。

しかし……さっきも言ったが、メールは大の苦手だ。

絵文字も、顔文字も、特には使用しないし。
…というか、事務連絡くらいにしか、メール使ったこと無いな。

――そんな女子失格の私は、苦心して、同じ文面を3人に宛てて作成した。

『今日は突然逃げて、すみません。
でも、女子の友達が欲しいなら、他をあたって下さい。
おやすみなさい。

本城』

コレ…で、いいか?そっけなさすぎ?
いやいや、でも、正直な気持ちだし。怒ってもらった方が逆にいいか。
――…よし、送信。

送信完了画面を確認し、私は携帯を放り投げた。そのまま自分の体も布団に投げ出す。
――なんか、今日、超疲れた。まだ寝るには早い時間だが、すごく眠い。

「……もう…うぜぇ……。」

思わず零れた、心の声。

もう、ヤダ。あいつら、めんどい。…何なんだよ、トモダチって。
今まで友人なんざ、数えるほどしか作ったこと無いから、よく分からねぇよ。
――面倒なことは大嫌いなのに。

もう、学生時代の繰り返しはゴメンだ。なんとかして逃げ切らないと。

どうやったら、飽きてくれるのかな……

誰か、他の人紹介しようか……

……。

そんなことを考えながら、私は微睡（マドロ）んだ。

奇妙な夜（2）（後書き）

お、なんかちょっと恋愛小説っぽくなってきましたかね？
３人の男子は口調とキャラで区別してください（笑）

混乱（1）

ＰＬＬＬ…ＰＬＬＬ…

私の携帯から、固定着信音が鳴り響く。のそっと起き上がり、ぼやける視界の中、時計を確認。
只今の時刻……5時…12分……

…誰だ、こんな時間に。非常識な。どうせイタズラ電話だろう。もう少し寝よう。
私は無視を決め込むと、再度布団にもぐりこむ。

ＰＬＬＬ…　ＰＬＬＬ…

…コールが、長い。もう２０コールは鳴ったんじゃないか？いい加減あきらめろよ。

ＰＬＬＬ…ＰＬＬＬ…

長い…長い…なが……

ＰＬＬＬ…　ＰＬ：「あーっもう！誰だ、こんな朝っぱらから！」
相当ムカついていたので、私は相手が誰かも確認せずに、電話に出た。

ウザい、ウザい！私の安眠を妨害すんな！

「だれ…」
『俺。今日、お前んとこ行くから。』
プツッ……ツーツー……
そうひとこと残して、電話は切られた。
……。……は？
なに、この謎の着信。おそるおそる着信履歴を見ると、［国崎聖悟］の文字が。
…国崎。お前には、常識というものは無いのか？いや、私に何か恨みでも？
覚えは……あるけど。
…いや、それより、さっきのヤツの言葉だ。…今日、来るって？
オイオイ、午前5時に送る冗談にしちゃ、ヘビー過ぎんだろ。…え、本当？マジッスか。しかも決定？決定なんスか。
…大学、休みてぇ……
一気に脱力した私は、枕に頭を押しつけ、がくりとうなだれた。
―――
―

重い足取りで、キッチンまで足を運ぶ。誰かさんのおかげで、すっかり目が覚めてしまった。
冷蔵庫を開けてミネラルウォーターを飲むと、冷たい水が私を潤してくれる。

…無駄に早起きしちゃった、か……
どうしよう。今からまた寝たら、起きられなくなりそうだし。

んーー。

――1分ほどの思考の後、私は早朝の散歩に出ることに決めた。何気に散歩は好きだ。走らなきゃ、ね。

パジャマを脱ぎ、ジャージの上下に着替える。こんな朝なら、誰にも会わないだろうと予測し、顔を洗ってすっぴんのまま外に繰り出した。…元々、化粧はそんなする方じゃ無いけど。

――
――

外はまだ薄暗く、日が出てまだ間もない、といったところ。
通りには誰もいないし、日中渋滞する交通路も、今の時間帯は車がまばらにしか走ってない。
私は、新鮮な空気を胸いっぱいに吸い込み、歩き出した。

あぁ…久しぶりに散歩するけど、なんか気持ちいいな。少し肌寒い気のする気温も、街路樹の青々とした様子も、私には好ましい。
――そう。私にはやっぱり、こういう1人のゆったりとした空間が

合う。
若者のくせにババくさいとか思われるかもしれないが、こうした時間が何よりも好きだ。
…最近、少し余裕が無かったのかもしれない。ここらでリラックスしとこう。
――1人でいる、セカイ。このスタイルを変えるつもりはない。やっと手に入れた私の自由だ。みすみす逃すものか。
そう、改めて願った。

――
――

大通りを歩き、交差点に差し掛かる。ほとんどの店は、まだ閉店中だ。
いつもは活気にあふれるショップ街も、今は閑散としていた。
ちょっと立ち止まって、腕時計を見る。…6時ちょっと過ぎ、か。
まだまだ時間には余裕がある。
調子にのって、いつもは歩かない道を通ってみることにした。
そう決め、歩き出すこと10分。

「あれ、ナツちゃん?」

早くも…後悔した。何故、まっすぐ帰らなかった、自分。
――目の前には、今最も会いたくない3…いや、4人の中の1人。

斎藤　宏樹がいた。
私と同じく、ジャージ姿。額には汗が浮かんでいる。

「ナツちゃん、家この辺なの？」

わ、なんかいきなり親しげに話しかけてきた。…爽やかだ。背景がなんかキラキラしてる。

「…はあ、一応。」

一応って。何だ、自分。

「へぇ。朝の散歩中？」
「あ、今日は珍しく早起きしたんで。斎藤君は、ロードワーク中ですか？」
「うん、そう。あー、…敬語はいいよ。同い年だし。なんか、他人行儀でヤダなー。」

言いながら、笑顔を向けられる。

…るっせ。私はその一線を引きたいんだって。

「遠慮します。」

私も、作り笑いを浮かべる。

「えー、聖悟にはタメだったのにー？」

ここでアイツを出すな。てか、黙れ。もう、散れ。
―心の中で毒づくも、全く効果は見られない。にこにこと笑う彼は、

なんで？とまた聞き返してきた。

「……国崎は、ムカツクから。」

なんかいい理由が思いつかず、とりあえず、そう言う。

「ハハッ、ムカツクって……。そんなこと言う女子、ナツちゃんくらいだよ。」

そっスか。ソイツは、私の中で呪いたい奴堂々の１位なんですが。

「…あ、えっと、ランニングの邪魔ですよね。失礼します。」

会話を無理矢理中断させて帰ろうと、来た道を戻ろうとするも、

「まぁ、待ってよ。」

と、斎藤が立ちふさがった。

…うわ、コイツ、身長でかい。１８０後半はありそう。

「…何ですか。」

身長差に怯みながらも、そう言葉を吐く。少し、不機嫌が混ざったのを知られたかもしれないが、まあいいや。

「あのさ、メール読んだけど、俺たちとつるむの、そんな嫌？」

斎藤は笑っていたが、真剣な目で聞いてきた。ああもう、この際はっきり言っておこう。

「嫌です。」
「…キッパリ言うね。何で?」
「何でも何も…、あなた方といると、私の生活が乱れるんです。」
そうだ、私の平穏を返せ。利子つけて。
「…あー、それはそうかもね。素のナツちゃん、目立つの苦手そうだし。」
「そうです。カラオケでの私は死にましたから。私を相手にしても、つまらないですよ?」
「そんなことないよ。」
――は?
「は?」
…あ。思わず声に出して聞き返してしまった。慌てて口を塞ぐも、もう遅い。
斎藤はくすっと笑って私に目を向けた。
「俺たちはさ、確かにカラオケでの君を見て面白いなとか思ったけど、それだけじゃわざわざ友達になろうなんて、サムいこと言わないよ。」
…サムい自覚はあったのか。
「……じゃ、何故?」
「…聖悟がさ。気に入ったって言ってるんだよ、君のこと。
あいつ、めちゃくちゃモテるからさ、恋愛関係はどっか冷めてんだ

よ。でも、ナツちゃんに関しては、自分から関わりたいらしいんだ。」

は？え、何それ。…だから、それは私のキャラの話であって……。…てか、恋愛って、ナニ。何の妄想トーク？これ。

「しかも、素の方がずっと魅力的なのに、わざわざ性格作ってる所も面白いって。俺、絶対アレがナツちゃんの素だと思ったのにさあ…。聖悟ってスゴイよねー。」

カラカラと笑う、斎藤。対照的に、私は顔面が赤くなったり、青くなったりと忙しい。

…な、なに言っちゃってんの、斎藤……、いや、国崎、か？冗談にしても、キモ過ぎるぞ。私をつかまえて、ミリョクテキて。やっぱり、目…いや、脳が腐ってたんだ。…可哀そうなヤツだ。

「…それで、俺や他のヤツらも興味が湧いたの。今までの子とは、全然違うし。ナツちゃん。」

1歩、斎藤は前に出てきた。

……な、何さ！

「俺も、君が気になるよ。」

―オレモ、キミガキニナルヨ―

……。……ちょ、待て。

これ、なんてギャルゲ？今流行りの乙女ゲーか？それで、今、主人公が『きゅん』とかなる場面？
…アホか、お前ら全員！国崎にも思ったことだが、現実でそんなこと、やっちゃ、ダメ！！
そして、相手が私とかやめようか！絶対、合わない！
私は真っ赤になってるであろう顔をぶんぶんと振り、ハッと、気付く。

！！まさか、コイツ…天然タラシとか！？性質悪ぃ！！しかもソレにいちいち反応する私って！！！

容量いっぱいになった使えない私の脳はエラーを掲げ、私は。

「…るっさいわ、ボケ！私は君らのことなんか知らん！！
あと、そういうセリフは、もっと乙女な君んとこのファンに言ってやれ！
きっと泣いて喜んでくれるからぁ！！」

恥ずかしいやら、屈辱やらでかなりの暴言を吐いてしまった。

……。

――あ、しくった。と思う。しかし、時すでに遅し。

「ククッ…、それが素ー？やっぱ、いいわ。ナツちゃん。」

斎藤に、爽やかに笑われた。私は自分の行動が恥ずかしくなり、俯く。

…うう。私って、こんな短絡的な人間だったか…？いつも自爆して

る気がするよ……。自重せねば。

「…っ、とにかく！もう帰る！斎藤！君なんか、もう2度と会いたくないわー！！」

悪役の捨てゼリフを言い残して、走り去る。視界の隅で斎藤が手を振っているのが見えた。

――

……っ。

本当に私、最近走ってばっかりだ。苦しい。心臓が、うるさい。

あの…天然タラシ、何て事言いやがる。

――素の方が魅力的

聖悟がさ、気に入ったって

関わりたいらしい

君が気になるよ

『那津。』

「～～っ！」

顔がボッと赤くなる。き、昨日の国崎が出てきた…

……もう、何だコレ。制御不能だ。
からかうのはもう、止めてくれよ。心臓が、ヤバい。

「…破壊力、ありすぎ。」

私は、混乱した。ぐるぐるの、ごちゃごちゃの、混沌とした渦の中にいるようだ。

――かき乱される。アイツに。

混乱（2）

―
―
―
―

チャイムが、鳴る。今日の授業も、滞りなく終わった。窓をのぞくと、雲1つない青空が広がっている…が、私の心境は曇天模様だ。まるで、ロンドンの街中のような。

…今朝から悩みすぎて、頭が痛い。そのくせ、何の解決策も糸口も見出せない。だから、腹が立つ。

――私らしくないな、絶対。

ハッと自嘲気味に笑ってみる。こんな、ぐじゃぐじゃな感情、知らない。

私はもっと、飄々としていて、受け流し上手だったハズ。

なんだってんだ、もう……

―片づけながら、またも思索にふけっていると、ふいに3人の影が私の席の前に現れた。

…あれ？デジャビュか？前もこんな……？

「本城　那津。この間はよくもやってくれたわね。」

低い声が、聞こえた。…あは、嫌な予感ａｇａｉｎ。

恐る恐る上を見上げると、件の３人のギャルたちが、いらっしゃいました。

…すっかり忘れてた。この人たちの存在。今まで授業、かぶってなかったのか。

なにやら面倒なことになりそうな予感だけが、する。

心の中で、そっと舌を打った。

「昨日、あのイケメンたちと、カフェで仲良さ気に話してたんだって？」

「……。」

もう、そんな噂が出回ってんのか。…仲良くはありませんけど、まあ、事実といえば事実。

「ホンット、なんでお前が！？こんな地味ブサイクより、もっと可愛いコがいるだろが！」

激怒して、叫ぶギャル。

…そんなこと、私に言われましても。少なくとも、君はそのカテゴリ外みたいですけど。

「何とか言えっての！！このメガネ！」

眼鏡をバカにすんなよ。全国何万人の人がかけてると思ってんの？

常々思っていたが、『メガネ』って悪口なのか？

…何とか言え、と言われたので、口を開く。

「…ごめん。今、君らの相手してる暇、無いんだよね。」

本当だよ。今、他のことでメッチャ悩んでんだから。

「ハァッ!?何だよ!調子こきやがって!」

「テメェさえいなきゃ、今頃彼氏出来てたかもしんないのに!」

「マジ、ウザい!死ねば!?」

あー、うるさい、うるさい。どうせあの合コン、私がいなくても失敗だったって。

それにあいつらが欲しいんなら、遠慮なくあげるから、もってってよ。

「っこのっ!!」

無言で睨みあげる私の態度にしびれをきらしたのか、ギャル子の1人が、手を振り上げる。

――あ、殴られるな。あんま痛いのは嫌なんだけどなー。

しっかし、スゲェ顔。ゴリラ顔負けだね。

他人事のようにそんなことを考えて、来るはずの衝撃を待つ。

……。

しかし、待てども痛みは起こらない。…アレ。痛く、ないな。はず

しやがったか？
何故だか届かない衝撃を疑問に感じ、そっと、目を開けてみる。

「何してんの、お前。」

聞こえてきた声と共に、私が見た光景。
――国崎が、振り上げたギャル子の腕を掴んで、立っていた。

……わぉ。またも、王道展開だな。これで私が超美少女ヒロインだったら、完璧なのにねぇ。
そう、ぼんやり思っていると、

「せ、聖悟くん！！」

手を掴まれた女子の、１オクターブ上がったような声が聞こえた。

「ど、どうしたの？こんな所まで来て！」
「会いたかったよ、聖悟君！」

パアッとバックに花を咲かせて、上目使いに男を覗きこむギャルたち。
…さっきとはえらい変貌ぶりだ。最早尊敬の域だよ、君たち。

―しかし、国崎は不機嫌そうに一刀両断した。

「俺は、全く会いたくなかった。今度、コイツに手ぇ出したら、女でも容赦しないから。」

その刺すような声に、ギャル子たちは猫かぶりスマイルのままピシッと固まる。それを横目に、国崎はぐいっと手を引っ張り私を教室の外へと連れ出した。

……痛いっつの。自称紳士はどうしたんだよ。今日はのっけから地、丸出しじゃん。

――

「離せ。」

とりあえず、教室から出ると即、手を振り払った。国崎は険悪な顔をしながら、軽く舌打ちする。

……舌打ちしたいのは、こっちだ。アホゥ。こんな、脳内がぐしゃぐしゃなときに会いに来やがって。

「何、ケンカ売ってんだよ。」
「…別に。どーでもいいでしょ。」

つーんと顔をそらす。…最近既存のキャラまでも崩壊してきてるな、この男のせいで。

「何だよ、何怒ってんだよ。」
「君に関係ない。」

言い捨てて、速足で歩きだす。…君は知らないだろうが、こっちは頭ん中がカオス状態だっての。

「待てよ。」

国崎は難なく追いつき、私の横に並ぶ。ついてくんな。

「…理由を教えろ。」

「理由なんて、無いし。」

「嘘つけ。」

「嘘じゃない。」

「那津。」

国崎の漏らした声に反応し、私は何故かぴたっと足を止めてしまった。

場所は中庭の隅だ。振り向くと、ヤツと目線がかち合う。

「…何が、あった?昨日と様子が違う。」

国崎の熱い視線が私を貫く。私は、居たたまれなくなって、顔を俯かせた。

「……何もな「言えよ。」

肩を掴まれ、強引に目線を合わせられる。

……国崎の顔は迫力がある。こっちが委縮するには十分過ぎるくらい。

私はまさに、蛇に睨まれた蛙、だ。

「――っ、」

ぎゅっと、唇をかむ私。

――見れない。ヤツの顔が。自分が今、どんな顔をしてるか、知ってるから。
声も、肩にかかる力も、…追い詰めるような、視線も。
すべてが私を苦しくさせる――

「…っ君が……っ悪い…」

息がつまりそうで、居心地の悪さから抜け出したくて、つい、本音が零れる。

「…俺が？何で？」

そう、さっきとは打って変わって優しく言うから、私は、それに甘えてしまった。

「…っ分からないっ！君のせいで、もう、なんか頭がぐちゃぐちゃだ！！
国崎になんか会わなきゃ、こんなことにならなかったんだ！
いちいち私をからかいやがって！
君なんて、最低だ！変態！アホ！女たらし！」

ひといきに言葉を並べ立て、ありったけの声量で叫ぶ。
ＴＰＯというものも、何を言ってるかすら意になく、ひたすら文にもなっていない罵詈雑言を口から出す。
まるで、小さい子供のように散々わめき散らす。

―こんなの、只のワガママだ。分かってるけど、やめられない。それほど、私はまいっていたのだ。
しかし、国崎も何も言わずにただ聞いているだけで。

止めるものがいないので、私は、思う存分気持ちを吐きだし続けた。

――

混乱（3）

…ひと通り、言い終えた。息もつかず言ったからか、呼吸が苦しい。
肩を大きく上下させる。
――本当に、私らしくない。乱されっぱなしとか、なんてカッコつかないんだ。
しかも結構大きな声でさけんでしまった……
恥ずかしい。酷いザマだ。

「…言いたいことは、全部言ったか？」
「！……ん…」

静寂の中、イキナリ発せられた国崎の声に少しびっくりし、私は1拍おいて、国崎の顔を睨みあげた、が……
ヤツは口角を上げ、嬉しそうに笑っていた。

「……は…」

怪訝そうに眉をひそめる私。
……なに？Mか？君。罵倒が好きなんて。そんな、本格的な変態だったのか？
だがそんなアホらしい思考も長くは続かず。
一瞬、ふわりと国崎のにおいがした、と思ったら、

私は、ヤツの腕に包まれていた。

「――！」

国崎の体が、近い。互いの心臓の音も聞こえそうな距離。私は身動きすらできずに固まってしまった。

――これ、は、どういう意味だ。

昨日のプレイバックか？こういうのを、ヤメロってんのに。

ぜんぜん、分かってない！

「っどけ！離せ！！」

ドンドンと、胸板を力いっぱい叩くが昨日のようにすんなりと離れてくれない。

それどころか、さらに力を入れて抱き締められる。

っうあーっ、ヤメロヤメロ！！苦しいぃい！

「那津、」

抱き締めたまま、国崎がささやく。

なんだ！ハナせ！！

「…そんなに、俺のこと考えてくれてたんだ？」

～～！

はたから聞いても明らかに嬉しそうな声に、一気に体温が上がる。

…っ、なんだ、自意識過剰だろ！この俺様が！！そういう…恋愛的な意味じゃ、ねぇし！！

…嬉しそうに笑ってんじゃねぇよ。殺すぞ。

「ちっ…違うし！誰が君のことなんか！」

うっわ、キモ。何、私。今時、ツンデレの人もこんなん言わないし。

「可愛い。」

クスクスと、さらにヤツは笑う。

――その様子に、ふつふつと怒りがこみ上げてきた。なんだか、馬鹿にされた気分で、イラッとくる。

私がこんなにあせって、ドキドキ（？）してんのに、コイツの余裕そうな態度。

…そりゃあ、百戦錬磨の国崎君は、怖いもんナシでしょうけど、私は、人生のサブロードを地味に地味に生きてきたワケですよ、１９年間。

―気まぐれとか、ちょっとからかってやろう精神でこんなんをやられても、困る。

「……国崎。」

「ん？」

げしっっ！！！

ひとこと断りを入れ、私は国崎の革靴を、思いっきり踏みつけた。

……カカトで。

「――――！！？」

国崎は、声にならない声を出し、抱いていた腕をゆるめたので、その隙に、私はヤツから脱出した。
ステップを踏み、国崎から遠ざかる。
…ふう。心臓確保。ザマァみやがれ、変態国崎。

「…っ、那津……。」

余程痛かったのか、恨めしそうに私を呼ぶ声が聞こえたが、フンと鼻を鳴らして冷たい目線を彼に向けた。

「君が悪い。」

先ほどと、全く同じセリフを、今度はややスッキリとした気分で言う。

――そうだ、コイツは変態なんだ。マトモな神経で相手したら、負けだ。何を血迷ってたんだ、私は。
思考を転換させ、体も国崎の方へ向けて、ヤツを見下ろす。なんか、視界がクリアになった気がする。

―よかった、これぞ、本来の私だ。戻ってきた。

私が仁王立ちしてたたずんでいると、ふいに複数人の足音が聞こえた。

「ナツちゃん！聖悟！こんな所にいたー！！」

斎藤だ。後ろから水谷　信二と乾　圭太朗も歩いて来るのが、見える。

…あーあ、オールスター、揃っちゃったじゃん。

嘆息したくなるのを堪え、彼らが来るのを待っていると、斎藤が私に向かって手を振る。

「ナツちゃん！今朝ぶり！どう、調子は？」

黙れ、斎藤。こんな醜態をさらしたのは、もとはと言えば君のせいだ。

「え、宏樹、ナッちゃんと会ったの？いいな～。ね、今度、俺とも駄弁ろうよ。」

見た目通り、中身もチャラいな、水谷。そんな予定は作りたくない。

「とりあえず、外に出ましょうか。ここにいると、また昨日の二の舞になりますよ。」

あ、やっぱりこの人が1番常識人だ。乾のもっともな意見に、私は頷く。

ちらっと後方を見ると、女子がちらほらと集まってきていた。……恐ろしいことに。

「……あ、そう。じゃあ私は、これで。」

もう昨日のように強制的に逃亡はしたくない。私は颯爽と、右手を挙げて去ろうとする。

「どこ、行くんだよ。」

…やはり、国崎からストップがかかったが。―あ、やっぱり？つーか、これで通算何度目？

彼は、どうやら足の痛みから解放されたらしい。足を軽く振りながらこちらに来た。

……ずっと沈んでてくれて良かったのに……。

「…だって、見てよ、あの女子軍。私１００％カンケーないし、巻き込まれたく無いから。」

冷静な声でそう反論する私。

正論だ。…正論だろう？単なる自己防衛のためだから。とっとと行かせてくれ。

―だが。

「……悪いけど、ソレ、無理。」

「…は？」

「どうも…囲まれたみたいですね。相変わらず、スゴい方々だ。」

―！

乾のその声に、私は絶句する。

こんな短時間で…だと？どんだけネットワークが繋がってるんだよ！？

てか、なにしみじみと言ってんだ！乾！

「んじゃ、逃げっぞ。」

「！？」

国崎がそう言うのと同時に、私の体は、宙に浮いた。

はぁ！？な、なんだ、なんだぁ！？

混乱の中、突如変わった視界。お腹辺りに圧迫感があり、足は投げ出されたまま。

そう、ヤツが私を抱きあげ、左肩にのせたのだ。簡単に言うと、米俵のように担がれている状態。

「…ちょっ、何してんの！降ろせ！」

私は足をバタバタと動かして、叫ぶ。

―が。

「ヒュー♪聖悟、やるねぇ。」

「じゃ、行きますか。」

「裏門イケそう？」

「一気に抜けるぞ。」

彼らに『聞く耳』は無いらしい。……や、人の話、聞けよ。何で私も、逃亡班に編成されてんの？

――勝手なヤツらばっかだな、マジで。

そうやって私を無視し、2言3言、言葉を交わした後、4人は走り出した。……＋私。

かなりのスピードだ。周りの景色がビュンビュン流れていく。

「っわーー！速いっ！速いって！！落ーちーるー！！」

「うるせぇ。あの女共の中に落とすぞ。」

「！！」

ひぃっ！！ドS再臨！！そうくると私は黙るしか無いじゃん！！

あとの3人も、クスクス笑いながらも、余裕でついて来る。四方八方から迫り来る女子を避けながら……
…って女子、怖っ！！

「き…君ら、いつもこんな感じなの！？」

思わず、走る彼らに問いかける。
…これ、異常だろ。
よく1年間同じ大学にいて気付かなかったな、私。

「んー？いつもよりは、ちょっと激しいかもなー。」

『ちょっと』、なんですか？水谷君！！

「この学部は、初めて来たから、興奮してるだけでしょ。理系学部の子も、初めはこんなんだったんじゃない？」

…はぁ、そうですか。スゲェ。マジでアイドル並みだ。

「ゴチャゴチャ言ってねぇで、走れ。」

4人（＋私）は、文字通り女子軍団の中を駆け抜けた。
もちろん、女子の皆さんは1人残らず私を睨んで行きましたよ、ええ。

…明日から、どうしよう。死亡フラグ、何本か立ったな、こりゃ…
……。

……。いや、明日にはもうこの世にはいないかも…。過激派に爆撃されるとか？

…あぁ、思えば短い生涯だったな……。ゴメン、兄ちゃん。私は先に逝きます――

「……那津？聞いてんの？」

私が遠い目をしていたら、国崎に話しかけられた。

…何さ。私は帰って遺書を作成しなきゃ――

「那津がいいなら、俺はこのままでもいいけど。」

……え。

そう言われて今の状況を確認すると、↓国崎に担がれたまま、校門前。

「……わぁっ！？降ろせ！」

一瞬の沈黙の後、私は再び暴れ出す。

そうじゃん！何、この体勢！女子軍のせいで、すっかり忘れてたぁ！

「ハイハイ。」

しかし、今度は、素直に降ろされる。すとん、と両足そろってコンクリートを踏みしめた。

…ハァ、良かった。久しぶりに地面と再会……。

「はは、ナッちゃん可愛いな。顔、真っ赤ー。」

「…見んな、水谷。」

―と、思ったら水谷に顔を覗きこまれた。…どうやら私はすぐ赤面するらしい。
しょうがないじゃん。なんたって男性経験０女ですから。

「…うん。やっぱり、そっちの方が素敵ですよ、ナツさん。なんか生き生きしてます。」

不機嫌な私の顔をまた覗きこみ、上品に微笑む乾。

へ？そっちって、なに。地が？こんな、毒舌で陰気なんが？
頭の上にハテナマークを飛ばしていると、また笑われた。
……なんか、感じ悪。やっぱりこの人たち、私と感覚違う。

「おい、圭太朗。口説いてんなよ。それよか、どっか店入らない？俺、腹減っちゃった。」

唐突に、そう斎藤が提案したので、私たちは近くのファミレスに入ることになった。
…そう、私も、強制連行だ。

帰らせろ。

最近、家が恋しくて仕方ないのは、気のせいでは無いだろう。

混乱（3）（後書き）

さて、那津は逃げ切れるのでしょうか…？次回に続く。

オトモダチのなりかた（1）

――大型チェーンのファミリーレストラン。
大学から程近く、値段もお手頃なので、この付近の学生によく利用される。

私もよくここに食べに来るが…入ってすぐにこんなに視線を感じるのは、恐らく初めてだ。
…主に、女子の熱い視線。言うまでもなく、私の前に入って行ったあの男たちに。
――しかし、やはりコイツら、どこ行っても目立つのか。迷惑な。
1人ならまだしも、こんなのが4人も揃うと、なあ……
…イケメンはイケメンを呼ぶ？そういうもん？

「ナッちゃん、こっちこっち。」
「ナツちゃん、ここ、座ろうか。」
「那津？早く来いよ。」

…そして、どーしてこの中に私がいるのかねぇ……。手招きして呼ぶの、止めてくれないかな。このアホ男どもが。
客はもちろん、接客のお姉さんまで信じられない、みたいな眼差しを向けてくれるし。
…安心しろ。それは、客観的に正しい反応だ。
ため息を吐きながら立ち尽くしていると、国崎に顔をのぞき込まれた。

「どうした?気分悪いのか?」
「……あぁ、視線に酔った。帰りたい。」
…いや、マジで。
「視線??」
4人がおかしそうに首をかしげる。
「…って、酔うもんなの?」
「こんなの、大学内に比べれば、まだマシですよ?」
「ホラ、とっとと座れって。」
…もしや、皆さん、免疫出来てます?なんか小慣れてる感じなんですけど。
私は、一生慣れそうにありませぬ。
「…いや、やっぱ帰「今から皆でお前ん家行くのと、どっちがいい?」
「…座ります。」
…クソ、この俺様野郎ォ……テメェなんかこっぴどく振られちまえ。
…無理か。絶対追われるタイプだよなぁ…国崎は。
――
――
「さ、嫌がる彼女も座ったし。」

えぇ。嫌がってますけど。分かってるなら、解放したまえ。

「注文してい？俺、もう腹ペコ。」

斎藤がそう言うので、各々メニューを見て、オーダーをとる。…特にお腹の空いてない私は、ブラックコーヒーで。

「そんだけー？もっと食べないと大きくなれないよ？」

女性に言うセリフか？それ。相手は小学生じゃないんだぞ。これだから天然斎藤は…。

「奢りますから、何でも頼んでください。」
「おっ圭、太っ腹ー♪俺のもよろしく！」
「信二、俺はナツさんにだけ言ったんですけど。」
「冷たっ！」

私はそんな乾と水谷の会話を聞き流し、「結構です。」とだけ言っておいた。
我ながら、そっけない。…ゴメン、わざとだけど。

――

「……あの、何で私、ここにいるのかな？」

注文したものがちらほら来始めた頃、私はそう切り出した。

「ん？聖悟に聞いてない？」

……朝の通話はひとことで切れましたけど？

「…聞いてないし。」

「言ってないから。」

私は国崎をジロリと睨みつける。ヤツはさらりと流す。

膠着状態に陥った私たちを見、水谷は苦笑しながら話した。

「今日、飲みに行かねーかって。ちょうど、タダ券あんのよ、居酒屋の。」

……。……はい？

何、その拷問。

「そー。お友達になった記念にさ、いいでしょ？」

ニコニコと笑いながら、ハンバーグを頬張る斎藤。

…いや、全然いくないんですけど。そもそも、いつトモダチになりましたっけ？私たち。

しかも、飲みに行くのにここで飯食っててていいのか？

「那津に拒否権は無いから。」

…んで、どうやら君の中では、私は人間じゃないらしいな、国崎。

そんな横暴が許されるとでも？

「…いや、普通に拒否したいんですけど。」

「えぇーー!?何でぇー?」

キッパリと否定の意を伝えると、駄々っ子のように頬を膨らます水谷。

いやいや、全然かわいくないから。

「…友達になった覚え、無いし。」

「今、なったじゃんか。

そう重く考える必要は無いって。楽しくお話して、仲良くなったらもうダチ。

Ｔａｋｅ　ｉｔ　ｅａｓｙ.　ＯＫ?　」

斎藤はニッコリ笑って、私の方を見た。

…最後、無駄に発音いいな、君。ムカツクよ。

どうにもよろしくない展開に、私は内心、頭を抱える。

えっと、どうすりゃいいかな、これ。

とにかく、『友達にならない』ルートに持っていきたいんだけど。

――とすると、

「……そういや、君ら、彼女とかいるワケ?」

悩んだ末、私はガラッと話を変えた。新たな突破口を模索だ。

…いるだろ。彼女の1人や2人や3人。セフレでも構わんから、いるって、言え。逃げ道が、欲しい。

―だが、

「俺、いない。」

「最後に別れたのは、2か月前かな。」
「俺は、かれこれ1年くらいいませんね。」
「セフレも随分前に、全員切ったしなあ。」

希望はブクブクと沈んでいった。……撃沈。
そっか。女子共が群がるのは、全員がフリーだからか。…私、さらに不利じゃん。

「…作る予定は？」

てか、作れ。

「ナニナニ～？立候補してくれるの～？」

水谷がちゃかしてそう言うと、

「信二、一遍死ぬか？」

何故か口を挟んできた国崎が怒った。
…この人、友達相手にこんな冷たい視線送れるんだ……！

「冗談だってー。」

―でも、あまり気にした様子の無い水谷。慣れてるのか。

「…まぁ、欲しいと思ったら作るけどさぁ、今んトコ、予定ナシかな。」
「だから、安心していいですよ、ナツさん。」

斎藤と乾が笑いながらまとめる。

う。見抜かれてたか。
彼女いるんなら、仲いい女友達とか、気まずくね？…と、いうわけで辞退しまーす☆作戦。

「……。」

意気消沈。私は無言でじっと自分の膝を見る。
……どうやったら断れるか思考をめぐらすも、全然コイツらに勝てる気がしない。

っああ！面倒くさ！！

――それにしても、しつこい。しつこすぎる。国崎の時も思ったが、何でここまで食いつく？
基本、来る者拒まず・去る者追わず体制じゃないのか？君らは。それとも、恋愛と友情は別なのか？
…こんな女、面倒臭いって言って、捨ててくれればいいのに。
―じっと、あらぬ方向を睨みつけていた私に、ふいに水谷が話しかけてきた。

「…聖悟と宏樹に聞いたんだけどさ、ナッちゃん、人嫌いで目立つのが嫌なんだろ？あと、寄ってくる女の子たちが怖いとか。別に、俺らと一緒にいることが嫌ってワケじゃないんだよな？」

瞬間、苦いカオをしてしまう。

…ゲ、そう捉えたか。しかし、
『君らとトモダチ』＝『目立つ、女子の目の敵にされる』
の方程式が成り立つこと、分かってんのか？

「ならさ、俺らが女の子たちをうまーくあしらえば済む話じゃん。」
「その、『うまく』が大変なんですけどね…。」
「圭は女子嫌いだからなー。でもなんとかなるでしょ。」
「…まあ、」

からからと陽気に笑う水谷に、やや同意する乾……
…い、いかん。このままだと、ノンストップで流されてしまう!!
異議あり!!!

「…ちょ、待て。だから、私は1人がいいんだってば!君らとも、誰とも付き合いたくないの!!分かる!?」

私、必死。

――しばらくの、静寂。私が必死に反論した後、4人と私は黙り込んだ。
―しかし、次の国崎の行動によってソレは破られる。

「ちょっと、来い。」
「……え?は!?」
「ちょっと、外出てくるわ。お前ら先に、居酒屋行ってて。」

国崎は3人の了承も聞かないまま、私の腕を引っ掴んで外に連れ出した。
私はただ、引かれるままだ。いきなりのことで、頭がついてかない。
は?え?こ、コイツ、何するつもりだ?なんか怖いんだけど!

―――
――

「座って。」

行き着いた先は、ファミレスの裏にある、公園のベンチ。小さな公園だからか、人はいない。

「……何。」

不信感を全面に出す私。いいから、と国崎が催促するので私はしぶしぶ座った。

「……。」
「……。」

お互い、無言を貫く。…ナンだよ。連れて来たんだったら、なんか話せよ。

すぐ隣に座っている男の方に首を傾ける、と、ちょうど国崎も私を見ているのに気付いた。
形の良い唇が、縦に開く。

「…那津ってさ。ホント変な女だよな。」
「あ？」

聞き違いかとも思ったが、確かに彼の口から放たれた言葉。
――考えたセリフが、それか？失礼以外の何物でも無いじゃん。
―とはいえ、馬鹿にされたのは変わらない。多少、苛立ったような

気持ちになった。

「…失礼だな。変わってんのは、重々承知だよ。…で、そんなヤツをここまで呼ぶとは、どういう了見？」

「…いや、なんとなく。」

「気分かよ！」

気まぐれに付き合わせんなよ！何かと思ったじゃん！！

「那津。」

「…だから、何――」

と、そこで私のセリフは止まった。

…国崎に、いきなり片手を掴まれたのだ。顔も、かなり近い。

――相変わらず行動が唐突なヤツだ。少しは心の準備期間をくれよ、アホが。

それでも目は逸らさずに、国崎に向かって何だ、と問う。

すると国崎は、一瞬目を逸らし、

「…那津って、弱いよな。」

呟いた。

……ｗｈａｔ？

今度こそ、耳がおかしくなったと思った。

『ヨワイ』なんて。そんな単語が私に発せられるなんて。

「……なんて？」

「いや。那津は弱いなーと思って。他人と関わりたくない、1人でいたいって、社会的に弱い証拠だろ？」

…んだと？…ピクッと、額に青筋が浮かぶ。若干顔が強張ったかも。

しかし、ヤツはそれを知ってか知らずか、好き勝手に話し続ける。

「俺たち4人と付き合う社交性すら、持ち合わせて無いって…人間として失格じゃね？可哀想なヤツだな。」

私を見降ろし、ハッと鼻で笑う国崎。

拳を作り、ぎゅっと握りしめる。怒りで手が震えている。

……くっ……落ちつけ……、私。怒ったら、負けだ。こんな、安い挑発にのるんじゃないったら。

「じゃ、悪かったな。弱い者イジメして。俺も大人げないコトしたわ。」

最後に鮮やかな笑顔でヤツはそう言い放ち、席を立った。

……。

……

……

私は、突如、無言で勢いよく立ち上がる。

そしてそのまま、国崎の方へつかつかと歩み寄り、自分より頭2つくらい背の高いヤツの胸ぐらを掴みあげた。

「……誰、が。弱いって？」

あまりの怒りで、女子とは思えない程極端に低い、ドス黒い声が出る。眼鏡の奥の瞳は鋭く男を睨みつけていた。

――しかし、睨みつけられている当の本人はどこ吹く風で、全く気にしていない。

「お前。本城那津が、だよ。心の狭い社会不適合者サン？俺らと遊ぶこともできない、可哀想なお前をいじめてゴメンネって、謝ってんの。理解できた？」

至近距離で私と目を合わせ、冷笑する、国崎聖悟。

…完璧に、蔑んでいる。

この私を。独りで生きて来た、この私を。

元々、話始めたのは最近で。お互い何も知らない状況で…なのに、なんで、そこまで見下されなければならないのか。

―君に、私のなにが分かるというわけでもないのに。

……ふざけるなよ。

怒りのボルテージがＭＡＸに上がり、私は国崎の方へガバッと顔を上げた。
そして。

ゴッッ！！！！

「――――っ！？」

鈍い音が、公園に響いた。

―私が頭を振りかぶって、彼に頭突きをかましたのだ。
突然の攻撃にヤツは相当痛がり、たたらを踏んでそのまま尻もちをついてしまった。

私はそんな国崎にゆらりと近付き、見下す。

「…黙って聞いてりゃ、勝手なことぬかしやがって……。」
「……」
「私が弱い？人間的に不都合だと……？」

すうっ

「ふざけんなーーーっ！！」

今度は、大声が公園に響き渡る。私の、血の叫びが。

「私は！そんな人間不審者でも、ネガティブなニートでもねぇ！！
もっと高尚な、気高い一匹オオカミだっ！！何言ってやがる！」

へたり込んでいる男に人差し指を突き付け、何度目か分からない暴

言を吐く。
――しかし、いつもは私が息をつくまで放っておく国崎が、何故か今回は反論してきた。

「…なんだよ、ソレ。結局は変わらないだろ。人と関わるのが怖いって時点で。」
「…は！私は怖いなんて、ひとことも言って無い！別に、上辺だけの付き合いならいくらでもやってのけるわ！！」
「それって、キャラ作って逃げてるだけじゃん。やっぱり素の自分を出せる程、強くはないんだな、お前。」
「―！黙れ！そんなん、全然楽勝だ！私はそんな弱いヤツじゃねぇし！！」
「へぇ。じゃ、見せてよ、俺たちに。楽勝なんだろ？」
「当たり前だ！そこまで不愉快なことぬかすんなら、今すぐ、オトモダチ登録でも何でもしてやるわあぁあ！！」

「……。」
「……。」

ゼイゼイ、ハアハアと息を切らす私を尻目にヤツはゆっくりと立ち上がった。パンパンと、ズボンについた砂を払う余裕まで見せて。
そして、とびきり『悪い』笑みを浮かべる。

「……言ったな？」

――――！！

その言葉に、私はすべてを一瞬にして理解した。
そして、つい10秒前の自分のセリフを省みて、顔面が蒼白になる。

――え、今、何て言った?私。
なんか地獄の果てまで後悔するようなコトを……言ってしまったような気がするのだが。

真っ青になっている私と対照的に、景気良く笑う国崎。
手を差し出し、

「…さ、居酒屋行くかー。マイフレンド。」
「!!っぐ!」

図々しく『フレンド』を強調してきた。

…や、やっぱり私……
やっちまった!?

「……ま、待て、国崎。今のは言葉のアヤで…「女に2言は無しだろ?バッチリこの耳で、聞いたぜ?」

う!!グサッと言葉が心臓に突き刺さる。

「ちょ、待「はーあ、疲れた。慣れないコト、言うもんじゃねぇな。なんか頭突きまで食らったし。」

んーと伸びをして、あー頭が痛い、と額に手を当てる国崎。

…もしかして……いや、確実に……

…ハメられた？　私。この、悪魔に。

「…ククッ。なーに固まってんだよ。そんな上手かった？俺の誘導尋問。」

「……卑怯だ……」

「那津って、怒り方ワンパターンだよな。慣れたら、扱いやすい。」

「……。」

もう国崎の方を振り向く気力すらない。

完敗。そんな言葉が脳裏に浮かび、さらに気分が落ち込んでいく。

反対に至極嬉しそうにニコニコと笑う国崎は、完璧に沈んだ私に顔を近づけた。

「だから、言っただろ？そう簡単に逃がすつもりは、無いって。仲良くしようぜ？那津ちゃん？」

―すると、ヤツの顔が急接近して

ちゅ。

頬に柔らかい感触が。

……

……っ！！

数秒後、状況を理解した私は、慌てて国崎の傍を離れる。多分、頬もろとも顔全体が朱に染まっている。

…な、なにした！？今！？人が放心してる間に！！あまりのことに、

脳が3秒ほどフリーズしたではないか！！

「なっ！なにすんの！！」

「ん。お近づきのしるしってことで。」

「んなの、いらんわーー！！マジで一遍死ね！」

変態男を置いて、ダッシュで公園を抜ける私。楽しそうに、その後からついて来る国崎。

…ありえない。ありえないだろ。

この私としたことが、完全にヤツの手の上で踊らされたなんて、冗談じゃない。

うっかり自殺してしまいそうだわ。

――いや、精神的に殺されるかも。近々、確実に……

……。

あ゛ーーーーー！！！（叫）やっちまったあぁあ！！！！！！

いきなり都合よく猫型ロボットとか現れないかな！

タイムマシン、早急に1台くれ！！

オトモダチのなりかた（2）（後書き）

はい、捕まっちゃったー。残念。
国崎も那津も、かなり頭がいい設定です。作者も台詞に頭を使いますｗｗ

ｉｎ居酒屋（１）（前書き）

前回までのあらすじー♪

主人公、地味メガネの本城那津は、３人のギャル子のカモにされ、
合コンに連行されました。

ムカついた那津は、それをブチ壊すために、ご自慢の面白い『キャラ』で大暴れ！！

結局、その合コンはご破算となりましたが、
何故か相手のイケメンたちに気に入られ、攻められたり、追いかけられたり、すったもんだしました。

平穏を望む那津は、抵抗し、拒否し続けましたが、
イケメンの内の１人、国崎にまんまと騙され、
ついに、晴れて彼らとお友達になることになりました☆

あらすじ　おしまい☆

……わー。何て下らない展開。
ベタすぎて誰もウケないって。

しかも、主人公が私とか。
ハハ……日本もここまで腐ったか。

「おい、いつまでも現実逃避してねぇで、戻ってこい。」

「……うるさい。逃避くらい、させろや。」

次ページから本編だよ→

ｉｎ居酒屋（１）

「那津？」
「……。」
「なーつー？」
「……。」
「黙ってないで、何か言おうか。」
「……。」

……ピッ。

『……なら、今すぐ君らとオトモダチ』「っわーーー！！分かった！分かったから、止めろ！！」

慌てて遮ると国崎の野郎はにんまりと笑った。
…やっぱり、魔王だろ、君。

――今、私は国崎の車の中にいる。
前回と同じく、運転席に国崎、助手席に私。…もちろん、例の居酒屋に向かうためだ。

……不本意だが、ひっっじょーに、不本意だが、私は、彼ら４人の友人となってしまったらしい。
しかも、ご丁寧にも先ほどの会話はすべて録音済み。…言質も取られたか……ハァ。

「そんな落ち込むなって。別にカノジョになれって言ってるわけじゃねーんだし。」
「……トモダチでもなりたい子たちが、どんだけいると思ってんの。」
「さぁ？１０ダースくらい？」
……この野郎、人事だと思って気楽に笑いやがって。１２０人程度で済むワケねぇだろ。
各ファンが集まったら、もの凄いことになるに決まってる。
「ま、いざとなれば、俺が脅しにかかるから、大丈夫だって。」
「……脅し、ね。」
確かに国崎が本気で怒ると、怖そう。…きっとニコニコと仮面をかぶったまま、追い詰めていくんだろうな。女子を。恐ろしい。
「…もうすぐ着く。あいつらは、先に席で待ってるって。」
「はあ…」
「これ見よがしにため息つくなよ。」
「つかずにいられるかよ。超憂鬱なんだけど。」
「あっそ。ま、頑張れ。」
彼は、そのまま前を向き、アクセルを踏んだ。
…返事、軽いぞ国崎。この胸の痛みは、どこにぶつけりゃいいのやら。
……今日はヤケ酒コースかな……。
―――

―――
――

「着いたぞ、ここだ。」

黒い車が駐車場に停まる。どうやら到着したらしい。
私たちは車から降りて、アットホームな感じの居酒屋ののれんをくぐった。

「お、来たね。」
「やっほー、ナッちゃん。」
「奥の席どうぞ。」

店に入るなり、私と国崎を出迎えるイケメン・S。
…にぎやかだね、ちくしょう。
私は促されるまま1番奥の座席に座った。国崎はその隣だ。

「あ、那津は説得してきたから。よろしくしてやって。」
「さっすが聖悟!」
「へー!どんな手使ったの?」
「んー、秘密。」
「教えて下さいよ。」

楽しく笑いあう4人を尻目に、私は無言を貫き、壁に目を向けていた。
――石だ、私は石なんだ。だから、おかまいなく。

「…よっしゃ、じゃ、腹ぁ割って話そうじゃねぇか!」

何を。

「とりあえず、生ビール、頼みますか？」

乾のスルー技術はなかなかのものだと思う。

「あれ？ナッちゃん、お酒ダメじゃなかったっけ？」

「……」

ちら、と国崎を見ると、ヤツはニヤリと笑いながら例の録音機のボタンに手をかけて……

…って、ダメッ！それ！

「…っ。れ、例のじいちゃんの教えは実在するが、私は去年から飲んでるから平気！」

慌てて、早口で言う私。ったく、イヤな弱みを握られちまったぜ…。

「ダメじゃん、それ。」

「大体飲み会とかで、『私、飲めません。』とか、白けるだろ絶対。」

「は、言えてる。」

４人は同感、といった風にニヤッと笑った。

――

――グダグダと話していると家に店員が来たので、オーダーした。
…うーん、お姉さん、顔赤いね。そして、私に向かって『え?』って顔するの、やめてね。よかったら、代わってくれてもいいよ?

「じゃ、カンパーイ!!」

ガチンッと、ジョッキをかち当てる音。そのまま、全員ぐいっと一口飲んだ。
…あーうめ。ビール飲むの、久々だなぁ。
私はいくらか気分をよくして、白い泡を飲み込んだ。

その後、ぞくぞくと届く料理たち。
適当に枝豆などをつまんでいると、サラダを山盛りに盛っている斎藤が、徐(オモムロ)に話しかけて来た。

「…ね、自己紹介とか、いる?」
「え、合コンで言ったじゃんか。」
「那津は、何1つ聞いちゃいねぇよ。」
「うわー、酷っ!ホントに俺らに興味無いんだ!!」

…悪かったな。その件に関しては、すげぇ後悔してるから、触れるなよ。
私はまた一口ビールを流し込むと、バツが悪そうに視線を下げた。

「…別に、いいよ。顔と名前覚えときゃ、いいでしょ。」
「ダメだって。せっかくムリに友達になったんだから!」

…ムリに、ねぇ。

――そして、何だか知らんが、自己紹介をし始めた男たち。

……ああ、うん。一応聞いてるから、大丈夫だって。
だからそんな何回も聞き返してくんな。ウザいから。

「……斎藤　宏樹。１９歳ね。今は、彼女より彼氏が欲しいかなあ。」

そして、斎藤　宏樹のターン。今日もキマッてる黒髪の彼は、そう言った。

……って、……は？
ちょっと、待て。聞き流すところだった。何か引っかかったぞ。

「……彼氏？」

ま　さ　か　。

「ああ、俺、バイだから。」

斎藤は至極簡単に、あっさりとした口調で答えて下さった。途端に、空気が凍った気がした。
…主に、私周辺の。
ま……まさかのリアルＢＬが身近に！？しかも、こんな爽やかな男前が！！？

「冗談、だよね？」
「んーん、マジマジ。」
「…彼氏とか、作ったことあるんだ？」

「詳細に聞きたい？」
「や、遠慮しときます。」
「そ？あ、でも女の子でも全然ＯＫだから。」

二コリと笑って手を振る、斎藤。…フォローになってねぇよ。

「…ククッ。驚いたろー？ナッちゃん。俺らも聞かされた時は、本気で貞操の心配したよなー。」
「聖悟なんか、一時期、本気で狙われましたし。」
「え、マジで！？」
「…食いつくな。今は、何でもねぇから。」

…昔は、あったんだ？
その昔を想像し、少し哀れみの視線を送ってやると、小突かれた。いて。

――しかし、斎藤がまさかのホモ…いや、バイ、か。
ＢＬとか、別に偏見は無いが、……意外すぎるわ。世の中は広いなあ。

「…あ、でも、それ女子に言えば？『俺、男にしか興味無いんで』とか。」
「言って、聞くと思う？」
「…なるほど。」

イケメンも苦労しているようだ。

「…いやーしかし、聖悟もよく落としたよね。こんな頑固な子を。」

空になったジョッキにビールを並々と注ぎながら、斎藤がケラケラ

笑う。
…落とした、とか。人聞き悪いこと言うな。頑固で悪かったね。
「別に、たいしたことしてない。何か自爆してくれただけだし。」
「は、よく言うわ。思いっきりハメたくせに。国崎いつか殺す。」
「ハハハ。」

笑い転げる水谷、傍観しながらひたすら食べている斎藤、時々助け舟を出す乾、そして、睨みあう私と国崎。
――居酒屋の1室で、酒を飲みながら、静かに夜は更けていく。

アルコールの熱に浮かされ、陽気に笑う男たちをぼんやりと見ながら、私は1度、冷静に考えることにした。

――本当に、奇特な野郎どもだ。
正直、ここまでするとは、思わなかった。最後は国崎の罠にかかった私が悪いが、こんな…ゴキブリ並みにしぶとくつきまとってくるとは。
もう、何度もきっぱり断った。手札も全部使い切った。
…それでも、ダメだったんだから……もう、私が折れるしかない気がする。
―なに、どうせコイツらの一時の世迷言。私など、すぐに飽きて捨てられるにきまってる。それまで、適当にやればいいか。
私はついに降参した、と同時に、『これからどうするか』に思考をシフトチェンジさせた。

……よろしい、なら私のやることは、1つだ。
私は、眼鏡の奥の瞳を細めた。

「あのさ、」

私はすくっと立ち上がって、４人を見下す。

「私と友達になるにあたって、お願いがいくつかあるんだけど。」

「は？オネガイ？」

「何だ、それ。お前にそんな権限無…「いいから、聞いて。」

…おお、初めて国崎の言葉を遮った。ちょっと、快感。

いい気になりながら、私は息を吸い込んだ。

「…まず、私以外の女友達を早急に作れ！しかも、複数！」

ビシッと人指し指を突き付ける。良い子はマネしちゃ、ダメだぞ。

「…は？女、友達？」

「え？」

当然のごとく、目を丸くする４人。私は気にせず続ける。

「口答え無用！とにかく可愛い子、数人選んで来い！むしろ、彼女でもよし。」

「…防波堤かよ。」

「悪いか！このままじゃ、女子からの被害を被るのは、確実に私なんだよ！何人かで怒りを分散した方が、得策。見目麗しい子なら、私は上手く隠れられるし！」

「…策士ですね、ナツさん。」

「…ああ、こっちのことは、全く考えてないあたりが。」

ふーん。どうせ自己本位ですよー。

君らと一緒にいるってのは、それだけリスクがあるんだっての。我慢しやがれ。

「ま、それはよろしく頼む！…んで、次ね。私、君らのメールアドレス、さらすから。」

「おいっ！売るなっつったろ！！」

「何言ってんの、国崎。あんだけ目立つことしといて、明日私はどうなると思う？下手すりゃ、身ぐるみはがされんのよ？とりあえず餌まいて、彼女たちの怒りを鎮めてもらわなきゃ。」

「…なんか、イケニエみたいですね。」

「なるほどー。で、俺たちの携帯は、パンクしてもいいって？」

「すぐにアドレス変えりゃ済む話でしょ。もしくは機種変更するとか。」

「…ホント、性格悪すぎ、お前。」

「ありがと。褒め言葉としてもらっとく。…で、あとはー。」

「まだあんのか？」

「最後だっての。んーっとね、…必要以上に、私には関わるな。」

……。

水を打ったように、突然静まり返った室内。う、空気、重。

「…何それ。やっぱ俺らと一緒にいるのは嫌ってこと？」

不審そうに尋ねる水谷。いつもみたく、軽いノリではない。

私も、覚えず喉がごくりと鳴った。

「……違う。そこはもう、諦めたから。私が言いたいのは、最低限のプライバシーは守れってこと。

誰でも人に干渉されたくないことって、あるでしょう?ましてや、私らは異性なワケだし。」

「……。」

「…私は、キチンとけじめさえつけてくれたら、後はどうでもいい。普通に仲良くできると思う。だから、コレは守って。」

「…ちなみに、それが守れないと?」

「大学内では話しかけずに、他人のフリする、かな。」

「えー、そんなん、ヤダー。」

彼は打って変わって顔を崩し、クスクスと笑いだす。

……お、よかった。元の陽キャラに戻った。真剣な水谷は、ある種キモイからな。

in居酒屋（2）

「…以上。どうかな？諸君。」

フンッと、満足気に鼻を鳴らしてみる。
言い終えた後、各々何か考えている様子の４人を眺めながら、私は勝ち誇った気分でいた。

―へっ、腹ぁくくった私は強いぜ！！文句でも何でも来いや！むしろ、キャンセル待ち！！（まだあきらめてない）

すると、しばらくして。

「…うーん、ナツちゃんの言うことも分かるよ。俺ら、あんだけ君の前で好き勝手したからね。」

斎藤がうなりながら呟いた。

「メールアドレスを変えるくらいなら、わけないんですけど…今すぐ女友達を作れってのは、難しそうですね。」

続いて乾も難しそうな顔をする。

…へぇ。真剣に悩んでくれちゃってる。案外マジメだね。それとも女子に対して、か？

「…別にリタイアでも「やだ。」

言いだしかけた提案は、即座に却下された。…声、ハモらせなくてもいいじゃん。言ってみただけだって。

「…俺は、」

―そのうちに、今度は国崎が口を開く。

「…俺は、別にそれでいい。ただ、最後のは分からないけどな。」

「……何が？」

「…干渉するなっつっても、俺には那津の、触れていいギリギリのラインが分からない。

まだお互いのことをよく知らないわけだから、ちょっとしたことで心の琴線に触れる可能性だってある。だから、無理。３つ目は保留にしとけ。」

と、思いがけず真面目な顔で、熱く語ってくるからビックリした。

「…へぇ、いろいろ考えてるんだね、国崎も。」

「お前と同じくらいには、な。」

互いの顔を見合わせる、私と国崎。その表情からは、何もうかがえない。

そして彼の黒い瞳には、私はどのように映っているのか。

「…うん、分かった。女のコの件は、なんとかするよ。

でもナツちゃんと仲良くしてくれるかどうかは、知らないからね。

２番目のも、特に問題は無し。

…ただ最後のだけは、聖悟の言う通り、徐々に慣れてくしかないんだけど、いい？」

斎藤も考えがまとまったのか、そう言ってきた。その言葉に、私は少なからず驚く。

…マジか。全部クリアするとは。私は、友人になるのに面倒くさい条件を出すような、とんでもない女だぞ？

……なんか、申し訳ないとか、思っちゃうじゃないか。

「…分かった。でも、女友達は集めといてよ。なるべく面倒臭くない子。」

「ナツさん以上に面倒臭い人なんて、そうそういませんよ。」

うぐ。い、意外と毒を吐くじゃないか、乾。

「ホントだよなー。全く、トモダチになるのにこんな手順踏んだの初めてよ？俺。」

…そら、そうだろ。私は『面倒臭い女』らしいからな。

「ま、いーんじゃない？これから、楽しそうじゃん？」

「……お手柔らかに。」

…ただし、私の平和は、乱すなよ……

――

―その後も、ワイワイ騒ぎ、下らない言いあいを続けた。
こうして話してみると、彼らも案外普通の人だった。
顔がいいというだけで、私も無条件に身構え過ぎたのかもしれない。
今日1日で、考えが少し変わった。
その意味では、今回の飲み会、成功だったのかもな。

―
―
―

「…そろそろ、お開きにする？」
夜もだいぶ深まった頃。斎藤がそう、シメる。
「えぇ～まだ飲もうよぉ。」
「お前は、飲みすぎ。」
やたら語尾を伸ばし抱きついてくる水谷を国崎がドツく。
…水谷は、酔うとさらにウザイ。絡み酒かよ、厄介な。
「じゃ、帰るか。」
私たちは、席を立ち始めた。
―帰りも、国崎の車だ。他の3人も一緒に乗っている。飲み疲れたのか、無言の車内。
…私も疲れた……。寝たい。
「…今日は、ありがとうございました、ナツさん。」

うつらうつらと瞼が降りようとしていたころ、唐突に乾が話しかけてきた。

「…ん、何が？ごちそうになったの、こっちじゃん。」
「いえ。ナツさんといると楽なんですよ。俺も、みんなも。」
「……へぇ。」
「よけいな気遣い、いらないし。」

あ、さいですか。

「…そりゃ、よかったわ。」

適当に返事をしながら、私は、ぼんやりと窓の外を眺める。
真っ暗な闇の中に、ぽっかりと浮かんだ光。
――今日は、満月だ。
月明かりに照らされながら、再び車内は沈黙した。

後ろの席から水谷のいびきが聞こえる。
その隣で斎藤が携帯をいじっている。
乾は空に浮かぶ月を見上げている。
国崎は…眠そうに、運転を続けている。

私は彼らを一瞥し、また窓の外に視線を戻した。

――いつ崩れるのか、分からない。友人関係なんて、そんなもんだろう？
こんな穏やかな時間なんて、いつか必ず壊れる。忘れる日も、やって来る。
…そうだな、それまでは、このお遊戯に付き合ってやってもいい。

でも、

―私は最後まで、君らを信用したりはしないだろう。

そんなことを、思いながら。

―――

―――

「…じゃ、また明日。」

「寂しくなったら、俺らの棟、来てよー。」

「おやすみなさい、ナツさん。」

数分後、手を振りながら車から降り出す男たち。

―3人は同じマンションに住んでいるらしい。仲良く家路についた。

そして、再び自動車を発進させる国崎。どうやら送ってくれるらしいので、素直に甘えておくが……

少し気になった私は隣の男に聞いてみた。

「…国崎は、家、どこなの?」

「……俺も、あいつらと同じトコだけど。」

「え?ちょっと、それを早く言ってよ!地下鉄でもバスでも使って帰ったのに!!」

弾けるように顔を上げる私。…国崎は酒も飲まず、運転続きなのだ。さすがに心苦しい。

「別にいいっての。最後まで、送る。」
「…そういや、女の子に優しい設定だっけ、君。」
「設定って何だよ。最初から優しいだろ俺は。」

どこがだ。
いや、感謝はするが、最初らへんの鬼畜っぷりを帳消しになんかさせないからな。

――

「―那津、」
「…ん、なに。」
「ありがとな。」

しばらく車に揺られていると、国崎に呼ばれた。

…なんか、感謝された。

「…何が？」

ちょっと驚いた。コイツから、お礼を言われるなんて。…ったく、乾といい、何なんだってんだ。

「ああいう条件だしてきたってことは、認めてくれたんだろ？俺らのこと。」
「…別に。諦めた……ってか、ほぼ強制だったじゃん、主に君の。」

「ククッ、ま、そうだけどな。こんな普通に女子と楽しく飲むの、初めてだから。」

…初めて？

「……どういう意味さ。」

「お前は、他の女とは違うってことだよ。褒めてんだから、ありがたく思っとけ。」

…なんか、納得いかんが……まあ、悪い意味じゃないらしいんで、よしとしとこう。

「でもあんまり仲良くなるなよ、…あいつらと。」

「……は？なんで？」

しかし、続けて言った彼の言葉は、まさしく不可解だった。

…なんか、矛盾しまくってないか？こんだけ『トモダチ』を押しておいて、あの人たちと仲良くなるな、て。

「なんでも。…俺が困るから。」

「？？？」

意味不明の回答に、さらに目を白黒させる。

君、が？さらに分かんないな。なんのこっちゃ。

「まあ、面倒臭いから私から近付くことは、無いと思うけど。

…もちろん、君にも。」

「……。」

言って、国崎の方を向くと、私を目視するヤツとまた目が合った。

車は、ちょうど赤信号で止まっている。
しばらくそのまま互いの顔を見ていると、

「……那津ってさ、猫みたいだよな。」
「……？」

突然、何の話だ。

「…ネコミミとかは、死ぬほど似合わないと存じますが。」
「誰がコスプレの話をしてんだよ。性格の話だっつの。自由奔放で、掴みどころがない。そのくせ他人には中々懐かない。」
「当たってるような、当たってないような…」

へぇ、そんな風に見られてたのか、私。

「……難しいな。」

ポツリと国崎が呟いた言葉は、私には届かなかった。
車が、再び動き出したからだ。吹き込んだ風で彼の言葉はかき消えた。

「…何か、言った？」
「別に、こっちの話。」

ふっと笑う彼。私は首をかしげたが、そのまま気にせずに正面を向いた。

――程なくして、車は私のアパートに着いた。
もう2度目だからか、慣れたものだ。国崎はちょうど正面でブレーキを踏んだ。

「…わざわざ、どうも。それじゃ。」

―そう言って、車を降りようとしたところ、突然、運転手に腕を掴まれる。
私は少し眉をひそめたが、もう、いきなりコイツに腕を掴まれるなど慣れたもの。
静かに、ヤツに問いかけた。

「…何さ、忘れ物？」
「ん。」

振り向いた時、国崎が身を乗り出して、

一瞬。
額に、柔らかい口唇の感触。

「じゃあな、おやすみ。」

国崎は、妖艶にニヤリと笑い手を振った。
数秒後、我に返った私はバッと車から降りる。

「――！ちょ、なにしてんの君！！」
「別に？ただのでこ「あーー！言わないでよろし！！」

っく！今度は額か！セクハラも大概にしろや！引っかかる私もアレだけど！
てか、コレは慣れてねぇからっ！慣れる予定も、ないから！

「宣戦布告だよ。覚悟しとけよ？」

何についてデスカーー!!?
……国崎はニヤニヤ笑ったまま車を発進させ、この場を後にした。

「あ…いつっ!絶対楽しんでやがる…!」

私は額を押さえて、車が走って行った方向を睨み見る。
どんなに目をこらしても、あの黒い影は、もう跡形もなく消え失せていた。

in居酒屋（2）（後書き）

本作品、ＢＬ要素はありません。斎藤君の属性はただのネタです（笑）

香るコーヒー屋（1）

―それからというもの。

「ナッちゃん、やっほー！暇だから遊びにきちゃった♪」

だの、

「ナツさん。今日の昼、一緒に食べませんか？」

だの。

わざわざ講義室にまで現れる男たち。

…棟が違うんだから、いちいち来るな、アホどもがっ！君らが来るたびに女子たちがざわつくんだよ！

おかげでもう……毎日瀕死状態ですよ……ああ……

「…何、死んでんの。那津。」

「今日はお前か、国崎…」

机に突っ伏していると、国崎に話しかけられた。途端、女子たちの黄色い悲鳴が上がる。

ホラ、ね。相変わらずだな……。

―――

―――
―――

居酒屋で飲んだ日の翌朝。やはり予想した通り、私は登校するなり女子に囲まれた。

『ねぇ、あの４人と知り合いなの!?紹介してよ、本城さん!!』
『もしかして、親戚とか?私のこと、紹介しといて!!』
『まさか、あの中の誰かの、彼女じゃないよねぇ?知らなかったなー、本城さんがあの人たちと仲いいなんてー。』

……エトセトラ。全く知らない、学部すら違う女子にも話しかけられた。
通りすがりの人にさえ、興味深そうに目を向けられる始末。
……下心丸見えだなー。女って、やっぱコワイ。
私は台本通り、「彼らは友達です。」と丁寧に受け答え、４人のメールアドレスを彼女らにバラまいた。
――餌効果は抜群だったらしい。歓喜した女どもは私には目もくれず、携帯を取り出してメールを打ち始めたのだから。
―おかげで難なく逃げおおせた。

――その夜。４人の新・メールアドレスが私の元に到達した。
…そういや、昼から夜にかけて来たメールの数も報告してきたっけ…

斎藤　６８通
水谷　７２通
乾　６３通
国崎　…１０１通

…これで国崎の人気が1番高いことが判明した。3ケタのったのか
……ほんの半日で。いや、他の3人も十分すごいけど。

……どこがいいんだか、あんな変態俺様の。
携帯をパタンと閉じ、ちっ、と舌打ちを打つ。

あの夜以来、国崎は私の中で有害危険人物一位に認定された。
…なるべく近寄らないようにしよう。抜け出せなくなったらヤバいんだからね！！
ダメ、ゼッタイ！！

――

メールアドレスによってひとまずは危機回避。彼らも、即アドレスを変えた。
…さて、ここまでは計画通りだ。

しかし、あれから1週間が経つというのに、一向に、彼らから新たな女友達は紹介されない。
……おかげで、このありさまだ。毎日毎時間、メス共が、うっとうしくてしゃーない。

――
――

「…どういうことだ、国崎…。」

所は変わって理学部近くのカフェ、…の、カゲ。私は神経を尖らせながら、国崎に恨めしげに尋ねる。
一応外からは見えにくいと思うが……見つかるのは時間の問題だろう。
彼女らはハイエナのごとく、瞬時に群がるワザを持っているからな。

「…だから、俺は知らないって。アイツらにまかせっきり。」
「だーーっもう！早くしねぇと私が危ないだろうが！！早いとこ作れって！友達が無理なら、彼女の2、3人くらい！！」
「二股も三股もする趣味、無いんだけど。」

そういう意味じゃねぇーっ！
全く気にしていない様子の国崎に苛立つ。コイツ、この私が生死をかけている時に…っ！

「っ、……そう、君さえ何とかなってくれりゃあいいのっ！国崎って、４人の中でも１番人気でしょ？」
「１番人気……人を人気商品みたいに…」
「シャーラップ。私だって必死なの！ここ数日、マジで生きた心地しなかったし！！」
「…そりゃ、ご愁傷さま。」

黙れ。何でそんな不服そうなんだ、君は。
ギリギリと歯を食いしばってイライラを隠しもしない私。

――すると、そこに人が近付いて来る気配がした。

コンマ２秒で気付いた私は、バッと振り向く。
―！マズイ、バレたか！７０％オーバーの確率で、この男を捜しに

来た女子の誰かだろう。

「…っ！国崎、話はまた後でっ！」

じゃっ、と手を挙げ、駆けだそうとすると

「ダメ、行くな。」

国崎に後ろからぎゅう、と抱き締められた。
国崎の顎が、私の頭に乗る。ふわりと彼の息がかかり、背筋がうすら寒くなった。

…ちょ、待て、このタイミングで！？嫌がらせ！？
ひぃ！死亡フラグ立ったぁあ！

「くく、国崎君！？離してくれないか！？」

いかん、声が震える。この恐怖感、ヤバイぞ。

「ヤダ。離したら逃げるだろ、那津。」

もちろん、そうだがっ！今は行かせてくれぇ！！

…ううん、なんか目が潤んできた。視界がぼやける。
それでも私の後ろで手を回す国崎を見上げて必死さをアピールすると、ヤツは目を見開いて驚いた表情を作った。
…初めて見る顔だ。

……あり、何で？

「…お前、そういう顔もできるんだ…。」

ぽつり、と呟く国崎。

…どういう顔だろう。そんな酷い顔面だったんだろうか？いや、ヒドイのは元からだが。

とにかく、何故か知らんが、国崎は力が抜けたように私を離し、顔を逸らした。

っしゃあ！なんか知らんがラッキィイイ！脱兎のごとく走りだそうと私は足を1歩踏み……

「聖悟君、見つけたぁ。」

……踏み出したまま、固まった。…お、遅かったか！？

やたら高いぶりっ子声が頭上から降ってくる。

……頭上？な…何！？上から…だ、と？

テラスの影は死角になるが、なんと理学棟の上階からは丸見えだったのだ！！

う、うかつ…っ！

そして、さらに。

「聖悟君っ！今日、暇？」

「一緒に遊ばない？」

近付いてきた足音＝女子5名　もあらわれた！！

…どうしよう、敵が多すぎるよ。国崎もぼうっとしたまま、素知らぬ顔してるし。

「ちょっと、本城さん。何してるの？」

そうこうしている内に、頭上の女子の内１人から低い声で話しかけられる。

…知らぬ間に私の名前は広まってしまったらしい。

以前は、大学内の９８％の人は知らなかったハズなのに、今では見知らぬ女子からも敵意を向けられる程の知名度に。

…アハ、もう死にたいな。いや、むしろ君が死んでくれないかな国崎。

「…えっと…今そこで会っただけ。じゃあね国崎君。私、帰るから。」

―だから君はここでコイツらの相手を頼む。

国崎は裏の意味も読み取ったのだろう、眉をしかめた。

…うん、ゴメン。でも、元はと言えば君が彼女を作らないせいだから。

私は眼だけでそのように伝えると、女子たちの矛先が私に向かないうちにこの場からフェードアウトを試みた。

――が、

「ちっ」

国崎が忌々しそうに舌打ちを打って、

「！！」

グラリと視界が揺れる。彼は一瞬で、私を担ぎあげた。

…2回目ー！この短期間で、2度も宙に浮く体験て！

「ちょ、君っ何す「俺、こいつと遊ぶ約束してるからさ。今日は無理。」

「…えっ！？」

驚愕の声を上げる女子たち。…こっちも、『えっ！？』なんですけどぉおお！！

「…じゃ、そういうことなんで。」

国崎は長い脚で地面を蹴って、走り出した。…私を左肩に乗せたまま。

「――オイ！国崎っ！国崎聖悟！！君は何を言っちゃってんの！？」

「何って、聞いただろ？」

「約束なんざ、した覚えもされた覚えも無いんだけど！？」

「そうか、俺も記憶に無い。」

なら、大ホラついてんじゃねぇよ！！しかもこっちに不利な嘘をー！

国崎と私はギャーギャーと口論を繰り広げる。だが、走りながら話すのに、流石に疲れたのか、

程なくして国崎は私を下ろし、大学内の芝生に座りこんだ。

…私も大声で叫んだからか、喉が痛い。お互いしばらく休んでいたが、怒りの収まりきらない私はすぐに隣を向いた。

「…また君は目立つようなことを……っ」

「どうせ俺といたら目立つにきまってるし、今更だろ。」

もう恒例にするには、早すぎるわっ！！しかもさらっと自過剰！！
ピキッと青筋を立て、私は改めてこいつを『敵』と認識した。

「黙れ。全く、国崎ってホントワケ分かんない。他の3人はもっと普通に接してくれるのに。」

「…は？なに、あいつらお前に会いに来てんの？」

「…毎日のように来るけど。おかげでこっちが大変だっての。」

「へぇ、そう。」

そう言って、国崎はちょっと黙った。…と、思ったら、いきなり頭をがしがしとかいた。

…？なんだ？

「…なにいきなりイライラしてんの。コーヒー飲めば？」

もしくはカルシウムか？よくは知らんが。
とりあえずそう助言すると、彼はぴたっと手を止めた。
そして

「…俺、苦いの不得意だから。」

そう、小さな声で、言った。

……。…っぷ。不得意って……
合わねーー！その顔で！？そういや、国崎は甘党だったけか！？
にしても、可笑しい！可笑しすぎる！！

「…笑うな。」
「…ックク、アハハハ！だ、だって、コーヒーダメとか、子供みたいでっ！君、合わなっ、い……！」
…あー、ヤバイ。笑いすぎて腹筋痛いわ。
ひとしきり笑い終え、国崎の方を向くと、ヤツはムスッとふてくされて、そっぽを向いている。
うーわーっ。マジでいじけてるっ！コイツの方が猫っぽいって、確実。
―なんだかその様子が可愛くて、毒気を抜かれた、というか。さっきまで怒っていたことを忘れてしまった。
「くくっ、ゴメンゴメン。じゃ、美味しいコーヒーの店、教えようか？」
ふて腐れていた国崎は、それにぴくっと反応しこっちをちらりと見る。
「…連れてってくれるなら、いく。」
……お、なんか釣れた。
こりゃ、女子の皆さんに耳よりな情報だな。いい店紹介すればついて来るらしいぞ、こいつ。
「オッケー。歩いて行けるから、今から行く？今日、まだ授業ある？」
「無い。今日はあとバイトだけ。」
「じゃあ、行こう。」

私と国崎は立ちあがり、並んで歩き出した。校門を通り抜け、大通りに差し掛かる。

―相変わらず、すごい人だ。信号待ちの歩行者は、車道にまではみ出している。

私たちも信号が青に変わるのを、待つ。

その間も、周囲の女性（時折男性も）が隣の男を見ているのが分かった。

…ここまで来ると、芸能人でいいんじゃね？君。

信号が青に変わり、再び時が動いたかのように、人の波は一気に前方へと押し寄せる。

私もその波に逆らうことなく、歩き出す。

――と、突然、手を握られた。

「っえ？」

―握った相手はもちろん、国崎聖悟。私の隣にいる男だ。彼の大きな右手が私の左手を覆う。

首をかしげると、ヤツは口パクで、『はぐれるから』と言ってきた。

…確かに人通りは多いしはぐれるかもだけど……、

……。…ま、いいか。コイツが、迷子になっても面倒くさい。誰にも分かりゃしないだろう。

どうせ、この人ごみで私は隠れるだろうから――

私は特に気にせず、国崎の手を握り返し、目的地に向かって歩き出した。

手を引かれて、男もおとなしくついて来る。足のコンパスはだいぶ

違うハズだが、国崎は私に合わせてゆっくりと歩いているらしい。
自然に、いつもと変わらぬ速度で歩けている。

…へぇ。こういう所はいい男っぽい。やっぱり、経験がものを言うのだろうか。

香るコーヒー屋（2）

―――
――

大学を出て、徒歩7分（私計算）。大きな道路から少しはずれた所に、私のお気に入りのコーヒー屋がある。
…コーヒー屋といっても、喫茶店のような所で、中でマスターがコーヒーを入れてくれるのだ。

――カランカラン。

いまどき珍しい、古風なドアベルがついたドアを押し、店内に入る。

「いらっしゃい。」

柔和な笑みを浮かべ、私たちを迎えてくれたのが、この店のマスターだ。
御歳、３５歳。独身。丸メガネとヒゲが、トレードマーク。

「こんにちは、マスター。」

私はとりあえず挨拶をして、カウンターに座った。
国崎はその隣の席に腰掛ける。なんだか物珍しそうに、店内を見回していた。

「那津ちゃん、久しぶりだね。こっちのカッコイイおにーちゃんは、彼氏？」

…定番トークしてきやがった。

「違います。友達、しかもなったばかり。」

「仲よさげに手、つないでるのに？」

は、しまった。つなぎっぱなしだったか。

瞬時に私はパッと国崎の手を離した。なんか汗かいてたし。最悪。

「…まぁ、これは、成り行きで。」

「いいねぇ、青春。オジサンはもう枯れ果てたからなぁ。」

聞いちゃいねぇな、このオヤジ。

「…国崎。マスターはこんなんだけど、コーヒー入れるのは上手いから。」

「こんなんって何よ、こんなんってえー！」

口うるさいオヤジだよ、もう。

「…はいはい、うるさいから黙っててー。私、ブルーマウンテンね。それと――」

「マスターさん、俺コーヒー苦手なんですけど。飲みやすいのありますか？」

ちらりと隣を覗きながら言うと、いきなり国崎に遮られた。おお、敬語だ。

「僕のことはマスターって呼んでよー。そっか、コーヒー苦手なの、君。じゃとっておきの、ブレンドしちゃおうかな？」
「うわ、マスター、実は男好き！？だから３５にもなって結婚できないんだって。」
「やかましい。年齢のことは言うんじゃないの。」
マスターは舌を出してそう言い残し、店の奥へ消えた。

――

―しばらくお互い無言でいると、視線を感じたので横を向く。…と、国崎が、なんとも言えない表情で、私を見つめていた。

「…何、国崎。」

目を細めて聞いてみる。

「…ん？ああ、なんか那津がくつろいでるの見て、意外な感じがしたから。」

と、なんだかぼんやりとした様子でそう返ってきた。…くつろいでる、ね。
私はふっと笑った。

「……確かにそうかも。私、コーヒーの香り好きだからね。なんか癒される。」

そう言って前を向き、少し黙った。
――マスターの店は感じがいい。
忙しい街の中で、ここだけ時が止まっているかのような錯覚を覚える。
―国崎もそう思っているのか、いつもより若干、顔の表情が柔らかいような気がする。

「…はーい、おまたせ。」

程なくして、マスターが戻ってきた。手には湯気の立つ、コーヒーカップが、2脚。

「さ、飲んでみて。」

私はいつも通り、香りを堪能してからカップを口に運び、一口飲んだ。
…うん、今日も美味しい。このオヤジからなんでこんな美味しいコーヒーが出るのか、不思議。

「…えっと、国崎君、だっけ。最初は何も入れないで飲んでみてよ。」

マスターに促された国崎も、恐る恐る手渡された一杯を一口飲んだ。
すると、

「…おいしい……。」

ヤツの顔は、パッと花が咲いたようにほころんだ。これには、私も

ぎょっとする。
―うわ。バックに花が飛んでるよ、花が。……客観的に見ても、超可愛い。
こりゃ、ファンには鼻血ものだな。なんだ、その汚れなき少年のような表情は。

「やったっ！それ、僕の自信作なんだよ！よかったー、気に入ってくれて。」

マスターもなんかやたら嬉しそうだ。…若干引くほど。

「俺、こんな美味しいコーヒー、初めて飲みました。」
「おうおう、嬉しいこと言ってくれるね。もう1杯どうよ。」
「じゃあ、いただきます。」

国崎のカップに新しくコーヒーが継ぎ足される。マスターも同じのを自分のカップに入れていた。
―マスターと国崎は、すっかり意気投合したようだ。親しげに話す2人を横目で見ながら、この店を紹介して良かったと思った。

……あ、そうだ。

「ね、マスター！私もそれ、飲んでみたい！」

忘れるトコだった。国崎も大絶賛するそれを、コーヒー愛好家の私だって、ぜひとも飲んでみたい。
そう思って申し出てみたのだが。

「残念ながら、もう無い！また次回、だな。」

…あっさり断られた。しかも笑いながら。

「えーっ嘘！もっと入れといてよ！」

ニャロ、国崎には2杯も入れたくせにい！男女差別か！？顔差別かっ！？ズルイッ！！

――私は最後の手段、とばかりに、じいっと国崎の持っているカップを見つめる。

「……欲しい、か？」

国崎が笑ってそう聞くと、

「うんっ！」

私は素直に即答した。やったっ！国崎イイヤツ！（単純）

国崎からコーヒーカップを受け取ると、綺麗な茶色を一口すする。途端、口が緩んで笑顔になった。

「あ、ほんとだ。スッキリしてて美味しいっ！」

あのオヤジ、こんないい豆を隠してやがったか。不公平だぞ。ありがと、とカップを返すと、国崎は苦笑して残りを一気に飲み干した。カップを置き、そして呟く。

「……なんか、ここにいる那津って、子供っぽい。」

……。

「…え、マジで？」

自覚ないんだけど。君の目にはそのように見えたのか？子供っぽい私って、なんかキモくない？

「うん、マジで。」

「…子供っぽいっていや、君もだろ。」

「え、俺も？」

「さっき、ファンにバラまいたら軽く１０万は稼げそうな、あどけない笑顔を漏らしてましたけど。」

「…うわ、怖いな。気をつけとこう。」

国崎は身震いして、自分に言い聞かすように呟く。

すると、カウンターから両腕が伸びて、私と国崎の頭をがしっと掴み、豪快に撫でた。

「ハッハッハッ！いいのよ、若者たち！！ここにいる時は存分に子供に戻りなさいっ！お父さんがコーヒー入れてあげるから。」

「…えー、こんな父さん、ヤダな。」

髪をかき交ぜる手を振り払って、冷たくそう言ってみる。

…ったく、何でこんなテンション高いのこのヒゲオヤジ。髪が乱れたじゃあないか。

「傷つく言葉を言うなっ、娘よ！反抗期か？」

「…じゃ、俺はこいつの兄？」

「勝手に設定作るなよ。それなら、私のが姉でしょ。」

「お前はどうみても妹だ。」

――なんか、あーだこうだ言いながら、馬鹿らしい設定を作られた（勝手に）

最終的に決まった役（？）は
マスターが妻に逃げられた３０男で、国崎が離婚の際、引き取った息子、私が再婚相手の連れ子。
……どこの昼ドラだよ。
確実に何度か修羅場を迎えるだろ。私、血繋がってないし。しかも再婚相手が非常に気になるトコロだな、コレ。

ま、でもある種リアルな偽装家族ごっこも、なかなか楽しめた。国崎も、マスターも楽しそうだったし。よく笑ってたし。
――私も、なんだか楽しい気分になった。

――

――気がつくと時間はだいぶ経っていて。もう夕日が傾きかけていた。

「マスター、そろそろ行くわ。」

私は席を立った。ついで国崎も立ち上がる。

「ん、またいつでも来てね。」

――カランカラン

マスターの笑顔の見送りを背に、私たちは外に出る。

――夕日であかね色に照らされた街。
行きは混み合っていた通りも、だいぶ人通りは少なくなっていた。
そんな街中を、私は国崎と肩を並べて歩く。

「…いい店だったでしょ。」

歩きながら、隣で歩く男に尋ねた。

「……ああ、そうだな。」

…なんだ、そのぼんやりとした返事は。いつもの国崎らしくない。

「…どうしたの？」

私は違和感を感じ、足を止めて国崎の顔を見た。夕日で照らされていて表情はよく読めないが、多分笑ってはいない。ヤツも、足を止めた。

「……那津は、何で俺をあの店に連れて行った？」

しばらく考えこんだ後、私を見つめて言う。国崎は、真剣な目をしていた。
――また、だ。この目。この真剣な眼差しに、射抜かれる。私は思わず、目線を下に向けて、顔を逸らした。

っ、え、なにこの空気。何でコイツ、こんなマジなの？
私は焦って弁解の言葉を口にする。

「だ、だって、君がコーヒー嫌いとか言うから！コーヒー程美味しい飲み物は無いってのにっ！！」

焦りつつも、口を尖らせて、答えた。
え、合ってるよね、私。これ以外の理由なんて、無いんだけど。何を求めてんの？君は。

「……でも、お前のお気に入りじゃなかったわけ？いいの？」

国崎は真面（マジ）のまま、小さく聞いてきた。

……。…ああ、なんだ。コイツ、私のテリトリーの心配をしてるワケか。
……私の言ったこと、覚えてたんだ。

「……別に、いいよ。国崎も気に入ってくれたら、私も嬉しいから。」

――うむ。
紳士な配慮はありがたいが、別に気にしてもらわなくても、いい。
マスターの店が広まるのはちょっと嫌だが、国崎は言いふらすタイプでもないし。

――君はトモダチ、だから。今は、ね。

しかし、気遣ってくれたのはうれしく思い、私は歯を見せてニカッと笑った。

「…ふーん。」

そっか、と国崎も嬉しそうに笑った。
…やっぱり紹介して、良かったな。よほど気に入ってくれたらしい。

夕暮れの中、再び並んで歩き出す。

「…また、ちょくちょく行ってあげたら？マスターも、息子のように思ってくれてるワケだし。」

「行く時は、那津と一緒に行くよ。」

「そ？」

「俺は、お前の兄貴だし。」

「…まだその設定、続くの？」

「しばらく、これでいこうかな？」

…やめなさい。私の本物の兄が泣くかもしれん

私たちは、そのまま人のいない道を歩き続けた。

香るコーヒー屋（2）（後書き）

ほのぼの系の話でした。次回も新キャラ登場です。

美女、来襲（1）

「―ちょっと、本城さん。話があるんだけどいいかしら？」

――時刻は、朝もまだ早い時間。1限の講義前である。

…目の前にいる、美女と呼ぶのにふさわしい、ブランドで固めた女に話しかけられたのは。

私は、昨日徹夜で仕上げたレポートをファイルケースに入れ、提出しようと教授の部屋を訪れるところだった。

「…あ？」

ジロリと見返したところ、謎の美女は若干、後ずさった。

…あ、スイマセン。徹夜明けなんで、目つき悪くて。

「…話があるの。時間はあるかしら？」

コホンと咳払いをし、改めて私に話しかけてきた。

なかなかいい人のようだ、見かけによらず。

マナーの悪い女なら、無理矢理引きずっていくだろうに。

……と、いうか、もう用件分かってますけど。あなたが来た時点で。

「…レポート提出して、3限の講義が終わった後ならいいですけど。待てます？」

「いいわ。じゃあ、大学前の喫茶店で、待っててくれるかしら。」

……いい人ってだけじゃなく、気も長いらしい。

別の言い方をすると、暇人。

じゃあ、後で。と手を振って彼女は階段を上っていった。

私も、ため息を1つついて、研究室に入る。

……ついに、来たか。女子からの呼びだし。

――ったく、高校生じゃ、あるまいし、男くらい実力でゲットしろよなー。

――

――

講義もすべて終わり、私は例の喫茶店に行くために、帰り仕度をした。

鞄をかつぎ、講義室を出る。中庭を通り、出口にさしかかる。

そして最後の角を曲がり――

「やっほー！ナッちゃん！」

「今終わり？一緒に遊ばない？」

――きる前に、見なれた顔がひょこっと飛び出してきた。

…う。出た。

眩しいくらい満面の笑みで近づいてくる、男たち。

今日は水谷・斎藤ペアだ。

…何故にヤツらは毎日日替わりで現れるのか。なんか示し合わせているんだろうか。『今日は俺たち』みたいな。
……迷惑以外の何物でもないな。

「…悪いけど、今日は無理。先約があるんで。」

手を前で振り、とりあえず断る。

「えー、嘘だろー？」
「もしかして、金欠？金なら貸すよ？別に。」

…オイ、先約ってのは、嘘確定かい。
ちがうから。ホントだから。むしろ、君らのせいだから。

「ああ、もう。今日メールするから、とりあえず帰れ。」
「マジっ！？約束だからね！」
「ナツちゃんのメール、レアだからなあ。」

……うっさい、レアで悪かったな。面倒臭いんだよ、打つの。

…4人とつるむようになってからも
相変わらず、メールはめったにしない私だった。

その後、しっかりとメールするよう釘を刺された私は、2人に見送られ大学を後にした。

……なんだか、私、あの4人に懐かれすぎてる気がする。
こっちはマスコットじゃ、ないってのにな。

――今度、私のプライバシーを侵害すんな、とか言ってみようか。

それはそれで厄介なことになりそうだ、と思いながら待ち合わせの喫茶店へと足を進めた。

――

――

数分後、目的地にたどり着いた。…いや、たどり着いた……のか？

本当に、ここであってる？

でも、大学前の喫茶店って、ここしかないし……。

…何というか、入るのをためらう店なんだが。

――彼女が指定してきた店は、

なんとも乙女チックな（？）感じの、超ファンシーなカフェだった。

レースのカーテン、フリフリエプロンの店員、そこら中にあるぬいぐるみや人形。もちろん、客は全員女性。

……何、この空間。私、完全に浮いてるよな？

つーか、何でわざわざこんなトコ選んだかな、あの女。

私は、いささかげんなりとして、パッチワークの引いてある椅子に座った。相手はまだ来ていないらしい。

「ご注文は、お決まりでしょうか？」

席に着くなり近寄って来た店員に、コーヒー、とだけ告げて私は机

に突っ伏した。
…頼むから早く来てくれ。居心地が悪すぎるぞ、コレ。
地味メガネ女×フリフリレース×ふわふわぬいぐるみ
……罰ゲーム？

―――

女が来たのは、それから１０分後だった。
朝見たときと変わらず、見目麗しい彼女は、ごめんなさいね、と一言謝り席に着く。
私はそのときようやく頭を上げて、紅茶とケーキを頼む女を観察した。

セミロングの髪は丁寧に巻かれていて、メイクにも余念なし。綺麗というよりは、可愛らしいという感じに仕上がっている。
淡いボーダーのシャツもピンクのロングスカートも彼女にぴったりと似合っていて……典型的なお嬢様タイプだ。

…罪な男よな、あいつらも。こんな美人に好かれるなんて。

彼女の頼んだ紅茶とケーキも届き、ひと段落したところで、目の前の美女は話し始めた。

「……じゃ、まず、自己紹介ね。私は高宮　麗奈（タカミヤ　レイナ）。

文学部の3回生で、２０歳よ。」

へぇ、先輩なんだ。
それにしちゃ、丁寧で感じ良さ気だな。

「ご丁寧に、どうも。本城那津、法学部の2回生です。年は１９。で、どういったご用件でしょう?」

私はしらじらしく、そう返す。
すると、少し気分を害したのか、高宮さんは綺麗に整えられた眉を多少ひそめた。

「……分かってるわよね?私が知りたいのは、S大の王子様たちと貴女がどういう関係かってことよ。」

…は、王子様だって。ひねりも無けりゃ、センスもねぇ呼び方。
私にとっちゃ、ただの面倒な男どもだけどな。

「どういうって、ただの友人ですけど。」
「嘘。友人にしては親しすぎるわ。あの中の誰かの、彼女なんでしょう?」
「誰の彼女だったら、困るんですか?」

そこで、高宮さんは、カッと顔を赤くした。
…案外、表情が豊かだな、このお嬢様。

「っ、それは、どういう意味っ!?」
「…いや、誰か狙ってる人がいるんでしょう?４人の内、誰かなって思って。」
「……。」

……あれ、そんなおかしなこと、聞いたか？黙っちまったぞ。

無言の彼女の方を向いたまま待機する私。

すると何秒か後、

「……き……くん…よ。」

高宮さんは、俯いたまま、ボソボソ呟いた。

…物事は、はっきり言おうかー？若干いらついたまま、もう一度聞いてみた。

「…すいませんが、聞こえません。誰です？」

「くっ、国崎聖悟君、よ！」

顔をガバッと上げた彼女は、顔面を真っ赤にして、『キャー』と恥じらっていた。

…乙女だ、この人。ああ、だからこんな喫茶店が好きなのか。

――にしても、やはり君か、国崎。さすが1番人気だな。モテるモテる。

「…はあ、そうですか。」

ちょっと冷めた目で見ながら、答えた。

「あ、貴女がこの間、国崎君と仲よさそうに歩いてるのを見たのよっ！どういうことっ！？」

あちゃ、見られてたか。この間の。それ見て誤解したんだな。

―これからは誤解を招かないように、複数で行動するとか、なんとかしないとなあ。

「えっと、彼に私のお気に入りのコーヒー屋を教えてたんです。」
「な、なにそれっ！デート！？」

違ぇ。

「違います。友人として、です。貴女も仲のいい男友達くらい、いるでしょ？」
「……そう、かしら。」

うーん、と疑り深い眼差しをこちらに向け、考え込む高宮さん。

…ていうか、何？やっぱりアレって、友人としては距離が近すぎるのか？
別にそうでもないと思うんだけど。あれ？私の感覚のが、変？

「…ま、そういうわけなんで。
大丈夫ですよ、国崎と私がどうこうなるなんて、１００％ありませんから。私もどっちかというと、嫌いよりですし。」

私はニッコリと笑って言った。

――だから、自信持ってください先輩！
ついでに私のことは空気と思っていただいても構いませんよ？

私の完全な否定に高宮さんも納得したのか、ほっと一息ついて、紅茶を飲んだ。

「…そう、分かったわ。ごめんなさい、変な勘違いして。」

まだ顔がうっすらと赤いままの彼女は、やはりとても綺麗だった。

…国崎、こんな美人見逃すなんてどういう了見だ。

バチ当たんぞ、いつか。

美女、来襲（2）

――

…しばらくお互いに何も話さなかったが、頃合いを見て、私は口を開いた。

「…あの、ついでにお聞きしたいんですが……」

「何？」

「国崎の、どこがいいんですか？」

失礼かとも思ったが、一応聞いてみる。

人気の理由が分かれば対策も練れるかもしれない、と思ったからだ。

「……何、貴女……」

「へ？」

――と、

いきなりガシッと両肩を掴まれ――

「国崎君の良さが分からないのっ！？あんな完璧な男性はいないっていうのに！」

そのままガクガクと揺さぶられる。

…うわ、また熱くなったよ、この人。
国崎関係の話だと、冷静さを欠くのか？それとも私、何か変なスイッチでも押したか？

「私、国崎君のことなら、小１時間は話せるわ！！」
「いや、長引くのもアレなんで、かいつまんでで結構です。
あと、声のボリュームも少し落として。」

小１時間も話されたら、困る。

「…コホン、ちょっと熱くなりすぎたわね、失礼。……いいわ、彼のすばらしさを語ってあげましょう。
１８０センチを軽く超える長身、スラッと長い脚、男らしく、でもしなやかな手、やせ形なのに程良くついた筋肉、サラサラの茶髪、何より、整った美しい顔！！
…まさに私の描く王子様そのものだった……。」

高宮さんは、うっとりとした瞳を虚空に投げかける。

……誰が、君の妄想話を話せと言った。
外見が特上クラスなのはもう、とうに知ってるって。

「……。」

私はしらけた気分で、先を待つ。彼女の話はまたさらに熱さを増した。

「……そして、あの紳士的な態度！！

私が彼に初めて会ったのは、彼が入学してまだ間もないころだった

わ…私、その日は高いヒールを履いていたものだから、足をひねって倒れこんでしまったのよ。
でもそんなとき、国崎君が来て、『大丈夫ですか？』って声をかけながら起こしてくれたの。私、すごくときめいちゃって、もう心臓がドキドキして仕方なかった……。
今思えば、あの時一目惚れしちゃったのね…
そして、その後彼は医務室まで連れて行ってくれて、
『今度から、ヒールの高い靴は避けた方がいいかもしれませんね。危なっかしいから。では、お大事に。』と言い残して、颯爽と去って行ったの！」

言いきると、彼女は満足そうに、バラ色のため息をこぼした。
（どんなだ）

……。

……ハイ、ノーカット版でお届けしました。
恋する乙女の回想録。

感想。高宮さんも、国崎もベタすぎ。以上。
つか、そんな簡単にオチるもんなんだな。やっぱ、ルックスって、武器？

――う～ん、まいった。全く有力な情報が得られなかったぞ。

国崎が、本当に普段はベタ紳士やってることと、
この人が妄想暴走乙女だってことくらいか。分かったの。

私はため息を吐いた。

…最近多いな、ため息。私、実際不幸だしな。

「……はあ、だいたい分かりました。で、告白はしたんですか？」

「…っな！あ、貴女っ…そんな…っできないわよ…！」

突如、顔がユデダコのように真っ赤になる高宮さん。

…え、マジで？1年以上も経つのに？

「…どうしてですか？」

「…だってっ、彼、ファンが多いでしょ？なんか怖くて近づけないし…。何より、彼に拒絶されるのが、怖いの……。」

さっきの勢いとは打って変わって、消え入りそうな声で言った。

しゅんと小さくなって俯く彼女は、本当に真剣に悩んでいるみたいだった。

…この人、ホント純粋だな。

まるで漫画のヒロインのようだ。…私と違って。

……。

――だが、コレは使えるな。

あいつら、相変わらず女子の友達を作ってこないし、彼女は十分過ぎるくらい美人だ。

――…よし。

「…なら、まずはお友達から始めてみては？」

「…え？」

決めた。この人をオトモダチ第1号にしよう。
目を丸くする彼女に構わず、私は手を組み、ゆっくりと話した。

「私が貴女のことを、私の友達として彼らに紹介しましょう。そうしたら近づけますよ、少しは。」

「…え?」

ぱちぱちと瞬きをし、驚いたような顔をする高宮さん。
美人はどんな顔でも美人なんだなあ。

「……っ!そんな…上手い話すぎるじゃないっ!」

ぼんやりと彼女の反応を待っていると、急に鋭い眼差しを向けて来た。
…いきなり承諾はしないが、めっちゃ動揺してんな。
もうちょい。

「別に、こっちも親切心だけでこんなこと言ってるワケじゃありませんよ。私も女子に目をつけられて困ってたんで、貴女のような美人が必要だったんです。」

「…それって、私を盾に使うってこと?」

「ま、簡単に言ってしまえば。でも、高宮さんだって国崎と仲良くなりたいんでしょう?ギブ&テイクですよ。」

「……。」

すっかり冷めたコーヒーの最後の1口を飲んで、再度彼女の反応を見る。
しばらくは、うろたえていたが、私をじっと見て、考えこんでいるようだ。

「……そういえば、貴女、どうやって彼らと友人に？」
「尤もな質問ですが、それは私が聞きたいです。」
「え、貴女から言い寄ったんじゃないのっ！？」
本気で驚いた顔を作られた。
……。普通の反応だろうが、なんかムカつくな。やっぱ世間的にはそう見られてんのか。
舌打ちを堪えながら、私は笑顔を作った。
「……違いますよ。」
「えっ？なら、どうやって？」
「成り行きは話が済んでから、で、どうです？」
「……。」
…こう言えば、どうかな。
そう大した話じゃあないが、気になるだろうしな。食いつく？
私はじぃっと高宮さんを見る。
彼女は何も言わずに考え込んでいるようだった。
――しばらくの、沈黙が流れる。
彼女の頭の中では、今、計算機がフル稼働中だろう。
考えてもらう時間も必要だから、私も黙る。
その間、特にやることの無い私は、ぼんやりと窓の外の道行く人々を観察していた。
「……あの、」

高宮さんはしばらく唸っていたが
やがてパッと顔をあげて、ハッキリと言った。

「…分かったわ。お友達になりましょう？本城さん。」

その返事に、私はニヤリと笑った。
……ミッション、コンプリート。貴女ならそう言うと思ったよ。

「……ありがとうございます。私のことは、『ナツ』で結構。私も、貴女を麗奈さんと呼びますから。」
「ええ、那津。貴女、優しいのね。」

高宮さんは感動めいた口調でそう言う、が、

「そうでもないよ。私、性格悪いし。彼らに紹介した後は、知らないからね。」

突然口調を変えた私に、驚いた様子を見せた。
――友人となったからには、とりあえず、地で接しないとな。後々面倒だから。

「これからは、一応、素でいくから。よろしく、麗奈さん。」

手を差し出す、と、麗奈さんもクスッと笑って私の手をとった。

――

「よろしく、那津。」

かくして、高宮麗奈さんがパーティに加わることとなった。
ジョブは、『イケメンたちの女友達かつ私の友達』。
……この人も、なんかひとクセありそうだがな。

まあ、いいや。
明日、アイツらに紹介することにしよう。

美女、来襲（2）（後書き）

女子キャラ登場。でもやっぱり普通じゃないｗｗ

麗奈の憂鬱（1）

「――と、いうわけで、私の友達の、高宮麗奈さん。1コ先輩だよ。」
「よ、よろしくお願いします、皆さん！！」
――翌日。
私はいつもの理学部カフェに4人を呼びだし、麗奈さんを紹介した。
ヤツらは私のいきなりの行動に、ビックリしていたようだったが、
「うわーっ美人！ね、麗奈ちゃんって、呼んでいい？」
水谷が最初に食いついてくれた。
―よし、ナイスだ水谷。君はこういう時、ホントに役に立つ。
「…あの、ナツさん。」
水谷が盛り上がっている横で、乾に耳打ちされる。
「なに？」
私も、小声で返した。
「あの人、本当に貴女のお友達ですか？」
「うん。昨日、なった。」
「…それは、貴女の目的のために？」

「当たり前じゃん。でも悪い人じゃないみたいだから、大丈夫だって。だいたい、君らがいつまで経っても女友達を作らないのが、悪い。」

「それは、そうですが……。」

「反対なワケ？」

「……俺は、女性が苦手なものですから。」

「ああ、そう。じゃ、私もいらないじゃないの？それなら。」

「ナツさんは別です。離すつもりもありませんし。」

？どういうこった。意味分からん。

時々、コイツもよく分からん発言するよな。

頭の上でハテナマークを飛ばし、また口を開こうとするが、

「なに、話してんの。」

国崎が上にのしかかってきたので、中断された。

のしっと体重がかけられていて、身動きが取れない。…ヤツは、完全に私に体をあずけて抱きついていた。

…お、重い。

「……別に、何も話してませんって。」

「嘘つけ。コソコソとウザいんだよ、お前ら。」

乾はあきれたように肩をすくめたが、国崎は、ギロリと彼を睨みつけた。

…心狭いな、国崎。そして抱きついて来るのに何の意味が。

――すると、私は麗奈さんがこっちを見ていることに気がついた。
水谷との会話はそっちのけで、私の方を、なんか睨んでる？ような……

……って、この体勢ーー！！
そういや、麗奈さんって、国崎が好きなんだった！
ヤバいっ！余計な内紛まで起こしたくないよ、私！

「くっ、国崎ぃ！マジ何でもないから、離せっ！！」

瞬時に事情を察した私は、腕を振り上げて、慌てて国崎を引きはがす。

―は、危なかった。
…ったく、こいつはスキンシップが過剰すぎて、困る。誤解を生む原因じゃんか。
そんなに私って、猫っぽいだろうか？

―疑問は残ったが、まあ、それはさておき。

「…とにかく、麗奈さんは私の友達だから。君らも仲良くしてやって。」

つーか、しろ。
４人はその発言の指す意味が分かっているので、苦笑した。

そして、

「じゃあ、よろしく。」
「初めまして、乾といいます。」

「ねぇーっ、また皆で居酒屋行こうぜー！」
「…どうも。」

各々挨拶をした。

麗奈さんも顔を赤くしながらも、彼らと笑いながら話していた。嬉しそうな横顔が、見える。

…うん、これでこの男どもも、私に飽きてくれるといいなあ。
自由になる日も近いか？とか思っていると、

「おい、」

背後から、国崎に話しかけられた。

「なによ？」

無視する理由も特に無いので答える。

「…あの女、お前の計画とやらに、乗ったのか？」
「うん、一応話したし。」
「…どこにメリットがあるんだよ、あの女に。」

あるんだってば。君に近付けるという、ね。

「あの女、じゃなくて、麗奈さん。ちゃんと呼んであげなよ。」
「……俺は別に、仲良くするつもりは無いし。」
「冷たいな。君、麗奈さんに1度、会ってるのに。覚えてないの？」
「…は、俺が？いつ？」
「本人に聞いてみれば？」

そう言うと、私は走って麗奈さんたちの所へ戻った。

――麗奈さんがいるんだから、あまり、国崎に近寄ってはいけない。

私はあくまでも、彼女を応援する立場だ。

だから。

…ちょっと避けとこう、あいつ。

――――

――――

――

そんなこんなで、麗奈さんが『オトモダチ』になってから、数日が過ぎた。

麗奈さんも、だいぶイケメンたちに慣れたようで、楽しそうに談笑している。

――そして、私も笑いが止まらない。

何故なら。

あれだけうざったく群れていた女子軍が、半数以下に激減していたのだ。

…何でも、麗奈さんは前々から美人で有名だったらしい。

敵わないとみた、中の上クラスの女子は、離脱したか。

アイドルの追っかけのようにキャーキャー言ってるヤツらが大半だったみたいだ。

おかげで私などは、以前と同じく、陰の薄い存在と認識された。

あるいは、『麗奈さんと仲良くなるためにイケメンたちに利用された女』と勝手に妄想してくれたのかもしれない。

――いずれにしろ、愉快なことこの上ない。ここまで上手く転がってくれるとは。

麗奈さんには、大感謝かな。

――

――

しかし、問題は、あった。

「…ねぇ、那津。明日はどんな服を着たらいいかしら？」

この恋する暴走乙女、高宮麗奈さん本人である。

日が経つにつれ、だんだんとなれなれしくなった彼女は、今では私に引っ付いて、レンアイ関係の話を振ってくるようになった。

――正直、もはやあの４人の男前よりも厄介かもしれない。この人。

はあ……なんて誤算…。……しかも、彼女。まだ本性を出してないっぽいしな。

ま、どうでもいいけど。

私は呆れた顔をして、振りかえった。

「…だから、私は知らないって言ってるじゃん。自分でなんとかし

なって。」

単純に、しつこく絡んでくるのがウザイんだけど。君。

「えーっ。曲りなりにも友達なんだから、いいでしょっ！」

「…ほんと、不本意だけど、一応、そういう設定だね。」

「そうよ。だから買い物付き合いなさい！！」

…何故『だから』なのか分からんが、強制かい。俺様は国崎だけで十分だってのに。

「え、嫌「車呼んだから、行くわよ！！」

しかも車て。

……麗奈さんは、見た目だけでなく、本当にお金持ちだと聞いた。確か父親が、某有名会社を経営してるとか、何とか……。

……。ワーオ、リアルセ・レ・ブ。

庶民には縁が遠すぎてワケ分かんないや。

「…那津っ！乗って乗って！」

私が呆けていると、目の前に……ベンツじゃない？コレ。が、停まった。しかも運転手付き。

…うわ、これは…違った意味で目立つわ。頼むから車の中で手招きしないくれ。

私はイキナリ逃げ場を失い、逃げるようにしてピカピカのベンツの中に入った。同時に、車が発進する。

「…ああ、もう。どこ行くんだよ……。」

私は去りゆく景色を横目にげんなりとして、フカフカの座席に座った。

「んーと、私がよく行く服屋に。……那津も少しはオシャレすれば？」

「私、そういうの興味無いし、元が酷いから、着飾ったって無駄。」

「…なんでそんなにネガティブなのよ……。」

麗奈さんは呆れたように苦笑した。

…ネガティブなのは、私のデフォルトですが、何か？

―――

――

車はいつの間にやら見知らぬ風景の中を走っていた。

しかし、流石高級車と言うべきか、走っている音も街の喧騒も聞こえない。

――故に、沈黙が痛い。

…さっきから麗奈さん、黙ったまんまなんだけど。居心地悪いなー。

私も同じく黙ったまま、座席の上で縮こまっていた。

すると

「……ねぇ、那津。」

突然、隣から声がした。

「うは、はあいっ？」

…ぐ、いきなり話しかけるから、変な返事しちゃったじゃん。

何だ、と麗奈さんの方を振り向く。

「…国崎君って、どんな子がタイプなのかな。」

だが、私の方は向かず、ポツリと零す麗奈さん。声色が深刻そのものだ。

私はビックリして、彼女の顔を覗き込んだ。

「…え？」

「……貴女のおかげで国崎君の傍に接近することができたし、お話もするようになったんだけど…何て言うか、彼の視界に入ってないの。」

「……。」

「……なにが、いけないのかな。服？髪型？スタイル？性格？顔は…さすがに変えれないけど、他の所だったら直すのに。」

彼女は、すごく辛そうな表情で、悩んでいるように見えた。今にも、泣きそうだ。

私は無表情で、女を見つめる。

…恋は盲目、か。

昔の人も、よく言ったもんだな。案外本当のことかもしれない。
私には理解できないが、な。

――国崎のために悪いとこ…つーか、好みで無いところを直す、なんて――
そんなの。

「…バカじゃないの。」
「へ？」
「国崎程度の男に、麗奈さんが合わせる必要なんて無い。だいたい気に入られようとするとか、多分アイツは嫌いだと思うよ。…いい？麗奈さん。貴女は綺麗だよ。国崎の好みはともかくとして、世間一般に見て、美人。だから、もっと自信を持ちなよ。そのまま自然体の自分でアイツを落とすくらいの根性がないと。」

正面を向いたまま、一気に喋りまくる。
人の気持ちなんて、分からないけど、とりあえず私が正しいと思ったことを。

…そもそも国崎ってエスパーだから、どんなに取り繕ってもバレるのがオチだろうし。
それに。…なんか、ここまで純粋に思われている国崎が、憎らしく思えた。

超美女がこんなに悩んでるんだよ、君のことで。
それで恐ろしいことに、私に相談してきてんだよ、君のせいで。

「那津……」

パチッと、瞳を潤ませる麗奈さんと目が合った。そのまま私をじっ

と見てくる。
―む。やはり恋愛シロウトの助言なんて、蛇足だったか？
「あ…別にただ言ってみただけだから…「その通りだわ！！」」
…断りを入れようかと思ったら、遮られた。すごい勢いで。
「そうよね！偽りの自分を好いてもらっても、空しいだけよねっ！なんで気付かなかったのかしら！ありがと、那津。元気でてきたわ！！私、国崎君に猛アタックかけて、絶対落としてみせる！！」
うわあ。イキナリ元気になりよった、この人。スイッチ切り替え早ぇ～。
「…そう、頑張れ。」
私は若干引き気味に、一気に血色が戻り、拳を突き出している麗奈さんに向かって呟いた。
――単純って、トクだな。ある種、うらやましい。
「……ね、那津。」
「…今度は、何スか。」
「私。どうして那津があの４人に気に入られたか、ずっと不思議だったの。もっと可愛い子もいるのにって。」
…突然、何だ。嫌みか。
「…でも、今ちょっと分かったわ。貴女はこだわらないのよ。ルックスにも、性格にも。だから話してて、疲れないの。」

「……それ、気にすればよかった？」

初耳だ、そんなの。

「いいえ。そこが貴女の長所よ。誇っていいわ。私も、那津のこと好きになったもの。」

「…あの、百合とかに興味は無「そういう意味じゃない！！」

車内は、笑い声に包まれた。麗奈さんは爆笑、私は苦笑。

……知らなかったが、私はイケメンとか、美女とかに好かれる性格らしい？…なんじゃ、そりゃ。

――ま、とにかく麗奈さんが元気になって良かったと思う。

――

――

その後。

車は巨大百貨店に停まり、私は麗奈さんと一緒に買い物をした。

――と、言っても買ったのは彼女だけだ。

…自分が気に入ったものを片っぱしから豪快に買いまくる麗奈さんを見て、スゴいと思いましたマル

私にも買ってあげると言われたが、丁重にお断りしておいた。買われても、金を返せる自信がない。

――いつも私が買っている服とは、値段のケタが違うだろうから。

…これが庶民と金持ちの差ぁだよ、諸君。

――

店に着いて正味3時間程過ぎたところで麗奈さんは満足したらしく、車を呼んでくれた。
や、やっと解放される……と私はほっと息をつく。

数分後、行きと同じく、黒塗りのベンツが私たちを出迎えた。
麗奈さんと後部座席に、座る。
荷物を積むのに時間がかかっているらしく、私たちはそのまま少し待った。
…しかし麗奈さん、君、どんだけ買ったんだ……

「…あー楽しかった！ねぇ、那津。本当に何も買わなくて良かったの？」
「あいにく、金欠なんで。」

1着買ったら、生活費すら、吹っ飛ぶからな。

「そ？でも、今日付き合ってくれたお礼に、ハイこれ！」

そう言って、彼女は真四角の箱を取り出した。手のひらに乗るサイズだ。

「…なに、これ。」
「開けてみてよ！」

言われるまま、私は箱を開けた。

「あ…」

―中身は、薄いブルーの液体が入った、香水だった。
ガラス瓶に入っていて、高そう。なんか有名なブランドのロゴも入っているような……。

…いつ、買ってたんだろう。

「…え、これ香水？もらえないよ、こんなん。」
「いいのっ！お礼なんだから、受け取りなさい！」

返そうとしたら、ズイッと突っ返され、持たされた。
―ったく、強引な。
私はしぶしぶソレを自分の手の中に収めた。

「その香水、シトラスミントの香りだって。那津にぴったりと思ったから、選んでみたの！遠慮なく使ってね！」

…と、言ってもな……香水なんて、初めてだぞ…？

―まあ、もらえるなら、もらっておくけどさ。
いつか使うとしよう。

「…うん、ありがと。」
「どういたしまして。でも、いいのよ。こっちがお礼を言いたいくらいなんだから。」

麗奈さんは不敵に笑った。窓ガラスに自信に満ちた、美しい顔が映

る。

「私、那津の言うとおり、頑張ってみるわ。だから、貴女も応援してくれるかしら？」

ずいっと、顔を近づけられ、両手を握られた。

…近い。そして、なんかコワイ。

「と、言われても…恋のキューピッドなんか出来ないけど。」

私はちょっと後ろに下がった。

威圧が。えも言われぬ圧力がかかってますよ、麗奈お嬢様。

「いいの、見守ってくれるだけで。後は自分でなんとかするから。」

ね、お願い。と綺麗にウインクされてしまった。

…う、女の私でも結構クルな、その技。

「……。ま、国崎とはしばらく会わないことにするから。あとは女子を避けながら頑張って。」

「そう！良かった！」

最終的に私が承諾するカタチで話がまとまると、麗奈さんは再び綺麗に笑い、窓の外を眺め始めた。

……。私は横に座っている女を無言で見つめた。

行きとは違って、生気に満ちあふれている麗奈さん。

…流石の国崎も、この本気モードの麗奈さんには、コロッと落ちちゃうんじゃないの？

――あ、でも、そうなったら好都合か。
国崎と麗奈さんがくっつけば、私は……
――いつか来るかもしれないその想像を、少し先延ばししたいような、寂しい気持ちになったのは、気のせいだろうか。
答えは出なかった。
……まだ。

――
――

キキッ！

「さ、着いたわよ。貴女の家、ここでしょう？」

…何故か、私の家にピンポイントで停まった、ベンツ。

「…何で、家、知ってんの？」
「私は社長令嬢だもの。情報入手なんて、たやすいことよ。」

…権力行使の仕方、間違ってないか？

「……まあ、送ってくれて、どうもありがとう。」
「ええ。また明日。」

手を振る麗奈さん＋ベンツを見送り、私は我が家に入った。

――ああ、なんかやたら疲れた……
女子相手にここまで振りまわされたのは、いつぶりだろうか…

『また明日。』
そう、明日からも、これは続く。
しかも、当分国崎に近寄らないようにしなければならないし。神経使うなあ、ホント。

――は、勘弁してくれよ。もう。
玄関にたどり着いた私は、そのまま膝から崩れ落ちてしまった。

麗奈の憂鬱（2）（後書き）

お嬢様ｖｓ毒舌女。しかし主人公には戦う気はなさそうです……

ホント、どうしようこの子。

国崎、激怒（1）

――カラ、カラン。

炭酸がグラスの中で弾け、泡をだす。
ぎっしり詰まった氷をかき交ぜながら、私はおもむろにグラスを傾け、黒いジュースを飲んだ。
―うん、コーラって、たまに飲むと美味しいよね。

「ちょっと、ナツちゃん、聞いてる？」
「…ん？あー、聞いてる聞いてる。」

私はグラスを机に置き、彼らの方に向きかえった。

――

麗奈さんの猛アタック宣言から、数日が経過した。
彼女は有言実行派らしい。あの日から、誰が見ても分かるくらいの好き好きオーラを発し、国崎に迫っている。

「…ナツちゃん、麗奈さんスゴいね…。」

斎藤は困ったように苦笑する。

「…だね。でも、元々彼女、国崎狙いだったから。」
「ちぇ、まぁた聖悟かよー。俺、麗奈ちゃん結構タイプだったのになあ。」
ストローを口に入れたまま、水谷が愚痴る。
「…でも、当の聖悟は、かなりイラついてるみたいですけどね……。」
乾は遠い目をして、アイスコーヒーを飲んでいた。
――私と乾、斎藤、水谷は今、おなじみの大型ファミリーレストランでぐだぐだと雑談している。
『国崎君と2人きりになりたい』という、麗奈さんの希望だ。
国崎は、もちろん置いて来た。
「…ま、いいんじゃない？美男美女で、お似合いでしょ。」
私は今度はメロンソーダを飲んだ。
シュワシュワして美味しいな～。夏はやっぱ炭酸に限る。
「…うーん、ビジュアル的にはいいけど、性格はどうだろう？」
「あの人、なかなか面白いよ。恋する暴走乙女だから。」
「…ブッ、暴走って…！」
「そんな激しい人なんですか？そうは見えませんが。」
「実はそうなんだよ。特に国崎の話になると、さ。」
笑いあう私と3人の男たち。

テーブル席に3人のイケメン＋私という構図だが、こいつらと付き合い始めて、もう1ヵ月弱、経つ。突き刺さる視線にも、慣れてきた。

…慣れって、怖いもんだな。

「―あ、そうだ。君ら、麗奈さんとどう？ちゃんと仲良くしてる？」

ぱっと顔を上げる。

せっかく集まったことだし、ちょっと本音を聞いてみたくなった。

うまく付き合えているんだろうか。…上手くいっていてほしいんだが。

―だが、

「…うーん、いい子なんだけど、ね。」

「俺は別に普通だけど、なんつーか……なあ？」

「前も言いましたけど、俺は苦手です。」

…なんだなんだ。

3人揃って茶を濁しやがって。

「…うまく、いってない感じ？」

聞かなきゃ良かったかな。

見た限りじゃあ、普通に仲よさそうだったんだが。

「いや、やっぱナツちゃんといるみたいには、いかないかな。」

「…私といるみたいにって？」

「本音では付き合えないかもって、言ってんの。その点、ナッちゃんは貴重だよなー。」

水谷に頭を掴まれ、ぐしゃぐしゃと撫でられる。
…痛いっての。
――しかし…ううん、残念だ。
いい人なんだけど、こいつらの評価がコレだと、友達としてやっていくには難しそう。
「…ねぇ、斎藤。女の子の方は、どうなってんの？」
私が選んだ子でダメなら、私は君らにまかせるしか、ないではないか。
しかし。
「あぁ、アレ？どうも無理そう。」
斎藤はカフェオレを飲みながら、サラリとそう言った。
…ｗｈａｔ？
「おい、ちょっと。無理ってどういうことだよ。」
「そのままだよ。女のコたちって、俺たちが選ぶと余計な勘違いするでしょ。
結構色々あたってみたんだけど、君みたいな子は相当レアだから。」
ちっ。それならそうと、さっさと言えよ。やっぱそうなったか。
「…私みたいって…口が悪くて、地味で、男に興味がない？」
「誰も、そこまで言ってないでしょう。自分を卑下するのは止めた方がいいですよ。」

恨めしげに尋ねると、乾にピシャリと反論される。
そして、私と目を合わせてきて、

「ナツさんは口は悪いけど、可愛らしい女性ですから。」

ニッコリと胡散臭い笑顔を浮かべて、断言された。

――けっ。可愛らしい、とか。
私相手に、リップサービスはムカツクだけだから、ヤメロって。
しかも口は悪いってトコは肯定するのか。わざと言ってやがるな？
コイツ。

「それは、どうもありがとー。」

棒読みでヒラヒラと手を振って見せた。

「褒めましたのに。」

クスクスと笑いを零す彼。……はー、ウザ。

「…とにかく、そういうことなら、麗奈さんに頑張ってもらわないとね。あの人のおかげで、女子戦力はガタ落ちなんだから。」

アレはかなり助かったから、今後も活用したい手である。

「…へぇ。それで、聖悟とくっつけばいいって？」
「そ。だから、ここ数日は彼女に協力して、国崎には近づかないようにしてるんじゃないか。」

―そう。私は麗奈さんと約束してから、1度も国崎には会わずに過ごしてきた。
約束は、守る方だからな。基本。

「友達が無理なら、本物の彼女になればいいんだと思って、ね。」

私は再度グラスを傾けながら、ぼやいた。

―麗奈さん。
自己中心的で悪いが、私のためにも、どうか1つよろしく頼む。頑張ってくれ。

「ふーん。」

興味なさそうだな、斎藤。なら話振るなよ。

「…でも、ナツさん、それはちょっとマズいかもしれませんね。」
「は?何が?」
「多分、今に酷い目にあうぞ。聖悟から。」

突然、彼らが深刻な顔を作った。
……国崎から?酷い目?

「…なんで?」

マジ不明。

「…ナツちゃんって、自分には鈍感なんだね、他人には敏感なのに。」

斎藤が苦笑しながらそう言う。

―だから、なにが？

え、もしかして私、知らない内に地雷踏んでる？

私は考え込んだ、が、どう思い返してみても、問題行動は特になさ

…そう。

？全然分かんない。

「……で、でもいい機会だろ？国崎の猫離れには。」

「……は？猫？」

3人の疑問符はキレイに揃った。

「…国崎がこないだ、言ってたんだよ。私は猫みたいだって。」

人間になりきれていない所が、悲しいが。

「だから、いい加減現実を見て、新しい恋でもしてもらわないとさ。」

フンッと鼻を鳴らした。

…別に親切心からの行動じゃ、ないが、国崎にとっても悪い話じゃないハズ。

これの、どこが悪いっての？

―すると、これ見よがしに、男性陣からため息を吐かれた。

「ナツちゃん…現実をみなきゃいけないのは、君の方かも……。」

「これは、聖悟も苦労するはずですね……。」

「そんなこと言う聖悟も聖悟だけどね……」

だ　か　ら　！

さっきから何が言いたいんだよ！何のことだか、さっぱりなんだってば！なんか馬鹿にされてるみたいで、腹立つっ！

うー、と唸っていると、今度は水谷が、まじまじと私を覗きこんできた。

…何だ、水谷。アップで近付いて来んな。

慣れたとはいえ、こいつら全員顔が整い過ぎてる故、急な接近は心臓に悪い。

「…うーん、猫か。でも、言えてるかもなあ。」

「っわ!?」

水谷は目を少し細めたかと思うと、

突然私を後ろから抱き締めた。そして髪を撫でているらしい。

「ボサボサ頭に見えるけど、結構猫っ毛だしさあ。

なんか抱いてると温かいとか?でもナッちゃん、痩せてるからそれはないか。もう少し太ったら?」

ゴチャゴチャ失礼なことを言う声が、頭上から聞こえる。

…オイ、水谷。私が猫なのは分かったから、離せ。

あと、腰回りを触んな。セクハラだっつの。

「……っだーもう!離ーー」

バコォンッ！！！

すると、突然。

私が催促するのと同時に、なんかもの凄い音が聞こえた。近くで。

…は？今、何が起こった……？

国崎、激怒（2）

いきなりの出来事に目をパチパチと瞬かせる。目の前を見ると、水谷が気絶していた。

…えっと、原因は……

「…缶コーヒー？」

しかもヘコんでいた。スチール缶なのに。

缶はコロコロと足元に転がってきた。

…どうやらコレが、思いっきり水谷の後頭部にぶち当たったみたいだ。

若干、彼の頭が赤くなっている。

…それにしても、すごいコントロールだな。水谷には悪いが、感心するわ。

私は投げた相手を見ようと、視線を後方へスライドさせ――――――すぐ戻した。

……ヤバイ。直視できない。

何アレ、人間？ターミ●ーターじゃないのか？私、まだ殺されたくないんだけどっ！

…いや待て、見間違いかもしれない。つか、そうであってほしい！

冷や汗をかきながら身動きひとつできない私に構わず、そいつは接近した。
そして、私の肩を掴んで強引に顔を向けさせた。…自分の方へと。
そこで私が見たのは。
――鬼のような形相の、国崎聖悟様。

…やはりさっき、ちらと拝見したお方は本物だったらしい。
今まで見たことがないくらい怒ってらっしゃる。瞳が炎で燃えあがってるような気さえ、します。

……。

――正直、命の危険を感じた。

私は、責めるように私を睨み続ける男に恐怖する。

「…あ。…えと……国崎…」

うわ、怖すぎてなんかかすれたような声しか出ない。どんだけ怯えてんの、私。

「――…宏樹、圭。話は後で聞くから。あと信二が起きたら言っといて、殺してやるって。」

国崎様は、私から一瞬視線をはずすと、2人に向かって恐ろしく低い声を出した。

…まるで地獄の底から響くような。

背筋が、ぞくっとした。

―っ！

なんか水谷が死刑宣告されているが、もう、どうでもよし！！今すぐこの犯罪者みたいなオーラを出す男から、逃れたいっ！！

…しかし、天への願いも空しく、

「…那津。」

っい、いやぁ！お呼びがかかったぁ！！

―もう、私は俯くしかできない。体もガクブルだ。

そこらのヤクザ者よりはるかに恐怖感を与えてくれる国崎は、一体、何者なんだろう。

つか私、何かしたかっ！？

「……来い。」

腕を引かれて、立たされる。

…何だか分からんが、ここは従うほかあるまい。私は手を引っ張られながら、歩いた。

…引かれながら、斎藤と乾が後ろで

「頑張れ」とか「生きて帰って来い」とか言ってるのが聞こえる。

わ、私、ホントに生還できるのかな……？

明日の日の目は見れるのだろうかっ！？

―――
――

国崎に連れられ、彼の車に押し込まれた。

――誘拐犯、リターンズ。

…いや、今度のは、シャレになんないな。ホントに誘拐かもしれない。

無言で車を発進させ、結構なスピードで国道を飛ばす国崎。

当然のごとく顔を見ることはできなかったが、かなり怒っている雰囲気だ。

私は助手席に縮こまって座り、ずっと自分の手を見つめていた。

―ちょっとやそっとのことでは驚かない私だが、今回はマジで危機感を覚える。

この私が、かよわい女子のように震えてることしかできないとか、前代未聞だぞ。

…こいつ、なんでこんなに怒ってるんだろう？

―――
――

どれだけ経ったのか分からないがとりあえず、車が、止まった。

どこかに着いたらしいが、私は硬直したまま前すら見ることができ

ず動けない。

「降りろ。」

私は横からの彼の声に体をビクッとさせ、震える手で助手席のドアを開けた。

な、なに、ここ。どこだ…？

恐る恐る外に出ると、暗い地下駐車場だった。…見た感じ、マンションの駐車場。

…と、いうことは……

「俺の家、行くぞ。」

ですよねーーっ！やっぱ君の家かいっ！

…ヤベェ。監禁されたら……とか。想像したら、体が勝手に震えてきた。

「早く、来い。」

しかし選択肢は無い。またも手を引かれ、歩かされる。

…国崎さん、アナタ、さっきから単語しか言ってませんね。それがまた、私の心臓を速めるんですけど。

――エレベーターに乗り、ついに国崎の家の前にたどり着いた。5階の、奥から2番目の部屋。黒い扉が私たちを出迎える。

――…魔王の城だ……

…ここに来るにはまだレベル足りないんじゃない？出直してきたいなー。

そんなことを考えてると、国崎は無言で鍵を開け、

「っ！？」

私を中に押し込んだ。

…かなりの力だ。玄関ですっ転び、私は鼻をしたたか打ちつけてしまった。

…っぐう。ＤＶか！？めっちゃ鼻痛い。

「っちょ、国崎！何すんの！！」

怒りからか、ようやく声のボリュームが上がってきた。私は男を振り返り、どなりつける。

「……何、すんのって？」

国崎は後ろ手にガチャリと鍵をかけてから、こちらに近づいてきた。ゆらりとした動作が、また不気味だ。

…こ、声のトーンがまだ低いよぉっ……！泣くよ？いくら私でも、泣くからね？コレ。

「それは、俺のセリフなんだけど。」

急速に距離を縮める国崎に、私は身の危険を感じ、足を滑らせながらもリビングへ走った。

国崎の部屋は存外に広く感じられたが、今の私に余計な装飾を気にしている暇はない。

あちこちと逃げ惑ったが、男と女の体格差からか、すぐに追い詰められ、そして。

「う、わ！？」

ついに、ソファに押し倒されてしまった。

私の体重で、ソファが若干沈む。その上に国崎が覆いかぶさった。
目の前に、彼が迫る。

「……っ！！」

―…ボ、ボコられる！？
私はぎゅっと目を閉じ、体を強張らせて衝撃に耐える姿勢を取った。

……。

しかし、何も起こらない。部屋の中がいきなり静かになったような気がした。

「…？」

私は恐る恐る目を開けてみた。国崎の顔が完全に視界に入る。
だが。

「…え？」

思わず、目を丸くする。
彼は、…何故か、すごく苦しそうな顔をしていた。
真っ暗な瞳には、怒りはもちろんだが、悲しみ、憎しみなどその他のものも映しているように見える。

「…君……、どうしたの？」

無意識に尋ねてしまう。国崎は明らかに様子がおかしかった。
押し倒されたままなので、互いの距離は異様に近く、吐息が顔にかかるほどだ。
しかし私は、この状況より彼の表情の方が気になった。

「……那津。」

長らく黙っていた国崎が、口を開き、私の名をささやく。
そして、吐きだすように言った。

「お前、やっぱムカつく。」

「……え、……むぐっ」

言うが早いか、大きな影が襲いかかり、私は口を塞がれた。
……国崎の、唇で。

「――――っ、！」

感じたことのない感触に、大いに戸惑う。

…何だこれ。何してんの、コイツ。

…い、息ができな……

酸素の供給不足か、だんだん頭がぼんやりしてくる。

「～んんっ、む！」

私はヤツを押しのけようと胸板を力いっぱい押すが、ビクともしない。それどころか、いっそう激しく私の唇を奪い、貪る。

――もう、わけが分からない。苦しい。

酸素不足だけじゃない、この変な感覚に、私は完全に力が抜けてしまった。

国崎、激怒（3）

「…っはぁ」

―やっと、ソレから解放される、と同時に私は室内の空気を思いっきり吸い込んだ。
全力疾走した後のように、息が切れる。どれだけの時間、唇を合わせていたのだろう。

……ん？唇…を、合わ……せて……？

――！！

ボンッと、突如顔が赤く染まった。

い……今、コイツ、私に……キ、キスした、のか？
…うわ、キス、とか自分の口から出るとは思いもよらなんだ！なんかやたら恥ずかしいんですけどっ！

「那津、顔真っ赤。」

私が人生最高に羞恥を感じている時に、国崎は鼻で笑いやがる。
人にムリヤリキスしといて、笑うとか。…テメェ。歯ぁくいしばれ。

「うらぁっ！！」

掛け声と同時に、私は自由になっている唯一の部位、足でヤツの鳩尾を思い切り蹴った。

「〜〜ぐっ！？」

不意をついた攻撃に国崎は身動きできず、腹にクリーンヒットした。よほど痛かったのか、腹を押さえて、悶絶している。

…は。股間じゃないだけ、マシに思え阿呆が。

私はその間に素早くソファから起き上がり、ヤツと距離をとった。

「…はっ、おま……このタイミングで蹴るか？普通。」

ソファに寝転んで、苦しそうに息を吐きながら、私を見る国崎。

「じゃ、私は普通じゃないってコトだろ。」

けっと悪態をつく。

私から見たら、君も十分普通じゃないがな。

「……そうだな。頭突きはするわ、腹は蹴りあげるわ……お前みたいな女、他にいるわけねぇよ。」

「褒め言葉と受け取っておこう。」

―いつの間にか、私は恐怖から脱出していた。国崎も、もういつもの調子に戻っている。

私は腕を組んだまま、国崎を見下した。

「…そんで国崎。どうしてそんなに怒ってるわけ？」
「…分かんない？」
分からねぇから、聞いてんだろ。君の気持ちはいつも分からない。
「…さあ、分からん。多分、麗奈さんのこととは思うんだけど。」
おそらく、彼女のアピールが余程うっとおしかったんだろう。それで私に八つ当たりしてんだと、予想した。
「……それもあるけど…、なに、那津。ホントに分かんないの？」
ヤツはジロリと私を見返した。…何だ、もったいぶりやがって。
「…君がなんか苦しんでるのは分かったけど、その内容は知らん。だから、聞いてるんじゃないか。」
すると、国崎は額に手をあて、はぁーっとため息を吐いた。
…なに、その『ダメだこりゃ』みたいなしぐさは。
「……ここまで鈍感とは、なあ…。」
「んなっ、失礼な！君が意味不明すぎるだけだろ！」
これでも結構『鋭い』って、言われてきてんだけど。
腹立つな。
「……まあ、いい。なら教えてやるよ。」
国崎は、1歩私に近づいた。
けど

「あ、ストップ。動くな。話ならここで聞くから。」

私は手のひらを突き出し、制止を呼び掛けた。

…また、さっきみたいなのされたら、今度こそ私の心臓は破裂する。

じりじりと後退する私を見て、国崎は吹き出した。

「……プッ、そんな警戒すんなよ。」

「するわっ！私、キッ、キス、初めてだったんだぞ！」

―うわ。キスとか、口に出すのも恥ずい。また、顔が火照る。

「へぇ～。それは、結構。」

なぁにが結構、だ。ニヤニヤしやがって。

国崎はクスクス笑いながら、ソファに座り、私を手招きする。

「ほら那津、何もしないから、おいで。」

「うさん臭いから、ヤダ。床でいいですー。」

対する私はつーんと顔を背けて、フローリングに三角座りした。

「…信用ねーな、俺。」

男はまたニヤリと笑って、私の傍に歩み寄る。

体をじっと硬くしてみたものの、ヤツは両腕でいともたやすく私を持ち上げ…結局ソファに一緒に座ることになった。

…っち、この細マッチョ。この身体のどこにそんな筋肉があんだよ。

「…どうせ強制なら、聞くなよ。」

ぶう、と不機嫌にふくれて愚痴った。

「床は冷たいだろーが。俺の優しさだよ。」

―どこが。せめてもの抵抗に、人1人分間を空けて座ってやる。

―国崎はしばらく苦笑していたが、
やがて真面目な表情を作ると私を正面から見つめた。

「…ね、那津。俺今めっちゃ怒ってんの。」

目が、笑ってない。

「それは、分かったから。…言ってよ。」

国崎は私の方に体ごと向け、ジロリと睨んだ。

「那津にけしかけられたあの女の相手すんの、ウザかった。毎日毎日、よく懲りないよな、アイツ。すげー疲れた。」

「……それは、素直に私のせいだわ。謝る。」

…けしかけたワケじゃないんだが、結果的にはそうなるかな。
どうやらコイツは、麗奈さんがタイプじゃなかったみたいだ。…この、贅沢者が。

「…あと、那津が露骨に俺を避け出したのも。
どうせ、俺とあの女をくっつけようとか、思ってたんだろ。俺の意

見も聞かずにさあ…。」
「……。」

図星。当たり過ぎててなにも言えねぇ。

…だってホントにお似合いだと思ったんだよ。麗奈さんとも約束したことだし。
でも、やっぱ、本人の意向を無視したのがいけなかったか。反省だなー。

「それに」

まだあんのか。

「俺抜きでアイツらとだけ会うとか、納得いかない。」
「……。」

……え、いや、それは私のせいじゃないだろ。…意外とナイーブな男だな。仲間ハズレが嫌、とか。

「え、最後のは関係ある？」
「大アリだし。」

へ。そうですか。

目を伏せていた私はしかし一瞬黙った彼を見上げ、おもむろに手を取った。

「…ごめん。」

国崎の手をそっと包む。

「……。」

「ごめんね、国崎。」

とりあえず誠心誠意をつくして謝る。どんな理由であれ、コイツを傷つけた私が、悪い。

それに、あんな顔されちゃ、いくらなんでも良心が痛んだ。

国崎はしばらくの間、黙って私を見ていたが、やがて肩を落とした。

「…はぁ……那津って本当に残酷だよな。」

「！」

言葉と同時に、掴んだ手をそのまま国崎に引かれ、一気に距離が縮まる。

そして、ヤツの胸に倒れこみ、ぎゅうっと抱き締められた。

――ちょっ！何もしないとか、言ったくせに！！

…とは、言えなかった。

事は私に非があるのだ。これが罰なら、甘んじて受けないと。

「…やけに、大人しいな。どうした？」

言いながら、国崎は私を抱く手に力をこめた。

「…別に……罰なら、受けようと思って。」

ぼそっと呟くと、国崎は突然バッと身体を離した。

……ものすごく驚いた顔をしている…？
どうしたというんだ。

国崎、激怒（4）

「……おいちょっと待て。お前、さっきのキスとか、今抱き締めてるのとか、罰ゲームだと思ってんのか？」

え、違うの？

「は？怒りまかせに嫌がらせしてたんじゃないの？じゃ、なんで？」

「……。」

国崎は、絶句している。

え、何、その地球外生命体を見るような目つきは。

なーんか変なこと言ったか？

「……もう、いいや。それで。」

しばらく固まっていたが、最終的にヤツはそう言った。…自分自身に言い聞かせているように。

一方、私は、首を傾げるばかりだ。

…えっと？結局、何だったんだろ。

「ちょ、国……「じゃ、これも罰だ。受けろよ。」

リアクションも取れないうちに国崎は、今度は私の首筋に唇を近付け、

——吸った。

「――!?」

チクッと痛みが走り、思わず体をそらす。

「っ今度は何だよ!!」

私は慌てて自分の首筋を押さえた。国崎が口をつけた所が、熱い。

ん、待て。……まさか、これは噂に聞く――

「キスマーク、だけど?」

「!?」

再び、私は頬を真っ赤に染めた。―またもや、人生初イベント。

……キ、キスマークって!

手鏡を覗いて確認してみると、確かに、鎖骨あたりに真っ赤な跡が見えた。

「…っ、ちょ、これ困るんだけど。」

…めちゃ目立つ。元々肌が白いものだから、くっきりと赤く跡がついている。

「だから罰だっての。隠すなよ?隠したら、またつけるから。」

何プレイだ。君の趣味に私を巻き込むなよ。

「…この、ドS。変態。」

「もっかいキスでもしてみる？」
「っい、いいです！遠慮します！」

私は慌てて否定した。
…この野郎、私が男に免疫ないからって、全部そっち方面に話をもっていくんじゃねぇ。
今日の、他の女子が見たら絶叫するぞ。……私もだが。違うイミで。

――
――

「とにかく、あの女とは絶交して来いよ。」

車の中、国崎は、私が帰る段になってそう言った。

…やー、それはムリだろ。普通に。

「……そう簡単に言うなよ。あ、そういや、君ら、今日どうやって別れたんだ？」
「ああ、俺が振った。」

――え！？

「えぇっ！？告られて、しかも振ったんかい！！」

思ったより話が進んでるじゃないか！

あまりにもびっくりして、シートベルトにブザマに引っかかった私。

…しかし、国崎は何でもないように話した。

「告白はされてないけど、それに近いこと言われたから、拒否った。別にいちいち言うことでもねえだろ。」

…いや、そうだけど。うわ～あんな美人振るなんてもったいない。やっぱり、こいつの趣味が違ったんだな。麗奈さんも可哀想に……。

「…一応、理由聞いていい？」

今後の参考に。あと、迫り来る女子たちの質問攻め対策のためにも。国崎はちらっと私を見て、また前を向いた。

「……無理だから。」

…完全な拒否だな。

「…いや、もうちょい具体的にお願いします。」

さすがにそれじゃ、彼女が不憫すぎる。

「…俺、がっついてくる女、嫌い。どんだけ美人でも引くわ。」

あ、アタックが裏目に出たか！？

「じゃ、じゃあどんなコがタイプ？」

「…好きになったヤツ。」

……これまた、なんて抽象的な。こりゃ、ジャンルは絞り辛いな。私がしかめっつらをしていると、国崎は一瞬ためてから、また口を

開いた。

「てか、…今好きなヤツ、いるし。」

「！！」

……え、マジか！初耳だ。

…ってことは麗奈さん、最初から不戦敗だったのか……

タイミングが悪かったなあ。

「え、そうなんだ。じゃ、その子と付き合えばいいじゃん。」

「それが、中々落ちないんだよ。しかもすげぇ鈍感だし。」

へぇー。国崎に落ちない女とかいるんだ。

鈍感、ね。イメージ的にはド天然で脳内お花畑な不思議ちゃんかな。

私とは全く正反対だな。ふふ。

「ふーん、まあ頑張って。」

「うん、頑張るよ。」

国崎は何がおかしいのか、笑いながら私を見送った。

…あ、なんか感じ悪いぞ、君。

―――

―――

「……うーん。」

私は家に帰り、風呂に入ったあと座イスの上であぐらをかいていた。

そして今後のことについて考える。
主に、『彼女』のことについて、だ。

……麗奈さん、残念だったな。
あれだけ意気込んで国崎に突っ込んで行ったのに、全部裏目に出るとは。なんとも悲しい話だ。

―しかしあの3人にも不評のようだし、彼女がこれからも私たちと付き合っていくのは、無理だろう。
どう説得するかなー。結構ねばりそうだよなー麗奈さんは。

憂鬱すぎる明日のことについてイメトレをしていると、フッとあることが思い浮かんだ。

――つーか、もし私がヤツとキスしたことがバレたら、殺されるんじゃない？――

私は急に悪寒を感じ、身震いした。

うわ、怖っ！ホントにありそう！あの人の情報網はすごいらしいしな……
――ったく、国崎のヤツも何で…キ、キスなんて……

……。

――っ！

い、いかん！また思い出した、あの感触！
無意識に口元にあてていた手を慌てて戻す。

…落ち着け、那津っ
あんなん、あいつにとってはただの衝動っつーか、遊びっつーか……
とにかく！そんな感じのモノだったんだっ！！
だから犬に噛まれたと思ってさっさと忘れろ！
消去だっ！ｄｅｌｅｔｅだっ！

ぐぁーとか、うぉーとか、よく分からない声を出して、悶えまくる私。…キモイ？分かってるよ、んなこと。

……ああ、こういうとき、恋愛偏差値が低いと困る。
経験をそこそこ積んだ女性なら何でもないような感じなんだろうが、いかんせん、私は恋愛の『恋』も『愛』も知らない女。
唇の皮膚接触ごときで、こんな始末だ。

「はあ……。」

私は思わず深いため息をついた。
抱きつかれるのは慣れ（？）たが、こんなことまでされるとは。
避けた結果がこれじゃあ、悪化してるじゃないか。

どうすりゃ、いいんだ。

国崎　聖悟。
……厄介だよ、君。私が今まで出会った男の中で、１番。

国崎、激怒（4）（後書き）

国崎も苦労するねえって話です。次回も長くなるかも……

なにがなんだか。（1）

「那津ぅ〜っ！！」

私がいつものように大学の門をまたぐと、いきなり正面から抱きつかれた。

…っと、危ない。倒れるところだった。

体のバランスが崩れ、たたらを踏んだが、何とかふんばり、転ぶことは無かった。そして、飛びついてきた本人、高宮麗奈を引きはがしにかかる。

「…分かった。話は聞くから、離れろ。あと、目立つからこんな所で泣かないで。」

…そう、彼女は眼を真っ赤に腫らして号泣していた。

―悪いがこんなぐしゃぐしゃな顔じゃ、美人もカタなし、だぞ。校門前で泣かれても、私が困る。

すでに好奇の視線が集まる中、私は彼女を連れ出した。

―
―

私は麗奈さんをなだめつつ、人気のない所まで移動した。

「……グス…」
「……。」
麗奈さんはまだ泣きじゃくっている。
目の腫れ方からして、昨晩からずっと泣いていたのだろう。
…なんか、可哀想だ。
――しばらくして、落ち着いてきたのか、麗奈さんは私に話し始めた。
「…那津……私、振られちゃった……。」
本当に、本当に小さな声で、ポツリと言った。
…まるで、そのことが現実であったと、自分自身で確認しているように。
「昨日……那津があの3人を連れ立って行ってくれて、国崎君と2人きりになれたから、デートの約束しようと頑張ってみたの……っでも…、ダメだった…っ！」
さらに透明な筋が彼女の頬を伝う。握っている拳も、かすかに震えている。
「…もう近付くなって…。私がウザいって……拒否、されちゃった…。」
「……そう、か……」
私はただ、相槌をうった。こんな時、何もかける言葉が見当たらな

い。
我ながら、薄情な女だな。
――声をかけ辛かったが、私は少々の沈黙の末に口を開いた。
「…ゴメン。私の助言のせい……か？」
罪悪感が少し、募る。結果的に、私の言った言葉のせいだったら、私が、悪いのだから。
しかし、麗奈さんは首を横に振った。
「……いいえ、彼が私のことを好きでなかっただけよ。…仕方ないって分かってるけど……っすごく、つらいっ…！」
またも泣きじゃくる女を前に、私は少し哀愁を感じる。
そして、思う。
――ああ、この人は、本当に国崎のことが好きなんだな。……多分、今でも。
彼を想って、こんなに泣けるんだから。
……やっぱ、主人公交代した方がよくない？この人なら、素でお姫様できるって。
私は遠い目をしながらそんな馬鹿なことを考える。そして、再度麗奈さんに視線を戻した。
――でも、このままじゃいけない。こんなんで落ちぶれてるのは、麗奈さんらしくない。
「……で、どうするの。」

「…どう、するって…？」

私が目線を合わせると、麗奈さんはきょとんとした表情を見せた。

「決まってんじゃん。君は選択しないといけないんだよ。国崎を諦めて、別の恋を捜すか、諦めずにヤツを想い続けるか。」

「…え……」

「メソメソ泣いてたって、何も変わんないでしょ。今しないといけないのは、これからについて考えること。」

私は麗奈さんの目をまっすぐ見て、言った。

―失敗したって成功したって、いつだって人は、次に進めていかなければならない。

ｍｙ持論だ。私はいつもこの考え方である。

…ネガティブなんだか、ポジティブなんだかよく分からないが。

「…え、でも…私は……「昨日、ひと晩泣いたんだろ？だったら、そろそろ切り替えないと。いつまでも立ち止まってちゃ、チャンスは掴めないから。」

うろたえる彼女を遮り、強い口調で諭す。

―ふむ。

私もおせっかいになったものだ。普段はこんな色恋沙汰、一瞬で切り捨ててやるのにな。一緒にいると情が湧くってヤツか。それとも、なんだかんだで私は彼女を応援したいのかな。

「…まだ、好きなんだろ、国崎のこと。」

私がボソリと呟くと、彼女はビクッと体を震わせ、赤面した。図星のようだ。

「私は国崎なんて忘れることをオススメするが、君は忘れることなんて出来なさそうだな。…ま、決めるのは麗奈さん自身だから、自分で決めな。」

「……。」

麗奈さんは、目を見開いて、私を見る。戸惑いの表情だ。

…情報量が多すぎて、処理出来ないか。ま、じっくり考えてくれ。

私は立ち上がり、その場を後にしようとした、が、言い忘れたことがあったのに気付き、彼女を振り返った。

「……あ、備考までに言っとくと、国崎には好きな人がいるらしい。」

私がそう付け足すと、

「！！な、なんで言ってくれなかったのっ！？誰よ！」

麗奈さんが猛進してきて、掴みかかられた。

コラ、揺らすな。

「…知らないって。私も昨日聞いたばっかだし。」

胸倉を掴んできた手を、そっと取り外す。

……この女、国崎のこととなると、ホント見境ねぇな。

「…コレを聞いてもまだ諦めらんないなら、頑張れ。一応、一途に想い続けて成功した例もあるっちゃあるらしいし。」

……漫画とか映画なら、だけどな。

コホン、と咳払いをひとつして、そうシメた。

そろそろ始業時間だ。行かないと。

「――那津っ！」

歩き出そうとしたら後ろから叫ばれたので、振り返ると、

「ありがとうっ！私、じっくり考えてみるわ！」

と、麗奈さんが私に向かって笑顔を見せた。

うん。元気が出たようでなにより。

その切り替えの速さが、麗奈さんのいいところなんだろう。

私は手をヒラヒラと振り、法学部棟に入った。

――

――

「…あれ、ナツさん。今日ツインテールなんですね。」

授業後、廊下を歩いていると、乾に出くわした。

…偶然、じゃねぇな。こいつとは学部が違うし。また待ち伏せしてやがったか。

「…ああ、うん。ま、たまにはね。」

はあ、と息をつき、私は歩きながら答える。

……まさか、キスマーク隠しとは言えまい。

「でも、似合いますよ。その髪型も。」

「そ。ありがと。」

私はバレないように、わざとそっけなくそう返す。

―そこで乾は一瞬沈黙したが、やがて意を決したように口を開いた。

「あの…ナツさん、聖悟に何かされましたか？」

「！」

私は意表を突かれて、思わず足を止めてしまった。

…わ、ヤバい。こんなん、動揺しているのがバレバレじゃないか。

案の定、乾はそれを見逃さず私の顔をじっと覗きこんできた。

「……されたんですね。ナツさん、顔赤いですよ。」

え。また赤いっ！？ちょっと私の顔面どうなってんだよ、全く。

「…ああ、ま、された……かな。」

頬で顔を隠しながら、私はゴニョゴニョと言い淀んだ。…ここまできたら、認めざるを得ないし。

「聖悟があそこまで怒るのは稀ですよ。信二もあの後、宣言通りボコボコにされてましたから。」

うわ、ここにも被害者が。…ご愁傷サマ。

「理不尽だよねー。国崎も。私にだって、怒ってんなら直接殴ってくれた方がまだマシだったのに。」

「男は女性を殴れませんよ。…それで、何されたんですか。」

「ん。…でも、国崎にどうせ聞いてんでしょ？」

「いや、聖悟も何も言いません。」

そうなんだ。

「……じゃ、私も秘密。」

その後も、乾に付きまとわれ、「えー。」だの「教えてくださいよ。」だの言われたが、すべて受け流した。

……言えるか、ボケ。んなことしたら、顔から火がでるわ。

―――

―――

「ナッちゃんっ！こっち、こっち！」

「信二ー。もっと声のボリューム下げなよ。」

「…那津。何で圭と一緒なわけ？」

予想通りというか、なんというか。ちょうど出口付近に友人×3が待ち構えていましたよ、ハイ。

……君らも暇だな。バイトとか、サークルとかないんかい。

――ま、今日はちょいと用があるからいいけどね。

「……あー、君たち。話があるんだけど、ちょっと移動しようか。」

いつも通り目立っている彼らにそう言う。やはり彼らのファンは、今日もぐるりと3人を囲んでいた。

しかも、今回は麗奈さんというディフェンダーもいないからさらに、だな。

……やはり、彼女。亡くすには惜しい人材だなぁ。

「いいよー。じゃ、俺と信二のウチ行こ！」

私の発言に、ぱっと顔を上げた斎藤がそう提案した。

「へぇ。2人一緒に住んでるんだ。」

「うん。圭と聖悟は1人だけど、ルームシェアした方が家賃安く済むし。」

…成る程ねぇ。

特に断る理由もない私は頷き、そのまま女子たちを蹴散らしながら、駐車場に走った。

なにがなんだか。（2）

――

「俺、バイクで来たから。」

水谷はそう言い、

「圭と俺は圭の車で行くね。」

斎藤もそう言ったので、

「ホラ、早く乗れ。」

必然的に私は国崎の車に乗ることに。

……なんか、昨日のこともあって、ちょっと気まずい。私は無言で、黒い車の助手席に座った。

「…隠すなって、言ったのに。」

車内、開口1番でそう言われ、ツインテールの髪を持ち上られる。

「…これくらい、勘弁しろ。あの3人に茶化されるのも、嫌だし。」

私はさっきの乾とのやりとりを思い出し、不機嫌にそう返した。

そして、ピシャリとヤツの手を振り払う。
国崎は、フッと笑みをこぼした。

「あっそ。ま、珍しいモンが見れたからよしとするか。」

…上から目線ヤメロ。
私はジロリとキーを入れる男を睨み返した。

「……へぇ、君、ツインテール萌えとか？意外に隠れオタクだね。」
「違ぇ。」

くすくすと笑いながら、国崎は左手で私の頭をくしゃっと撫でつけた。
―そのまま隣の男は昨日とは別人のように、機嫌よさそうに運転を続ける。私はその横顔を見て、ホッと胸をなでおろした。

―よかった。とりあえず、普通に戻ってる。やっぱり昨日のこいつはどっかおかしかったんだな。一安心だ。

人知れず、顔をゆるませた私。

…って……おっと、ダメだ。
私はハッと我に返った。なごんでる場合じゃない。

麗奈さんがあんなに傷ついてるってのに、私がのんきにコイツと会話してるとか。
ここは、ひと言物申しとかないとな。

「…オイ、女の敵。」

思い立った私は、ビシッと人指し指を国崎に突き付けた。

「…？急に、何。」

国崎は眉をひそめたが、私は構わず続ける。

「…麗奈さん、超泣いてたよ。あんな美人泣かすなんて、最低だよ、君。デート1回くらい、してやったらよかったのに。」

「……何かと思えば、その話か。仕方ないだろ。俺、あの人に興味ないし。」

「でもチャンスくらいは与えてやれって！」

一発で切り捨てたら可哀想だろ！

私が熱弁をふるうと、国崎は冷めた目でこちらを見た。

「お前な……俺がいちいち女の相手をしてたら、軽く2ヶ月は予定が埋まるぞ。」

「え、嘘。自分でそんなこと言っちゃうんだ、国崎は。」

「事実だ。それと、この話はもう終わり。」

そう言ったきり、国崎は何も言わずに運転に専念してしまう。

――うーん。モテる男は辛い、ってか？

こんな、何もしなくても女子が寄ってくるようなヤツ、どうやったらオトせるんだろう？？

――

――

最早見慣れたマンションの駐車場に車を停め、降りて歩く。すると、国崎は何の脈絡もなく質問してきた。

「……じゃあさ、逆に那津だったらどうすんだよ。好きでもない男に言い寄られた時は。」

私は振り返って隣を歩く男を見る。

「…さっきの話は、もう終わりじゃなかったの？」

「や、ちょっと気になったから。」

…なんとも自分勝手な。流石、国崎。

しかし、先を促すような鋭い視線を感じたので、私は答えてやった。

「……うーん、そういう奇特な男もいるにはいたけどね、デートしてやったよ、1日。」

「はあ！？」

いきなり、国崎は柄にもなく大声をあげる。…声、響いてるけど。

「うるさ。何だよ。」

「…っいや、マジで？」

「マジで。」

なんだよ。流石にデートの1回や2回はしたことあるっての。

どうしてそんなに驚いてんのさ。

ヤツはしばらく何やら考えていたようだったが、やがて視線だけ私に向けて尋ねた。

「…何で？」

何でって。

「誘われたから。」

…に、決まってるじゃん。何言ってんの。

「……。」

「…それに、１日付き合ってやって本性バラせば、大抵の男は逃げてくから。そっちの方が手っとり早いんだよ。国崎もあるでしょ。紳士キャラに騙されてた子に、『想像と違った！』って言われた経験。」

「……ああ、あるな。確かに。」

いくつか覚えがあるのか、国崎は頷いた。

「ま、そんな恋愛的なイミで私に近づくヤツなんてそうはいないけどね。君と違って、人気者じゃありませんから。」

私は腕を組んで自嘲気味に笑った。

……やっぱこう考えると、イケメンよりは普通の顔の人の方が楽な人生を送れるのかな、うん。ちょっと国崎が可哀想に思えた。

「…ま、要するにだな、私が言いたいのは、一遍麗奈さんともデートしてから…

「じゃ、頼んだらしてくれるワケ？」

は？

「何を？」

「だから、デート。」

…さらに、は？なんですけど。

「…誰が、誰と？」

「俺が、那津と。」

瞬間、しんっと辺りが静まり返った。

―そのまま数秒が経過。

私は一瞬の思考の末、国崎に向かって、言った。

「無理。」

きっぱりと。

その返事に、国崎はガクッと肩を落とした。

「…おい、デートくらいなら誰でもいいんじゃねぇのかよ。」

「別にいいけど、君はダメ。2度と言うなよ、そんな恐ろしいこと。」

「恐ろしいって……。」

…本当のことだろ。

想像してみろ、私が君とでーと、なんて。意味不明過ぎて話のネタにもなりゃしねぇ。

「そんな暇があるなら、他の女のコたちと遊びなさい。私を優先してたら、彼女なんかできないよ？」

「はあ……。」

国崎は呆れたようにため息をつき、キッと私を正面から睨みつけた。

「あのなぁ、那津。俺は、女ととっかえひっかえ遊ぶ趣味はないし、そんなサービス精神があるワケでもないの。」

「うん、それは分かってる。大変だよねー、顔がいいと。」

あ、ゴメン。口調がまるで他人事だ。

「…俺はお前と遊びたい。いいだろ？1日くらい。」

は？いやだから無理ですってば。何故にそんな食いつく？

「だーかーらー、嫌だって。行くんなら他の…

「っだー！そのループはやめろ！

俺は那津と行きたいって言ってんだよ！遠慮なく誘われとけ！」

わーまた俺様ですか。つか、なんでそんな必死になってんだよ。

どうでもいいけど、最近、レアな国崎をよく見るな。

後ろを歩く国崎の前で立ち止まって、私は軽く目をつむり、また腕を組んだ。

「…ったく。私みたいな奴誘って何が楽しいんだよ。こんな、超インドア派に爽やかお出かけは合わないだろ。」

「いや、爽やかって…、なんだその勝手なイメージ。どうしてそんなに卑屈なんだよ。」

ｎｅｇａｔｉｖｅは私の代名詞だって言ってんだろ。

ボケが。

「ハハ、君は自信に満ちあふれてるからねぇ、私とは違うわー。ごめんね、陰気で。」

私は軽ーく受け流し、知らぬ間に着いた斎藤たちの部屋（らしい）のインターホンに手をかけた、が。

「待った、流すな。返事聞くまで入れさせねぇ。」

国崎の大きな手に遮られた。

…っち、騙されなかったか。つか、いい加減うぜぇ。

私はうっとおしい国崎の手を振り払った。

「あーもう、だから返事はＮＯ！さっきも言ったじゃん。」

「～～。何でそんなに嫌がるんだよ……。」

彼は苛立ったようにガシガシと頭を掻く。

「そりゃ目立ったりとか、女子の目の敵にされたりとか、逆ナンとか。」

「そんなん、今更だろ。」

「プライベートとなると別だろ、被害が。」

「……。」

そう、ふんぞり返りながら放った台詞を聞くと、国崎はうつむいた。

「…もういいでしょ？じゃ、入ろう？」

何も言わなくなった彼を不思議に思いながら、私はまたドアノブに手をかける。

―だが、諦めないのがこの男だった。

「…じゃあ、実力行使だ。」

「え？」

―トン。

国崎がそう言うなり、私の体は反転し、後ろの壁に押しつけられる。

「っちょ、何――」

パッと顔を上げると、ヤツのバカみたいに綺麗な顔……、のアップ。

顔同士が極端に、近い。

「…今週の日曜、付き合え。」

そして、国崎は低く甘い声で私にささやいた。

…近い。近いって。離れろ。

「……嫌だ。」

恐怖はひしひしと感じる。

だが、私は勇気を持って目は逸らさず、ぼそりと拒絶の言葉を吐いた。

すると、国崎は

「じゃ、今からキスされるのと、どっちがヤダ？」

…とんでもねぇことをぬかしやがった。笑顔で。

瞬間、強張る私の頬と表情。

―！だ、だからそういう2択やめようよ！私には刺激が強すぎるって！！

「ど、どっちも嫌「どっちが、嫌だ？」

ひっ！この男、口は笑ってんのに、目だけ笑ってないぃ！危険！

「……っわ、分かった！じゃあ、1日遊ぼう！」

長らく見つめあった末、私は結局、そう言ってしまった。

……否、言わされた、かな。このアホに。

「忘れんなよ。」

悪魔（国崎）はニヤリと満足そうに笑うと、ようやく私から体を離す。

私はぐったりと力なく頷き、やっと家のインターホンを押した。

―こ、この男の相手、疲れる……やたらセクハラすんの、やめてくれないかな……

…いや、別にしてもいいけどね。私以外には。

なにがなんだか。（3）

―――
―

「どした？遅かったじゃん。」

水谷が、ドアを開けると同時にそう言い放つ。

「…いや、何でもない。」
「那津がグズッた。」

私と国崎は同時に答え、私は反射的にヤツの背中に平手打ちを1発かましといた。

「っ！」
「じゃ、おじゃまします。」

痛がる国崎は無視。そして悠々と中に入る。

―斎藤と水谷の部屋は、国崎の部屋と構造は一緒らしい。
向きは違ったが、リビングなどの配置や部屋の広さは同じだった。

「…前も思ったけど君らの部屋、広くていいね。確かに1人で住むには広すぎるかも。」

うらやましい。家賃いくらなんだろうか、ここ。

「でしょ？聖悟たちもルームシェアすりゃいいのにさ。」

斎藤がキッチンに立ってお茶の用意をしながら答えた。

「ま、あれだよ。聖悟は女の子を連れ込み…」

水谷も椅子に寄りかかって口を挟む、がセリフは、突如横から飛んできた蹴りに中断させられた。

…相当のスピード、そしてパワーだ。痛そ。

「あ、わり。足が滑ったわ。」

国崎は無表情のまま足を上げている。悪びれる様子は、ゼロだ。

「…っぐほっ、テメェ……ッ足なんかどうやったら滑るんだよ！」

「さあ？信二がいらないこと言うからだろ？」

彼は足を下げ、そのままソファに腰を下ろした。……私も手を引っ張られたので、隣に座る。

「……で、ナツちゃん。話って、何？」

斎藤は全員分お茶を入れて、配りながら本題に入るように促す。

私はふぅ、と息をついて話始めた。

「…高宮　麗奈さんが、昨日国崎に非道いことされた。」

…言うと同時に男3人は茶を噴出した。

わあ、漫画みたーい。

3人は苦しそうにせき込みながら、国崎に詰め寄る。

「っげほっ、マジか！聖悟！？」

「は！？なに聖悟、ヤッ……「違う。誤解を招く言い方すんな、那津。

ただ振っただけだっつの。」

は、んなモン知ってるよ。わざと言ってみたんだよ。さっきの仕返しに。

「へぇ。……結構早かったですね。」

乾はティッシュで机を拭きながら冷静にそう呟いた。

「ん？乾、予想してた？」

「まあ、聖悟は全く興味なさそうでしたし。時間の問題かと思っていただけです。」

成る程ね。客観的に見てもそんな感じだったか。

「で、それが何？」

「…いや、このまま一緒にいても気まずいから、彼女とは縁を切れと国崎が言うんだよ。」

「…俺のせいじゃないだろ。」

いや、君のせいだろ、１００％。

私は国崎をジロリと一瞥すると、他の3人に目を向けた。

「なんか君ら3人の反応見てても微妙だし、このまま麗奈さんと友人続けていくのは苦しいんじゃないかと思ってね。やっぱ、彼女と一緒にいるの、ヤダ？」

斎藤、乾、水谷は互いに顔を見合わせた。

「……そーだね。やっぱ俺たちとナツちゃん、5人の方が気楽でいいな。」

やっぱ気ぃ使ってたのか。

「高宮さんには申し訳ありませんが、俺もそっちの方がいいです。」

ああ、君は女嫌いだっけ？

「麗奈ちゃんはどうしても女子として見ちゃうからなー。」

私も女子なんだがな。そういう結論に至るか。

――結果、

この件は可決、ですね。

はあ……彼女とは交渉人ばりの対決を繰り広げにゃならんかも……

私はソファの上でがっくりとうなだれた。

「っはー。やっぱこの作戦、よくなかったのかな。」

麗奈さんのおかげで私は助かったけどなあ…人間の気持ちって、難

しいモンだな。

「―つか、その作戦自体潰れると思ってたけどね、俺は。」

「…何でさ。」

くるりと斎藤の方を向く。

「だって、可愛くて事情の分かる女の子なんて、そういないから。ナツちゃんが諦めるのがオチかな、と。」

……オイ、まさかそれで女のコ探し、放棄してたんじゃねぇだろうな。

ケロッとぬかしやがって。

「…だから、彼女は貴重なんでしょうが。国崎が非道いことするせいで、もう終わっちゃうけどね。あー、なくすの、ホントもったいないなあ。」

「……や、お前も十分酷いぞ。人扱いしてねぇわけだし。」

うるさいな。私は、最初からそんな人間だっての。しかも君に意見は求めてないよ、国崎。

ぶう、とふて腐れたままソファの背もたれに背中を倒す。

―すると、ふと、茶をすすっていた水谷が口を開いた。

「そういや、聞いてなかったんだけど、麗奈ちゃんとナッちゃんってどうやって知り合ったの?」

何気なく言われたひとこと。だが私はピシっと一瞬動きを止めてしまう。

……なんって厄介なこと聞いてくるんだ、コイツ。国崎がこの場にいる今、言えるワケ、ねーだろ。

「あ、俺も知りたいです。違う学部だし、先輩ですから……接点なさそうですけど。」

「どうやって、捕まえたの？」

「答えろよ。」

さらに追い打ちをかけるように詰め寄って来るヤツら。

…ううう、しくった。こないだのファミレスで説明しときゃよかった。

……国崎のいない内に。

「……あー、えっと、その……」

……どうしよう。どう言えばいい？

まさか国崎を売った、なんて言えるわけがない。でも、今更ウソついてもツケが回ってくるだけだし。

脳みそをフル回転させる。背中は油汗でびっしょりだ。

「…なに、言えないワケ？」

私が黙って俯いていると、国崎が眉間にしわを寄せて覗きこんできた。

…このくそボケ国崎が。人の気も知らないで。お前さえいなけりゃ言っても構わん内容なんだよ。

恨めしそうに彼を見上げるが、今、コイツ抜きで話をしたら、国崎のヤツ、今度はキレて何されるか分からない。
仲間はずれは、嫌らしいからな。……子供か、この男。

「……ね、国崎。言っても怒らない？」

――結局、最終手段、『事前にお願い』
…こんなキモい手段取らされるとか、マジで屈辱だ。でもまあ、その後のこと考えるとこれが最良、か……

「……内容による。」

私のキモイお願いに対し、国崎は仏頂面を作った。
…ちっ。1番困る返答じゃん。なんだかんだで、頭いいからな、コイツ。

「…怒らないって約束してくれたら、話す。」

―なら、私はこうだ。もう一方的に怒られるのは勘弁願いたい。

一進一退。じっとお互いを睨みつける私と国崎。

――と、

「……なんとなく、話は見えるけどさ、聖悟、ナツちゃんもこう言ってるから、約束してあげなよ。」

見かねたのか、横から斎藤が割り込んだ。

おお！斎藤、ナイス助け舟。私も便乗するように、頭を激しくタテに振る。

「……ちっ、分かったよ。」

ようやく、国崎はヤレヤレって感じで承諾した。そして、私に早く話すよう促す。

…ホントムカつくな、お前。
常に上から言うのは癖か？なんでこんな見下されないといけないんだ？
切れそうになるのを我慢して、私はとりあえず事の顛末を話すことにした。

―
―

「……で、彼女は交換条件として、私を守ってくれることになりました。おしまい。」

数分後、麗奈さんとの出会いから取引内容までを話終えた。一応、すべて真実を。
……４人の反応を見るのが怖いな。特に、国崎。
―しかし沈黙に耐えきれなくなった私は、４人に問いかけた。

「…え、えっと、どうでしょう？みなさん。」

何でもいいから、リアクションしてくれ。無言は痛い。
必死の顔で懇願すると、男たちはボソボソと口を開き始めた。

「えっと、その…」
「なんというか……」

え、なにその歯切れの悪さ。

男たちの反応を怪訝に思っていると。

「……那津…」
「ふぁあっい!?」

いきなり隣からひっくい声が発せられた。心臓がどくっと鳴り、方が跳ね上がる。
く、国崎っ?ナニその声!また怒ってんの!?

私は恐る恐る隣の男の様子をうかがった、が、

「……え?」

ヤツの方を向いた途端、思わず、間の抜けた変な声を出してしまった。

彼の表情は……なんというか、暗、かった。…がっくりとうなだれていて、よくは見えないが。
しかも、めっちゃ凹んでるっぽい?何故?

「…え、ちょ、何でそんな凹んでんの?なんか私、変なこと言った?」

予想外の反応に、私はうろたえた。…あの国崎が肩落としてるとか、普通ありえんぞ。
これは、余程ショックなことを言ってしまったんだろう、私が。
……
……んと、どの辺?ゴメン、全然分かんないんだけど。

「……あー、いややっぱ、なんでもねぇ。つか、そっとしといてくれ今は。」
「??」

国崎はそのまま気だるそうにソファに寝転がってしまった。

「……えっと、国崎、本当に大丈夫?」
「あー、ナツちゃん。今は放っといてあげて。聖悟なら大丈夫だから。」

腰を上げて彼の方に近づくと、斎藤に制止された。

……だから、一体なんだってんだ。いや放っといてほしいなら、別になにも言わないけどさ。
…なんか納得いかないな。

なにがなんだか。（4）

――まあ、とりあえずヤツは放置しておくことにした。
お茶うけの菓子を食いながら、私たちは4人で話を続ける。

「それでさ、麗奈ちゃんがいなくなった後はどうすんのー？」

水谷がポテチをパリパリと口に運びながら、聞いて来た。

「ん、ああ、それなんだけど、君たち大学内では話しかけ
「却下。」

…最後まで言ってないのに。つか、君ら息合いすぎ。

ぶう、とむくれていると、乾が何気なく私の方を向き、提案をしてきた。

「別に、俺たちでナツさんを守ってあげれば済む話じゃないですか？」

…はー？んなクサイ言葉、素面で言うなよな、乾。
なに、王子様とか、騎士さまとか？……アホらし。

「いや、遠慮します。むしろ近づくな。危険だから。」

私は全力で拒否って、プイと顔をそむけた。

「もう。大人しく守られてりゃいいじゃんか。そのポジションって、普通、女の子のアコガレじゃないの？」

私の反応に、水谷も不服そうに口を尖らす。

――私は普通じゃないらしいからな。残念ながら。

「…いいんだって。君らは女子の怖さ知らないでしょ。守られる方が苦痛なのよ、こっちとしては。」

そうきっぱりと言い終えると、男子全員に、盛大にため息をつかれた。

「……はぁ、ホント、ナツちゃんって……」

「頑固。」

「意地っ張り。」

「腹黒。」

うるせぇ。

「あー、ハイハイ。何とでも言え。…じゃあ、話はそんだけだから。私、帰るね。」

寒い笑顔を貼りつけながら適当にあしらった後、足に力を入れて立ちあがろうとすると。

「あ、ちょっと待ってよ。夕飯食べていかない？」

斎藤に腕を掴まれた。

……夕飯？もうそんな時間？

「鍋、しようと思ってんだけど。みんなで。」
「材料はもう買ってあるからさ。」
「ビールもありますよ。」

次々に出てくる好条件に、帰るつもりだった私は思わず頷いてしまった。

……今月、ピンチだったからな。食費が浮くのは助かるし。うん。

なんて、誰に対しての言い訳か知らないが自分に言い聞かせ、私は再びストンと席に着いた。

―――
―――

その後、４人（国崎も復活した）と共に、寄せ鍋のようなものを食べた。
久しぶりに鍋を食べ、ビールを飲み、私も機嫌をよくしていた。男衆も美味しそうに杯をかきこみ、笑う。

「……はあ、食べたね。」

斎藤は後片付けの後、ゴロンとソファに寝転がった。他の３人も、その辺でゴロゴロしている。

「ごちそうさま。」

私も一応、皿洗いなどを手伝い、ゆったりとしていた。
そして、なんかのバラエティ番組を横目で見ながら、壁にかかっている時計をちらっと見る。

――――10時ちょっと過ぎ。そろそろ、頃合いだろう。

「……じゃ、私今度こそ帰るわ。」

そう言って立ち上がると、体がフラッとよろめいた。

…少し、飲みすぎたか。まあ、でも帰れないほどじゃない。
電車に乗ってしまえば、何とかなるだろう。
そのまま鞄を引っ掴み、私はヨロヨロと玄関の方に向かう。

「あー、もう、ナッちゃんも泊まればぁ?」

危なっかしいなあ、とリビングから水谷の声がした。

「…やめとく。まだ電車あるから大丈夫だし。」

…泊まるて。そんな選択肢は私には無いんだけど。

私はそう答えると、

「じゃーね。」
「うん。」
「またね。」

そんな会話を最後にして、扉を開いた。

――外は、もう真っ暗だった。一歩踏み出すと、冷たくひんやりとした夜風が私を吹き付け、火照った肌を冷やす。

気持ちいい。

しばらくボーっと突っ立っていると、ギイッと再度ドアが開き、出てきた人に腕を掴まれた。

私の腕をゆるく持ちながら、それでも離すそぶりはない。

無言を貫くソイツに、私は息をひとつつき、後ろを振り返らずにボソッと呟く。

「…どーしたの、国崎。」

―そう、相手は、国崎。ヤツも相当酔ってるみたいだ。酒臭い。

「……」

――声をかけたが、国崎は無言のまま、動こうとしない。

「ねえ、聞いてる？」

「……。」

「用がないなら、離せって。」

「……。」

「…国崎？酔ってんの？」

「ちょっと、」

私は返事を返さない男にいい加減しびれを切らして、振りかえってみた。

すると、

「……。」

完全に目が据わった男と目が合った。

「……く、国崎、くん？」

ちょっと引き気味に尋ねてみる。

……何、その顔。いや、いつも通りイケメンだけどさ。…ちょっと怖いよ、君。酔うとこんな風になんの？

私がまじまじと国崎の顔を観察してると、彼は目をすっと細めた。

そしてひとこと。

「……眠い。」

―え。

国崎は唐突に口を聞いてそう言ったかと思うと、何か言う暇も与えず私の手を引っ張った。

酔ってるとは思えないほどの力、勢いに圧倒され、私はされるがままだ。

――状況理解、不可。誰か説明してくれると助かる。

―やがて、ヤツは２０歩ほど先にある自分の家の鍵を回し、

「――！え、ちょ、待…」

いつぞやのように私を中に押し込んだ。

……えっ、はっ？なにっ！？

鍵開けんの早すぎだろ…って、そうじゃなくって！

「――っ！？なにすんのさっ！」

パニックの中、私はバッと国崎に食ってかかったが、

「別に、帰らなくていいだろ。泊まってけよ。」

ヤツは恐ろしいことを無表情で言い放った。

――なんだと？つか、君の家にか？……無理だろ！

「――！や、ヤダッ！帰る！」

国崎を抜け、外に出ようと試みるも、大の男を突破出来るハズもなく、

「うるさい。いいから、大人しく寝とけ。」

男は簡単に私を奥に連れ込み、ベッドの方へ放り投げた。

白いシーツの上に髪がばらっと広がり、スプリングがはずみ、私は布団の中にゆっくりと沈む。

……え、これ、やばくね？

やばい展開じゃないか？てか、何でこんなことになってんの？

ふと過った、この後の最悪の事態を予想して、サッと顔が青ざめる。

……。

――いやいや、私相手にソレはないだろ。コイツも酔ってるだけだし。

……あれ、酔ってるから、ヤバいんだっけ？

なんて私があれこれ考えている間に、国崎もベッドの中に入って来た。

「…！」

そして長い腕を私の体に巻き付け、正面からギュッと抱き締められる。ヤツの腕の中に私はすっぽりとおさまってしまった。

…って、ちょ、待て。何　し　て　ん　の　君？

「っ国崎ぃ！おい、フザけんなっ！電車なくなるだろうが！！」

罵倒しながら、がむしゃらに暴れてみる。

だが全く効果をなさない。さらに国崎の息が私の首筋にかかってゾクゾクと悪寒が走った。

――酔っぱらいってこんなに面倒なモンなの！？

エロさ3割増しじゃね？

「は・な・れ・ろぉおお！！」

しかし、国崎は迷惑そうな顔をして私の叫びを一蹴する。

「…寝ろっつってんじゃん。暴れるなよ。」

……暴れるわー！！何、この意味不明な状況を受け入れろとっ？
私、そんな包容力のある人間じゃ、ねーし！！

どけ、アホ、マジで死ね、このセクハラ男ぉ！
私は騒ぎ、罵り、手足をバタつかせたが、国崎の腕は弱まるどころか、いっそう強く抱き締めてくるばかり。
オマケに体までくっつけてきやがるから、私の頭は沸騰寸前だ。

…こっのやろう……無駄に出すフェロモン、しまえ！
なんか恥ずい。めっちゃ恥ずいんですけど、これ。

こんなことする、意図も意味も理由も分からないってば。

―とうとう、疲労困憊した私は、

「……はあ…国崎、頼むから、離してくれ……。」

切実に、ヤツにそう頼んだ。
……何でこんなんに体力使わなきゃならないんだ。超ノド渇いた。

「……。」

――しかし、返事も返答も、なにも返ってこない。
胸板に顔が押しつけられていて、彼の表情を読むのも不可能だ。

「…おーい。」
「……。」
「国崎くーん？」
「……。」

へんじがない。　ただのしかばねのようだ。
……って、まさか？

「……寝、た？」

嘘だろ、オイ。
私は力を入れて、国崎の胸板から顔を上げ、恐る恐る、ほど近い所にある彼の顔を覗く。と、

国崎聖悟は目を完全に閉じていた。

長い睫毛、スッとのびた鼻、そして薄く開いた唇がセクシー。なんちて。

……要するに、国崎サマは完璧に夢の世界に入られた、と。そういうことですか？

……。

「っぐ！くそ、離せ！…この状態で、寝るなぁああ！！」

オー、ジーザス。

なにがなんだか。（4）（後書き）

あー、長かった（笑）この時点でもう３０部か…ラストには何十部になってることやら。

閑話そのいち

＊special vol.1＊

＊kunisaki side＊

――ムク。

「……寝た、か。」

夜もだいぶ更けた頃。一寸前まで暴れていた女が、静かになったころを見計らって、男は起き出す。

―そして、自分の胸の上で女が、完全に眠りに堕ちたことを確認する。

男は、腕の中にいる彼女を大事そうに抱え、月明かりを頼りにその顔を覗き見た。

「……。」

女は、安らかに眠っていた。何の心配事も無さそうな、平和な寝姿。

すると、彼は彼女の普段とは違う幼い寝顔にふと笑みをこぼし、目を細めて、
無言で顔を近づけ、彼女の額に口唇を落とす。

次に、こめかみ、頬、鼻。
静かに、味わうようにキスの雨を降らせる。

男の表情は、室内が暗いせいで、全く見えない。

「……はっ、情けねぇな、俺も。」

男はかすれた声で呟いて、自嘲気味に苦笑を漏らす。
最後に、女の口唇にキスをし、再び夢の中にいる彼女の、細い体を抱き締めた。

「…那津。お前は、どうすれば、手に入る？」

1人の男の、普段は口に出すことのない心の葛藤。

それは誰にも聞かれること無く、暗闇に溶けていった。

――――

＊special vol.2＊

～そのころの3人の男たちの会話～

「―しっかしなあ……アレは酷いでしょ、ナッちゃん。聖悟が可哀想に思えたもん、俺。」

「目に見えて凹んでたねー、あいつ。」

「…というか、俺にはわざと聖悟を怒らせてるようにしか思えないんですけどね。」

「でも本人自覚なしなんでしょ?…聖悟、完璧に脈ナシって、20年生きてきて、初じゃない?」

「…ま、1度くらいは痛い目あった方がいいって。あいつはいつもモテてばっかだもんな。」

「僻(ヒガ)んでるだけでしょう、信二。」

「っ違ぇよ!俺は聖悟のためを思って、だな……」

「分かった分かった。でも余計なことはしちゃダメだよ?聖悟は自分でなんとかしないと。」

「そうですね。ナツさんは絶対手強いですからそう簡単にオチるわけありませんが…手を貸しちゃ、意味ありませんから。」

「だよね。…でもさ、ああやって必死な姿の聖悟も、萌えるよね～。」

「……おい、宏樹。もしかして、未だに狙ってんのか？」

「ん～手は出さないよ～。あわよくばコッチ来ないかな、とは思ってるけど。」

「……。」

「……。」

デートに危険はつきもの（1）

「……っっ！！？」

…おはようございます。本城那津でございます。

目が覚めたら、何故か見知らぬ部屋で寝ておりまして。隣には、…
…なんと国崎もいるわけですよ、至近距離で。目を開けたら、ヤツ
のドアップ。

何事なの、コレ。

―まだ、脳内のセーブデータが正常にロードされてない状態だった
ので、私はベッドの中で、声にならない声で叫んでしまった。
……人間て、本当に驚いたときは声、出ないんだよ？知ってた？

「……えーと、なんで、こんなことになってんの？」

たっぷり3拍ほど間を空け、私は疑問を口に出した。
…ロードには、まだ時間がかかるらしい。頭はだんだんはっきりし
てきたが、まだ、半記憶喪失状態だ。

…オーケイ。じゃ、冷静に考えてみよう。まずは、昨日の記憶から
辿ろうか。

…えっとー

斎藤ん家行ってー、麗奈さんの話してー、鍋を5人で食べた。
うん、ここまでは、よし。問題ない。

そんで……帰ろうとしたら、国崎も出てきて、無理矢理部屋まで連れてかれて……ベッドに倒されて？
で、国崎の野郎が私を抱いたまま、寝た、と。
……。……なんだ。要するに……

１００％、この男のせいだ。

私は息を目いっぱい吸い込んだ。

「……おっきろぉおお！！！このクソボケがぁあっ！！」

―――
―――

「……あー、なんかまだ耳鳴りがすんだけど。」
「自業自得だから。私のせいじゃないから。」

隣で耳を押さえる男を見ずに私は憮然と言い放つ。
…恨めしそうに睨むんじゃねぇ。私を恨むのは、お角違いだ。

シャコシャコと、鏡の前で国崎と並んで歯を磨く。私は、ヤツのストックしていた歯ブラシをもらって。
…後で返さないとな。薬局行って買っておこう。

歯を磨きながら、私は室内を見回した。―…にしても、綺麗な洗面

所だ。
余計なものが置かれてないからか、やたら広く感じる。
キチンと掃除もしてあるようで、もしかすると、私の家よりキレイかも……

…いや、考えるの、止めよ。女としてのプライドが傷つく。

「……そういや、那津。どこ行きたい？」

口をゆすぐ私に、未だに目が眠そうな国崎が尋ねた。

「どこって……、何の話？」
「もう忘れたのかよ、…デートだよ、デート。」

……。

……あ！そんな恐ろしい約束、してたっけか。ゴメン、リアルに忘れてたわ。

「あ、やっぱそれ、無しってことには…「朝一番だけど、キスしてあげよっか。」

―げ！

「…すいません。」
「別に、俺はいいけど？歯ぁ磨いたばっかだし。それとも、こないだのキスマーク、上書きしてあげようか？」
「すいません。もう言いません。許して下さい。」

勢いよくまくしたてる私に、国崎は『そうか、残念だな』と白々し

く呟いた。

…うはー、朝から平謝りとか、疲れる。…コンニャロ、どこまでSなんだよ。うちの兄といい勝負だ。

げんなりと肩を落とす私。ああ、なんか急に老けた気がする。

「で、どこ行く？」

「……。」

まだ言ってんのか。

私は仏頂面で歯ブラシを置いて、国崎の方を振り向く。

「…はぁ、どこでもいいってば。つか、どっか遊びに行くんなら他の3人も誘えばいいんじゃないの？」

「……んなの、デートじゃねぇだろ。俺は2人がいいの。」

私がそう聞くと、国崎はちょっとふて腐れたような顔を作った。

…うーん、デートにこだわるなあ、この人。私としては、複数人いた方がいいんだけどな。

―しかし、まあデートと言ったのは私だし。

仕方ないか、とまた肩を落とす。

「…分かった。場所は国崎が決めてくれていいよ。」

…まあ、いいや。1回くらいは、付き合ってやってもいいか。

……なんか、君ら4人と絡むようになってから、私、諦念を覚えたような気がするよ。

それがいいのやら、悪いのやら。

―
―
―

それから身支度を済ませた私は、玄関先に立った。

「じゃ、帰るから。おじゃましました。」
「…送ってくって、言ってんのに。」
「いらん。たまには電車で帰らせろ。ガソリン代とか請求されても敵わないし。」
「そんなケチくせーこと、しないっての。」

国崎は笑いながら、私を入口まで見送る。…別に付いて来なくてもいいのに。
靴を履き、鞄をかついで扉から外に出ようとすると、

「あ、ちょっと待て。」

思いだしたかのように、国崎に呼びとめられた。

「……何。」
「日曜、朝9時に、R広場な。」

日時と場所？へえ、もう決めたのか。気の早いこった。

「……9時？早くない？私、寝坊するかも。」

遊び心でニヤニヤしながら、いちゃもんをつけてみると、

「じゃ、家まで迎えに行こうか？」

国崎もニヤニヤしながら返してきた。

「……ヤメロ。私が悪かった。」

うぐぐ、撃沈。

…やっぱり国崎には、口では敵わないな。ちくしょう。

なんか悔しくなった私は、最後に出来る限りの笑みを作り、

「じゃあ、楽しみにしてる。」

デートっつーことで彼女特有のセリフを吐いて、

そのままドアを開け、外に飛び出した。…ま、俗に言う、言い逃げだ。

……。

……やっぱ、ちょっとキモかったかな？気分悪くしたんなら、後で謝っとこう。自分の笑顔なんて、絶対ヤバい映像だよなあ……

ごめん、国崎。劇物見せたかもしれない。

私はエレベーターに乗りながら、今しがたの行動を軽く後悔した。

「～！…わざとだって、分かってんのに……っ」

――顔を手で覆い、苛立つ男に、実は違う意味で効果があったなんて、知らずに。

―――
―――
――

そして。ついに来ちゃいました、日曜日。

……いやー、出来れば、一生来てほしくなかったんだけど。
時ってのは残酷だな。飛ぶように過ぎ去って行きましたよ。

――時刻は9時ちょっと前。私は近所にある、R広場に向かってゆっくり歩いていた。
天気は、快晴。親子連れや、カップルが楽しそうに遊んでいるのが見える。

…そういや、国崎はどこで遊ぶつもりなのかな？ここか？
確かに金はかからなくていいが……私は、そんなアウトドア派じゃないってば。
ぼんやりと考えながらさらに歩き、中央の噴水のところまでたどり着く、と。

「うわー。やっぱ群れてんなあ……」

目印のごとく、女子の群が集中している箇所が。
おそらく……いや、多分間違いなく、国崎はあの中心にいることだろう。
ったく、どこ行っても人騒がせなヤツだ。

……あそこまで行くの、メンドいな。帰っていいかな？
私は舌打ちを打って、心の中でそんなことを思う。

だが、集団に突っ込んでいく勇気などあるはずも無く。
――とりあえず傍観を決め込んだ私は、集団から若干離れたベンチに座り、成り行きを見守った。
ふむ。減るどころか、だんだん増えていってるな、人数。スゲーな～。

……あ、そうだ。

女子の群に目を落としているとふと名案が浮かぶ。

―あん中の1人、もしくは数人が強引に国崎を誘ってどっか行ってくれればいいんじゃないか？
そうすれば今回のデート帳消し？

やったね。今日は1日暇になるじゃん。
国崎には、「君、いなかったよ。」とでも言っておけばカンペキ――……

「……那津、何やってんだよ。」

ニヤリと笑いながらガッツポーズしていると、背後から黒い影がかぶさった。
ふっと目線を上げると、何か色々頑張ったらしい国崎の、息せき切った姿。

「ちっ、もう出てきやがったか。」

振り切るの早すぎだ、君。

「何だ、その悔しそうな顔。居るなら助けろよ。」
「ヤダ。そんな勇気は持ち合わせてないから。」

とてもデートで待ち合わせをしていた男女には思えないくらい、険悪な空気を醸し出す私と国崎。
睨みあいながらギスギスした会話を繰り広げていると、

「ねえ、おにいさん。」

さっきまでヤツに群れていた女子軍が、背後に。
……うげ、嫌な予感。

「ちょっとー、オニーさん!そんな女放っといて、ウチらと遊ぼうって!!」
「いい店知ってるの。奢ってあげるから、いらっしゃいよ。」
「うわー。カッコイイなあ、君。芸能事務所の者だけど、よかったら――」
「誰ー?このブス。あなたの知り合い?」

ワイワイ、ギャーギャーと騒ぐ女子たち。もう誰が何を言っているのか、聖徳太子すらお手上げ状態だ。

……わー予想通り過ぎて笑えねー、この状況。しかも女子高生から、推定３０代のマダムまで、オールジャンルじゃん。ヤベェな、流石国崎。スペック半端ねぇ。

「……逃げるぞ。」
「了解。」

迫りくる乙女と言う名の兵器たちを前に、流石に私たちの意見は合

致した。

くるりと彼女らに背を向けるや否や、一目散に公園の出口を目指して突っ走った。

――

――

「――はっ、ここまでっ来れば、いいんじゃない？」

「そうだな。だいぶ走ったし。」

公園を抜け、さらに5、6分ほど走った私たち。今はバス停横のベンチに2人、座りこんでいる。

「……お前、息切らしすぎ。」

「は、…うるせっ。」

そう、コイツは私と同じ距離を走っていたにも関わらず、息ひとつ乱していない。対する私は、無様に深呼吸を繰り返す。……体力無いんだって。

――しばらく座っていると、ようやく息も整ってきた。家から持ってきた水を口に含みながら、隣の男をチラリと見る。

――うん。相変わらず、キレーな顔してやがる。

麗奈さんも絶賛のシャープな顔立ち、ダメージジーンズも履きこなす長い足、案外ついてる筋肉。

第一印象、花マルだもんなー。こりゃ、モテるわけよな。
そう思って、遠い目をしていると、国崎が私に視線を合わせてきた。

「……どーした？さっきから人の顔をジロジロ見て。」
「…んー、いや、君はモテるなーと思って。」

世の中は不公平だな。この男はＤＮＡから何か違うんじゃないか？

「……別に、んな大したことはねぇよ。」
「はー、あれで大したことないとか言うんだ。スゴイねー。」
「ケンカ売ってんのか。」

苦笑する国崎は、ゆるく私の頭にげんこつを落とした。ひゃ、ゴメン。怒んないでー。

「……でもさ、君の彼女になる子は、大変だよねー。」

私が何気なく言ったひとことに、しばらく笑いながらじゃれていた国崎が、ピタリと動きを止める。
……しかし、彼の少しの変化に、私は気付かない。

「…何で。」
「や、だってさー。よっぽどの美人じゃなきゃ、釣り合わないでしょ、実際。」

例えば麗奈さんとか。一緒に並んでて、ビジュアルが堪えられるくらいの美女じゃなきゃねえ。

「女子って、自分が勝てると思った相手は徹底的に蹴落としにかかるからさ。彼女になる女の子、精神的にも強くないとねー。」

他人事みたいに、カラカラと笑う。

―あーでも、そう考えたら中々恋人できないよね、国崎。もしくは続かない、とか。

私は並み以下の一般ピーポーで助かったよ、うん。

「……そう、か…」

はあ、とため息をつかれた。

「そんな落ち込むなよ。君ならすぐにキレイな恋人が見つかるって。」

「…いや、そうじゃねぇよ。」

そう言って、もう一回ため息を吐く国崎。

…？なんだあ？

「……あ、それで結局どこ行くことにしたの？」

少し疑問に思ったものの、こんな話ばっかりしてても重いので、私はさっと話題を転換した。

「あぁ、水族館。この近くにあるから。」

国崎の方ももう気にしていないのか、何気なく返ってきた返答。

――まさかのａｑｕａｒｉｕｍ。ぶっちゃけ、意外だな。

「……へぇ、何年ぶりかな、そんなの。何で行くの？」

「このバス。２０分くらいで着くから。」

彼がそう言うと同時に、バスが停留所に停まった。
……タイミング、いいな。最近のバスは空気も読む仕様なのか。（違）

―――
――

今日は、日曜日。休日。―故にバス内は大変混雑していた。
座れる座席はもちろん無く、私も国崎も立ったままだ。

……これで２０分、か。キツイな……

吊革にしがみつき、バスの入り口付近で振動に耐える。
…くぅ。こういう時、もっと手足が長けりゃなあ……隣で悠々と立っていられるヤツが、憎らしいぜ。

国崎を恨めしげに下から見上げていると、ふとヤツと目が合った。
そして、くすっと笑われる。

「…立ってるの、きつい？」
「いや、別に…。バスとか久々に乗ったから。」

図星なクセに、なんだか悔しくなった私は、フイと目線をそらした。
すると。

「――！？」

ぎゅっと、国崎の腕が、後ろから私の腰にまわされた。背中をヤツの胸に預けているような格好になる。

「……ちょっ、何してんの。」

「ん、別に。こうした方が楽だろ。」

国崎はそう言って、自然に私の頭に顎をのせてくる。

……や、確かに楽だよ。もたれられるから、楽ではあるけど。…そういう問題じゃ、ねぇし。

「…違う。あのねぇ、前も言った気がするけど、こういうのって軽々しくするもんじゃ…

「那津、いいにおいする。なにコレ?」

……。相変わらず人の話をきかねぇな。国崎は。

ちょっとは聞いてくれてもいいだろ。空しいんだけど……心が。

「……におい?あー、あれかな。香水。」

ダメだこりゃ、と脱力しながらも質問に答える。

「香水?そんなんつけるんだ、お前。」

「失礼な。…ま、私のじゃないけど。」

「…もらいモン?誰から?」

「麗奈さん、……君が振った。」

そこで、国崎は若干渋い顔をした。

「……ふーん。つか、そんなことといつまでも引っ張るんじゃねぇよ。

」

引っ張るよ。

「まだ諦めてないっぽいからな、彼女。今度はちゃんと相手してあげなよ？」

「……はあ。」

また、ため息かよ。今日3回目じゃん。…何悩んでんだろ？こいつ。

「……？ま、いいや。とにかく、腕どけて。」

「あと、15分くらいだろ。このままで、いい。」

…それ、君が決めることじゃ、無いだろ。

―だが結局、国崎が私を離すことは無く、水族館に着くまでこの体勢は変わらなかった。

―――

――

「おーーっ。魚おいしそーっ。」

「オイ、水族館でそれは禁句だろ。」

暑苦しいバスから降り、広々とした大きな空間＝水族館に足を踏み入れた私たち。

様々な大きさの透明な水槽、薄い水色に統一された館内、うごめく

海の生物。
すべてが、日常とは違う、カンペキな別世界へと客を誘う。
――ホント、なんか久しぶりだ。中学…いや、小学生以来か。水族館なんか来るの。
でも、子供のころとは違った視点で見れて面白い。
私は年甲斐もなくハシャギまわり、次々と展示物や動物を見て回った。

「……楽しいか？」

ペンギンに目を奪われている時に、隣にいた国崎に話しかけられた。
私はくるっと彼の方を向くと、にこりと笑って頷く。

「うん、楽しい。ここに引っ越してきて1年少し経つけど、こんなトコがあるなんて知らなかったよ。」

「都心から少しはずれてるからな。俺も、来たの2回目。」

へぇ。

「1回目は、彼女とのデートだったり？」
「……さあ？」

……図星だな。その絶妙に空いた間が、すべてを物語っている。
…ま、別にどーでもいいけど、知ったからには深く聞いとこうかな？

「…じゃ、ちょっと複雑な心境じゃない？『ここに来ると、アイツを思い出す』とか、ならないワケ？」
「――だから別に女と来たとか言って、「違うの？」

「……。」

私が意地悪く問い詰めると、彼は、ちょっと気まずそうな顔を作った。

―くく。またいつもとは違う国崎だ。おもしろい。

にまにまと笑う私にたじろぐ国崎。

彼は何やら言い訳を考えているようだったが、やがて諦めたように頭をがしがしと掻いた。

「～そうだけど。でも、そいつとはすぐ終わったからな。むしろ、思い出したくもない。」

「へえ。」

―お。ついに認めたな。正直なのはいいと思うよ、うん。

――しかし、こいつにそこまで言わせるとは、何者だ?その女。余程すごい人格の持ち主なんだろうな?

「で、どんな女の子だったの?」

その人、目指そうかな私。目を輝かせて、わくわくして聞く。

しかし、

「……お前には関係ナイだろ。次、行こうぜ。」

国崎は本当に触れてほしくないらしく、それから何度話を振っても答えてくれなかった。

……このケチ男ー。

―
―
―

イルカショーを見たところでちょうどお昼時になったので、水族館に隣接するハンバーガーショップに行くことにした。

快晴の中、国崎と2人、歩く。

「っはー。なんかめっちゃ水しぶきかかった……。」

ずぶぬれなんですけど。…あのイルカ、やりおる。

私の髪からポタポタと滴がおちて、乾いた地面にしみを作った。

「いいじゃん。動物に好かれてるってことで。」

水もしたたるいい女の私を見下し、ヤツの方は楽しそうに笑っている。……隣に座っていたハズの国崎は、全くの無事だったりする。

―何だろ、この差。

「……でも、こんなんじゃ店、入れないよ。」

でっかいタオルでも常備しときゃよかったなー。いくら天気がいいとはいえ、すぐには乾かないだろうし。

ふむ、と困り顔を作る私に対し、国崎さんはニヤリと嫌～な笑顔を見せた。

あ、これやべぇ。―と思ったときにはすでに遅し。

「じゃ、俺が拭いてやるよ♪」

ばふっっ

素早く私の後ろに回ると、自分のミニタオルを私の頭にかぶせてきやがった。そしてわしゃわしゃと濡れた髪をかき混ぜられる。

……いや、『♪』ってなに!?君のキャラじゃねぇだろっ!

「っぶは、やめろって!自分でやるからぁーー!」

やーめーれー!ただでさえボサボサの頭がもっと酷いことにぃ!

「遠慮すんな。」

1ミリもしてない!

私は頑張って逃げたが肩をがっちりと掴まれてしまったので、結局、彼にされるがままになってしまった。

……っち。もっと身長高けりゃよかったのに。…あと、手足。学生時代、成長が手ぇ抜いたな。

「……ほら、乾いたぞ。完璧。」

「…どこが。」

―国崎が手を離したとき、やはり髪の毛がもっさもさになっていた。なんつーか、寝ぐせが3くらいレベルアップしたような感じ?…んー、うまく言えないな。

―とにかく、かつてないボリュームに驚きだぜ。どうしてくれんだ、テメェ。

仏頂面で睨むと、不謹慎にも、ヤツは大笑いして下さった。

「ぷっ…ははははっ!!面白ぇなその髪型!斬新でいいんじゃね?」

黙れボケ。指さして笑うな。斬新すぎて、もはや誰も着いて来れないよ?コレ。

「……うぜぇ。国崎、私トイレ行って直してくるから、適当に注文して席とっとけ。」

私は苛立ったまま店内に入ると、すぐにトイレに向かった。

……流石の私も、コレは恥ずかしい。とっととクシでとかしてこよう。

―――

……ふぅ。なんとか、少しはマシになった…か？
数分後、ブラシを片手に髪を通常に戻した私は、洗面台の鏡を覗きこみついでに自分の顔を見た。

「……うわ、酷い顔。」

自分の顔にウケるって、どうなんだろ？思わず2度見しちゃったじゃないか。

ボサボサ（＋α）の髪は相変わらずだが、目つきの悪い人相……に、若干目が黒ずんでないか？
さらに黒縁眼鏡がカゲを落とすせいで余計に暗くみえる。

……度重なる徹夜のせいだよなコレ。今度から回数減らさないとな、……週2くらいに。

……。私は無言で鏡の中の自分をまじまじと見る。そして思わず自嘲の笑みを浮かべてしまった。

…やー、しかし。この顔であの4人と一緒にいて、よく生きてこれ

たな、私。
こりゃー女子も怒るわけだ。私だって多分怒ると思うし。誰が見たって、こんな不細工、お断りだろう。
自分の中でそう自己完結した私は、しかし首を傾げる。
「……そんで国崎は、私なんかと遊んで、何が楽しいんだ？」
…最終的には、やっぱりそこに行き着いた。あとで本人に聞いてみるとするか。答えてくれる保証はないけど。
――
あまり待たせるのも悪いと思ったので、そこで思考を止め、女子トイレから出た。
そしてレジャー施設の隣だからか、やたら広い店内を見渡す。――さっと目を通すも、国崎の長身は中々見つからなかった。
――あいつは、どこ行った？
あんだけ目立つはずなのになんで見つからないんだ、と私は眉をひそめ、さらに奥へと足を進める。
――――すると、突然。
「っ那津！来いっ！！」
「…うぎゃっ！？」

どこからか、探していた国崎本人が現れ、私の手をとるなり風のごとく駆けだした。もう片方の手には、ハンバーガーの袋を持っているようだ。

…あ、ちなみにさっきパチモンの恐竜みたいな奇声あげたの、私ね。

変な鳴き声（？）まで上げてしまって顔を赤くする私。だが国崎は構わず店から私を引っ張りだした。

私をハンバーガーショップから連れ出したヤツは、店の裏口みたいなところに隠れ、辺りの様子をうかがう。

……珍しく、あせったような表情だ。そして……若干顔に浮かんでいるのは、…恐怖、か？

マジで切羽詰まっている様子だったが、何が起こっているのかワケの分からない私は、国崎に尋ねた。

「ちょ、国崎！どういうことだよ、いきなり店飛び出してっ！」

「うるせえ！静かにしないと見つかるだろ！」

――は、見つかる？何に。だから状況を説明しろよ。どんな展開？これ。

「…いや、意味分かんないって！見つかるって誰――」

「―っ、黙れっ！」

そして、一瞬。

揺れる茶髪が視界に入ったかと思うと、すぐさまお互いの唇が重なった。

私は、大きく目を見開く。

整った顔がすぐ近くに……ってか、距離、ゼロ。

柔らかい唇の感触に、どんどん体が熱くなる。

叫びようにも吐息ごと唇で包まれ、音を形作れず、離れようにも、いつの間にか壁に体を押しつけられていて、動けなかった。

―またも、国崎の独擅場だ。

目を閉じるヤツの顔が見れなくて、私のまぶたも自然と降りた。

――2回目。

そろそろ訴えた方がいいかな?

混乱しているにも関わらず、そんなどうでもいいことを考えながら、私はそのまま口を塞がれたままでいた。

するとしばらくして。近くで、足音が聞こえた。バタバタと忙しそうに走っている足音が。

―その音はだんだん遠ざかり、ついに聞こえなくなった。

……。

――今のが、国崎が追われてたっぽい人か?いなくなったようだけど。

……あ、じゃあそろそろ私、解放されるんじゃ……

なんて、ほっと一息(つけないけど)ついて安堵していたら、

「……！むっ？んんっ！？」

いきなり、なにか柔らかいモノが私の口を割って侵入してきた。

――舌、だ。国崎の。

そう気付いた時には、すでに私の舌は彼のに絡め取られていて、いっそうキスを深くされた。舌が自由に動き回り、私の口内を犯していく。

「……ふっ…、…あ…」

時々漏れる自分のものとは思えない声が、クソ恥ずい。さらに、体温上昇だ。

完全にオーバーヒートした頭はもはや使い物にならず、何も考えられなくなった。

「―っ、」

――国崎、国崎。頼むから、解放してくれよ。

熱い。

どこもかしこも熱すぎて、多分、体のどっかが溶ける。

すがるものが欲しくなったのか知らないが、自分でも気付かぬうちに国崎の服をぎゅっと掴んでいた。

――

何分経っただろう。もう1時間はこうしている気がする。…実際には数分だろうが。
ゆっくりと国崎の唇が離れ、ようやく私は自由になった。
2人とも、息が荒い。肺呼吸を忘れてしまったかのように、なかなか上手く息を吸えない。
しかも、彼が離れた瞬間、支えを失った私は、ずずっと地面にへたりこんでしまった。

「……はぁ、…はっ……」

私は大きく胸を上下させて、何とか肺に酸素を送り込む。
…いかん。言いたいことが山ほどあるのにしゃべれない。
――キスすると、体まで不自由になるのか？厄介な。

「……行った、な。」

それに対し、早くも息を上手く整えたらしい国崎は、何事もなかったように後方を見つめ、呟いた。
―何故にコイツは、こんな平然としているんだ……！？

「……っ、くに……さき…」
「ゆっくり深呼吸してから、言え。辛いだろ。」

誰のせいだ、誰のーっ！
私は不服そうな表情を作って見せたが、大人しくヤツの言う通り空気を体に取り込むことに専念した。

――酸素って、大事だよね、うん。最近、特にそう思うよ。
…主に、このカス男のおかげで。

――しばらくして、ようやく息を整えた私は、膝を立てて立ち上がった。

「……ふう、国崎。聞きたいことが、2、3あるんだが……」
「何。」

『何』じゃねぇよ。わざとらしいわ。

「何で……その、キス…した?」

言いながら、顔が勝手に赤く染まっていくのが分かる。自分で感じるくらいだから、傍からみたらもっとヒドイだろう。

――くっ、なんでヤラレタ側の私がこんなに恥ずかしいんだっ!
いや、国崎に羞恥心がないだけか?…君はもっと『恥』というものを学ぶべきだ、ゼッタイ。

「……何でって。那津が静かにしないから。」
「いやっ!だったら手で口塞ぐとか、他に手段あっただろ!」
「手、塞がってたし?」

言いながら、国崎は両手を上げた。
右は彼の鞄、左は茶色のペーパーバッグ、店のロゴ入り。

「~~!」
「俺もあせってたから、咄嗟に顔近付けちゃったんだよな。」

しょうがないな、とわざとらしく顔を傾ける国崎。
―だから、君の過失はゼロだって?んなワケ、ないだろ。咄嗟に体より口が先に出るとか、貴様の身体はどういう構造だ?
私はギリッと歯ぎしりしながら、ヤツを見上げた。
「……。」
「……。」
だが、相手には弁解も謝罪も無いらしい。無言のまま私を見てきた。
…こんなんじゃ、話が進まないな。あくまで自分は悪くないとか言うつもりかい。ガキが。
私は嘆息した。
「……もう、いい。１０００００歩譲って、それは事故だったとしよう。」
「…事故、じゃねぇけど。」
「いいの!そういうことにしとけっ!そこで、２つ目の質問だが…
…舌まで入れる必要が、どこにあった?」
私は聞いたぞ。
君さ、謎の足音が聞こえなくなってから、わざとヤリやがったよな??
アレ、確実不要だったよな?どうなんだ、オイ!?答えろ国崎!
ギロっと彼を責めるように睨む私。
―するとヤツは、
奇想天外な回答をよこしなさった。

「……んー、せっかくだから？」

何の記念んんーーっ！！？そして疑問形ー？

流石にこれには怒った私。国崎に掴みかかり、激しくしゃべった。

「おい！またお得意のなんとなく、か！？」

冗談じゃない。実はチャラ男か？君っ！？

「いや、なんか止まらなくてさ。」

黙れカス。表現が生々しいわ。

「君の欲求不満に、人を付き合わすんじゃないっ！」

続けて、ギャーギャーと節制だのマナーだのを言いまくる。が、数分ほど叫んだ後、国崎はヤレヤレって感じで肩をすくめ、―ガラリと雰囲気を変えて、私を鋭い目で睨んできた。

私も、ただならぬヤツのオーラに身をすくませる。

――何だよ。

その激しい眼差しに、騒ぐのをやめ反射的に後ずさった。

「……欲求不満、か。そうかもな。」

そう呟きながら、国崎はじりじりと私との距離を詰めて来る。

国崎と、バックに青空が視界に入った。

どっかで見たことあるような、責めるような眼差しを向けて近づいてくる彼に、私はいささか恐怖感を覚える。

――あ、やばい。なんか変なスイッチ入ったわ、こいつ。

「……な、なんだ！近づくなって！！」

私が1歩下がったら、ヤツはさらに1歩、前に出る。袋のねずみよろしく、どんどんと後退していく私。

「断る。」

何故、そこ断言するかなっ！

「――！き、君の下半身事情なんか知るかっ！そんなんで、人で遊ぶのもいい加減にしろよ！！」

…うあ、焦ってるからか、なんかもの凄いこと言ってしまった。こ

れもう女のセリフじゃ、ないよね。
反省します。あとで、家で。

国崎は、流石にこれには驚いた様子を見せたが、クスクスと苦笑しながら、さらに数?、距離を縮めた。

「……女が下半身言うなよ。引かれるぞ?」
「っ、いいし!大いに引けっ!そんで戻ってくんな!!」

私はしっしっとヤツの顔の前で手を払った。

――まずい。まずいって。危険な状況だよ、これ。なんてったって、国崎、すげぇ悪い笑みを浮かべているし。
そろりとさらに後退したが、ついに壁に背中がついてしまった。途端、顔が凍りつく。

「……ね、那津。」

甘く囁かれるのと同時に、とうとう顔の左右に国崎の手が置かれた。

「っ、な、なにかっ!?」

顔同士の距離は、数?だ。こんだけ近かったら、相手のマツゲの本数数えれそう。

「…那津、」

だから、何。近づく彼の顔に、意味無く身体が火照ってきた。

……だって、仕方なくね?ああいうコトになった直後だから、おこ

がましくも意識してしまうのは当然なわけで……
それ差し引いても、こんな美しいお顔を間近で見て、気後れするのは自然だろうし……

……あーーっ！何言ってんの私！もうワケわかんないっ！！
とりあえず、色々と限界だってばーー！

頭の中でギャーギャーと騒ぐ私。だが男は全くそれにかまわず。
国崎はちょっと息を吐いてから口を開いた。

「……俺は――」

ぐうううぅうぅ……

……その時、盛大に腹の虫が、鳴いた。

――私の、お腹から。

「……。」
「……。」

…当然のごとく、空気が止まったよ。今までの艶やかな空間が、一瞬でブチ壊しに。

「……くっ…くくっ……」

国崎は3秒ほどあっけにとられていたが、眼鏡の奥で目をそらす私

を見るなり、ノドの奥で笑いだした。
私もなんだか恥ずかしくなって、顔を俯かせる。
……笑うんなら、遠慮なく笑えばいいだろ。しょーがないじゃん！
自然現象なんだからーっ！

「っ、ははっ……何だよその腹。タイミングが漫画みてぇ。」
「うるさい。お腹減ったんだよ。もうお昼過ぎなんだし。」

すると国崎は、ボソボソと呟きながらふてくされている私の頭の上にポンと手をのせ、

「じゃあ、飯にするか。俺も腹減った。」

私から離れて、茶色のペーパーバッグの中から買ったものを取り出し始めた。

……

一瞬の間のあと、私はハッと我に返った。

……あ、よかった。これ、成功ルートだ。普段の国崎に戻った。私は脱力し、さっきの出来事から上手く脱したことを悟った。

―グッジョブ、私のお腹。とってもナイスなタイミングで鳴ってくれたな。

―
―

店の前に設置されてあるベンチに座って、もくもくと昼飯を食べ進める私たち。

…ここのハンバーガー、コショウとマスタードがきいてて中々美味い。無心になってハンバーガーにかぶりついていると、横から国崎の声がした。

「腹減ってたんだろ。たくさん食えよ。」

「…や、さすがにこんなには無理。」

「そうか？」

いやいや、ちょっと量見てよ、量を。コイツ、どんだけ買ったんだ？ハンバーガーの他にも、ポテト、ナゲット、シェイク……軽く3、4人分くらいはあるぞ。

私が食べる手を休め、ドリンクを飲んでいると、国崎の手が延ばされる。

「そんだけでいいのか？じゃ、後は俺が頂くけど。」

その提案に、私は目を見張る。国崎はすでにハンバーガー3コ、ポテト1コをたいらげているというのにまだ食べれるのか。

…君の胃袋、どうなってんの？異空間？そんなに食うのに、よく太らないな。

「…あぁ、どうぞどうぞ。私はもう食べれないから。」

国崎は『じゃあ』と言ってまたハンバーガーの包みを破る、…見てるだけでハラいっぱいでーす。けぷ。

――

昼御飯があらかた（主に国崎の）胃におさまったところで、私はさっきの話の続きをし出す。

「…あー、そんで君。誰に追われてたの？」

…私にあんな口封じするくらいだ。余程の人物なんだろうな？彼は私をちらっと盗み見て、ポテトをつまみながらぼそっと答えた。

「ん。…元カノ。」

「へぇ、元カノ。……って、えぇっ！？」

思いよらない人物に、私は芸人バリのリアクションをとる。

――え、元彼女って……さっきの、国崎的に思いだしたくもない女っ！？

なんてＨＯＴな話題だよ！タイミングいいな、おい！…や、悪いのか？この場合。

「……会ったの？」

「ああ、最悪なことに、さっきの店でバッタリ。」

私の問いに、国崎は苦々しげに答えた。…はー、そりゃ、無視できないわなー。残念でした。

しかしその顛末を聞きながら、私は軽く首をひねった。

「……でも、その人、何でわざわざ水族館に？」

フツー、ちょっと遊びに行こうと思ってチョイスするような場所じゃ、ないよね？水族館て。

どうにも理解できないその女の奇行に私は首を傾げるばかりだったが、国崎は最後の袋をくしゃっとつぶし、さらりとその疑問を解消してくれた。

「あーさっき思いだしたんだけど、去年の今日だったんだよな。アイツとのデート。」

……え。

「……それ、先に思いだしとけよ！！」

…それって、向こうは未練タラタラなパターンじゃんかあ！しかも、そんな日に私とデートなんかしてんじゃねぇーっ！最低！この男最低ですよ、皆さん！

私は少し国崎から離れ、じとっとした目つきで彼を見た。

「…国崎。君、いつか刺されるよ？」

全く、女泣かせな男だ。こんな無神経男と上手くいった彼女っているのか？

「…ま、気をつけとく。」

……否定は、しないのかい。

私はある種残念なイケメンを仰ぎ見て、やっぱりこいつムカつくなあ、と再認識した。

デートに危険はつきもの（4）（後書き）

どたばたしてるなあ、今回。デートはまだ続きます。

※お気に入り登録、評価ありがとうございます！！

夕暮れの来客（1）

「―ったく、いつアイツに出くわすか分からないのに、何でわざわざ水族館に戻るんだよ…」

「いいじゃん。修羅場起こったって、私には関係ない話なんだし。それに、料金分は楽しまなきゃ損でしょ？」

あと3年はここ来なくてもいいように、堪能しなきゃ。

「……なんか、違くね？その価値観。」

―と、いうワケで。私と国崎は再び館内に戻った。

そして、

「…次、蟹見よう、カニ。普段めったに食べれないし。」

「いや、だからどっか視点おかしいって、ソレ。」

私は朝のときと同じように彼を引っ張って、次から次へとコーナーを回った。国崎も何も言わずついてきてくれるので、それに大いに甘える。

―クラゲ、サメ、熱帯魚、カメ、ヒトデ……

様々な海の仲間たちを見ていると、心が和んだ。日ごろのささくれだった気持ちも癒されるような……

「……すでに腹が真っ黒なお前はどうやっても改善されねぇだろ。」
「そのセリフ、そっくりそのまま返すわ、…エスパー君。」

ジロリ、と引きつった笑みとともに国崎を見返す。
…人がせっかくいい気持ちになってるのに、まぁた心を読みやがって。だから私にもコツを教えてよね、コツを。

―
―
―

―それから、約2時間ちょっと経過。

「……大体、回ったな。そろそろ終わりにするか？」

国崎が、若干疲れた様子で呟く。

「…お、おーけー。じゃ、帰ろうか。」

…私の方も、すでに足が限界だ。長い時間歩き回っていたからか、激しく疲労している。
でも、これで、3年どころか5年は水族館来なくていいわ、私。

私たちはゆっくりと、水色のカーペットの上を出口に向かって歩きだした。歩きながら背筋を伸ばし、大きく伸びをする。

「…んー、満喫したなあ、水族館。」
「そりゃ、よかった。最後に土産でも見ていくか？」
「えー、面倒くさ。誰に？」

「アホ、今日の記念だって。」

国崎に小突かれながらも、せっかくなので最後に少々小さめのお土産コーナーへと、足を運んだ。

中では物色している人がまばらにいた。私もまじまじと1つ1つの商品を見ていく。

海の生物のマスコット、ぬいぐるみ、水族館のロゴ入りクッキー……そんな類のものが棚の中に所狭しと並んでいるのを見渡す。

「スゴイねー、本物はあんなにグロいのに、こんなに可愛く商品化されてるよ。」

「それ、言うなよ。夢ブチ壊しじゃねぇか。」

…だって、そう思わない？魚がフツーこんな綺麗な青色してるワケ、無いからね？マンタとかもっとでかくてゴツいし、ツッコミいれたらキリないって。

―そのようなことを考えていると、何か見つけたらしい国崎に手招きされた。

「那津、那津。ちょっと、こっち来て。」

「む、何かあった？」

彼に近づくと。

――シャラ

「へ？」

何か、首に冷たい感触がした。……何、コレ？
不思議に思い、首元を見てみると、

「……ネックレス？」

――が、首にかかっていた。
トップは青いトルコ石のついた、シルバーのペンギン。中々品のいいデザインだ。

「あー、やっぱ青が似合うな、お前。」

あっけにとられている私とそのネックレスを見て、国崎は納得したように頷き、

「これください。」

買った。
……って、えっっ！！？

「ちょ、待てーいっ！！」

財布から金を出そうとするヤツの腕を慌てて掴み、制す。
―ちょ、君、なにしてんのさ！？

「……何だよ。」
「それ、コッチのセリフ！何、即決してんの？そして、このペンギンは誰用っ！？」

……まさか、私の、とか言うなよ。

「お前しかいないだろ。付けてるんだし。それは、那津の。」

…言ったよ、この男。
まったく意味の分からない私は、眉を曲げた。

「…は?何で?私、別にいらないんだけど。」

そもそも。オミヤゲって、普通ここに来ていない人に渡すもんだろ?
なのに、何故私に?…謎だ。何がしたいの?君は。

「あー、うるせぇ。俺が買ってやるって言ってんだよ。…スイマセン。このまま付けていくんで、袋いらないです。」

…っあーーっ!
私が結論出す前にアッサリ会計済ましてるしー!!
愕然とする私を尻目に国崎はさっさと財布をポケットにしまった。

「ほら、買ったから行くぞ。」

いつもと変わらず、涼しげに言う彼を、私はキッと睨みつける。

「っだから!買う意味が分かんないって!!今日、私の誕生日でも、何かの記念日でも無いし!」
「今日の記念、でいいだろ。」

…毎日が記念日~♪みたいなノリか?そんな散財してたら、すぐに破産するわー!!

「か、返すっ!」
「じゃ、ゴミ箱に直行するだけだけど?せっかく買ったのにソレは

もったいないな。」
「――っ、…性格悪ぃ！！」
「何だ、今更気付いたのか？」
勝ち誇ったように綺麗な笑顔を見せるアホ男を見上げ、悔しまぎれに唇をかむ。
―そんなん、私がもらっとくしかないじゃん！！…新手のイジメか？オイ。
答えはもう分かってる、といった風にニヤニヤと笑う国崎が心底鬱陶しい。
―本当、イイ性格してるよな、君。
こんなに親の顔が見たくなったヤツは初めてだよ。
「…っち、もらうしかない、か……」
忌々しそうに首元で揺れるペンギンをつまむと、国崎は苦笑を返してきた。
「素直に受け取ればいいだろ。ホント、頑固だな。」
「うるせ、アホ。手の込んだイジメしてきやがって。」
「…せっかく買ってやったのに、イジメって何事だよ。」
――ほら、罪悪感を感じるとか、何かたくらんでるんじゃないかとか、そんな感じ。…ま、主に後者の理由だが。
しばらくああだこうだと言いあっていたが、ふと国崎は会話を切り、自分の腕時計をのぞいた。

「…そろそろ、バスが来るな。外出るか。」

そう言って、体を反転させて出口に向おうとするので、

「っ、ちょっと待って！…いや、外で待ってて！」

私は慌てて踵を返し店内に戻った。

こんなんじゃ、本当にただ貰っただけじゃん。貸し借りはナシにしとかないと、後がコワイ！！

――

数分後。

「―はい。」

水族館の外で腕を組みながら待っていた彼に、私は水色の小袋を突き出した。

国崎は一瞬驚いたようだったが、すぐに怪訝そうな顔を作り、私に疑問を投げかける。

「……なに、コレ。」

「お返しだよ。貰いっぱなしだと気分悪いし。」

「…そりゃ、どうも。」

国崎はフッと笑みをこぼしてソレを受け取った。

そして無造作に袋を開ける。

中身は――

「ストラップ……」
「無難でしょ？」

実用性はあると思うよ？
…もっとも、私は持ち物に装飾はつけない派だが。

私は得意げに彼とそのストラップを覗きこんだが、次の瞬間、彼のひと言に見事にフリーズした。

「……で、おそろい？可愛いとこあるな、意外に。」

なんと、
ニヤリと笑う国崎の手で揺れるストラップは、私の首元についてるペンギンと同じデザインであった。

……

しくった！！！

わー！なに、この痛恨のミス！！なんで私、自分で自分を追い込んでんの！
適当に引っ掴んできたから（酷）どんなのか全然見てなかった！！

…これ、ヤバくない？
一緒に付けてんのみられた日にゃあ……瞬殺？　…あ、即死？
マズイ。激しくマズイぞ。

「……あの、国崎さん。」

「返品、不可。」

…ですよねー。簡潔に反対してくれやがって。

「…じゃ、私コレ、はずしていい？」

「今日くらいは付けとけよ。」

「……それなら、国崎、そのストラップは付けないで…」

「何で？せっかくもらったんだから、普通につけるけど？」

……

「……もう、いいっす……」

「そうか？」

くす、と天使のようなほほ笑みを残して、国崎は早々とストラップを付けた携帯電話をポケットに突っ込んでいた。

…っだーー！！ホント、嫌がらせの神だな、君はっ！！

ちったあこっちの都合も考えてくれよ！

非常に…ひっじょーに、楽しく笑いなさる国崎を見て、私は諦めて肩を落とした。

夕暮れの来客（2）

―――
――

バス停にたどり着くと、乗客の列ができていた。今から帰る家族連れがほぼ、だろうか。やたら騒がしい。
…どうやら、まだ、バスは来ていないらしい。私たちも最後尾に並ぶ。

「――で、この後どうするの？」

隣で眠そうに立っている国崎に聞いてみる。

他に予定はあるのだろうか？―べつに、もう帰ってもいいけどね、私は。疲れたし。
国崎はちょっと考えるようなそぶりをみせた後、口を開いた。

「そうだな…帰すにはまだ早いしな…。どっかで飯でも食うか？」
「…『帰る』じゃなくて『帰す』なんだ？」
「当たり前だろ。……どうせもう帰りたいとか思ってんだろうけど。」

ジロリとこっちを見る。

―おっと、ご名答。よーく分かってるじゃないか。

私は笑って誤魔化しといた。

「それにこういう機会でもなけりゃ、お前は絶対デートなんかしてくれないしな。これで別れるにはもったいない。」

…要するに、まだ弄り足りないってことか？

……っつーか。

「…これ、デートなの？」

私が真剣な顔をしてそう聞くと、国崎は眉をひそめた。

「……今更、何を。そういう名目だろうが。」

「や、でも、私は君の友達なワケだし、デートとは言えないんじゃ？」

普通に遊びに来た、くらいだろ。このノリ。

……アレ、そもそも友達同士でもデートってするのか？経験無さ過ぎて、わかんね。

すると、国崎は何か複雑な顔を作ったかと思えば、

「…じゃ、するか。デートっぽいこと。」

「…は？」

ぎゅっと、手をつないできた。

彼の右手が私の左手に重なり、温かい体温がダイレクトに私の手に伝わる。

…しかも、ノーマルなヤツじゃなく……

「デートっぽいこと、そのいち。恋人つなぎ。」

――だった。

「…オイ、何してんのさ。」

ブンブンと手を振り、絡まった指をほどこうとするが、しっかりと握られているようで、全く効果がない。

「那津がデートみたく無いって言うから、それっぽくしようと思って。」

「あー…もう十分わかったからいいっす。離して。」

君って奴は……まぁた変なこと考えやがって。そういう意味で言ったんじゃねぇよ、コッチは。

「ヤダ。お前、全然分かってないし。とりあえず雰囲気だけで味わっとけよ。」

余計なお世話だ、バーロー。確かに誰かと手ぇつないだのなんて数年ぶりだが、何故、君とする必要が？

「…だからって――「バス、来たぞ。いい加減静かにしないと、もっとレベル上げたことすっぞ？」

……ハイ、一瞬で黙りましたとも。

私はハァ、とため息をつき、繋がれた手をそのまま放置した。

――うーわ、なーんか、また失言したな私。思ったことすぐ口に出

すのはよくないな、うん。ホント。
つか、そのいち、って全部でいくつあるんだ?

―
―

「…で、バスの中でもつないでるの?」

ステップを踏んで、2人バスに乗り込んだ後、私は視線を落としてつながれたままの左手を見つめた。
……つなぐ意味、無いだろ。暑いし。

「ん、別にいんじゃね。公園に着くまでくらい。」

しかし、国崎はいつもと変わらない調子だ。私の方を見もしないあたりが憎らしい。
…だから、『別に』って、ナニさ。
行きといい、帰りといい……バス内って何かのアピールポイントだったりする?もしかして。

―どうせ言ってもスルーされるだけなので、私はヤツをそのまま無視して放置することにした。

……

…いや、放置してソレを考えないようにしようと努力した、の方が正しい。

なんか、なんつーか……ワケも無く顔が熱くなっていくんですけど。

こうやって手ぇつなぎながら電車乗るカップル、よくいるけど、彼らは恥ずかしくないんだろうか？

…私は無理だ。見られるのもそうだが、手と手が絡んでるって事実自体に、すげー緊張する。

しかも、相手がコイツだしなあ……何の罰ゲームかな、コレは。

…つか、私、今日、いくつ罰ゲームした？軽く4、5コはやった気がするけど？

国崎のテンションも、今朝からおかしいし。

むしろ、このデートが罰？

……いやいや、何のだよ。そこまで悪いことやってないよ、私。

あ、もしや厄日、パート2？

「……那津、ナニ考えてんの？眉間にシワ、寄ってるけど。」

じっと1点を見たまま思考にふけっていた私に、隣から声がかかる。

「……厄日…デート……？」

「は？」

…おっと、ゴメン。考えてたことがそのまま口に。意味分かんない上に不吉なひとりごとだよな、今の。

「…あ、何でもない。気にするな。」

右手を振りながら怪訝そうな顔をする男に詫びを入れると、

「あーー！あの人たち、おててつないでるよー！」

「らぶらぶだねーーっ。」

前方から元気な声が飛んできた。前の座席に座っていたガキども（計3名）がわざわざ気付いてくれたらしい。

……声、デカイっての。

横にいる母親らしき女性も、にこにこ笑いながら「仲いいですね。」とかホザくし。

――こういうの、フツーは「こら、ダメでしょ」とか注意するだろ、母親なら。

いらんフォローいれてないで、さっさとそいつらの口を塞げ。

子供相手に舌打ちは大人げないと思ったので、親の方に八つ当たりしといた。……頭の中で。

――だが、なにはともあれ、うるさいガキどものおかげで乗客の注目が一気に集まってしまった。

典型的日本人な私は気まずくなり、国崎の背に隠れる。

「……クッ、照れた？」

私を覗きこむ国崎は、至極楽しそうな笑顔を浮かべていて。

……むかつく。私は小声で怒鳴った。

「……そう思ってんなら、離せよ、手！！」

「ダメ。こういう時の那津、可愛いから。」

「～～！」

コイツは……っ！さらっとリアクションに困るようなこと、言うなっての！！

私は赤くなった顔を隠すように俯き、すべてに耐える姿勢に入る。
まだ騒いでるガキ、見守る母親、興味津々にこっちを見てくる野次馬ども……そして、目の前のこの男。

――ここに、私の味方はいないな……
敵ばかりの現状況に嫌気がさした私は脱力し、早く着いてくれるのを祈るばかりだった。

はあ……

――
――

そんで、十数分後。やっと……や　っ　と　！！
バスはR広場に到着した。

私はバスを降りると同時に国崎の手を振り払う。

そして。

「I　am　freeーーー！！」

おおーきく手を振り上げ、ガッツポーズ。
―ヤバい。この爽快感、ヤバい。両手が空くだけで、こんなに解放された気分になれるとは。

「……そこまで、嫌がるって…」

国崎が後ろでボソボソ呟いてるが、もうスルーだ。無視だ。
――とにかく、後は飯食って帰るのみっ！今日、これ以上のイベントはもうないだろうっ！！うん、断言できる！

私は公園の芝生を踏みしめながら、後ろを振り返った。

「よしっ、国崎！どこに食べに行くーっ！？」
「……急に元気になったな。」
「もーちょっとで今日が終わるからね！！」
「お前、今日を何だと思ってるわけ？」

試練だよ？色々と。

国崎はポケットに手を突っ込んだまま、ぶすっとした顔で何やら考えていたが、やがてニヤリと口角を上げた。

……嫌な顔。そして、悪い予感。

「――じゃ、俺の家で食うか。」

何だと？

――――
――

「いーやーだーっ！！嫌だって言ってるじゃんっ！」
「往生際が悪い。ホラ、ちゃんと歩けよ。」

――広場から歩くこと……20分？いや電車も乗ったし、もっとか？

…よくわからんが、とにかく、
駄々をこねながら、国崎に引きずられながら、私は彼のウチに強制連行されていた。
ちなみに、私、涙目。そして、度々私の悲痛な叫びが響く。

「っ、なんでわざわざ家!?その辺の居酒屋とかでいいじゃん!」
「食費が安く済む。」
「今更節約とか、男としてどーなのっ。」
「あー悪かったな、ケチくさい男で。」

……くっそ!何言っても軽く流しやがって!いいから手ぇ離せーーっ

「それに、ほら。デートっぽいこと、そのに。彼氏の家に行く。」
「『ほら』、じゃないっ!却下!」

だから君、彼氏じゃねーだろおぉ!それ、いつまで有効にする気だっ!?

―ガンガン言い争っていたら、（主に私が、だが）いつの間にか国崎の住むマンションが、もう目前にあった。ソレが視界に入った途端、冷や汗が身体から噴き出る。

……もう嫌な予感しかしない。
またこの間みたいな展開が起こったら、今度こそ私、死ぬかも？

「っ!もーやだ!帰るぅー!」

数日間で何回ココ来るわけ?私っ!?

「だから、帰さないって。」

愉快そうにささやく国崎。

―こういう時の国崎の顔は、嫌に輝いて見える。
気のせいか、黒いシッポとツノが生えてるような……

……って、典型的な悪魔って奴?
あははははは……笑えねぇ。

夕暮れの来客（3）

―
―
―

エレベーターがチンッと小気味のいい音を立てて5階に到着した時、私はもう、ぐったりとしていた。
なんやかんやで、結局抜け出すことが出来なかったのだ。
――この、悪魔サマから。

……あークソ。1回でいいから逃亡成功してみてぇなー
今回も敗北かよ。なんで私には『逃げる』コマンドがナイんだろうな？

ここまで来たらもう無理だ、と私は諦めの表情を浮かべ、彼に続いて吹きさらしの廊下を歩いた。
すると。

「…え？」
「は？」

私と国崎は一緒にマヌケな声を出してしまった。

―国崎の家の前に、誰かが立っているのが見えたからだ。
ぴったりとドアに背中をつけて、本人が帰ってくるのを待ってるみ

たい。

…夕日に照らされて顔はよく見えないが……国崎の知り合いか？誰？

「…国崎、誰かと約束してたの？」

「…そんな予定はなかったはずだけど。」

不審がる私たちはさらに歩を進め、その人の姿を確認した。

――女、だ。

艶のある長い黒髪に、細い手足、小さい顔。真っ白なワンピースを着ている。

……え、何。マジで何者？

麗奈さんとタイプは違うが、並ぶくらい。清楚で可憐な美少女じゃないか。

私は驚きに目を見開き、首を傾げたが、隣の国崎の渋い表情と、駆けよって来た彼女の第一声で彼女が誰なのかを、ハッキリと理解した。

「――聖悟っ！よかった、また会えて！！さっきは、なんでいきなり逃げ出したりしたの？」

――あ、例の国崎の元彼女かこの人。成る程、と。

国崎の元カノさんらしき人は、目を輝かせながらそのまま国崎にしがみつく。
そして、上目使いに彼を見上げた。

「…聖悟……会いたかった…」

…いや、会いたかったって、アナタ。
感動の再会シーンを演じてる所悪いけど、家で待ち伏せしときゃ、１００パー会えるだろ。アホか？

国崎も同じ気持ちらしく、口元を引きつらせたまま彼女に話しかけた。

「……何で、家まできたんですか。俺たち、もう別れたはずですよね。」

……！瞬間、背筋にゾクゾクっと悪寒が走った。
…け、敬語っ！！この俺様ドS男がっ！？

驚いて国崎をバッと振り返ると、彼はもうすでに完全にキャラチェンジしていた。
顔の表情まで違う。顔は微笑んでいるのに、どこか冷たい空気。

――すげぇ、鮮やかな早業だ。しかも違和感ない。
……そうか、コイツ、他の女子にはこうだっけ？付き合ってた彼女にまでコレだったのか。

「……く、くっ、」

理由は分かったが、私からすればコイツがこんな敬語紳士キャラを

演じているなんて、おかしすぎる。つい含み笑いが漏れてしまった。

「……」

…国崎が無言で私の手をつねってきたので、無理矢理笑みをひっこめたが。

…スイマセンって。もう笑わないよ。地味に痛いから離せや。

私は口を不自然に引きつらせたが、そんなことは眼中にない……っつーか、私の存在自体が目に入らないらしい女は、話を続けた。

「そんな…だって、私、あなたのこと諦められないんだもんっ！」

「…でも、もう1年も前の話ですし、今更……」

「今更じゃない！私は本当に…っ！」

「でも、あの時きっぱりと別れたのは事実でしょう？そうですよね。」

あくまで紳士（偽）に接する国崎。

だが、やんわりとした拒絶を繰り返す奴にしびれをきらした彼女は、とんでもないことを言い出した。

「で、でもっ聖悟も私のこと、まだ好きなんでしょっ！？」

……

……

……は？

この衝撃発言には、国崎も私も完全に固まった。
何、言ってんの？この女。え、今の日本語？

「……えっと、それは、どういう？」

国崎も困惑顔だ。当然のごとく。

「ごまかしたって、私には分かってるわ。」

だから、何を？

私の心の声に答えるがごとく、女は自信満々に息をすいこんで、続いて言葉を紡いだ。
…正直、あんま聞く気ないな。なんか、麗奈さんの時と同じ既視感。

「私、１年前にあなたと別れた後、毎日後悔したわ。そしてずっと聖悟のことばかり想ってた…
今日水族館に行ったのも、あの日の思い出が忘れられないからよ。
そしたら、聖悟に会えるなんて！しかも、今日、この日にっ！
それで確信したの、あなたも私のこと、まだ好きなんだって！！」

……

……あ、ゴメン、ストップ。やっぱ聞かなきゃよかったわ。
てか、またデジャヴかなコレ？話が長い上に、後半意味分かんねぇよパート２。

私は超冷めた目で、目の前の女を見返す。

――この女、何なんだ？コワいんだけど。

美人のくせに、とんだ勘違いストーカーだよ。そこまで断定できる自信は、どこから生まれるのか。

この人と比べたら、麗奈さんが普通に見えるから不思議。

――とにかくこのストーカー女から離れたくなった私は、彼女が（自分に）酔っている間に、私と同じく激しく引いている国崎に小声で話しかけた。

（……ね、国崎。私帰ってい？）

（は？ダメに決まってんだろ。）

（だって、私が居たらさらにヤバい状況じゃん。あの人、コワいし。）

（……それは、確かにそうだが……）

（頼む。私、まだ死にたくないから。）

手を合わせて必死で頼む。

――あ、ヤバい。もうちょいで、あの人がこっち向く。

お願いしますって。国崎さん。

すると、

（……はぁ、分かったよ。下手にコイツを刺激してもアレだしな…）

私の必死の説得が通じたのか、国崎も肩を落としながら了承してくれた。

……っしゃ！なんだ、コイツにしちゃあ、あっさりＯＫ出たな。そ

れだけヤバい相手ってこと？
ま、何にしろ、ラッキー……

「……何、内緒話？そういえば聖悟、この人は誰なの？」

ひそかにほくそ笑んでいると、横から美しい顔が私を覗きこんだ。
うわ、き、気付かれたっ！
一瞬固まった私は、笑顔を貼り付けたまま、ギギ、と首を彼女に向ける。

「…ヤー、ハハハ。タダノ国崎クンノ友人デスヨー。今ソコデ会ッテー…」
「何で片言なんだよ。」

…だから、怖いんだってば。察せよ、国崎。

「…国崎クンノ、彼女サンデスカ？可愛ラシイ方デスネ。」
「えー、そんなことないですよぉ。可愛くて美人で性格よくて、聖悟とお似合いなんてー。」

…そこまで言ってねぇし。勘違いが冴えるなあ、ったく。

何かと言いたいこともあったが、私は別にそんなことを気にする立場ではない。スマイルを浮かべ、彼女に向かってさっと手を上げた。

「……デハ、私ハ用ガアルノデコレデ！国崎クントゴユックリ～」

そして、その左手を左右に振りながら駆け足で来た道を戻り出す。
後ろは一度も振り返ること無く、エレベーターまで走っていく。
その顔は、気持ち悪いくらいの笑顔だった。

――あばよ、国崎の元彼女とやら。もう二度と会うことはないだろう。

とにかく、幸運にも今から家に帰れるっ。
国崎から逃れることに成功した！その点では君、よくやったよ！

―走りながらにやける私に、これからの展開を予想し、ため息をつく国崎。

2人とも、気づくことはなかった。

……長い黒髪の女が、妖しげな笑みを浮かべたことを。

――
――

「……はー、つっかれたぁ……。」

―黄昏時、というのだろうか。今にも落ちそうな夕日に、薄暗くなっていく空。
そんな幻想的な景色を眺めながら、私は一息ついた。

後方を見ても、国崎のマンションはもう見えない。あの勢いのまま、結構歩いて来てしまったようだ。

…あとは、電車とかを乗り継ぐだけ、か……本当、長い一日だった

な。

ふと足をとめ、首元にぶら下がっているペンギンを見る。
光をはじいて輝く銀色、そしてなめらかなトルコ石は、海面のように穏やかできれいな色をしていた。
私は目を閉じ、今日のことを思い返してみる。

…発端から意味不明だった今日のデート。
色々とトラブルもあって、酷い目にあった気もするが。
笑いあって、喋りまくって、ふざけて。

「……なんだかんだで、楽しかった、かな……」

言いながらくすっと、ひそかに笑みをこぼす。
…こんなこと、国崎には絶対言えないな。きっと調子に乗るだけだし。

「っし、帰るかー。」

んーっと伸びをした後、足を突き出し、歩き出した。

てくてくと、薄暗がりの中を歩く。周囲に人気はないが、別に、深夜にバイトをしている私にとっては、いつものことだ。
気にせず、ずんずんと歩いて行く。
1歩、2歩、3歩。何ら変わりない、普段の歩幅。

――しかし、

ドカッ！！

衝撃。４歩目を歩いたところで、何者かに、背後から殴られた。
…いや、正確にはよく分からないが、後頭部辺りに鋭い痛みが、走った。

「……っ、な……に……」

視界が、ぼやける。思考がだんだん停止していく。

薄れゆく意識の中、私の背後にいた相手が口角を上げ、呟くのを聞いた。後ろにいたヤツは――確かに、こう言った。

『消えて』と。

意識はそこで途切れ、すべてが真っ暗になった。

夕暮れの来客（3）（後書き）

突然、シリアス展開。

暗闇（1）（前書き）

※注意※
この章は多少の残酷な表現・暴力表現を含みます。
閲覧にはご注意ください。

暗闇（1）

目を開けたのに、視界は暗いままだった。見通しは悪く、数メートル先も見えない。
ぽっかりとあいた闇が自分を飲みこんでいるみたいで、背筋がうすら寒くなった。

――……ここは、どこだ？

瞬きを繰り返し、私は考える。
多分、知らない場所だ。…よく見えないけど。頭がやたら痛むし、あまり記憶がはっきりしない…。

頭を抱え、数分くらいボーっとしていると自分が冷たい床の上に倒れていたことに気付く。
自然物を感じさせないコンクリート。
ってことは……どっかの廃ビルとかかな、ここ。やたらホコリっぽいし。

―そして、

「……あぁ、拉致されたのか、私。」

ぼそっと、どっか他人事みたいに呟き、事実確認。
自分でも驚きだが、意外に冷静だ。まだ頭がぼんやりしているから

だろうか。

…幸いにも、よくあるドラマみたいに手足は縛られていないようだ。荷物は流石にないけど、とりあえず自由には動ける。私はふらりと立ちあがり、歩き回ることにした。

首を回し、部屋全体を見る。…あまり広くない、灰色の一室だ。用途の分からない木箱や段ボールなどが置かれているから、廃ビルと言うよりは倉庫の類だろうか？何にしろ、近所では見たこと無い。

……

…アレ、もしかして私、ヤバい？

途端に冷や汗が体を伝う。暗闇の中で私は青ざめた。

……え、ど、ど、どーしようっ！もしや殺されるっ！？

危機感を覚え、（今更）慌てふためきだした私はとりあえず周囲を見渡し、何か武器的なものを探してみるという妙な行動に打って出た。

が、…結果、何もなかったわけで。がっくりと肩を落としてため息をつく。

…ま、私みたいな非戦闘人種が何か武器持ったところで何も変わらないけどさ……

は、分かってるって、んなこと。

自嘲気味に笑い、またあぐらをかいてその場に座った。

こうなれば仕方ない。とりあえず誘拐犯の到着を待つしかないだろう、と腹を括る。

……しっかし、面倒なことになったなぁ。
どーしてわざわざ私みたいな貧乏学生狙うかな、誘拐犯サンも。金を請求されても、払えないよ？多分。
今の預金通帳の残高を思い出し、私は再度ため息をついた。

――
――

……今、何時だ？どれくらい経った？
暗闇の中だから、時間が全く分からないが結構な時間、この部屋にいる気がする。

―つか、誘拐しといて犯人は何してんだ？
……え、まさかの放置？
どんだけ興味ないのさ、私に。だったら帰してくれよと言いたい。

――バタンッ！！！

そうやって姿の見えない犯人に悪態をついていると、いきなり白い光が暗室に差し込んだ。
真っ白な光がドアの形に切り取られ、室内を照らしだす。

――あ、あれドアだったのか。
歩き回ったのに気付かなかったとか……やっぱ私、生存能力低いな～
そんな下らないことを考えながら、あまりの眩しさに目を細める。
強い光ではなかったが、闇に慣れ過ぎた私の目には、毒だったようだ。

しばらく瞬きを繰り返し、やっと目が開けてきたところに、いきなり目の前に人が接近し、両腕をグイッと引っ張られた。
座っていた私はそのまま起こされ、部屋の外に連れ出される。

無言のまま手を引かれるが、相手が誰だか分からないので、とりあえず空気を読んで従う。
――逆光で顔は分からないけど……手の細さからいって、女？

――――
――――
――

――――ガンッ！！！

「っ、ぐ！！」

カビ臭い廊下のような通路を抜け、新たな部屋に入るや否や、手を引いていた人物に突き飛ばされた。

…腰を強打。痛い……後で青アザになってるかも。腰をさすりながら体勢を整えようとすると、

「目は、覚めた？」

ここにきて、初めての声。場所的に、目の前の人物から発せられたようだ。
―予想通り、やっぱり女だ。

しかしどこかで聞き覚えがある声だと思い、ゆっくりと顔を正面に向けた。

そこには。

「……え、」

白いワンピース、長い黒髪の美少女が妖しげな笑みを口元に浮かべて私を見下ろす姿があった。

私は思わず口をぽかん、と開ける。

――国崎の、元カノさん……じゃ、ないか。

驚いた。私、この人と全く面識ないのに。

「……えー、と……」

間抜けな声を出しながら、言葉を探す。

…何を話せばいいか、全く分からん。だってほぼ初対面なのに、コレ。

私が困っていると、彼女の方から話しかけて来た。

「……ああ、自己紹介がまだだったわね。私は　篠原　未央（シノハラ　ミオ）。
K女子大学の2年生よ。よろしく。」

…や、そんな笑顔で言われましても。

聞いてないし、よろしくしたかないんですけど。てか、この状況でそのセリフ？

「あ、はぁ。そうですか。私は本城那津です……」

そんで、何で自己紹介してるかな、自分。反射って怖ぇな。

するとシノハラさんとやらはにっこり笑って、

「知ってるわ。最近、聖悟にやたら付きまっとってる、害虫女。」

――毒を、吐いた。

…いや、毒っつーか、単なる悪口だな。『害虫』とか、久々に聞いたよ?私。

何となく話の分かってきた私は、息をついて、落ち着いた口調で返した。

「……あの、付きまとった覚えはまっったく、無いんですけど。」

「とぼけても無駄よ。聖悟の傍で、いつもうろちょろして。目ざわりなのよ、アナタ。」

…だが、まあ予想通り、全然聞いてくれないシノハラさん。

こういうタイプは何言っても無駄、と。

…だからさー、そりゃ、国崎が勝手に来てるだけだってのに。

……何でこういうツケは全部私に回ってくんのかなー。

文句があるなら、本人に直接言えばいいんじゃない?きっと、笑顔で一刀両断してくれるからさ。

マジで頼むから、こっちに来るな。

「……。」

そこまで愚痴を呟いた後、私は無言で彼女を見上げ、脳をフル回転させる。
…脳内ではバカなことを考えていたが、ここで返答をミスると、ヤバい。下手すりゃ、火に油だ。
さて、どうしようか……

――変な沈黙が流れる。
もちろん、私が思考中だからだ。無音のこの空間は、とっても気まずい。
何も話さない私にいらついたらしい女は、ふいに私の髪の毛を掴みあげた。

「何とか、言えば!?」

怒鳴りながら、結構な力で引っ張られる。
シノハラさんの顔は怒りに歪み、美人なのに、もの凄く怖い。
まるで般若のようだ……

…痛い。冗談じゃ無くかなり痛いよこれ。頭皮がギリギリ言ってるし。
相手サンはかなり短気と見た。ここで『何とか』とか言ったら、ボッコボコにされそうだな。マジで。

暗闇（2）

――そんなところで、じっと痛みに耐えながら私は今から演じるキャラを決めた。
上手く乗り切れるか分からんが……やるしかない、か。

突如、私は体をガバッと起こし、
髪を掴むシノハラさんの手をはずして、彼女の目の前に立った。

「な、何よ！」

いきなりの私の行動に動揺するシノハラさん。
私は彼女など目もくれず、

「……ごめんなさいーーーっ！！」

ベタっと、勢いよく地面に頭をつけた。
必殺、ＴＨＥ☆ジャンピング土下座。よい子はマネしちゃ、ダメだからね☆

「……え、…は？」

ぽかん……と口を開け、間抜けな顔を作るシノハラさん。
…でも、顔が顔だから可愛いな。君、これくらい愛想あった方がい

いよ、うん。
当然の反応、ありがとう。
私は一瞬顔をあげて、相手の反応を確認した後、また地面にべたりと頭をくっつけた。
そんで、
「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいいいーーっっ！！そうですよね、私みたいなやつが国崎君に近づいてんじゃねーよって話ですよねっ！あの人なんて、マジで雲の上の存在なのに調子乗ってましたあぁあ！」
頭をガンガン地面にぶつけながら息継ぎなしで、まくしたてる。…つか、「叫ぶ」レベルだな、もはや。
この部屋いっぱい響き渡る私の声は、ある種不気味だ。
周辺住民の皆さん、騒音しつれーい。
「…ちょ、ちょっと何
「やっぱ身分不相応だよ…国崎君、優しいから私もつい傍にいたいな、とか思ったりして……。ああ！スイマセン、こんなこと言ってキモイですよねっ！」
「……いや、だか
「いえ！言わなくても分かってますっ！！全部私のせいですから！…あぁ、もう嫌だ……何で私、いつもこうなんだろう…下手に夢ばっか見てテメーいくつだよマジで死にたくなってきた……」
「……。」
異様な威圧感と鬱オーラ全開の私に、どう接すればいいのか戸惑う彼女。
最初の勢いは、もう無い。

私はかなーり引きながら自分を見つめる女に気付かれないように、ニヤリと笑った。

…よかった、どうやら有効だったようだ。

私の、気弱×鬱キャラ。

…ま、意外とハマリ役らしいからな、この性格。ホントの中身とは１７２。くらい違うけどー。

――そう、相手が毒を吐くなら、その前に毒を抜けばいい。

こんな病気みたいな鬱キャラだったら、怒鳴ったりする気力も失せよう。

顔を俯けながら、心の中で「やった！」と呟く、と

「…だ、だからっ顔上げて！とにかく私の話を聞きなさいっ！」

焦ったようなシノハラさんの声が頭上から降ってきた。

私はさらに追い打ちをかけるべく素早くキャラに戻り、至極ゆっくりと頭を上げ、すぐに俯いた。

目の端には涙。口はぎゅっと結んだまま。

「…何ですか……もう私のことなんか、放っといて下さい……」

プラス、地獄の底を這うような、ドス暗い声。

――鬱度、ＭＡＸである。

あは、危なすぎて近寄れないよね、こんな女。フツーは。

ハッキリ言って、私でも逃げ出すわ。こんなヤツがいたら。

ギロリと下から睨みあげてやると、彼女はう、と声にならない声をもらす。

「な、何よ、この女……！報告と全然違うじゃないっ！」

そして頭を片手で抱えながら、ボソボソと言葉をこぼした。

……報告？

「……あの、」

「！な、なに！？」

気になったのでふいに声をかけてみると、思いっきり顔をそらされた。

…そんな警戒しなくても。

キャラとはいえ、そこまで引かれると那津ちゃん傷つくわ。

私は涙（偽）をぬぐい、顔を上げた。背中は木箱にくっつけ、地面に座ったままだ。彼女の綺麗な顔を見上げて口を開く。

「そういえば、何で私のこと知っていたんですか？他校なのに。」

―初対面ですらないのに、この状況。おかしいよね、流石に。

「……ぁ、ああ。そんなの簡単よ。私、S大学にトモダチがたくさんいるもの。」

彼女は、まともな質問に気が緩んだのか、少しほっとした顔をして答えてくれた。

……トモダチ、ねぇ。
いつもの、あの女子どもの何人かがこの人のお友達ってことか。成る程な。…なら、さぞ屈折しまくったウワサがこの人の耳に届いてるんだろうな。

私は納得したように頷いて見せた。

「じゃあ、国崎……君、のマンションで会ったときには、もう私のこと知ってたんですね……」
「…そうっ！で、その子たちから、アナタがいつも聖悟にベタベタくっついてるって聞いたのよ！」

途端、パッと顔に生気が戻り、私に詰め寄る彼女。

…ゲ、ちょっと確認してみただけなのに元気取り戻してきた。
単純だが、立ち直りも早いのか。この人。
麗奈さんとちょっと似てるかも。……もちろん悪い意味で。

「…う、嘘です！そんな、ベタベタなんておこがましいっ！出来るワケないじゃないですかぁ！く、国崎君とは、ただの友達ですよぉ……」

とにかく調子乗られたらまずいので、また反撃、そして反論。
…妙な誤解されるのだけは避けたいからね。
わたわたと手を振りながら顔をゆがめる私に、相手がちょっと怯むのが見えた。しかし、今度は簡単には引いてこない。

「嘘よ！今日だって聖悟と一緒にいたくせに！！」
「だから、ソレもただ偶然会っただけでっ！」
「偶然でマンションの前まで来る？どうせ、アナタが言い寄ったん

でしょう！」
「……っ」
「何も言わないってことは図星？ホント、ムカつく女ね！」
…っく、私が押されてるだと……？
やはり元から狂ってるヤツに対抗するのは無理があったか？
「――だからっ！それは誤解で…」
「――違うっ！アナタは……」
私も負けじと叫び返すが、シノハラさんはさらにそれを凌駕する勢いで、責め立ててくる。
…うーわ、ヒートアップしちゃってるぅ……これ、どうすりゃいいのさ。
こうなったらヤケだ、と私は息を切らしながらもまた相手に向かって食ってかかった。
――
何分か経ち、この意味のない口論に私も疲れてきた。多分、向こうもナニ言ってるか覚えていないだろう。
だんだんと双方の言葉づかいも荒くなってきた。
「…はぁっ、そんなこと、分かってますって……」
「…げほっ、だったらアナタは何でまだ傍にくっついて……」
…ちなみに、議論自体は一歩も進んでいない。

…あーーっ面倒クセーーー！！
コイツは人の話を聞いてるのか？ことごとく私のセリフを打ち消しやがって。
自己中か？自己中なんだな？
国崎も、よくこんな女と付き合う気になったもんだっ！

会話を重ねるごとにだんだん苛立ってきた私は、
つい、この人に会ってからずっと気になっていたことをしゃべってしまった。

「…貴女は国崎君と、もう別れたんですよね？だったらそんな執着する必要、無いじゃないですかっ！！」

薄暗い部屋の中、私の声が響く。それ故に、その後訪れた静寂が、やたら重く感じた。

――言って、すぐに後悔した。数秒前の自分を抹殺したくなるくらいに。
…私の阿呆っ！こんなこと言ったら、相手をさらに怒らせるだけだろうが！

焦った私はマジで殴られるかと思い、身を硬くするが、
予想外なことに、彼女はいきなり口を歪めて笑いだし、やたら甘い声色で答えた。

「だって、欲しいもの。」
「……え？」

私がとぼけた顔を素でしてしまうと、シノハラさんはさらに笑みを深くする。

「…聖悟は最高の男よ。あのルックス、スタイル！まさに完璧な私に釣り合うと思わないっ！？」

「……」

「今日、水族館で会ってやっぱりどうしても欲しくなった……聖悟だってカワイイ彼女が欲しいでしょう？もう1度付き合うべきなのよ、私たちは。」

そこで、彼女はまっすぐに私を見て来た。目には、なにか狂気のようなものが宿っている。

「私の、完璧な生活のために、聖悟は必要なの。」

冷たい、声だった。

暗闇（3）

――何、ソレ。そんなんまるで…

「…国崎のこと、好きじゃないの？」

思わず、キャラを忘れて話してしまう。
しかし、興奮してきた彼女には気付かれなかったようだ。
笑みを貼り付けたまま答えてきた。

「ええ、もちろん好きよ。決まってるじゃない。彼氏のレベルはいつだって女のステイタスだもの。」

そして狂ったように高笑いする。

…その後も女は、つらつらと自分の自慢話を語っていたが、私はもう、聞いてはいなかった。
腹の底から、ふつふつと怒りが湧いてくる。

――こんな、不愉快に思ったのは久々だ。
何といっても、この女が気持ち悪くて仕方ない。吐き気がする。

―コイツは、一体、国崎を何だと思ってるんだ。ブランドの鞄？都合のいい道具？
だから、『スキ』？

ホントの『国崎』なんか、1ミリも気にしちゃいないじゃないか。

怒りが、体中をめぐる。彼女はまだ、雑音を発している。

狭い空間がさらに凝縮されたように感じ、眩暈がした。

―醜い。醜い。醜い。反吐が出る。

――アイツを思いだす――――

「……れ…」

本当に自然に、口を動かす。

「…は?何?はっきり言いなさいよ!」

彼女も口を動かすのを他人事のように見ていた。

……

…ああ、もういいや。

何でか知らないけど、酷く気分が悪い。

私は心の中で制止する声を無視し、低い声で続けた。

「…黙れよ、ブス。」

どうにでも、なれ。

「……な…っ!?」

女は目を見開き、顔を歪めた。
反対に私はゆっくりと立ち上がり、凍てつくような冷たい視線を彼女に送ってやる。

「…さっきから、黙って聞いてりゃ勝手なことばかり言いやがって……君、何様のつもり?ブスのくせに何が完璧?完璧って言葉の意味、分かってるの?」
「……っ!…ブ、ブスって、アナタの方がよっぽど醜いわよ!」
「誰が顔のハナシしてんだよ。性格がブスだって言ってんの。…何で国崎が君と別れたか、すぐ分かったよ。君、人生で一度でも自分が悪いとか思ったことある?無いだろ?性格が破綻してるんじゃ、いくら美人でも付き合いたいワケないもんなー?」

ニヤリと口の端を上げて、女を見下してやる。

―止まらない、止められない。
後先を考えなかったわけではないが、とにかくムカついていたのでつっかえがとれたように言葉が溢れてくる。
そんな私の毒を真正面から受けたシノハラさんは、顔を真っ赤にしながら怒りに震えだした。

「…あ、アナタ……本城那津!さっきと全く性格が違うじゃないのっ!」
「そりゃ、そうだろ。さっきのは作ったキャラだし。…ま、台無しになったけど。」
「…きゃ、キャラって。」
「見破れるワケないよね。付き合ってたくせに国崎が性格作ってた

ことも、気付かないんだもん。」
「!?聖悟も……」

シノハラさんの愕然とした表情を見て、彼女が本当に性格のことを知らされてなかったことを知った。

―哀れな女。でも国崎もこんなろくでもない女になんか、素はさらしたくないよな。
分かるよ。

肩をすくめ虚空を仰ぎ見る。そして私はさらにセリフを紡いだ。

「そ、つまりシノハラさんは国崎に騙されてたってことー。でもお互い様じゃない?君だってアイツを利用してたわけだし。」
「…で、デタラメ言ってると、締めるわよ!」
「デタラメじゃ、ないって。アイツの素はドSな俺様野郎だから。」
「ど…!?」

シノハラさんは目を瞬かせ、驚愕の表情を浮かべる。信じられない、といった風に。ザマアミロ。

…そこで、一瞬の間があいた。
と思えば、
今度はシノハラさんは鬼気迫る勢いで私に掴みかかった。

「…ちょっと待って。じゃ、何でアナタがそれを知ってるの!?」
「……。」

私を睨みつける彼女を見下すように私も視線を合わせる。

……ま、ごもっともな質問だな。
おそらく誰にも易々とは見せなかった国崎の地の性格を、何故私が知ってるのか？
それは――――
……
……あれ？何で、だ？
「…さぁ？」
「はあ！？」
や、そんなこと言われても、マジで分からない。
だって、最初からああだったぞ？記憶には、毎回私を弄って楽しむ国崎しか浮かばない。
―むしろアイツが紳士キャラやってたって方に驚きだったからね、私。
本気で悩む私を余所に、彼女は何か屈曲した感じでその答えを受け止めたらしい。
「……そう、アナタは自分だけが彼の特別だって言いたいワケね。自分だけが聖悟のことを理解してやってるとでも？」
…あ、ヤバい。なんかキレたよこの女。そんな解釈、誤ってるってのに。
「やっぱり、許してはおけないわね…」

そんな彼女の不気味なセリフに何か嫌な予感がした私は、身をひねって掴んでいた腕をもぎはずし、距離をとった。
それと同時に、近づいて来る複数の足音が響く。

…いかん、この展開は、まさか――

「未央ー、帰ったぜー。」
「コンビニ遠いよな、こっから。」
「あれ、例の女のコ、目覚ましたの？」
「アハハ、何この間抜け面ー」

私の悪い予想は的中し、奥の扉が開いたかと思うと、複数の男女が部屋にどやどやと入って来た。

……ひー、ふー、みー…
……は、8人だと！？
うわ、多い！しかも男女比、男の方に偏ってるし！
しまった、実はモンスターハウスだったか！？

今度は私の表情が凍る。逆にシノハラさんは瘢に障る笑みを浮かべながら、呟く。

「……ふふ。遊びは終わりよ、本城サン？さっきはよくも私を侮辱してくれたわね。」

そして、

「さ、あなたたち……やってちょうだい。」

最悪な命令を、下した。
それと同時に近づいて来る、妙にガタイのいい男たち。

「なに、ホントに好きにしていいわけ？」
「そうらしいぜー？」
「ちょっと、でもヤルのはやめてよ？女子の前なんだし。」
「ちぇー、マジで？」
「まあいいじゃん。じゃ、よろしくね。ナツちゃん、だったか？」

私は、顔を真っ青にして少しずつ後退したが、すぐに背中が壁についてしまい、なす術をなくした。
男たちが目の前に迫ってくる。私は観念して、目を閉じた。

――これは……死んだかな。私。

やっぱりどこか他人事のように、頭の片隅で思った。

暗闇（4）

―――

―――

…ドカッ！バシッ！バキィッ！！

灰色の空間に反響する、何とも痛そうな音。

…もちろん、その中心は私だ。

見知らぬ男たちは、容赦なく私を殴ったり、蹴ったりしている。

――どのくらい、殴られたんだろう？

頭、肩、お腹、足……

なんか、もう身体全体が痛い。

私が怒らせたからとはいえ、他人によくここまでできるなー。

意識も朦朧としてきたし、連れてこられた時より断然、気分が悪い。

「……か、はっ！」

ぼーっと天井を眺めていると、今度は正面の男のローキックが鳩尾に決まった。

…わ、最悪、口切った。痛い。

「ハハハハッ！どうした？もう動けねぇか？」

「クスクス……無様な姿ね！国崎君に手なんか出すからこんなこと

になるのよっ！」
「なあ、次俺が殴っていい？最近ストレス溜まっててさー」
それとともに、ふりそそぐ耳障りな男女の笑い声。
…ホント、気持ち悪いな。身体的にもそうだが、ここにいる人間の、何とも醜いこと。
ひどすぎ。てか、本当に人間なのか？この人たち。
「…ご気分はいかがかしら？本城さん？」
あまりの痛さに、うずくまったままでいると、シノハラさんの甲高い声が耳に届いた。
「……気分？良さそうに…見える…？」
こんなときでも、減らず口を叩いてしまう私は、多分バカなんだろう。でも。―この女には屈したくない。
そんな下らないプライドだけが私を支えていた。…さっきとは、えらい心境の変化だ。
「……ふふ、確かに見えないわね。それで、どうかしら？自分のやったこと、きちんと反省した？」
「私が…何を、したって？」
目を閉じたまま細い声で呟くと、女はカッと目を開き、いきなり私の胸あたりを蹴った。
「っぐ！」

一瞬、息が詰まる。
しかし、彼女はそんなことは気にも留めず、激しい感情をそのまま表に出すように、私にぶちまけてきた。

「っだから！聖悟に言い寄ったこと、私を侮辱したこと、その他諸々、すべてよ！！分からないのっ！？」

髪を振り乱し、血走った目で私を睨む彼女に、もはや、美人だった面影は残っていない。
…バケモノ、みたいだ。

これが『嫉妬』ならまだカワイイもんだが、この女は自尊心とプライドだけなんだよな……行動理由が。
――クズが。

「…っ、はは。」

思わず乾いた笑いが漏れる。

「…何よ。何が、おかしいの？」

だってさ。

「…可哀想っ、だから…君という、…人間が……」
「……！？」

シノハラさんは一瞬目を見開くと、また私の胸倉をぐっとつかんだ。

「な、なんですって……？もう一度言ってみなさいっ！」
「…っ！ゲホッ、ゴホッ……！」

…無茶、いうな。思いっきり人の体、蹴っといて。

「私が、可哀想……？何をバカなことを！！」

「……っそこに気付かないのが、可哀想だってんだよ！！」

私は最後の抵抗とばかりに、苦しさを押さえながらも思い切り声を張り上げる。

――倍返しされようが、これだけは、この女に言っておきたい。

「…そもそも、私を消したところで、易々と国崎が振り向くと思ってんの？国崎が君を相手にしないのは、単に君の性格が原因だろうが！」

ただならぬ気迫に気圧され、シノハラさんは目を丸くしたが、プライドの高い性格からか、すぐ口を開いた。

「…あ、アナタが聖悟に近付いたからよっ！私が悪いんじゃない！！」

「は、まだそんな頭悪いこと、言うの？自分のせいだって気付かないとか、本気の阿呆だな？気の毒に。」

鼻で笑ってやると、彼女の顔はみるみるうちに赤く染まる。

―怒りに。

「…っ！本城…那津……まだ痛い目に遭いたいの…？」

そして血走った目で私を脅してくる。

しかし私は息を大きく吸い、

「……本当の国崎のこともよく知らないくせに、欲しいだの自分にお似合いだの、好き勝手ぬかしやがって……！人の心がそう簡単に手に入ると思うなっ！！」

シノハラさんに一番言ってやりたかったことを叫んだ。

――静寂が、辺りを支配する。

呆然とした様子のシノハラさんも、さっきまで笑っていた男女も、時が止まったかのように全員動きを止め、言葉を吐いた私を見ていた。

そして、その私は、

――ん、我ながらクサいこと言ったな。しかも、かなりの暴言つき。…こりゃ、ホントにもう生きて帰れないかもねー。

なんて考えながら、この後の容易に想像できる未来を思い、自嘲気味に笑って、彼らが動きだすのを静かに待っていた。

――――いや、実際は、はたして想像通りにはならなかった。そのあと第一声を発したのは、ここにいる誰でもなかったからだ。

ミシッ、ミシミシ……バコオオォン！！！！

突如起こる、ものすごい轟音。
そして地響き、砂煙の後、聞こえた声。

「いいこというねー、ナッちゃん。惚れ直しちゃった♪」
「どーも、こんばんわー。ちょっとお邪魔するよ。」

耳に届いた聞き覚えのある声の持ち主、

水谷信二と、斎藤宏樹が

蹴り破られてボロボロになった扉の前で立っていた。

暗闇（4）（後書き）

少しダークな内容になりました…。
苦手な方スイマセン。ラブコメと豪語しといてこんな話（泣）

ヒーロー登場？そして…（1）

――びっくりした、なんてもんじゃない。
予想だにしなかった登場人物たちに私は驚愕に目を見開き、呆然と彼らを見つめた。

…えっ、なに、幻覚？私、ついに目までイカレたのか？

「……ちょっと、ナッちゃん？せっかく助けに来たんだから、もっと喜んでよー。」
「ま、ここまで来るのに結構時間かかっちゃったけど。遅れてゴメンね。」

しかし、私に近付いてくる2人は、間違いなく水谷・斎藤両人だった。
―軽い口調で話してはいるが、2人とも、表情は全く笑っていない。

「っ、な、なんでここが……っ！？」

いち早く我に返ったシノハラさんがおそらくここにいる誰もが思っているであろうことを、代表で叫ぶ。

私以上に驚いているらしい彼女の顔は真っ青だ。他の人たちも、ざわめき始める。

「……。」

斎藤と水谷は私の前まで歩を進めると立ち止まり、私のヒドイ有様に顔をしかめる。
そして、くるりと声の方を向いた。

「……そんなコト、別にどうでもいいでしょ。」

いつもとは違う、斎藤の刺すような冷たい声。

「それよりさ、―俺たちのダチに、何してくれてんの?」

その恐ろしいほどの迫力に、私は震えあがった。

「……っ!!」

息をのむ音がやたらハッキリ聞こえた。
私ですら恐怖を感じたくらいだから、シノハラさんが受けたショックは半端ないだろう。
彼女にはもはや顔色が無かった。青どころか、白。みたいな。

「―で、誰がやったのかなー?これ。女の子に暴力ふるとか、サイテーだぜ?ええ?」

水谷も斎藤の後に続いて、シノハラさんその他を威嚇する。…コイツも普段と全然違って正直、近寄りがたい。

「とっとと出て来たら?それとも、ビビってんの?」
「俺らも暇じゃねぇんだけど。」

ポケットに手を突っ込みながら飄々とけなしまくる彼ら。

…ホントに、ヒーロー、か？どっちかっていうと真の悪役登場、ってカンジですけど！
しかも、もう誰ですかレベルだろ、このオーラ！何だ、君らトランスでもしたのかっ！

「……っち！いい気になってんじゃねぇぞ！」

私が頭の中で色々と突っ込んでいる間に
彼らのブシツケな態度にいらついたのか、助走をつけながら男Ａが
斎藤の方に拳を振り上げた。

――！

斎藤に迫る男を見て、私は息をのむ。

…や、やばくないか？
さっきから啖呵切ってるけど、斎藤って強いの？見た目、虫も殺せないような優男だよ！？
マンガとかなら、こういうタイミングで現れるヒーローって普通はメッチャ強いって設定だけど、流石に現実ではそれはナイんでね！？
見ていられなくて、ぎゅっと目を閉じる。
すると、

――ドゴッ！！

「っうぐ！！」

次の瞬間、鈍い音のあとに、くぐもったような叫び声がした。

1発で倒され、地面にひれ伏したのは――――

「……弱。図体デカいだけだね。」

――彼に向かって行った男の方だった。

斎藤は、蹴りを入れた足を引きながらつまらなそうに倒れている男を一瞥する。

「……え、強っ」

彼の鮮やかな動きに、私の口から思わずつぶやきが漏れる。

―ウソだ。何このギャップ?スゴすぎて、さっきの男がマジでクズに見える。ごめん。

「…驚いたー?ナッちゃん。これでも昔はヤンチャしてたんだよ、俺ら。」

呆気にとられている私。

横を向くと、いつの間にか水谷が私の隣に座っていた。

…や、嬉しそうに言うことじゃないって、それ。

「…あ、そうですか。」

「反応薄ー。俺ら、地元じゃ結構有名だったんだぜ?ま、聖悟に比べりゃ大したこと無いけどな、俺も宏樹も。」

「へぇ、国崎もケンカするんだ。」

「ああ。今日ここにいるヤツらはまだ幸せだよ。聖悟相手だったら骨折じゃあ済まないからな。」

…わー、こわーい。それで、何が紳士なんだろうね？

「…あ、てなワケで女の子たちは下がっててね。キミたちと違って女を殴る趣味は無いから。」

そう言われて、遠巻きに斎藤と水谷を見ていた女子たちはビクッと体を震わせ、コクコク頷いた。

「信二、こいつら雑魚だから俺ひとりで大丈夫みたい。」

「あ、そー。じゃ見学しとくわ。」

斎藤はぐるりと室内を見渡し、敵の方を観察すると、そのように言った。

対して水谷は何事もなく私の隣であぐらをかいたまま。

…おい、何だよその『ちょっと買い物行ってくるわー』並みの会話。

…引くよ。女子たちみんな顔真っ青じゃん。

「…っこの！なめるなアホがぁああ！！」

「ブッ殺してやる！！」

そして案の定、ブチ切れるゴツイ男ども。

男Ａが倒されたことで動揺していたようだったが、彼の完全にこちら側をなめ腐ったような言いように、男のプライドらしきものが発動したみたい。残り全員で斎藤に突っ込んで行く。

「ホント、馬鹿だよね。」

斎藤の口が、ニヤリと歪んだように見えた。

―――

「……終わり、かな？」

斎藤はパンパンと手を払った。その体にはキズひとつ見当たらない。
足元には呻きながらゴロゴロと転がっている、複数の男たち。

…いやはや、やっぱスゲェわ。圧倒的って感じ。宣言通り、彼にとって男たちは雑魚だったらしい。
全員ほぼ一発で沈め、容赦なくダウンさせていった。

「オニーサンたち、ケンカする相手は選ばないとダメだよー。ケガするから。」

水谷は水谷で不気味に笑ってるし。

――私、とんでもねぇ人たちと付き合ってるんだなあ。

改めて違う世界の方々だと実感していると、斎藤がこっちに走って来た。

「お待たせ。…ナツちゃん、無事？」
「……無事、じゃないけど、まあ助かった。ありがと。」
「後で手当てするからな。今、圭が車回してる所だし。」

2人は私を起こし、立たせた。途端、激痛がいたる所で起こる。

…う、痛い。おそらく骨まではイッてないと思うが、打ち身とかがヒドイのかな？
顔を一瞬歪めるも、何とか無表情を保ち、私たちはへたり込んでいるシノハラさんの前に立った。

「…さて、始末は済んだし、本題はいろうか？」

斎藤の台詞がやたら大きく響いた。

斎藤は静かにそう言ったが、彼女は俯いたまま動かない。

「…あ、えーっと、篠原未央さん、だよね？聖悟の……何代目彼女だっけな……」

言いつつ、両手の指を折って数える水谷。
…数えられないのかい。アイツ、もしや歴代彼女が3桁いってるんじゃねぇだろうな？

「…信二、それは置いといて。
ね、質問に答えてくれる？何でナツちゃんにこんなコトしたの？」
「……。」
「…言えないの？」
「……。」
「話してくれないと分かんないんだけど。」
「……。」

じっと沈黙を守る彼女に、だんだんと斎藤の目つきが厳しくなる。
一触即発な雰囲気を感じ、私は慌てて彼にストップをかけた。

「ちょ、斎藤。もういいから。」
「…いいワケ、ないでしょ。そんな目に遭っておいて。」
「…ん、まあキズは痛いけど、その人に何言っても通じないし。」
「それは…そうかもしれないけど。」
「男どもは、もう斎藤が倒してくれたじゃん。それで十分だよ。」

言いながら私はシノハラさんを見下すと、しゃがんで彼女と目線を合わせる。
明らかに顔を逸らす女にため息を一つつき、その後ニコリと口元を緩ませた。

「……ねえ、篠原さん。私、君キライだわ。」

「……な!?」

ヒーロー登場？そして…（2）

途端に、黒髪を揺らし勢いよくこちらを振り向く篠原さん。
私は意地悪く、笑った。

「へぇ、口、聞けるじゃん？」
「……っ」

しまった、というように彼女は顔を紅潮させる。

「まー、嫌いなのはホントだけど？君は自分のことしか考えないから。いわば、自己中だねー。」

彼女を眺め、にこにこしながら全く穏やかでないことを吐く私。

……あー、言いたいことは言ったはずなのにまたモノ申したくなってきた。
ゴメン、小さい女ですから？ワタクシ。

息を吸い込み、笑顔を作ったまま話し出す。

「…大体さぁ篠原さん、人を人とも思ってないもん。そりゃ国崎だって逃げ出したくなるよ。君みたいなストーカー女、恐ろしすぎるから。
しかも関係ない人を誘拐してボコるって、手が古すぎ。コレ、何年

前のドラマ？マジないわー。
あとさ、今、何時だと思ってんの？一日にこんなイベント盛り沢山じゃ、疲れるって。こっちの都合も考えてよ。それにさー……」

ベラベラベラベラ。

マシンガンのごとく口が動き、言葉が出てくる。…体は超疲れてるのに、口だけこんな動くって不思議だな。

「……」

篠原さんはポカンと口を開けたまま、私のセリフを聞いている。

「…ナツちゃん……」
「スゲェ…やっぱ怒ってたんだ。笑ってるけどなんか笑顔が黒い…！」

斎藤の呆れた声＆水谷の感心したような声が聞こえたが、口が忙しい私は何もツッコまない。

ザ・スルーだ。

ただただ、今までのストレスをぶちまけた。

―――
――

「……な、ナッちゃん。そろそろストップしたら……？」

「多分、もう２０分ほど経ってるよ…？」
「…だって！だから……ん？アレ、もうそんなに経った？まだま
だ話せるのにー。」

――完全に日が落ち、夜も更けてきたころ。
誰が点けたか知らないが、電灯が煌々と灯り、薄暗い室内を照らす。

そこには、ぐったりとする斎藤、水谷、そして篠原さん。
対照的に、蘭々と目を光らせ、さらに言葉を紡ごうとする私。
――が、映し出されていた。

えー？何で皆そんなに疲れてんのー？

「……はぁ。いいわ、いい。…もう、分かったから。」

最終的に、篠原さんまでそう言いだした。さらに「コイツヤバいわ」
みたいな目で見てくれる。
―よせやい。そんな目で見られると、照れるぜー（黙れ）

「あ、ホント？言いたいこと分かってくれたー？」
「…ああ、ええ、うん。ハイ。もうなんかボロボロよ……」

心身ともにホントに疲れてるような様子を見せる彼女に、私は一応
満足した。ふっと笑顔がこぼれ出る。

「ん、じゃーいいかな。…斎藤、水谷。そろそろ帰るよ。」

そう後方の彼らに言いながら、踵を返そうとすると、

「ああ、……ってええ！？いいの！？これで！」

斎藤の、驚愕に満ちた声が追ってきた。

「えー。いいも何も……私は満足したし？」

ここまでやるつもりは、無かったけどね？

「っ、だって！そんなに痛い目に遭ったのに？」

「あーいいの、いいの。こんなん、どうせすぐ治るし。疲れたからもう帰りたいわ。」

「……。」

どこか渋い表情を作ってじっと私を見る斎藤。しかしやがて諦めたように肩をすくめた。

「……ま、ナツちゃんがそう言うなら俺らは何も言わないけど……」

彼は嘆息しながら静かに私の肩に手を回すと、

「……次、こんなことが起こったら、どうするか分かんないからね？」

鋭い眼差しを、篠原さんに向けて放った。

「……！！」

疲れ切ってる中、一瞬で体感温度零度を体験した彼女は、ブルッと体を震わせ、

「…そ、そんな気持ち悪い女、頼まれたって、もう近付かないわよっ！！」

捨てゼリフを吐くと、また俯いた。

―流石、斎藤。しっかり釘刺したね。

私は斎藤にフッと笑いかけると、再度篠原さんの方を向いた。

「…じゃ、私はそろそろ行くけど……」

そして、彼女の瞳を覗きこむ。

「…な、なに？」

「……そうやって可愛げのある未央チャンの方が、私は好きだよ？」

鮮やかな、笑みを残して言ってやった。

「っ！！？」

突如顔に血が上り、真っ赤になった彼女。

―こういうトコ、可愛いんだけどな、と思いながら私はまた口を開き、

「ちゃんと改心して、人のこともっと考えられるようになりなよ？そしたら国崎レベルの男なんて、一発で落とせるからさ。じゃーね。」

ヒラヒラと手を振りながら、斎藤とドアを目指して足を踏み出した。

――

よろよろと、コンクリートを踏みしめる。
…ううう、カッコつけてあんなこと言ったけど、やっぱまだ痛いや……
「大丈夫？」と声をかけながら支えてくれる斎藤に相づちを打つ。

――と私はふと、聞きたかったことを思いだした。
斎藤の方をちらりと見る。

「……あ、そうだ。斎藤。さっきの質問答えてよ。」
「…さっき？」
「うん。あの、何でこの場所が分かったかってヤツ。よく探せたよね？」
「ああ、それは――」

「…な、何なのよ、あの女……！」
「まだ顔赤いよー、未央チャン？」
「う、うるさい、水谷信二っ！気安く呼ばないで！！」
「ハイハイ。……あのさぁ、聖悟はもう諦めた方がいいぜー？ナッちゃん相手じゃ勝ち目無いって。」
「っ何で！？」
「だって――」

「麗奈さんが見つけてくれたんだよ。」

「聖悟とナッちゃん、もうチューまでしたらしいから。」

「なつぅううぅ！！！」

――斎藤のトンデモゼリフと、
案外近くで聞こえた、水谷の何言ってんだコノヤロウセリフと、
私の名前を呼び衝撃音と共に彼女が現れたのは、
全く、同時だった。

「……」

―全員の動きが止まり、何度目かの静寂が辺りを包む。
通常の人間なら一時停止するのが普通だろう。
もうどうリアクションすればいいか、分かんないような状態だ。

「……っ、え……う、はっ！？」

一番に発声したのは私だったが、
視線をあちこちに飛ばしながら、言うべきことを見失ってしまった。

……
…あ、いや、ちょっと待とうか。これ、どこからとっかかればいい系？
斎藤に理由説明させる？水谷のセリフの弁解？それとも、彼女の対処？

…おいおい勘弁してくれよジョニー…
突っ込みどこ、多すぎるぜ？俺に全部拾えと？

――しかし、展開は待ってはくれない。
混乱する私を余所に、入ってきた人物は突然抱きついてきた。

「那津ぅ！！大丈夫！！？」

…もちろん、相手は例の、高宮麗奈お嬢様だ。
見てるだけで男はイチコロであろう上目使い＋涙目で私の腰あたりにひっついてくる。

…色気の無駄遣い禁止令。誰を悩殺する気だ？君は。
私はどうしたものかとため息をつき、一応返事を返した

「……うん、大丈夫…」

―だから、とっとと離れろ。
押しつけられてる腰とかアバラが痛いから。

「ああ、よかった無事で！居場所はすぐ分かったんだけど、うちのＳＰに連絡を取ってたら手間取って来るのが遅れてしまったの、ごめんなさいね……。あ、でも那津、貴女ヒドイ怪我してるわ！すぐに手当てをしなきゃ……」

私の心の声は聞こえないらしい、基本ＫＹの麗奈さん。
私にしがみついたまま落ち着きなく話し続けた。

って……は？居場所はすぐ分かった？ＳＰ？なんのこっちゃ。

「……麗奈さん、君どうやって私の場所を…」

「…ああ、那津の携帯のＧＰＳ機能を使って場所を特定したのよ。ウチの社員は優秀だから。……って、そんなことはどうでもいいわ！何されたの？警察は呼んだ？あと……」

…以下、略。なんか同じような事繰り返していた気がするが聞いていない。

――や、どうでもよくないっすよ？高宮サン。

胸はって言われても、それ普通にやっちゃいけないことだろ！

てか、そんなことしたのか！？怖ぇよっ！！

ヒーロー登場？そして…（3）

改めて高宮麗奈という人に恐怖を感じているとひとしきり言いたいことは話したらしい麗奈さんは私に回した手を解き、今度はへたり込んでいる女に目を向けた。

「……あら、篠原未央さん、ではなくて？」

「高宮、さん……」

「…どんな人が那津にこんな酷いことをしたかと思えば、貴女だったの。そんなことだから貴女は品がないのよ。」

「っ、少し美人で金持ちだからって、調子のらないで！！」

あまりよろしくない雰囲気のなか、見つめ合う2人。間には火花が飛び散っている……気がする。

なんとなんとまさかの、知り合いのようだ。

どういう関係なんだろ、世界狭いな、……帰りたいな

2人が交わす、女特有のギスギスしたトークを聞きながらぼんやり思った。

「……ナツ、ちゃん。」

「…？」

しばらくして、放置していた男子たちに背後から耳打ちされる。

「…さっさと抜け出さない？この人たちに関わったらまた厄介なことになるよ？」
「俺も女の修羅場はゴメンだし、圭も待たせてんだよ。な、行こうぜナッちゃん？」
……うん、激しく同意だ。君らもたまにはいいこと言うな。私も彼らに向き返って、頷いた。
「…そうだね。じゃ、こっそり退散――」
そのまま出口の方へ1歩2歩と足を出す。
だが、
「…あら、どこに行くつもり？那津。」
――次の瞬間、がっちりと両肩を掴まれた。片方は、篠原さん。もう片方は麗奈さん。
…あは、そう簡単に、逃がしてくれるわけ、無いか……
…ですよねー。
2人は私の心中を知ってか知らずか、肩に手をのせたまま話しかけてくる。
「まだ行くには早いわ。私が篠原さんと決着をつけるまで待ってて。」
待ちたくねぇよ、麗奈さん。何時間かかるんだそのドラマは。
「待ちなさいよ、まだアナタには聞きたいことがあるのよ！」

もう黙ってくれよ、篠原さん。私には話すことはナイから。
すると、

「……あら、何かしら。那津に聞きたいことって。」

恐ろしいことに麗奈さんが篠原さんの話題に乗ってしまった。

―…は?
何でそこで私の話になるんだよおおおっ!誰が君らの舞台に参加表明したか!?

女たちの会話に、露骨に嫌な顔をしたまま静止する私。
――しかし、本当に顔に色がなくなったのは、この後だった。

「そうよ、大事なこと。……本城さん。さっき水谷信二が言ったことは本当?」
「?」

……さっき…?
私が黙って首を傾げると、彼女は焦れたように叫んだ。

「アナタ、ホントに聖悟とキスしたのっ!!?」

爆弾投下。
彼女のセリフを聞いた途端、本当に息が出来なくなって困った。

……!!!
な、に言ってくれてんだ、このアマぁああ!!!

……いや、水谷ぃいい！！
麗奈さんの登場でどさくさに紛れて忘れてたが……あんの野郎、わざわざ刺激するようなセリフ言いやがって！！
……つか、何で知ってるか、ソレを！！！

「……な、つ？」

すぐ近くで発せられた低い声にビクッと体を魚のように跳ねさせる。
心臓がこれでもかってくらい、速い速度で脈打つ。

…後ろ？振り向けないに決まってんだろ。石化するぞ？

――聞いたこともないような麗奈さんの声に、ビクビクするばかりの私。

頭が真っ白だ。これから何が起こるか、全く分からない。予測不能。
なんてことだ、私はまた未知に挑まねばならないのか…！

「……那津？聞こえ、ないの？」
「っひゃ、はひ！！」

ヤバい、これは酷い。呂律が回りません、隊長！！
スリル満点のジェットコースターに強制乗車させられている気分の私は、恐る恐る前を向いた（向かされた）。

「那津、それはどういうこと？」

案の定、麗奈さんがキラキラとした笑顔で、私を問い質してくる。

「……あ、えっと嘘です。全くのデタラメです、ハイ。」

「じゃあ、何で水谷君がそんなことを言うの？」
「それは、その場のノリでヤツが適当言っただけで……」
「適当でそんな言葉はでないわよ？普通。」
「……。」

……ちっ、ダメだ、信頼性の低い言い訳しかできない……！
麗奈さんも、いつもは騙されてくれるのに今日はやたら突っ込みやがる……

―どうするよ？私。本当のことなんか、言えるワケないし。
かといって、真実を隠し通す技術も、私は持っていないし……

―それきり黙って悩みだす私に、だが麗奈さんの呆れたような声が降ってきた。

「はぁ……分かった。貴女も疲れているものね。問い詰めるのも可哀想よね…」

それを聞いた途端に、道が開けたように気分が浮上する。

…お、これは、諦めてくれたのか！？ラッキー！女神だ、貴女様は！！

「そ、そうだね。今日はもう遅いし……」

顔をパッと上げて便乗する私に、麗奈さんはニコリとほほ笑んだ。

「……そう。だから、後は私の家でゆっくり聞かせてもらうわね。」

……。

私は、意識を一瞬飛ばした。そして、再度聞いてみる。

「……え、今、何て？」

思わず聞き返してしまうくらい、衝撃の発言が聞こえたような、聞こえてないような……？

いや、聞き間違いだよね！最近幻聴が酷くてまいったなぁ……

―しかし、彼女はいともたやすく私の夢を打ち砕いてくれる。

「だから、今日は私の家に泊まって、ゆっくり話しましょうって。」

っ、やっぱ幻聴じゃなかったーー！！！

てか、なにそのホラー企画！？私にひと晩で何回死ねというんだ！！

「……そうそう、篠原さんもいらっしゃい。決着は今夜、家でつけましょう？」

「…ええ、いいわ。望むところよ。」

えええええぇ！何で君までーーー！？

しかもこの2人なんか結託してないっ！？いつの間に！？

「…や、私お邪魔みたいなんで今日は遠慮「さ、行きましょ、那津！表に車が来ているから。」

「あの、私は行きたくな「逃がさないわよ？本城那津。今夜のお礼は、たっぷりしてあげるから。」

ああ、もう駄目だ。日本語通じねぇや、この女ども。

唖然とする私の腕をぎゅっと握り、麗奈さんは歩き出す。篠原さんはその跡をついて来る。

本気でヤバいと感じ始めた私は顔をひねって味方と思える彼らに向かって、叫んだ。

「斎藤、水谷！何とかしてくれ！」

―しかし。

「…うーん、俺にはどうしようもできない、かな？」

斎藤、テッメェ！首かしげても可愛くねえから！

「…水谷！」

「だって、事実じゃん？しょうがなくね？」

諸悪の根源が何をいうかあぁぁあ！！

「…ちょ、待て！君らは君らで話していいから、私は置いてけ！！もういい加減にしろぉおおおお！！！」

私の悲しげな悲鳴は廃屋の中に響き渡り、そのまま消え失せた。

――高級車の、エンジン音とともに。

――

「…あーあ、行っちゃったかー。」
「信二のせいでしょ。何であんなこと言ったわけ？」
「だってさ、そろそろハッキリさせた方がいいだろ。あの人たちも……ナッちゃんも。」
「はぁ、ま、分からなくはないけどさ。そんなこと言ってるとまぁた聖悟に殴られるよ？」
「うげ、それだけは勘弁！」

カチャ、
ピ、ピ、ピ……ＰＬＬＬ……
……ガチャ

「……もしもし聖悟ー？ん、あー居たには居たけど……。違う。あ、待て切るなって！実は――」

黄金の檻（1）（前書き）

前回までのあらすじ、パート2～

日曜日、国崎と成り行きでデートすることになった本城那津。
那津は国崎にセクハラされながらも、水族館でそれなりに楽しむが、彼の家へ向かったとき、国崎の元カノである篠原未央が現れた！！

それを口実に帰ろうとした那津は、何者かに背後から殴られ、拉致されてしまう！

――目が覚めたら廃屋の中におり、那津は、実は篠原未央が国崎関係の問題で、自分を拉致したことに気付く。

そして未央の言うコトにあまりにも腹が立った那津は、一度はキャラで自分を守ろうとしたものの、あっさり素を見せ、未央に説教をかました。

怒り狂った未央は『トモダチ』の男たちに那津を襲わせる。

ボロボロになった那津だったが、斎藤・水谷が助けに来てくれ、事なきを得た。

しかし、

その後さらに高宮麗奈が現れ、今度は彼女の家に拉致されることになった那津だった……

「…ねぇ、いい加減にしろよ、作者。今日1日でどんだけ話進めるつもり？」

※いけるトコまでです。

次ページから本編だよ→

黄金の檻（1）

「……。」

なんで、こんなことになったのかしら。

「さ、那津。手当てもしたし、もう安心よね？たっぷり話してもらおうかしら。」

どこが、安心だ？

ホコリっぽい廃屋からゴージャスな黄金の檻に変わっただけじゃないかっ。

「さて、サクサク白状してもらおうじゃない。」

そして、君はなんで当然のような顔でここにいるのか？

麗奈さんとバトる予定はどうした？

目の前でほほ笑む、２人の美女。でも私には、闇魔サマにしか見えません。ハイ。

……もう、ヤダ。私、今日が命日かもよ？マジで。

―――
――

廃屋から連れ出され、車で運ばれた先は、見たこともないような大豪邸だった。門から玄関までが異様に長く、家の端から端も見えないわ、庭に噴水はあるわ……

まったく、スゲェのひと言に尽きる。

内装もタダゴトじゃない。ゴージャスなシャンデリア、贅をこらした調度品、やたらたくさんいるメイドに執事……

…マンガか。もう着いていけない世界だ。

――そして、私は着くなり麗奈さんかかりつけだという医者の往診を受け、即座に手当てされた。

体中に包帯が巻かれ、薬を塗られる。幸い骨は折れていなかったが、やはり打ち身、ねんざ、擦り傷がひどく、全治1週間…とか。…案外、かかるな。

看護婦やメイドが手当てを手伝ってくれ、なんだか気恥ずかしかったが、
まあ治療費はいらないらしいので、よしとしようか。

……ここまでは。

「……では、那津様。浴場に参りましょう。」

「……は？いえ、いいですよ。そんな…」

ひく、と引きつった笑いでメイド服の女性を見上げる。

…まさか、風呂までついて来る気か？このメイド。

「しかし、麗奈お嬢様の言い付けでございます。怪我をしている身では入浴も難しいだろうから、と……」

おいぃぃ！麗奈さぁあん！！だから、いらねー気回すなって！

じりじり迫るメイドさんに、後ずさりする私。

「……や、いいですっ！お風呂貸していただけるだけで十分です！だから……ってうわぁあぁぁ！！？」

……その後のことは、ご想像におまかせしよう。

ううう、もうお嫁にいけない……ぐすん。

―――

―

お風呂から出た私を待ちうけていたのは、入浴済みらしい麗奈さんと篠原さんの姿。

湯あみ後の彼女らは女神さながらに美しい、が。

「那津。こちらにいらっしゃい。」

「ほら、早く。」

……眼差しは悪魔を凌駕するくらいだ。

私は恐怖に怯えつつ近付き、これまた豪華な丸テーブルに3人、顔を合わせて座った。

――そして、冒頭に至る。

2人は笑顔、私は冷や汗まみれ。

ううん、何から話せば……何話しても怒られそうなんだけど……

「…あ、麗奈さん。ありがとう。手当てとか、お風呂とか……」

とりあえず無難にお礼から述べる。

「礼には及ばないわ。その服も、似合ってるし。」

「……ホントに？」

嘘つけ。

先程、悪夢の入浴が終わり、用意されたものに着替えたはいいが…

…私はちらりと自分の着ているものを見た。

――レースがふんだんにあしらってある、フリフリのネグリジェ。

しかも、白。

……麗奈さんの私服だろうが…ぜっっったい、似合うワケないだろ。

私に。しかも、髪も緩く巻かれているし。

…この服装も私のテンションを下げる要因のひとつなんだが。

私は、がくりと項垂れた。

そして、

「……」

「…何よ、その目。」

ジトリ、と目の前の黒髪の美女を見る。何でこの人はここにいるんだろうか。

私をボコしといて、この余裕。反撃とか復讐されるとか、考えてないのか？

……や、しないけどね。面倒だし。

でも、空気悪い上に気まずいな。ったく……

素知らぬ顔で紅茶をすする篠原さんを見て、またため息が出た。

「……さて、そろそろハッキリさせましょう？」

篠原さんに気を取られていると、麗奈さんが本題、とばかりに冷静な声で話しかけてきた。

その声色に甘さは一切含まれておらず。とびきり濃いコーヒーミルク抜き砂糖抜きのような、厳しい感情がひしひしと伝わってくる。

ビクリと私は体を震わせた。こ、これがこの人の真の姿……？

「は、はっきりとは…なんですか？」

「いい？那津。ホントのことだけを、答えてね。」

む、無視…！ヤバい、本気だこの人…！

視線が冷たすぎる……っ

「ち、ちなみに嘘ついたら？」

「…そう、ね。大学退学、とか？不可能なハナシではないし…」

……！！！顔が恐怖でビシリと固まる。

戦慄だ！たかが嘘つくだけで何その報復ーーー！？

鬼畜すぎるぞ！この女ぁ！

……いや、しかしこの人ならやりかねん。

なんてったって、国崎のためならどこまででも暴走していくような女だ。ためらいなく、やるだろう。それくらい。

……。

――考えに考えた挙句、仕方なく、私は覚悟を決めた。

「……わか、った。」

すっと表情を消し、彼女らを見据える。

この時点で、私の選択肢は一つしか残っていない。

――すなわち、

真実を話して、死ぬこと。

……死ぬこと前提ってあたりが私だなー。ま、ほぼ確実な未来だし？とりあえず大学退学だけは、絶対ヤダからね。

「…ふふ、那津は頭がいいものね。そう言ってくれると思ったわ。」

「お褒めにあずかり、光栄です。」

「こんなときも余裕なのが、貴女らしいわね。」

別に余裕なわけじゃないけどね。ただの強がりですよ、お嬢様。

私はふう、と息をついた。一瞬体の力を抜き、また表情を引き締める。

…っはー、話す内容が内容だし、やっぱり緊張する。

―しかし、もう腹をくくったことだ。

2人の視線が集中する中、私はすうっと息を吸い込み、話しだした。

「……私は。確かに奴、国崎聖悟と、キスという名の皮膚接触をいたしました。」

…宣誓かよ。

…いやしかし、白状させられる凶悪犯の気持ちってこんななのかなー……仕方ないことなのに、言ってから後悔するような。

「…！やっぱ本当なのねっ！」

「皮膚接触って……」

各々リアクションをとりつつ責めるような目つきで見てくる2人。

私は気迫に飲まれ、後ずさった。

や、やっぱり予想通りのリアクションを取ってくれますね、君ら！

「…や、でも事故だからね！なんかその……あれ、恋愛的なヤツじゃなくてっ」
「どこをどーなってキスなんて事故が起こるのよっ！」
「もっと詳細に事態を説明して！！さあっ！」
……うぅ～怖いよ君たち……何その目…今から誰か殺しにでも行くのか？……あ、私？
――結局、私は涙目で、ことの顛末を全て語ることになったのだった。
――
――
「…い、以上です、ケド……」
「……」
「……」
話し終え、怖々、彼女たちの様子をうかがうと2人とも仏頂面で何か考え込んでいた。
……な、何か反応してもらわないと、こちらも動きようがないんですけど。
やっぱり、怒ってる？
…どうしよ、いきなり刺されたりしたら。
明日の新聞に記事でるかな？『刺殺死体発見』とか？

……

い、いやだぁああ！こんな形で新聞載りたくないぃいいい！！

「……那津。」

「え、は、はい！」

私が最悪の事態を考えていると、横から麗奈さんが話しかけて来た。

な、なんだ！どんな言葉が出てくるんだっ！ちょ、待って、まだ心の準備が……！

「…それで……貴女は聖悟君のこと、どう思っているの？」

「……は？」

―が、思っていたのとはそれも違う返答。

え。罵倒が来ると思ったのに、まさかの質問？思わず聞き返しちゃったよ。しかも……

「どう、思ってるって？」

「ったく、鈍いわね！聖悟のこと好きかどうかってことよ！」

イライラしたような口調で篠原さんも口をはさむ。

…ああ、さいですか。すいませんね、馬鹿なもので。

私はとりあえず息をつき、テーブルに置いてあった高級コーヒーを一口飲んだ。

「……そんなこと言われても、国崎はただの友達だよ？」

何度も言ってるのに、何で誰も信じてくれないんだろう？

「嘘でしょ、絶対。」

ほら。

「いやいや、ホントだって。彼を……その、レンアイ対象として見たことないから。」

「…じゃ、好きじゃない？」

「あー好きじゃない、好きじゃない。だから、国崎のコトを狙いたいんならどうぞご勝手に。私は関係ないですから。」

…投げやりっぽくて、悪いな国崎。だが私のためだ。辛抱してくれ。

私がそうきっぱりと言い切ると、麗奈さんと篠原さんは露骨にため息をついた。

「……はぁ、国崎君も可哀想に。」

「なーんにも、伝わってないわけね。」

「へ？」

だから、何が？

…アレ、なんか斎藤たちにもそんな感じのこと前に言われたような？

何でだろう、と首をひねっていると、篠原さんはニコリと笑って私と目線を合わせた。

「…ま、いいわ。気付いてないなら好都合だし、ね。」

何に、気付いてないって？
あーもう意味分かんないんですけど。ここまで理解不能な会話が繰り広げられるとなんか腹立つな。

私が仏頂面を作って唸っていると、彼女はコホン、と咳払いをして改まった。

「―そこで、アナタに1つお願いがあるんだけど。」
「…？何。」

お願い、つか命令だろ、どうせ。注文の多い人だな。何だよ？

「聖悟には近付かないでくれる？」
「…は？」

話、聞いてなかった？私は単なる友達だって言ってんのに。
篠原さんの謎な言動に、私の頭の中は疑問符でいっぱいだ。

「……何で？」
「何でも、よ。たかが女友達でも目障りだもの。」

め、目障りって。酷い言われようだな。

「いいでしょ？本城さん、聖悟のことを何とも思ってないんだし。」
「……」
「アナタ面倒なことが嫌いなんでしょ？」
「……うん…」

私は言いながら頭を回転させる。

――うん、そうだな。

その通りといえば、その通りだよ。

元はと言えば、ヤツと一緒にいたからこんな騒動が起きたワケだし。

…そろそろ国崎の方も私に飽きるころだろうし？

もう、振り回されるのはこりごりなんだろ？那津。なら別にいいじゃないか。

―国崎とは、もう会わない方がいい。

「…そしたら、君は私にはもう関わらない？変な誤解はしない？」

「ええ、いいわよ。約束する。」

「…なら――」

私は口を開いた。

「……分かった。国崎には、もう近付かないから。」

――ズキン、

「……？」

言った瞬間、何故か胸が痛んだ。

チクっと、刺すような痛み。心の、内側から。

…何だろ。なんか病気か、もしかして？

原因不明の痛みに胸を押さえる私を一瞥し、
篠原さんは「そう、」とだけ答えてまたニコリと笑った。

黄金の檻（2）

―――

―――

「……ねぇ那津、本当にいいの？」

「ん？何が？」

部屋からこれまた煌びやかな廊下に出たとき、麗奈さんに呼びとめられた。篠原さんは先に行ったから、ここにはいない。

私と麗奈さんが広い廊下の中央で向き合う。

先程から終始無言だった彼女の様子は……なんか変、だ。怒っているわけでもなく、悲しんでいるわけでもない。

そう、私を心配している……ような。

……何故に？

「…なにがって、国崎君とのことよ。もう彼とは会わないって、本気？」

「？うん、そのつもりだけど？…麗奈さんもその方がいいんじゃないの？」

なにを、そんなに心配してるの？

恋にお邪魔なヤツが消えるだけじゃん。好都合でしょ。君にとっては、むしろ。

私は首を傾げたが、麗奈さんは俯いてしまい、顔が見れなかった。
無言でそのままの体勢を保っていた彼女はしばらくすると、ギュッとこぶしを握りしめ、決心したように私に視線を向けた。

「……ううん、私、聖悟君のことは諦めることにしたから。」
「……へ？」

何だって？
その衝撃の一言に、私はポカンと口を開けたまま固まってしまった。

「…なんで？」

…さっきから疑問符ばかりだな、私。
…でも、本当にワケ分かんない。あんなに泣いて苦しんでいたのに。君。しかも国崎と私のことを問い詰めて来たじゃないか、たった今。
怪訝そうな顔を作る私を見つめ、麗奈さんは静かに微笑みながら続ける。

「…私ね、那津の話を聞きながらいろいろ考えたんだけど、彼が幸せならそれでいいって、最終的に思うようになったのよ。」
「しあ、わせ？」
「そう。だから国崎君を応援したい。」
「……」

国崎の応援って……何だ？何が、国崎の幸せ？
全然分からない。けど、

「……それで、君は本当にいいの？」

麗奈さんが自己犠牲を払おうとしてるのは分かった。

彼女の穏やかな目に、不安げに瞳を揺らす自分の姿が映る。

だが、それでも麗奈さんは、綺麗にほほ笑んだ。

「いいのよ。那津の話で決心がついたわ。…それにね。私、那津になら負けてもいいって思えるもの。」

「え？」

「消えるのは私の方にするわ。聖悟君にもそう言われたんでしょ？」

「…え、ああ……そうだけど…」

何で、知って…？

「―だから、貴女は聖悟君の傍にいなさい。」

呆気にとられる私を余所に、麗奈さんはキラキラした笑顔でそうしめた。

その顔は本当に晴れ晴れとした様子で、なんか色々とふっ切れたみたいだ。

…対照的に、私は頭の中がパンク寸前で。もう彼女が何言ってんのかすら理解できない。

「……っ、麗奈さんそれどういう――

……むぐぁっ！？」

疑問を晴らそうと、私はさらに問いかけるセリフを言おうとしたのだが、途中でいきなり目の前が真っ暗になり、何か大きなもので包まれた。
そのまま腰辺りに手を回され、キツク抱き締められる。
……え!?また真っ暗じゃん!なに、何コレ、誰?
あまりのことに体が硬直する。またもや混乱に陥った私の耳に、麗奈さんの落ち着いた声が聞こえてきた。
「あら、こんばんわ。……遅かったのね。」
「……どうも。」
「――!」
麗奈さんに言葉を返した人物は、
私のすぐ傍で聞こえた、馴染みのある低い声の人は、
会話のネタであった、国崎聖悟本人だった。
――
身体を抱いている人物が特定されるや否や、私は腕をぐっとつき出して暴れだす。じたばたと、それはもう、勢いよく。
―てか、ナンデ君ガココニイルンダ!?

そして来てすぐこの状態って何事っ！？頭、狂ってんじゃないか？
こいつ。
…篠原さんがこの場にいなくてマジで良かった。約束ソッコーで破ってるし。

「く、国崎！？なんでここが…「うっせーな、黙ってろ。」

…うぁ、いつもより口調荒っ！なに、コイツも怒ってるの？
ちょ、涙目なんですけど私。本気で怖いんですけど。

――しかし、あまりにも彼のオーラが黒いので、私はしぶしぶその場で縮こまってるしかなかった。
その間、麗奈さんと国崎の会話が続行される。

「…じゃあ、那津を連れて帰ります。色々とありがとうございました。」

…保護者か君は。コイツが親父だったら私泣くな、きっと。

「そう、見送りはいらないようね？」
「……はい。」

…わ、麗奈さん、なんて穏やかな笑顔。私もそんな顔がしてみたいもんだ。無理だけど。…最近は特に。

ニコニコほほ笑む麗奈さんと、顔が見えない国崎。
何だかピリピリした微妙な空気の中、じっと息をひそめて、私は彼らの会話を聞くことに徹した。
――つーか、それしかできないんだけどさ、この状況では。
口をはさめる雰囲気でも無いし。

「…ねぇ、聖悟君。」
「……何か。」
「ふふ、そう身構えなくてもいいわよ。…これで、最後だから。」
――最後、だって？
私は驚いて顔をあげようとしたが、またもやたくましい胸板に頭をおしこまれる。
まるで――お前は、何もするな、とでも言いたげに。
……横暴な。
しばらくの間。
があいて、すうっと息を吸い込んだ麗奈さんが静かな声で続けた。
「…あのね、貴方にとって私は鬱陶しい女だったかもしれないけど、私、聖悟君のこと、本当に好きだったわ。」
「……。」
国崎の体の隙間から覗き見た麗奈さんの表情や声は真剣そのもので。
私は思わず変な顔を作った。
…ええ？何を言い出すんですか、麗奈さん。
1年越しの告白を何故今言うんだ？しかも、コレ私、超邪魔じゃないか。
激しく立ち去りたい……彼女の声を聞くのが、なんか怖いし。
……しかしソレすら許してくれないのが国崎という男で。
私はもはや、腕すら動かせなくなった。―拘束力、半端ない。
「…貴方は覚えてないわよね、入学式のとき、私を助けてくれたな

んてこと……でも、その時から私、聖悟君に片思いしていたの。」

「……そう、ですか……」

国崎が今何を考えてるのかは全然分からないが、回された手が少し強くなったように感じた。

「……まあ、返事なんかいらないわ。もう分かり切ったことだし、ただ聞いてもらいたかっただけだから。それに、貴方にはもう好きな人がいるみたいだし？」

「……すみません。」

麗奈さんはふっと息を吐くと、笑いながら軽い口調で言葉を紡ぐ。

「…っふふ、別に謝ることなんてないわよ。私と貴方の好きな人が違っただけ。そうでしょ？好きな子がいる男を追いかけることほど難しいことは無いから……」

彼女は言いながら、腕の間からひょっこりと顔を出す私に笑いかける。

そして、

「だから、私はもう、退散するわね。」

高宮麗奈は、キレイに、あまりにも鮮やかに笑った。

でも、何処か胸が切なくなるような笑みに、私の心の奥はズキ、と痛んだ。

彼女の心と繋がっているかのように、私の胸がきゅうっと、締めつけられるように痛む。
麗奈さんの気持ちが、じかに伝わるように。

「……っ、」

その苦しさに、息が詰まったようにかける言葉を亡くした。
そして、実感する。
――この人はホントに国崎のことを諦めたんだ、と。

冗談かと思ったが、彼女の言葉ひとつひとつに本気を感じた。
これは、真面目（マジ）なハナシだ。笑えないジョークには出来ない。

―そう思うと、自分が失恋したわけでもないのに、すごく胸が苦しくなった。
別に、何の責任も感じてるわけじゃない。
ただ、苦しい。

「……高宮さん。」

ふいに、国崎が発言する。
表情は相変わらず見えないが、麗奈さんと同じく真面目な口調。
だが、

「…何？」
「アンタは、いい女だな。」
「……へ？」

真剣な声から一変。明らかに口調の変わったヤツに、私と麗奈さんのマヌケな声が重なった。

彼女の方は無意識に声を出したんだろうが私も結構驚いてしまった。

――アレ、素じゃね？この国崎。

しかし、私たちの反応などお構いなしに国崎はまた話しだす。

「美人だし、潔いし、俺には勿体なさ過ぎて、付き合うなんて出来ない。もっといい男がお似合いだよ。」

国崎の腕が緩み、私が解放される。今度は肩に手を置かれ、彼の隣に並んだ。

私がヤツを見上げるとヤツとも一瞬だけ目を合う。

だが、すぐに彼は前方を向き、

「ゴメン、ありがとな。」

国崎聖悟は、最後にそう締めくくって、ニヤッと、笑って見せた。

「……。」

瞬間、麗奈さんは無言のまま、そのまま石化したように動かなくなってしまった。

「れ、麗奈、さん？」

顔の前で手をふってみるも、反応ナシ。

え、大丈夫か？この人。てか、何でいきなりフリーズ？

そんな彼女を背に、国崎は恐る恐る麗奈さんの顔を覗きこむ私の腕を、引っ張った。

「じゃ、行くぞ。那津。」

「…って、えぇ？ちょ、この人このまま放っとくの！？しかもナニ綺麗に終わろうとしてるわけ！？全然分からん！」

「いいんだよ。終わったんだから。」

いいわけねーだろっ！

麗奈さんはあんだけ君一筋だったんだぞ！？それで、ここにきて『ハイ、もう終わり』！？

人の気持ちがそうコロコロ変わってたまるかっ何か相当なコトがあったからだろうが！

…あーもう分かんね。誰か、ぷりーず説明！！

「だーーっ、ハナセ国崎！麗奈さんに聞っ……「必要ねぇ」

「でもっ……」

「那津。」

自分の名前を呼ばれ、声も動きも止まる。顔を上げた瞬間、ぶつかった視線が妙にアツかった。

「いいから来い。さっさとしねぇと、俺、本気で何するか分かんねぇぞ？」

――――！！

今度は私の顔がフリーズする。

あ、……あぁ……またでたよこの男のブラックサイド……！
ここ最近、何回やってんのそれぇ……
また体感温度下がって来たんですけどっ！？

そんなの、

「…あ、う、はい。行きます。」

こう言う他ないじゃない。ヘタレな私は。

結局、ヤツに引きずられながら、私はこの豪勢なお屋敷を後にしたのだった。

――広い廊下に、高宮麗奈ひとりを、残して。

黄金の檻（2）（後書き）

麗奈さんフェードアウトの巻。女キャラって動かしづらいなあ……

閑話そのに

＊ｒｅｉｎａ　ｓｉｄｅ＊

バタン、と玄関の方から扉のしまった音がする。
聖悟君と那津が出て行った方向を見やると、途端に涙が溢れ出した。
――我慢、してたんだけど、あの2人には気づかれたかしら――
…いや、どうせ気付いていたんだろう。
くすりと自嘲気味に笑い、力を抜くと重力に従ってその場に崩れ落ちた。
涙がとめどなく溢れてきて、止まらない。嗚咽も漏れる。
那津には平気そうな振りを見せてたけど、やっぱり失恋は堪える。
……それも、大好きな人には。

結果なんか分かっていたコト。
聖悟君に好きな人がいるのも知っていたコト。

しかし、1年も膨らみ続けた想いを捨て去るには、時間がかかりそうだ。

でも――――

「…はじめて……本当の貴方を見せてくれた……！聖悟君…っ」

呟きながら、また新たな筋を流す。胸がいっぱいになって息苦しさえ感じる。

――本当の彼は。

私がイメージしていた聖悟君と全然違くて、那津の言った通り、偽りの性格を作っていたのだと知った。

でも、それでも、最後に見せた笑顔は、おそらく本物の笑顔。

失恋を悲しく思う反面、最後に本当の彼が見れて、すごくうれしく感じる自分がいる。

…それでね、

2人一緒に並んでいるのを見て、やっぱり私じゃダメだって、思ったのよ？那津。

さっき、聖悟君がどんな顔をしていたか、分かる？

那津と一緒にいるときの彼と、私といるときの彼。

全く違う顔をしてるんだから。

私がどんなに頑張っても、聖悟君は絶対振りむいてはくれない。

彼には、貴女だけなのよ。多分。

だから――――……

「……聖悟君を振ったりなんかしたら、許さないんだから……」

那津、貴女になら負けてもいい。この言葉に嘘はないわ。

…でも、貴女以外が彼の隣に並ぶのは嫌だから。

絶対、上手くやるのよ。

私はぐっと涙をぬぐうと、長い長い回廊を戻った。

――――

＊ｍｉｏ　ｓｉｄｅ＊

「……ふぅ、疲れたわね……」

高宮麗奈に言い渡された部屋に入り、ふかふかのベッドに横たわる。

遅いから泊まっていけ、と彼女のご厚意らしい。

…全く、金持ちは得よね。『人間みな平等』なんて戯言、誰がホザいたのかしら。

ぼす、とふかふかした布団を叩くと、弾力のある羽毛が手を跳ね返してきた。

……まぁ、高宮麗奈は後でゆっくり排除するとして、目下の敵は、

あの地味女よね。

本城那津。

あの平凡そうな女に何の魅力があるワケ？

―ホント、冗談だと思いたいわ。聖悟がまさか、あんな子を追ってるなんて。

でも、話を聞いてる限りではそうなのよね……

本城那津の話が嘘っぱちって可能性もあるけど、こんなので嘘を言う理由もないし。

ってことは、マジ、なのね。

「はぁ……」

思わずため息をつく。

昔は私みたいな美人やカワイイ子を付き合ってたのに、どこをどーやってこんな趣味悪くなったのよ、聖悟。

…やっぱりあの女が妙なことをしたに違いないわよね。聖悟は騙されてるわ、絶対。

斎藤宏樹も、水谷信二も味方にするなんて侮れない女。

邪魔以外の、ナニモノでもない。

私は寝転がりながら、ぐっと手を握り締める。

「ふふ……待ってて、聖悟。目を覚まさしてあげるから。」

本城那津は聖悟の気持ちなんか微塵も気付いてないみたいだし、釘もさしておいたし、攻めるなら今よね？

――前より格段にカッコよくなった聖悟。

貴方はやっぱり私の彼氏になるべき存在、よ。

必ず、私があの女から救い出してあげる。

フクザツ感情（1）

――バタ、ン！

見慣れた黒い日本車のドアが多少荒々しく閉まる、と同時に、正面からまた思い切り抱き締められた。

……言わずもがな、国崎に、だ。

ヤツは私の腰に腕を回し、肩に顔をうずめている。

「……」

「……」

そして、この無言。

…どうしてくれようか、この男。いや、どうしたいんだろ、この男。

「…オイ。国崎、離せ。」

「……。」

だから無言は困るっての。どうしてさっきからずっと顔見せないのさ？

しかも――体、超痛ぇ。

「……っは、苦しい、てか痛いから！離して！！」

私のアバラ、その他の骨が悲鳴を上げていることを訴えると、よう

やく少し力を弱めてくれる。
しかし、体勢を変えるつもりは無いのか、全く動いてくれない。
……だから、何がしたいんだってば。もう……
「…何を、された？」
しばらくして、やっと国崎の低い声が耳元で聞こえた。
「……何を、って？どういう意味？」
「…未央に、何をされたかって聞いてんだよ。」
言いながら国崎は体を少し離すと、私の頬を右手でなぞる。
それが何だか恥ずかしいんだか、くすぐったいんだかで、私はフイと顔をそらした。
「……や、別に何も…「嘘つけ。」
私のおどけた口調は、彼の鋭い声で即座に遮られた。
「何も無いわけ、無いだろ。こんな……怪我、して。」
さらに悲しげな声を発すヤツの視線の先は、服の隙間からわずかにのぞく、白い包帯だ。
――なんだよ、その声。まったく君らしくもない。
心配なんて、いらないのに。
私は観念したように軽く肩をすくめると、ヤツと目線を合わせた。

「……あぁ、そうだよ。彼女になんか廃墟っぽいところに連れてかれて、そこにいた男どもに殴られた。」
「……っ！」
無言で見つめてくる国崎に、私はあくまでも軽い口調で話す。
「……あー、でもまぁほんの数発もらったくらいだから、大したことナイナイ。」
実際は数十発だろうけど。あえて言う必要はないだろう。
「……。」
「…えっと、その、性的なことはされてないし？精神的ショックはない。」
今思えばラッキーな話だな。…ま、こんな私の体だからな。
「……。」
また無言を貫く国崎の様子を、私は恐る恐るうかがう。
「…あの、だから心配には及ばないってこと。全然大丈夫――」
「大丈夫なんて、言うなっ！！！」
突然の大声に、ビックリして固まる私。国崎は苦しそうに顔を歪め、また私を包んだ。
―今度は壊れ物を包むように、優しく。
「……ごめん、ごめん那津っ…俺のせいだ……」

耳元でボソボソと謝罪を繰り返す国崎。彼のささやきを、私は黙って聞いていた。

その声は本当に苦しそうで、聞いているこっちが切なくなる。

もういいから、と言いたくなる。

しかし、

そんな彼に、目をスッと細めた私は

「……そうだね、君のせいだよ。」

――容赦ない一撃を与えた。

国崎は驚いたようにバッと身を離し、私の方を見る。私は恐らく無表情。ただ静かに彼を見ているだけ。

「っ、……なっ」

「―だって、本当にそうだろ？君と一緒にいなけりゃそのミオさんにも目をつけられずに済んだ。こんな目に遭うこともなかった。」

国崎の手を振り払って助手席に座り直し正面を向く。

凍てつくような視線を送りながら、有無を言わさない口調で続ける私。彼にはどう見えているのだろうか。

「…もう、たくさんなんだよ。私の生活をことごとく乱しやがって。君と出会ってから、ホントにロクなことがない。」

そして、彼を真っ直ぐ見て、決定打を打つ。

「国崎。頼むから、私にはもう関わらないでくれるか？」
「――――！」

しん……と静寂があたりを包む。
私は国崎の目を見たまま動かなかった。彼の方も、一瞬息をのんだかと思えば、目を見開いたまま動かなくなった。

――今言った言葉は、半分嘘で半分ホントだ。
本当は。
本当は怒ってなんか、ない。
しかも、篠原さんに襲われたのは間違いなく彼女のせいであり、国崎の方に過失などありはしない。

――でも、本気で謝る国崎を見て、性格の悪い私はそれを口実に使い、関係を断ち切ろうとしたのだ。
そこまで言うなら、もう会わなきゃいいじゃないかと。
…ついでに篠原さんとの約束も果たせるしな。一石二鳥てなもの。

それに、後半は本当の気持ちを言ったまでだ。
もうそろそろ潮時だろ。

――私たちは会うべきではない。

そんなの、最初から分かっていたこと。
――いずれ崩れるモノを、それでもズルズルと引き摺るように続けてきてしまった関係を、失くす。
ただ、それだけのことなんだから。

「それで、どう？国崎。」
「……」
「君も、そろそろ私に飽きただろ。目ぇ覚ませよ、いい加減。」
いや、マジで。
「……」
国崎はしばらく何事か考え込んでいたようだったが、ふと口を開き話し始めた。肩を落としたように俯き、顔は見えない。
「……そうだよな。こんなことが起こったし、そうでなくても俺と一緒にいると目立つわけだしな…お前の言い分も、分かる。」
…おお。なんだ、なかなか物分かりがいいではないか。
私は首を上下に振って同意した。
「そうだね。だから……「でも、それは無理だ。」
……。
――は？ええー？
――ちょ、待とうか一回。ＣＭ入ろう、とりあえず。
何だ、それ。そのまさかの返答。この流れは完璧『ｙｅｓ』ルートだったでしょうが。普通は。
相変わらず意味不明すぎて、意図が全く読めん。
私は頭に？を飛ばしながらそのまま疑問を口にした。

「…何、無理って。」
「那津を離れるとか、俺が無理。」
「……はぁ？」

ナニ言ってんのよ、こいつは。マジで、本当に。
まだ肩を落としたままの国崎の表情はうかがえないが、多分真面目に言ってる感じだ。
……このセリフでか？

「…はあ、あのね、国崎。いくらトモダチでもこれは干渉しすぎ。最初に言ったでしょ？その辺を理解しろって。」
「……友達、ならな。」
？？？

「…え？君、なに言ってんの？私は君の友達なんだろ？」

少なくとも私は、その代名詞を背負ってきたと信じてるんだが。
……友達じゃなかったら、一体何。

「……。」
「…友達、じゃないの？じゃ、何よ？」

知り合いとか？あ、これは格下げ？

「……。」

ちっ、まただんまりかい。いきなり会話ブチ切られるこっちの身にもなってほしい。

ため息をひとつついて、また話しかける。

「……国崎、だから何が言いたいん――」「友達じゃ、嫌だ。」

――へ？

「…え、――んっ」

突如、何の脈絡もなく重なった唇。

いつの間に距離を詰められていたのだろうと、考える暇も無く、ぐっと顔を掴まれヤツの口を押しつけられる。

数秒遅れてやっと意識が戻り、私は顔を赤く染めた。

――っ…なんだ、一体。こいつは何がしたい？

そしてこのキスはどういう意味だ。

―またもや徐々に破壊されつつある脳内の計算機。

しかしまだストックされていた理性を働かせ、抵抗しようと手をバタつかせたら、意外にもすぐに解放された。

…と言っても、国崎は口同士がくっつきそうなくらいの近距離で顔を止める。しかも、極上の笑顔つきだ。

顔がアツい、のに視線がそらせない。まるで魔法にかかったように全く体が動かないんだ。

「…まだ、分かんない？」

「……っ、何が…」

「ったく、ホント鈍いな。鈍すぎ。フツー気付くだろ、ここまでされたら。それとも、言葉にしなきゃ分かんないわけ？」

「……は……」

ゼロに近い距離で見る国崎の顔はやっぱり綺麗で、思わず見とれてしまう。

そして、目を細めたヤツの口が弧を描き、ゆっくりと言葉を発した。

「好きだ、那津。どうしてもお前が好き。…もう友達じゃ嫌なんだ。」

――私にとっては、衝撃の言葉を。

フクザツ感情（2）

――一瞬、ヤツが何を言ったのか全く理解できなかった。なんとか頭にその言葉が入ってきても、やはり意味はさっぱり分からない。

「……罰ゲーム？」

ようやく、目を見開きながら口から出たのはそんなセリフで。

「……あ？」

国崎は怪訝そうな顔を作った。

「…や、アレでしょ。よくある告白罰ゲーム。４人で何か賭けでもした？それで私が君にオチるかどうかとか？」

「……オイ、せっかくの人の告白を罰ゲーム扱いすんな。」

「いやいや、それしかないでしょ。―ああなんだ、友達として好きとか？」

「俺、今ソレ否定したばっかだろ。」

「……。」

私は首を傾げた。心からの疑問だ。

「…うーん、他になんかある？君が私にそんなこと言う理由。」

思いつかないんだけど。

「…頼むから、普通に考えろフツーに。何でそんな考えが屈折してんだよ那津は。傷つくぞ、流石に。」

国崎が脱力したようにそう言うから、私もまた考えてみる。

――フツー？普通って、何さ？言葉そのままって意味？

そのまま…『スキ』？

ってことは……

――――！

バッと顔を上げ、真剣な表情を作って国崎の方を向く。

「……国崎、君、」

まさか。

「…私のことが好き、なの？」

「だから、そう言ってんだろ。」

「…それは、恋愛的な意味で？」

「そうだけど？」

「マジで、告白してる？」

「マジで。」

……

ポクポクポク。チーン。

「嘘だーーーーー！！！！」

突如、トマトのように顔を赤くした私は叫びながら国崎から飛びのいた。

「え、え、え、嘘だ、絶っっ対嘘だろっ！？」

「…たっぷり考えた末にそれか？ホントだって。何で人の告白、力いっぱい否定すんだよ。」

呆れたようにフッと笑みをこぼす国崎。

…いやいやいやいや！待て、嘘だろ普通に！！

何故、君が私に本気告白っ！！？

天変地異どころか、宇宙がそっくりそのままひっくり返るくらいありえねぇって！！

「く、国崎。待て、早まるなお、落ち着け！」

「那津の方が落ち着けよ。」

落ち着けるかぁあああ！！そんでまた徐々に近づいてくるんじゃ、ねぇーー！

じりじりと後ろに下がろうとするが、いかんせん、狭い車内である。

すぐにドアに背がついた。

しかし、ヤツは進行を止めず、ますます焦る私。

「いやいや、マジで嘘だろ！てか、嘘にしとけっ！あと近付いて来んな！！」

「なに、しとけって。そんなん無理に決まってんだろ。」
「―っ！君、フザけてんだろ！私をからかってんだろっ！？」
「からかってなんか、ない。」
腕を掴まれた。それと同時に視線が絡まり、また私は動けなくなる。

「お前が、本気で好きなんだ。」

また国崎の熱い視線が絡まり、私を動けなくさせる。彼の言葉のひとつひとつが心に突き刺さり、反響する。目の前の男の瞳のなかの自分が、口を開けたままブサイクな顔をしているのが見えた。

――なんだ、コイツ。本気か？本気で――

「…頭、おかしいんじゃないの。」
「……。」

一瞬の静寂が流れ、

「……はぁ、」

国崎は呆れたように息をつき、私を暗に責めたてる。

…でも、だってそうとしか思えないじゃんか。…国崎が私のことを好き、とか。ありえない。
あ、もしかして君、どっかで頭打ったか？

「…俺は正気だ。何でそう信じねぇんだよ。お前、人の気持ちを読

むのが得意なんだろ？」
「……そんな、君じゃあるまいし。全然分かんないって。」
「大体、分かんない方がおかしい。逆に何でそうビックリするんだよ？別に隠してきたわけでもねぇのに。」
「や、最初っからそんな可能性、排除してたから。ホントに予想外というかなんというか！」
わーわーと、自分でもワケ分からんセリフをぶつぶつ言ってたら。
「…那津。」
近くで自分の名をささやかれて、ぴく！と体が反応する。
て、低音ボイスとか卑怯だろ、この場面で！自分の名前なのに、まるで自分の名前じゃないみたいだ。
耳がゲシュタルト崩壊おこした。
「なぁ、那津。まだ信じられない？」
「……っ！あ、当たり前だろ！そんなイキナリ言われてもっ…」
だから接近するんじゃないって！さっきから心臓がうるさすぎる。
「イキナリじゃないし。……俺が誰にでもこんなことするとでも思ってんの？」
「こ、こんなことって……？」
「こんなコト。」
そして、また重なる唇。

「〜〜！」
「な？」

数秒後に唇を離すと、国崎は満足そうに笑いながら目を合わせてくる。

……『な』じゃないよ、『な』じゃ。もうヤバい。恥死量超えてる。…コイツ、絶対顔だけで人殺せると思うんだが。私よりか、断然色気がある。

私は真っ赤な顔を左右に振って、なんとかこの男の魔力から脱し、冷静さを保とうとする。
そして口をとがらせ、反撃に乗り出した。

「……君、絶対おかしい。何で、私なんだ。」
「――は？」
「君ぐらいの男なら、もっとレベルの高い女をいくらでも落とせるだろ。なのに、何血迷ったこと言ってるワケ？」

女なんかよりどりみどり〜なんだろ？
何で敢えて私みたいな女を選ぶかな、国崎君は。

「…血迷うって……」
「大方、普通の女子は飽きたから一風変わったヤツと付き合ってみたい、とか思ったんだろ。だったら私は止めとけ。即行で別れたくなるから。」

―そうだ。罰ゲームではないにしろ、『私と付き合いたい』なんて言う理由は、結局はそういうことだろ？だったら、止めておいた方がいい。

自分の性格は分かってるし、何の取り柄も無いし。
…激しく即返品をオススメするけど？こんな欠陥女。

「……んなの、付き合ってみなきゃ分かんねぇだろ。」
「わ・か・る！だから私は……「那津。」

冷たい国崎の手が頬に触れ、本日、2度めのフリーズ。
狭い車内でさらに彼は身を乗り出して密着してきた。

「何も、分かってねぇのな。」
「……あぁ？」

わ、脳内パニくりすぎて思わずチンピラみたいな声が……っ
…笑ってんじゃねぇぞ国崎、こっちにとっちゃ、由々しき事態なんだからっ！

「……くく、お前みたいな奴、他にいるかよ。俺は他の誰でもなく、那津がいい。」

そして何度目かのヤツの温もりと、

「マジで好き、だから。俺と付き合ってよ。」

懇願するような甘い声に、私の心臓が大きく鼓動した。

――――ドクドクドクドク

…ちょ、待てまて。テンポ速いって。ナニコレ。なんでまたこんな

に活発に動くんだ私の心臓ぉ！！
早鐘のように鳴る心臓は……もうドキドキというか、バクバクって感じ？すごい苦しい。

止まれ、いや止まったら困るもう少し落ち着けと、バグだらけの脳内に意味不明な指令を送りながら、私はたまらず目を閉じた。

……

……国崎が、私を好き？
アリエナイ。はぁー？だろ。誰がどう聞いても。
なんだ巨大エイプリルフールか今日は。ドッキリカメラでも出てくるの？そっちの方がまだ納得なんだけど。もしくは夢オチ？

本当に、嘘としか思えない。
――まさか、私を好きな人間が現れるなんて。

自分の中に僅かにある、オトメゴコロらしき物がきゅっと反応して、また顔が紅くなる。

……何だ、キモイぞ私。こんなの、私じゃないでしょ。
今鏡見たら、絶対自分を殺したくなるわ。

――とは思うものの、

今まで感じたことのない不思議な感情に戸惑い、国崎の方はどんな顔をしているのか気になった私。
羞恥心を抑えそっと薄目を開けて彼の顔を確認しようとした、

瞬間。

バッといろんな映像が胸の中に過ぎ去った。―というより、瞼の裏に映し出された。

私は目を見開く。

篠原さんの勝ち誇ったような顔と、麗奈さんの泣き出しそうな笑顔。

そして――

「……アンタには、分からないわね。一生。」

―昔々の、記憶の隅に閉じ込めていたはずの、あの女のカオ。

「――――!!」

私は瞬時に国崎から飛びのいた。

フクザツ感情（3）

「那津……？」

国崎はいきなり動きだした私を怪訝そうな顔で覗きこんだ。

―それはそうだろう。愛の告白をした相手が、いきなり無言で距離をとってきたのだから。

―しかし私はそれどころではない。いっきに正気に戻された、気がした。

――久々に見た、悪いユメで。

今度は違う意味で心臓がドキドキする。すごい量の汗をかいてる。顔色も悪くなってるのではないだろうか。

「……那津、本当に大丈夫か？」

…そんな声で話しかけんな、阿呆。勘違いな私の心拍数が、また上がるだろ。

――そうだ、勘違い。これは勘違いなんだ。昔みたいなミス犯したら痛いぞ、自分。

……一体、何を浮かれてたんだろう私は。

愛、とかそんな虚像。

ずっと昔に、信じるのは止めたはずなのに。

「……国崎。」

私は彼を制止し、至極ゆっくりとした動作で向き直った。相変わらず超絶カッコイイ国崎の呆けたような顔が月夜に照らされる。

――全く、バカじゃね？この私に、告白してくるとか。客観的にも釣り合うワケ、ないし。

一瞬忘れてたけど篠原さんとの約束もあるわけだし。

…それに、思い出したよ。

私には、スキとかいらないから。

だから、容赦なく――――

「……私は、君が嫌いだ。君なんか大っ嫌い。さっきも言っただろうが。もう関わんな！」

「……！」

――振りきってしまえ。

高鳴る鼓動を全無視し、冷静な声のトーンまでもっていく。次第に顔の赤色も引き、無表情になった。

「っ……なん…で、」

国崎は私の雰囲気の変化に驚きを隠せない様子だ。
でも、私は淡々と先を続ける。

「……元々、私と君は『友達』のはずだろ。だから一緒に遊んだりとか、行動したわけだ。でもそれ以上となると、『恋人』となると話は別。―彼女なんて、誰がなるか。」

けっと悪態をつき、国崎を睨みつける。

「そんな面倒事はゴメンだ。愛とか恋とか私に求める方が間違ってる。」

「……っ、な…」

珍しく、感情むき出しな彼は絶句した。それを見てクスクスと揶揄するように笑う私。

「……何、そんな驚くこと?自分が振られるワケないとでも思ってたの?君。これだから自意識過剰の俺様クンは困るなぁ。」

―もちろん安い挑発だが、流石の国崎も、この状況下では冷静さを失っていたらしい。
カッと顔を赤くして、喰ってかかってきた。

「何だと…っもう一遍言ってみろ!」

私の両腕を掴み、強い口調で問い詰める。怒りまかせに見えるが、相当動揺しているようだ。
…瞳が、揺らいでいるから。

「…何度でも言ってあげるけど？私は、君が嫌い。要するに告白失敗ってわけ。分かった？」
「―っ」
驚愕、を全面に出す、いつもの彼らしからぬ表情を見るのは辛いものもあったが、私は冷静に徹し、すらすらと鋭利な言葉を並びたてる。
「……ああ、そうだ国崎。それとさ、『友達』じゃないんならもういいよね？」
「……は」
彼の顔が、また歪んだ。
「もう、解放されてもいいよな？君らとのトモダチごっこも、ついでにこれで終わりでいいじゃん？」
「―っ！おい、那津！」
国崎の声を無視し、私は唐突に会話を切って助手席のドアを開け外に転がり出る。
「…じゃ、サヨナラ、国崎聖悟クン？これに懲りたなら、とっとと新しい彼女でも作れば？――私には、関係ない話だけど。」
そう捨てゼリフを吐き捨て、手を振る。
そのまま私は、振り向くこと無く走り去った。彼の呼びとめる声も聞かず、ただひたすらに。
―耳にはまだあの悪夢の声が反響していた。

―――――
―――
―――

――ガチャッ！ドタ、バタン！！！

「……はっ、……はぁ……」

息が切れる。自室の扉を勢いよく開け中に入ると、私は玄関にへたりこんだ。

「……くっ、は……っ、…気分、悪……っ」

吐きそうになるくらい精神的に弱ってる。うずくまったまま動けなくなってしまうくらいに。

……久々に、本当に久しぶりに、アイツの顔が出てきた。
でも昔よりはるかに鮮明に思い出した。…それだけで、こんなに心が不安定になるなんて。

…まだ引き摺ってるのか、私は。ハッ、全くアホらしい。もう何年も前のことなのに。

―でも、彼女の夢を見る度に、私は思い知らされるんだ。
自分の小ささ、取るに足らなさ、そして

「……愛、なんて所詮嘘だろ。」

『愛情』への憎悪。

ぼそりと呟くと、ズキっと、刺すように胸が痛んだ。

…は。何傷ついてんの、自分。悲劇の主人公にでもなったつもりなのか？自分に酔ってんのかよ、バカか。調子のってんじゃねぇよ。本城那津の分際で。

自嘲気味に自分を詰(ナジ)っているとだんだんと鬱な気分になる。

―本当、最悪な気分だ。どこまで私という人間は最低なんだろう。

―酷いことを言って、また人を傷つけた。遠ざけた。

悲しそうに私を見つめて来た国崎のカオが、また頭をよぎる。彼のコトを考えると、また心が痛んだ。

……でも、これでいい。よかったんだ。

つまらない女にひっかからなくてよかったな、国崎。そろそろ君も正気に戻ってくれることを祈るよ。

――こんな女。誰も好きになんかなるはずないんだから――

だから私は、独りで、いいんだ。

愛されなくても別に構わない。

最初から、そう言ってるじゃないか。何で放っといてくれないんだ。

どうでもいいじゃないか。私なんか。

フクザツ感情（4）

――膝を抱えたまま目を閉じる。
だが、しばらくそうしたまま鬱鬱とした気分に落ち込んでいたら、ふと疑問が浮かび上がってきた。

――でも。
…もしも、あの時。あの人が私の内に現れなかったら、どうしていたのだろう？
あのまま国崎の腕に抱かれて、私は何を言っただろう？

心の中に、またさっきの出来事がよみがえる。国崎の顔を思い出す。

……

――ドク、ン。

突然。心臓が大きく脈を打ち始めた。

「……あ、れ…？」

ドキドキドキドキドクドクドク。

心臓がさっきより、…いや、かつてない程活発に脈を打つ。

そしてその間、脳内スクリーンにはあいつばかりが映し出される。

笑ってる顔、ニヤリと嫌なことをたくらんでいる顔、マジギレしたときの顔、デートしたときの優しい顔、…最後、一瞬だけ見えた、切なげに歪んだ顔――

さらには、走馬灯のようにいままでの出来事がフラッシュバックした。

――え、何コレ。脳内バグ？

私、死ぬの？室内で？いきなり？死ぬとしたら何死にあたる？

……近いとこで、心臓病？こんなに心臓がうるさく鳴ることなんて、今までなかったから。

――や、待て。違う。

顔に手をあて、思考の渦に身を投じる。頬は、自分でも驚く程熱を持っていた。

コレは知ってるぞ。昔、なんかの漫画で見たことある気がする。

まさか、もしかして、

私はうるさい胸をぎゅっと握り、

自分でも信じられないくらい、すんなりとそのコトバを口にする。

これは、この、感情は――――――

「……惚れ、た？」

……。

「……い、いや、待て。違う、おおおち、落ち着くんだ。」

その一秒後、

私はブンブンと首を振り、即座に自分の言葉を打ち消した。

――こ、これはアレだ。また国崎の毒牙にかかっただけだ。

前もあったじゃないか。国崎マジックにヤラレて混乱したことが。

アイツに近づきすぎるとどんな女も思考がこんな風になるんだっ。

今回もそんな感じに違いない！

しばらく。そう、しばらく待ってたらこの動悸もおさまるはず……

……。

―しかし。

待てども待てども、一向に顔の朱色は引かず、脈も速くなっていくばかり。鼓動が胸全体で響き、息切れもしてきた。

…本気で病気ではないかと思う。思わず、病院の開始時刻を確認してしまった。

「……っ、何なんだよ…」

私はフローリングの上に寝そべると大きなため息を漏らした。

今夜の私はおかしい。疲れからなのか何なのか知らんが、異常すぎ

る。

……なにがって？

ずっと、ずっとあいつが――国崎聖悟が、頭から離れないんだよ。

どうやっても。

ダルい体を起こして鏡を覗くと、耳まで真っ赤な自分が見返してきた。

―何あれ。赤過ぎでしょ。酔っ払ってんじゃないかと見紛う程だ。

――もう、意味分からん。こんな女、私じゃない。絶対、どうかしてる。

…告白、原因はアノ告白だ。

男から告白なんて、初めてされたから動揺してるだけだ！それだけだよ、それだけ。別に深い意味は無い！

誰に言い聞かしてんだか、私は自分でうんうんと納得した。

「ＰＬＬＬ……ＰＬＬＬ……」

「――――！！」

すると突然。携帯の電子音が鳴りだす。

…私のだ、モチロン。いつも聞き慣れてるはずなのに、思わずビクッと体を震わせてしまった。

――マジで寿命縮んだ。空気読んでよね、この小型電子機器が。

やり場のない怒りを携帯に向け、その辺に放り出していた鞄を乱暴

にひっつかんだ。
そして未だに存在を主張し続ける携帯電話を取り出し――
動きを止めた。

『着信　国崎聖悟』

携帯電話の液晶に、確かにそう表示されているのを見たから。

「……。」

まだ携帯は鳴り続ける。しかし私は取れない。取ることが出来ない。

――だって、何を話すんだよ？あんだけ叫びまくって、罵って。
気まずいにも程がある。
…いや、会話を無理矢理切って帰って来たワケだから、ヤツが電話してくるのも納得はできるが。

…何より驚いたのは、私の心臓が再び活発に鳴り始めたこと。
『国崎』と名前を見ただけで。

――これ、出たら今度こそ心臓壊れるかも――

そういう、わけの分からない恐怖もあって、なかなか電話が取れない。

「ＰＬＬＬ……ＰＬＬＬ……ＰＬＬＬ……」

コールが続く。
……諦めないな、奴も。早朝にムリヤリ取らせたこともあったしな。
忍耐力があるんだか、何なんだか。とりあえず、何が何でも私を電

話に出させたいらしい。

……電源、切ろうかな……

鳴りやまぬ電子音は無視し、電源ボタンにそろそろと手をかける…

……と、

「……あれ」

突然、プツっと電話は切れた。コールが途中で途切れたので、おそらく向こうから電話を切ったんだろう。携帯画面も通常に戻る。

……なんだ、諦めたのか。

ホッと安心するとともに、何故か、あっけにとられたような、不服な気分になった。

…なんて、意味わかんねぇな私。電話取らなかったくせにね。フッと自嘲気味に笑みをこぼしてみる。

―ま、なにはともあれ、用無しになった携帯を机に置こうと手を伸ばし――

「～♪」

「っわ、あああぁ!?」

そのまま、放り投げた。

――な、何、今度はナニ!?この携帯、呪われてんの!?

さっき以上にビックリした私はバクバク鳴る心臓を押さえ、放物線

を描いてガシャンと床に落ちた、哀れな携帯電話をみた。

この音は、メールだが……

不審に思い、チラと液晶部分を覗くと、また『国崎聖悟』の文字。

思わず、ため息がでた。

「……今度は、メールかよ…」

まあ、本人が電話を受け取らないんだ。自然な流れではあるけど……

私は立ちあがり、若干キズのついたブルーの携帯を取り上げる。

そして数分悩んだ後、ランプの光る携帯を開いて、彼のメールを読むことにした。

―メール読むくらいなら、いいか。返信しなきゃいい話だし。…別に特に支障は無い。うん。

自分への言い訳もそこそこに、若干緊張しながら受信ボックスを開く。

「――――!」

開いた瞬間、絶句してしまった。

――恐る恐る開けた国崎からのメールは、たったの4文字しか書かれていなかった。

『会いたい』

ただ、それだけ。

ただ、それだけだったのに。

詳細の全く書いてない、ただの文字の羅列に私はまた心を揺らした。

「…うわぁ……」

携帯を持ったまま、仰向けにゆっくり倒れる。白い天井がやけにぼんやりとかすんで見えた。

自分のカオは確認してないが、どうせ、朱に染まってるんだろう。フローリングのひんやりとした冷たさが、火照った肌にしみる。

「……マジ、か……」

―もう、流石に認めざるを経ない。

名前、電話、メール。それだけでこんなに乱される。

そんな怪奇現象の理由は、ひとつしかない。

――私は、国崎が好きだ。

ここにきて、ようやく私は自分の感情というものを理解した。

――しかし、

「……は、アホらし。」

私はすぐに冷めた表情を作った。

―理解したからといって、何が変わる?確かに、私は国崎がスキらしい。

でも、あいつに気持ちを伝えたところで、面倒なコトになるだけじゃないか。

迫り来る過激派女子とか、陰口、根も葉もないウワサ。そういうのも死ぬ程嫌だが、

―なにより、この感情が、面倒くさい。

国崎限定ではないけど、誰かを好きになるとか、愛すとか、理解できない。

『好き』とか『愛してる』なんて幻想、抱きたくない。

これじゃ、あの女と何も変わらないし、私はそんなの、絶対嫌だから。

だから。

――こんな感情、消してしまえ。

私は芽生えた気持ちをひねり潰すように、国崎のメールを削除した。

フクザツ感情（4）（後書き）

これからだんだんとダークな内容に……

オイカケッコ（1）

――それから、あの日から5日。
私は、今日も元気に。

……ズズ、ズー

「あー、美味し。」

――コーヒーをすする。

相変わらずガラガラなマスターの喫茶店は私が好む、平和で、静かな空間だ。
聞こえる音と言えば、私がコーヒーを飲む音と、小説のページをめくる音だけ。

…ああ、癒されるなぁ。

「マスター、おかわりー。」
「…ナツちゃん、それもう5杯目なんだけど。てか、暇だね。」
「うっさい、いいから入れて。」

マスターはカウンターから呆れたように私を見た。

―失敬な。好きで暇してるわけじゃないって。

私が目線で促すと、呆れながらもマスターはコーヒーを注いでくれ、目の前に新たな1杯が出される。
私は嬉々としてそれを受け取った。

「ナツちゃん、ここ最近よく来てくれるけど、どーしたの？」
「……んー、別に。ちょっと家に帰り辛いというか。」
「…は？」

怪訝そうな顔でこちらを向くマスター。私はため息をつき、新たにページをめくった。

…てか、帰れないんだって。

――

―そう、色んなことが起こった例の日の翌日から、私は時間を見計らないと家に帰れないのだ。

理由は簡単。――国崎が、待ち伏せしてやがるから。
よくウチの前にヤツの車が停まっていて、うかつに玄関に入れない。

…全く、迷惑千万な話だ。自分の家なのに入れないとか。
いつから篠原さんみたいなストーカーに成り下がったんだか、あいつも。
おかげで私は彼が帰るまでこの喫茶店か、大学、バイト先に身を潜めているしかない。

……どこの逃亡者だ？
暗い気分で頬杖をついて、入れたてコーヒーをひとくち飲んだ。
……まあ大学内でも、私の全スキルを駆使して避けまくってるものだから、ヤツも最終手段に出たと思うんだが……
――絶対に、今は会えない。
何故なら。

「…あ、そういえば国崎君だっけ？ナツちゃんの彼氏。何で一緒に来ないの？」
「――――！」

がしゃーん。

瞬間、持っていたコーヒーカップが手から離れ、重力に従って床に落ちた。
カップは細かい破片となり、茶色いシミが床に広がる。

「…！ちょ、ナツちゃん何やってんのっ！」

慌てて私の方へ駆け寄ってくるマスター。怪我はない？とかなんとか問われる。
―しかし、私は顔を俯かせたまま、動かない。

「……ナツちゃん？」
「……マスター、頼むからヤツの名前は出すな。あと、彼氏じゃないから。」

マスターからは見えなかったと思うが、下を向いた顔は真っ赤だっ

た。

――名前を聞いただけでこうなるから、会うのは無理だっつの。対面して、普通の顔は絶対できない自信がある。

……はぁ、相当の重症だな、私も。

とにかく、この、顔面赤面症および不整脈が治らない限りは、絶対国崎と接触できねぇ！

せめて、対国崎用の仮面とキャラが完成するまでは待ってくれ。

今会ってしまったら、この気持ちに気付かれてしまう。１００％。

そしたら、私は終わりだ。気付かれては、駄目。今までの自分が壊れてしまう気がする。

だから。押し殺せ、この感情を。

「……」

マスターは何か言いたげに私を見ながら、割れたカップを片づけ始めた。

――

――

――今日、店に入ってすでに2時間が経過。

「……ナツちゃん、いつまでここにいるのかなー？」

流石に長居しすぎている私に、マスターのボヤキが聞こえて来た。

「…んー、ごめん。もうちょい。」

ごめんマスター、バイトの時間まで待ってくれ。それに、今日はなんか嫌な予感がするから動きたくない。

ぼんやりと思考しつつ、何杯めかのコーヒーを傾けていると、

突然、

ドタドタとやかましい足音が聞こえた。

途端、ぎくりと動きが止まる。

――なっ!?まさか……

「マスター!那津、来てないかっ!」

そして一瞬後に、乱暴にドアを開け、男が入って来た。カランカランとうるさくベルが鳴る。

息せききった様子のその男は、――言うまでも無い。

国崎、だ。

最近姿すら見なかったが、間違うわけがない。

…しかも第一声、それかよ。

そして、そのお尋ね者の私は、

「……あー、ナツちゃん、ね…」

マスターがちらと視線を下にやる。

――間一髪でマスターの居るカウンターの下に身を潜めていた。

……ホント、危なかった。

無様な格好でへたり込んでいる私はマスターに全力で『ＮＯ！』を伝えると、気配を消すように身を縮めた。

「…今日は来てないかな。」

「そう、か……」

マスターの返事を聞くと、国崎はドカッとカウンター席に腰を下ろした。

……え、いやいや座ってんじゃないよ。ここに居ないってんだから、余所行けや。

声に出さずにツッコむが、出るつもりはないのか、国崎は勝手に話し始める。

「っだー、くそ。アイツ、どこにいるんだよ……」

何処となく苛立った口調だ。

…こりゃ、見つかったら本気でヤバいな。

「何、ナツちゃん探してるの？」

「そ。那津、大学でも全然捕まらないんだよ。携帯も着信拒否にしてるみたいだし……」

うわ、バレたか。

直後の『今度会ったらどうしてくれようか……』っていう呟きは聞かなかったことにしよう、…うん。

「へぇ…だから、ね。」

しかし、部外者であるマスターはすごく楽しそうだ。
…こっちにちらちら視線送るの、やめろ。気付かれるだろうが。

「…何が？」
「ん、いや、こっちのハナシ。てか国崎君、ナツちゃんに何したの？そんな避けられるって。」
「……」

マスターの放ったひと言で、しばし沈黙が流れる。

――気まずい。
……そういう質問は、本人がいないときにしろよマスター。
なんか私まで緊張するだろ。

そんなこと思いつつ、私も彼の返答を待った。
国崎は『あー』だの『うー』だの言っていたが、やがて小さな声で呟く。

「……告白、した。」

ぽつり、と漏らした国崎の声に私の心臓がドクンと跳ねる。何とも切ない声に、また顔に熱が集まっていく。

――うぁ、何コレ恥ずかしいぃっ！
言った本人より言われた方が恥ずいって!!

「へぇ！そうなんだ？」

一方、マスターはすごく嬉しそうな様子。

…このおっさん、完全面白がってるな。年甲斐も無く声、弾ませやがって。

「んで、どうだったの？返事は？」

「……マスター、分かってて言ってるだろ。嫌みか？」

「はは、ゴメンゴメン。いやーしかし、国崎君もナツちゃん相手じゃ苦労するね～。」

「全く、だ。」

すぐ近くで身悶える私のことなど知りもしない彼は、自嘲気味に笑った。

私はふと動きを止め、三角座りをしながら国崎の声を黙って聞く。

また、何やら話しだしそうな雰囲気だ。

――いや、でもソレ、このまま私が聞いてていいのか？この先を聞くのが怖い。ドキドキする。

マスター相手にする国崎の話は、紛れも無く、本音だから――

……と言っても、もともと動けない私にはどうしようもないってハナシだが。

黙って彼らの会話が進行していくのを聞いているしかなかった。

「……俺、今までマジで恋愛してこなかったんだと思う。」

国崎は少し間をおいた後、よく通る低い声で話始めた。張り詰めたような声は、彼が真剣な証拠だ。

「…えー？国崎君は恋愛経験豊富そうだけど？」

マスターは少し驚いたような顔を作り、聞き返すが、

「…は、『経験』だけならな。でもそれだけだ。誰かを好きになったりとか、無かったかもしれない。」

国崎はあくまで真剣な口調を崩さない。

「……そう。」

彼もまた静かな声で答えた。

異様な雰囲気が店を包む、と共に、彼らの話はそのまま進行していった。

―まぁ、それがダイレクトに聞こえるんですけどね。位置的に。

……何でいきなりシリアスになってんの、この2人。しかも話してる内容、めちゃくちゃ嫌なんですけど。

……居辛い。ハッキリ言って、強烈な居心地の悪さを感じる。

自分が話題なわけだし。

しかもタチ悪いことに胸の鼓動がおさまらないのよ。

……もう、何なの、コレ。

オイカケッコ（2）

――

「――意地っ張りだし、そのくせ本音隠すのが上手いんだか、下手なんだか……」
「あー分かる分かる。最初からそんな感じだよ、ナツちゃん。」
「しかも、人の気持ち、全く考えねぇし。」
「それも、同感。」

――その後も延々と続く国崎とマスターの話し合い……
ってか、私の愚痴。

私は眉をヒクつかせながら、その拷問に耐えていた。

…おい、真剣なハナシはどうしたんだ?後半、私の悪口しか言ってないじゃん。
黙れや、クソ男どもが。そろそろブチ切れんぞ、コラァ。

かなり頭にキテいた私は、脳内で国崎を半殺しにするが、

「――…だからさ、ホントに分かんない。アイツの心はどうすれば手に入るのか。」

――それ故に、彼の唐突な告白に対処出来なかった。

セリフに気持ちが着いていけずに、いきなり心臓が跳ね上がる。思わず顔を上げた。

っな、なにをまたコイツは…！

「アイツの行動に振りまわされて、一喜一憂、気分が落ち込んだり浮いたり。…マジで、らしくねぇしダサいよな、俺。」

……え？これ、本当に国崎？

淡々と言葉を吐き出す彼に、私は驚いた。

弱々しい、掠れたような声は、平生の彼からは想像もつかない。顔はもちろん見えないわけだが、多分疲れた感じだ。声の調子からして。

「おーおー、初々しいねぇ。」

…そして、それをわざわざちゃかすマスターは、かなりのツワモノだ。

国崎も口を尖らせた。

「…るっさいな。仕方ねぇだろ、こんなん初めてなんだから。」

「そこが、カワイイんだって。…んで、どーにも我慢できなくなった国崎クンはナツちゃんに告白したんだ？」

「…言い方ムカつくな。……あぁ、そうだよ。告って、見事玉砕。簡単にオチる女じゃねぇって分かってたんだけど…流石に、面と向かって『嫌い』は効いた……」

ハァと大きなため息を吐き、がくりと国崎が項垂れた気配がした。

……

…国崎、これが君の本音か？
何でこんな弱ってんのさ、たかが私に振られたくらいで。
気にするなよ。もう忘れろよ私のことなんて。君は最強俺様イケメン君だろう？
こんな姿、全然君らしくないじゃないの。

…胸が、痛い。ズクズクと膿んでいくみたいだ。

麗奈さんの時に感じた痛みは、彼女の同情或いは罪悪感だった。
――なら、これはどんな種類の痛みなんだろう？

「……でも、」

国崎はまだ続ける。
…もう、話すなって。分かったから。てか心臓が痛いから。ホントに。

「…どうしても、那津が欲しいんだ。断られたって諦められねぇ。」
「っ～～！！」

ボッ！！と音をたてて顔が朱に染まる。

爆弾投下。
顔面温度は最高温度４１℃まで達しました。

どうすんの、これ。めちゃくちゃ顔が熱い。火傷しそう。つーか、する。

…なんっつー恥ずかしいことを、コイツはさらっと言えるんだ！！

自重！少しは自重しろっ色気の！！

理不尽な怒りを国崎に向けて、心の中で罵倒する。

その間も、心臓がありえない程速いペースをキープしつつ、鳴っていた。

…まだ正体不明の胸の痛みも、消えてないのに。

「へぇ～諦められない、ね。」

さらにその直後に、マスターのニヤけた顔が容易に想像できるようなセリフ。彼はくっくっと喉を鳴らして笑った。

…もう君ら、皆死ね。特にマスター、地獄に堕ちろ。何この羞恥プレイ。私を殺すつもり？

私は胸をぎゅっと押さえながら、2人に気付かれないようにそっとため息をついた。

……

…やっぱ、ダメだな……これは、本当によろしくない。捨て置いたはずの感情がまた戻ってきそうだ。

全然ふっ切れてないじゃん、私――

マスターはまた下に、というか私に目線を送りながら国崎に言った。

「……そっか、ホントに本気なんだね。」

「あぁ、」

まさに当然のごとくさらりと返す国崎。

……だからそういうコト言うの止め――

「……しかもアイツ、最後、様子がおかしかった。」

――！瞬間、びくっと体が反応する。

赤くなった頬が一瞬で白く変わった気がする。

……な、に？

「……様子？」

「俺のことが嫌いだって言う前、何かに怯えるような…そんな仕草をしたんだ、那津は。」

ドクン、ドクン。心臓が鳴る。やたら大きい音で。

「…あの怯え方は異常だ。絶対何かあった。」

ドクン、ドクン。

「…そうだな、何か嫌な記憶でも思い出したりしたのかもしれない。友人関係、学校問題、あとは…」

ドク、ドク。

「家庭の事情、とか。」

ドク、ン。

その言葉を聞いた瞬間、本気で息が止まった。そして、眩暈がした。
またフラッシュバックが脳内で起こる。

「――っ、」

あまりの衝撃に私は頭を抱え、声にならない声を漏らした。
嫌悪と憎悪と苦しさで胸が痛む。視界が歪み、吐きそうなくらい気持ちが悪い。

――ちっ、
荒々しくなりそうな息を整え、忌々しげに、小さく舌を打った。

――やっぱり、国崎に会うわけにはいかない。

君は鋭すぎるんだよ。エスパーも大概にしとけよ?
何で、そうやすやすと人の事情まで見抜いてしまうんだ。

…会ったら、すべて暴かれてしまう。
私の気持ちも、誰にも言いたくない過去も――

君は、危険だ。

私は鋭い棘を刺されたように痛む胸を押さえ、改めてそう思った。

―そこまで言った国崎は、ふっと軽く笑い、

「…ま、あくまでも想像だけどな。とにかくあいつは何か隠してる。そこをまた聞きださねぇと。」

ガタ、と椅子が動く音がした。

それを聞いて、あぁ、ようやく去ってくれるのか、と安堵する。心はかき乱れ、動悸も激しいままだが、ホッと息をついた。

――とっとと帰れ。これは、この胸の痛みは、修復に時間がかかりそうだから。

「じゃ、マスター。そういうことだから、那津が来たら連絡して―

―「国崎君。」

――え?

席を立ちかけていた国崎にマスターが声をかける。彼だけでなく、私も怪訝に思った。

…何、何の用なのよマスター?

きょとん、と目を丸くする私にマスターは苦笑いをして、

「……ごめん、ナツちゃん。ここは国崎君を応援したいわ、俺。」

そう、呟いた。

――――ha?

え、え、ちょっと、待て。ま　さ　か　……

「国崎君、実はナツちゃん今ここに居るんだ。」
「はっ！！？」

……嫌な予感、的中。
マスターが『ここ』と指差した場所は、もちろん私の居るカウンターの裏だった。

――ガッシャーーーン！！！

それとほぼ同時に響く破裂音。

私はカウンターの裏を思いっきり蹴った。テーブルの上の食器や花瓶が音を立てて下に落ちる。
――国崎側に。

「っああ！なにしてんのナツちゃん！！この皿高いのにっ…「るっさいマスター、死ねハゲっ！！」」

破片が飛び散り、マスターの悲痛な叫び声が聞こえる。

急いで身を引く国崎とは目を合わせず、立ちあがった私は、マスターに悪態をつきながら裏口まで走った。
扉を勢いよく開け、裏路地を抜ける。外は風が強く、私の黒髪を揺らした。

――っだああ！あんのクソ馬鹿三十路男！！

何、バラしてんだぁあああ！！！！
国崎に、見つかってしまったじゃねぇか！しかも、最悪なタイミングで！！
マジで殺す！！後で、マスターん家に火ぃつけたらぁあああ！！

オイカケッコ（3）

―狭い裏路地を抜けると、いつか国崎と2人で歩いた大通りに出る。
今は平日の午後。幸い、道にはたくさんの人がいた。

――とりあえず、S大まで行こう。あそこなら隠れ場所がいっぱいある。
そう思い立った私は、出来るだけ体をかがめ、人ごみに紛れながら、走る。

なに、私は逃げ足は速いんだ。アイツに見つからなきゃ確実に逃げ切れる――

「那津っ！待て！」

……見つからなきゃ、ね。

動きがピタリと止まった。国崎が私の行く道に、横からイキナリ現れたのだ。
……てか、追いつくの早っ！！

当然、急いでUターンし、駆けだす。国崎も私を追いかける。

―リアル鬼ごっこ、スタートだ。恐怖すぎる。
走りながら私は大声をあげた。

「っだー！何でそんなとこにいるんだよっ！！」
「お前の行動パターンなんか見え見えだっての！どうせ大学に行くつもりだったんだろっ！」

……ええ、図星ですけどっ！？
ギリ、と唇を噛んでさらに走るスピードを上げる。後方で舌打ちが聞こえた。

「おい、待てっての！話があるっ」
「私は無いわー！とにかく消えろボケェ！！」

地面を蹴り、走りまわる若い男女。傍から見てるとアホらしい追いかけっこだが、両者とも必死だ。
……特に、私。

――絶対、捕まってたまるかぁあああ！！！！

――

「はっ…はっ……」

走り始めて、どのくらい経ったか分からない。
だが、着実に2人の距離は縮まっていた。単純に体格と体力差だ。
私はもう、息も絶え絶えだった。対するヤツは、多少息を切らす程度。

―っ、水族館の時の思ったが、コイツ、体力ありすぎだろ！

いや、私はかなりナイ方だがっ！

私はついに商店街の表側……かなり大きな道路に出た所で、足を止めてしまった。

「…もう、追いかけっこは終わりか？」

国崎の声が、静かに響く。

私は、国崎から見てほんの数メートル前にいる。もう獲物は目前、とでも言うように、彼は嘲笑った。

……ちょ、何その悪役のセリフ。

嫌みのようにゆっくりと近付く男を私は睨みつけた。

「……っは、う、る……さい！」

ぐいっと額の汗を拭う。後から後から流れ出る汗を忌々しく思った。

「…相当辛そうじゃねぇか。もう諦めろって。」

「……私、は！捕まら……ないっ！！」

「まだそんなこと言うのか？」

「……」

近づく国崎。もうヤツの顔がしっかり確認できるほど距離が近い。

だが。

…まだ、だと？

はっ、私がこんな所で止まった理由が分からないのか？

――最終手段だ。私は息を大きく吸いこんだ。

「…イケメン好きの女子のみなさーーん!!噂のS大の王子様、国崎聖悟君がデートのお相手を探してるそうですよーーーっ!予約は速いモン勝ち!!さぁ寄ってらっしゃい、見てらっしゃい!!」

ありったけの声が、辺りに木霊した。

「っ、おい!?」

動揺する国崎の言葉は、

きゃあああああああ!!!―という、もんの凄い歓声でかき消された。

…というか、最早悲鳴に近い気もするが。

そして、ぞわっと、女子たちがどこからともなく現れた!

流石、S大学の近くということもあって、彼を知る女子大生が集まる。だが、何も知らない一般の女性も、イケメンを一目見ようと群がった。

―そうして、国崎はあっという間に女子軍で囲まれてしまった。

『国崎君!私っ私とデートしよっ!!』

『いや、私と!!』

『うっさいブス!生まれ変わってから言えよ!』

『聖悟くんが決めてっ!どんな子がタイプ?』

『オニーサン、マジかっこいいね!若い子に飽きたらアタシでもっ!』

『ババァはスッこんでろ!顔の皺何とかしなっ!!』

ギャーギャーと罵詈壮言が飛び交う中、私はこっそりその集団から抜け出し、ニヤリと笑みを見せた。

「っ那津！待てよっ！！」

中心にいる国崎の声が聞こえた気がするが、私はそれを空耳と信じ、ゆったりと歩きだす。

―やはりこんな時頼りになるのは、恐るべき女子パワーだな。これほど有効な兵器もなかなか無いよ？ホント、助かったわー。

優雅に歩を進め、国崎と女子軍が少しづつ遠のいていく。つんざくような女子の叫び声も段々と小さくなり、やがて消失する。

私はまた、口を歪めて笑った。

――私を甘く見るなよ？国崎。君から逃げるためだったら、何だってしてやるさ。

――

――

「……さて、と。どこに行こうかな……」

女子の波から遠ざかるように上手いことすり抜けた私は、あてもなくふらふらと彷徨う。

国崎の登場のせいで、残念ながら大学とは反対の方向にしか行けない。
…故にその近くにある自宅にも帰れないわけで……
行き場を無くした私は、こうしてただ移動しているしかないのだ。
…立ち止まってると、追いつかれるかもしれないしね。

―チラリと腕時計を覗くと午後5時を回ったところだった。
まだ、バイトまでも時間がある。

「…ハァ……」

どうにもツイてないな、私。
ため息をひとつついて、とりあえず道路に沿ってぐねぐねと曲がった道をたどって行った。

―――

しばらく道なりに歩き、足を止めたのはバスの停留所の前だった。
そろそろ体力的にも限界で、体が休息を要求していたので、私はベンチに座って休むことにした。

――…裏道を通ってきたから、そう簡単には見つからないハズ。
しばらく休んだら、どっかの店に入って隠れよう――
そう思って、背もたれにもたれながら、リラックスする。

空を仰ぐと、古ぼけた屋根の隙間から夕暮れの景色が覗いた。涼しい風が吹き、体を癒してくれる。
私はフッと口を緩め、そのまま、視線を正面に戻した。

座っている私の目の前を、幾人もの人が通り過ぎる。
学校帰りの子供、散歩中のお年寄り、慌ただしいサラリーマン……
みんな、歩幅も違えば表情も、雰囲気も違う。みんな、違う。
……ああ、いつか考えてたっけ。こんな大勢の人が皆他人なのは、
なんだか不思議だって……
でも、別に何も不思議じゃないよね。人は、知り合いより他人の方
がよっぽど多いから。

そして私も、その一部だ。
人の波に流れて、ほぼすべての人の『他人』として、生きていく。
道行く人々のように、何の関わりも接点もなく。

でも――――

『好きだ、那津。』
『…欲しくて、たまらねぇんだ。』

国崎のカオが、また音も無く浮かんでくる。
こっちが恥ずかしくなるような、ストレートなセリフと共に。

――――…何で、君は、他人のまま終わらせてくれなかったんだ。

こんなに人がいるんだ。日本だけでも人口は1億3千万ちょっと。
男も女も、もういらないってくらい、いる。

なのに、どうして、君は、私を見つけてしまったんだ。
明らかにスルー推奨女なのにね。

私は、君に――――
――…出会ってよかったんだろうか？

「～～あー、くそっ」

私はぐしゃぐしゃと頭を掻き、バッと勢いよく立ちあがった。

――ダメだ。立ち止まってると余計なこと考えるっ！

…しかも、もーコレ何回思い出してんの、私。
そしてその度に赤面するなよ、本城那津の分際で！この阿呆っ！
しっかりしろ！と、自分で自分を叱り飛ばしながら頬を叩き、私は大股で歩き出す。

……挙動不審？分かってるって、そんなこと。今更でしょ。
できれば見ないで下さい。ええ、目に毒ですから。

―よし、遠くに行こう。できるだけ遠くへ行って、頭を冷やさねば
――
そう思ってしばらくずんずんと歩いていると、

――――キキッ

軽快なブレーキ音が、した。
灰色がかった白い車が私の目の前にキレイに停まる。

「――え？」

驚いて目をパチクリしていると、運転席側のウィンドウが開き、運転者と目を合わせる。

中の人物は、ニコリと笑った。

オイカケッコ（3）（後書き）

那津、謎の運転手に会う。続きます。

焦る不器用と笑う腹黒（1）

――静かに、車は走り出す。見慣れた景色の1部と、溶け込んでいく。

私は窓に寄りかかって頬杖をつきながら、徐に運転手に話しかけた。

「――なんで、君がここにいるわけ？……乾。」

ちらっと視線をそちらに向けると、乾　圭太朗は優雅に微笑んでみせる。

「単なる偶然ですよ？」

「…嘘つけ。家、逆方向だろうが。」

「はは、いやだなあ。ホントですって。買い物がてら、ドライブしてたんですよ。そしたらナツさんを見かけたので。」

……絶対、嘘だ。ナニその胡散臭い笑み。怪しすぎる。

…やっぱ、車が停まった時点でダッシュで逃げればよかったかも…。いや、乾のヤツ、送るっつって無言のプレッシャー与えてきたからな…あの状況じゃ無理だ。相手、車だし。

「――！」

そこで、私はハッと気付いた。相手が引くくらいのスピードで振り

向く。

「っ、まさか国崎が君を？」

ヤツの差し金か…っ？

ヤベェ、だとしたら逃げ場、ねぇえええ！！もう乗っちゃったしぃいい！何このハニートラップ！手ぇ込みすぎだろ！

私が顔面蒼白のまま固まっていると、

「…聖悟が、どうかしたんですか？」

乾のほうはきょとん、とした顔で首を傾げた。

「……え？」

お先真っ暗な予想をしていた私は思わず問いかけてしまう。しかし乾の方も『え？』みたいな顔をして私を覗く。気まずい空気が車内に広がった。

――何、もしかしてホントに知らない？国崎と私のこと。…国崎の性格上、絶対協力者使うと思ってたんだけど。

まあ、最近ドタバタしてたから、まだ言ってないのかな？

「――ナツさん？どうしたんですか？聖悟が、何なんですか？」

気がついたら、私の前でヒラヒラと手を振る彼の姿が見えた。

「……あ、いや、何でも無い。勘違いだったみたい。」

――まあ、知らないなら知らないでいい。問題ない。この顔は多分嘘じゃないだろう。
こいつが来たのは本当に偶然で、純粋に好意で家に送ってくれるというなら、それはそれで楽だし。私はホッと一安心して、視線を前に戻す。
前の車が停止し、ちょうど赤信号になる所だった。
信号待ちの間、私がボーっと暮れゆく街並みを眺めていると、ふいに乾から声をかけられる。

「……ナツさん、聞いてもいいですか。」
「―ん？何。」

私も何気なく聞き返す。乾はハンドルを切りながら、普通の調子で私に尋ねた。

「聖悟から、告白されましたか？」

…心臓、口から出ると思った。

「……えっ、だ……はぁっ！！？」

一瞬……いや、多分三瞬くらい意識なかったと思う。失っていたソレが戻ってきたと同時に、私は勢いよく飛び起き、

――ゴンッ！！

「……あだっ！！」

…強かに、頭を天井にぶつけた。勢いをつけた分だけ痛みが大きい。頭がグワーンと鳴り、視界が歪んだ。…やべぇ、超痛ぇ。頭割れる。

「……えっと、大丈夫ですか？」

乾は頭頂部を強打し、悶絶する私に話しかける。…驚きと呆れが６：４ってとこか。反応としては間違ってないが、なんかムカつく。

「っ問題ない！！」

焦る私は、半ば反射で答える。もはやヤケだ。ヤケクソだ。

「え、スゴい音、しましたけど？」

対する乾は苦笑しながらも冷静にツッコミを入れてくる。

「脳細胞が少し死滅したくらいだ！損傷は無い！」

「…いや、それ結構な重症ですよ？」

「うるさいっ！どうせもう脳みそなんか使わないんだからいいの！」

「……大学生を侮辱してるんですか？」

……ああっもう！君、いちいち細かく返さなくていいからっ！動揺しすぎて自分でも何言ってるか分かんねぇから！！

――ていうか、乾。何故君はそれを知ってるんだ？

乾はクスクスと笑いながら前を向き、再び車を発進させた。

「…まぁ、大丈夫ならいいんですけど。分かりやすい反応ありがとうございます。ふふ、そうですか、やっぱり……」

やっぱりって、何だ。何ニヤニヤしてんのボケが。

「……何、何が言いたいの。」

「いえ、聖悟も頑張ったなぁと思いまして。」

そして、彼はニコリと綺麗に笑顔を作る。

「……。」

私は眉根を寄せ、彼の方を向いた。乾の言葉が不可解だった。

…何だろう。こいつの、まるで母親が見守るような温かい眼差し。

まるで――

―アイツが私のことをずっと好きだった、みたいな。んで、やっと告白できてよかったな、みたいな。

「ええ、そうですけど？」

「――――!?」

さらりと、いきなり返ってきた返事に思わず絶句。…え、私口に出してなかったのにっ!?

「ナツさん、顔に書いてありますよ、顔に。」

「……あ、そうですか。」

「はい。」

乾は軽い口調でそう言い放ち、私を黙らせる。

くっ、表情から思考を読まれるなんて、未熟！つか、乾が鋭すぎるんじゃない？
もう少し心を落ち着けなければ……やっぱり、ちょいと修行が必要かなー。

「……って、違うでしょう。問題から目を逸らさない。」

うわ、またバレタ。別に少しくらい現実逃避の時間くれたっていいじゃんか。

ぴしゃりと思考を遮断され、私は唇を尖らせた。自然と猫背になり、シートの下に視線をもっていく。しばしの無言の末、私はボソボソと呟いた。

「……だって、そんなわけ、ないじゃないか。」

口から滑り出た言葉は、自分でも驚くほど本音だった。

「…何が、そんなわけないんですか？」
「だから……国崎が、私のこと……」

もごもごと言い淀み、俯いてしまう私。
うが、言えねぇ。恥ずかしい。しかも身の程知らず過ぎる、こんなセリフ。

「――聖悟がナツさんを好きって、ことですか？」

…サラっと言ってくれたけどね。この男は。

乾は、はあ、と大げさ気にため息をつく。理解しがたい、とばかりに。

「…何でそんなに否定するんです？誰が見たって明らかじゃないですか。彼は、貴女のことが好きです。」

続けて『ていうか、気付いてなかったのナツさん本人くらいですよ。』とボヤかれる。

「っ、だーかーらっ！違うんだって！ヤツは私のこと面白がってるの！」

―それに対し、露骨な表現を吐かれた私は、とにかく叫ぶ。誰が見ても、聞いても『照れ隠し』に間違いなかろうに。

「真剣に、告白されたのに？」

じと、と今度は目力で睨んでくるのでうぐ、と一瞬言葉に詰まる。が、

――それは、違うって、乾。

ふ、と自嘲なのか呆れなのか分からない、曖昧なため息をもらすと、私は乾　圭太朗に向かって、ハッキリと言ってやった。

「……全部、何かの間違いなんだって。私のことなんか、好きなはずがない。国崎、気でも狂ったんじゃない？」

「……」

「とにかく、私は認めない。そんで、国崎の遊びにもいちいち付き

合ってられない。」

自分のセリフにどんどん心と体が冷めていく。確認するかのような、自分に言い聞かせているような、そんな言葉に。

―あーあ、うざいうざい。もう放っとけって、私のことは。どうせ全部勘違いのマヤカシばっかなんだから。

じわじわと私を侵食する黒い感情のまま、私は乾を睨みつけ、叫んだ。

「…アイツなんか、もう知らないし。乾からもなにか言ってやってよ。私なんか――っ」

だが、そこで、私の言葉は途切れる。なぜなら、隣から発生する異様な雰囲気に気圧されたから。

――あ、れ？なにこの空気。

「……い、ぬい？」

いきなり無言になった彼に私は不審に思い、運転席に顔を向けた。すると。

「…そんなこと、言いますか、ナツさん。」

口角を上げ、不気味なくらいキレイな笑みを浮かべた乾と目が合った。瞬間、体にゾクッと悪寒が走る。

―え、なにその黒い笑顔。

恐怖に戦く私。ニコニコと笑みを絶やさない彼。…どう考えても、

異質な空間だった。
車内に気まずいくらいしん…とした空気が広がり、私はしばらく引きつった顔のまま動けないでいる。

―しかし、その微妙な空気を打開する策を講じる必要はなく。……いや、なくなった、と言うべきか。
――とにかくそんなことを考えてる暇は皆無となった。

ギュルルルルルッ!!!キィイイイィ!!

…突如、ド派手な音を立てて、車は止まったから。
車輪は横に滑り、車体は大きく傾く。まるで映画のワンシーンみたいな、通常ではありえないアクションだ。車の中のものが重力に従って散乱してしまう程度に、激しかった。
…なので、もちろん。

「――っだぁああ!!?」

中の人間も、大きく姿勢を崩すハメとなる。私はゴッと嫌な音をたて、左の窓にしたたか頭を打ってしまった。…また。
……シートベルトしてたから良かったものの、かなり危ないってコレ!!

「っ、おい乾!ちょっと、」

非難しようと隣の男を下から睨み付けるが、

「――――っうぁあああ!!?」

今度は、反転。車はハンドルによって素直に進路を変え、ぐるりとその体を回した。

…当然、中の人間も、以下略。遠心力に逆らえるハズもなく、今度は反対側、乾の方へ体ごと倒れこんだ。……ちょ、もう勘弁しろって。

凄まじいカーテクニックにより強制的に体が揺れ動かされ、脳がグワングワンと揺れる。……気持ち悪い。

しかし、運転手はどこ吹く風で。華麗なUターンを決めた後、悠々と愛車を走らせていた。

「――ちょっ、乾！何すんのっ！そして何処行くんだよ！！」

そして、怒り心頭のワタクシ。―当然だ。彼の動向も目的も何も掴めないんだから。

激しい感情のまま、眼鏡の男に向かって食ってかかった。すると、彼は。

「…え、何処って……」

ニッコリ。

「聖悟の所ですけど？」

乾は、前を向いたまま、『それが、何か？』的口調で言ってきた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3415x/

脳内計算

2011年10月21日07時00分発行